中央公論

第廿年 第四号

陽春號

THE CENTRAL REVIEW

近刊豫告

明治闇黑史は、表面の事實に耳を假さずして常に裏面の消息に注目せる明治年間の活歷史なり、權貴者と浪人、勢力者と無勢力者、强者と弱者とが感情と利害との衝突に依り暗鬪せる時代推移の眞相を描寫せる社會史なり

有磯逸郎著

明治闇黑史

四月下旬發賣

紙數約四百頁

上卷 には、明治新政府の創設に筆を着け、維新派と復古派の二大潮流を擧げて、公家と浪人、藩主と藩士との衝突を描き、横井平四郎の横殺、廣澤眞臣の慘殺より、愛宕事件を中心として、當時全國に瀰蔓せる復古派の面目を發揮す。其の前後に、圓海坊の奥羽十七藩同盟の劃策あり、雲井龍雄の叛あり、大村益次郎の襲擊を前提として、長州騎兵隊の暴動あり、掉尾の運動として、丸山作樂の朝鮮計劃あり

中卷 には、征韓論破裂より筆を起こし、全國に磅礴せる士族の反抗運動に入りて、西南戰役の大破裂に筆を收めたり。其の間に江藤新平の叛あり、熊本の神風連の叛、前原一誠の叛あり、前原と連絡せる永岡久茂の思案橋事件は、其の後を承け、西南戰役に至りて、士族の黨爰に全敗す。然かも之を前にしては、芝增上寺の燒拂あり、岩倉具視の要擊あり、後には林有造等の政府顚覆運動あり、竹橋暴動あり

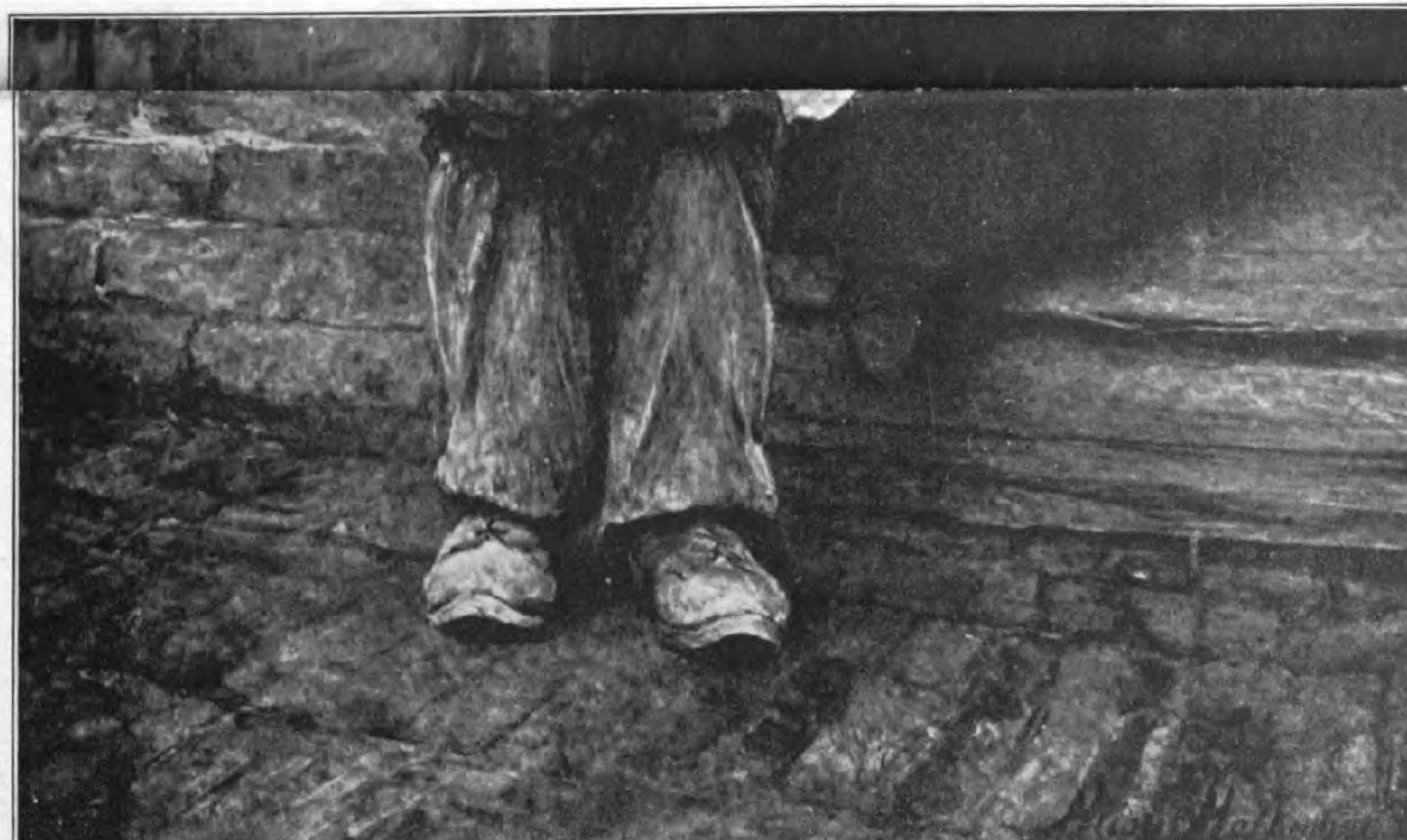
下卷 には、自由民權論を中心として、初めて我國に起りたる國民大運動を紹介す。立志社及嚶鳴社に依りて鼓吹せられたる自由民權論の勃興は、政黨の現出を促がし、然かも政黨の挫折に依りて、政界再び闇黑に陷り、秘密結社の類四方に起こる。福島事件を先驅として、群馬事件、加波山事件、秩父暴動、飯田事件、名古屋事件、靜岡事件等相繼いで起り、大井憲太郎等の大阪事件に至りて、僅に一段落を告ぐ。

昨今東京燒拂の暴動に驚ける世人は、本書に就て、動亂の來る因由を探れ、本書は、斯くの如き變調に對して靜かに警戒と敎訓とを與へつゝあり

發行所　東京本郷區西片町　反省社

中央公論陽春號（第二十一年第四號）目次

"ON STRIKE"



BY HUBERT VON HERKOMER, R .A.

●洋服界の進歩と米田屋卸賣店

米田屋支店は洋服界諸種の**便宜**と**一新面目**を**需用者各位**に報告するの**光榮**を有す曩に店主世の**風潮**に**鑑**み洋服裁縫業研究の爲め**歐米各國**を**漫遊**し輓近盛に彼國にて行はるゝ高等出來合洋服の法に倣ひ**品質柄行**の**撰擇**は勿論流行は時々の通信に基き最も發達せる分業法によりて**注意周到**遺憾なく調製仕り從來の誂品に比して毫も遜色なきのみならず**大**に**好評**を博し一度弊店に於て御購求の御方は其**裁縫**の**精密**なると**身體**に能く**適合**するとにより續々御紹介を賜はるに至りしは實に弊店の面目とする處に候爾來益々**工場**を**擴張**し如何なる御注文にも應ずべき樣準備仕候に付何卒御用向御付被下度尚ほ**新着**の**珍柄**多數取揃へ置候へば御好に隨ひ**出來合直段**に準じ**廉價**に**新調**可仕候

冬の部

定價表

フロツクコート	三ツ揃	廿二圓方	卅八圓迄
モーニングコート	三ツ揃	十七圓方	廿五圓迄
背廣	三ツ揃	十一圓方	廿三圓迄
オーバーコート	一枚	十圓方	二十圓迄
インバネス	一枚	九圓方	二十圓迄
ロングコート	一枚	十五圓方	廿五圓迄
トンビ	一枚	十三圓方	廿八圓迄
吾妻コート	一枚	十一圓方	十六圓迄

但し高等出來合洋服は正札付現金にて一切懸引なし

●**地方**より御注文の御方は**洋服**の**種類**及び大凡の**價格**等御通知被下候得は完全なる**寸法雛形**並に**地質見本**(但し郵劵十錢封入の事)送呈可仕候

東京神田小川町通雉子町卅二番地(電本局一七九一)

嶄新**洋服廉價裁縫店**

米田屋支店

◉大日本帝國腦病院長
◉獨乙ドクトル齋藤
先生御方劑



腦病一切神經衰弱を全治し腦充血卒中を防ぐ

腦病の大敵……健康の友……

恐るべき卒中風腦充血は身體肥滿せる飲酒家に多く之を未發に防ぐは腦丸の特色とする處 又腦神經衰弱にて常に頭重く顔色蒼く物事に倦易く記臆力缺乏し臥す事を好みて安眠する能はず些事に驚き感動し次第に身體疲勞する者、手婬の害遺精、頭痛めまひ逆上耳鳴便秘こし痛脊髓勞等に大効あり

腦丸を用れば腦、神經健全にし、逆上を下げ通じを快くし精神活潑に記臆力を増進するが故に飲酒家は勿論座業に従事して運動不足の者腦神經を過勞する參謀家、商家、學生、高等官、僧侶、銀行會社員、裁判官、商店番頭、大家の令婦人及び身體肥滿せる者は腦丸を持薬となし機に應じて之を服用し天授の幸福を得たまう可し

腦丸定價 二日分十五錢 四日分三十錢 七日分五十錢 十九日分壹圓 卅二日分強貳圓 送料四錢

發賣元 東京神田花房町角 **山崎帝國堂** 大阪高麗橋二丁目堺筋西 **山崎支店**

此廣告により御注文の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

此廣告により御注文の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

米國セントルイス世界大博覧會名譽金牌受領
米國ポートランド萬國博覧會最高金牌受領
日本第五回内國勸業博覧會一等賞牌ヲ始
諸博覧會ニ於テ數多賞牌ヲ受領ス

美滿津商店 體育部 樂器部 營業品

戸外運動器械　室内運動器械

兵式體操器械　活力計器

樂器

美滿津商店 標本部 雜種部 營業品

博物學標本　同實驗用器具材料

生理學模型　學術用模型及參考品

幻燈　其他教用品

宮内省東西大學各高等師範中學清國大學堂師範學堂御用

登錄商標

MM

東京市本郷區本郷五丁目

美滿津商店

長電話下谷八四五番

此廣告により御注文の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

◎四月十五日發行

同文館創業十週年紀念號

輓近學術の進歩

教育學術界臨時增刊

洋裝全一冊紙數八百頁定價金八十錢郵稅金六錢

「輓近學術之進歩」は現今世界に於ける精神科學の進歩の要點を表彰したる大論文集なり。我國に於ける學術の進歩教育の普及は、近來殊に著しく、敢へて歐米先進國に讓ること無きに至りたるは、吾人の慶賀措く能はざる所なり、教育學術界生れてこゝに滿六年十二卷を重ね大家の賛助愈々深く、世の同情日に月に增し行き其發行所たる同文館亦創業以來常に教育書を刊行して茲に滿十年學界に裨補せし所少からざるべく、世の信用從つて益々盛大を致し顧みて喜悅と感謝との情に堪へざるなり。依つて紀念のため本誌の一大臨時增刊を發兌して我國に於ける哲學倫理學心理學教育學美術學言語學社會學宗教學等の泰斗たる學者に請ひて、大論文の寄稿を忝うし且つ我國の學界と教育とに貢獻せし歐米先進國の論文を揭載して廣く世に頒たんとす之の目次左の如し

●論説　當今我が國朝野の名士にして學界に關係深き大家の高論卓説を揭ぐ

●哲學　●新哲學（文學博士加藤弘之）●我邦に於ける哲學の將來（文學博士井上哲次郎）●本體論（文學博士松本文三郎）●現代哲學の趨勢（文學博士桑木嚴翼）

●倫理學　●現今の倫理學（文學博士中島力造）●倫理學界の新潮流（文學士吉田靜致）●行爲の基本要求としての「人道」を論す（文學士紀平正美）●自我實現說評論（文學士深作安文）●獨逸に於ける倫理教化運動（在獨逸東京高等師範教授乙竹岩造）

●心理學　●意識界と物質界との關係（文學博士元良勇次郎）●兒童心理に關する研究（文學士松本孝次郎）●實驗心理學發達の趨勢（文學士塚原政次）●苦悶と救濟と無我（文學士福來友吉）

●教育學　●學校騷動に就いて（文學博士谷本富）●近世の教育思想と哲學（文學士大瀬甚太郎）●女子教育の變遷（文學士下田次郎）●特別教育に就いて（文學士溝淵進馬）●實驗的教育學とは何ぞ（文學士吉田熊次）●教授論の趨勢（東京高等師範教授森岡常藏）●心學の分布及其武家との關係（文學士白石正邦）

●教授法　●理科教授統合案（高等師範校教授棚橋源太郎）●現今教育上改良すべきもの二三（在墺太利東京高等師範學教授佐々木吉三郎）

●言語學　●過去十年間に於ける本邦語學界の趨勢（文學博士上田萬年）

●社會學　●社會學輓近の進歩（文學士建部遯吾）

●宗教學　●宗教の研究（文學博士姉崎正治）

●美學　●藝術起源の問題に就いて（文學博士大塚保治）

●外國學者の論文　●催眠術と法律との關係（米國エール大學教授チー、テイーラッド）●合理の感情（米國ハーバート大學教授ウィリアム、ゼームス）●二十世紀の初頭に於ける獨逸大學々生（獨逸ストラスブルク大學教授テオバルトチーグラー）●倫理學と生存競爭（伯林大學教授ウキルヘルム、フォーター）●十九世紀に於ける獨逸國民の思想界（伯林大學教授フリードリッヒパウルゼン）

發兌　東京神田表神保町　同文館　大賣捌　東京早稻田　同文館支店　大坂備後町　寶文館　東京神田　東京堂

公論欄



第二十一年第四號
陽春號
(二百五號)

新内閣の經過

西園寺内閣の成立(一月七日)より今や僅かに二ヶ月餘を經過したるのみ、而かも其の間特記すべきもの少からず、此の事實は其の一面に於て正さしく内閣の力量を暗示するものにして、又實に其の前途の運命をトすべき一資料なりとす

先づ擧ぐべきは加藤高明氏が外務大臣を罷めたること也、吾人は曾て言へり『加藤氏は新内閣の一危險物なり、氏は現に國債償却基金の設定、戰時税繼續等に反對の意見を主張したる人なれば也、之がため他の閣臣と一致すること最も難ければ也』と、果然加藤氏は財政上の論爭に由て去れり、加藤氏自から辯明する所によれば『國債償却基金、戰時税繼續の如きは前內閣の財政計畫を踏襲したるものにして、新内閣は全く之を更定すべき餘地を有せざりき、故に姑らく之に同じたるは敢て本來の主張を枉げたるに非ず、次年度を待て十分に之を改正すべき豫定なりし也、唯だ彼の鐵道國有案に至つては、一旦之を行へば再び改め難くして、國家百年の患害を貽すものなり、國務大臣の義として一歩も交讓すべき餘地あるを見ず、若し之をしも交讓せば、是れ交讓に非ずして屈服也、苟合也、變節也』といふ、然れども鐵道國有を實行したりとも、後に至て必らずしも更改しがたきには非ず。況んや加藤氏は絶對に國有を非とす、主として其の時期を不可なりとしたるものなるをや。加藤氏の去りしは、思ふに其の辯明以外尙ほ或る事情あるべきか、唯だ加藤氏が掛冠に由て多く世の同情を惹くに至らざりしは何ぞや、局量狹隘にして人に悅ばれざるの致す所か、將た察々の明。能く

衆望を收めがたきが故か、抑もまた餘りに潔白にして、濁流をも呑吐するの氣宇なきが故か。吾人は思ふ、氏が多く世人に呪詛せらるゝは岩崎家の女婿たると少くも他に嫌厭せらるる一因なるべしと、苟くも世に立たんとする者の富豪に緣を繫ぐの不可なる斯の如し。志あるもの鑑みざる可らざる也

然れども加藤氏を論題とするは吾人の主意に非ず、吾人の殊に感嘆を禁じ得ざるは、加藤氏の掛冠に對せる西園寺首相の態度なり、加藤氏の內閣にある、一の危險物といふと雖も又一の强味なりき、氏の背後には岩崎家並に其の系統を引ける三菱派の援助あり、左右には伊藤侯大隈伯ありて之と相宜しく、且つ進歩黨と聲息を通すべき徑路をすら有したれば也、加藤高明なる氏名は、頗ぶる海外に知られて、外交家として多く輕んぜらるゝ所莫ければ也、然るに西園寺侯は、氏の辭表を接受するも殆んど聲色だに動かさず、直ちに之を天闕に執奏すると同時に、氏の反對したる國有案を決定して上裁を仰ぎ、即夜政黨の領袖を招きて案の大要を說示し、次て自から外務大臣の地位を兼ねて（三月四日）曾て逡巡遲疑する所あらざりき、坐ろに思ふ、此の事若し前內閣にあらば、彼の多智多算なる桂伯と雖も、必らず色を變ぜざるを得ざるべく、假令伊藤侯と雖も廟堂の風色に動搖を生ぜざる能はざるべし。唯だ西園寺侯輕く斷じ易く行ひ、閣臣をして仰ぎ視て安怡沈着せしむ、西園寺侯は夫れ天の成せる好主相か、吾人は單に此の一事を以てするも、此の內閣の漫りに輕侮す可らざるものたるを思はざる能はざる也。

新內閣は又多く勞するとなくして十億餘圓の大豫算を成立せしめたり、國績償却基金制を設定したり、最も面倒なるべき戰時稅の繼續案をも通過せしめ得たり、夫れ國債償却基金制は實業家の多數之を贊したるも、一部の經濟家、憲政本黨及び其の同氣風の議員を始め、多數新聞紙の極力反對する所なりき、而かも新內閣は順潮に船を遣るが如く之を通過せしめたり、戰時稅繼續に至ては、心あるもの國家の進運に伴ふて政費の增加を來すの當然なるを信じて、敢て負擔の加重

を辭せずと雖も、惡税不良税の改良せざる可らざる。何人も之を認めたりき、唯だ議會に於ける政黨等無成算なりしに因て改良を行ふを得ず、新内閣が二ヶ年を期して其の存否改廢を調査すといふに從つて、僅かに永久本税を繼續するの精神に非ざることを表示せしのみ、而かも新内閣が格別の面倒もなく兎に角之を成立せしめたるはまた一の成効と稱せざる可らざる也。

斯の如きは思ふに桂内閣の到底能くし得ざりし所なるべし、假令之を成すも、其の間幾多の經營、苦慮、詭計を用ひ、幾多の曲折、起伏、波瀾を免かれず、隨つて政界を溷濁すべき事情二三にして止む可らず、若し伊藤内閣ならば、衆議院多數の賛同を得ることは猶ほ西園寺内閣の如くならんも、貴族院に多數を占むることは至難ならざる可らず、隨つて戰後至難の政局を擔當し、十億圓の大豫算を成立せしめ。剩つさへ國債償却基金制、戰時税繼續の如き重大問題を通過せしむるが如き、幾んど思ひも寄らざる所なるべし、然るに新内閣は多く勞する所なくして悉く之を成せり。

更らに思ふに、鐵道國有の如き重大問題も、必らず兩院の協賛を得て成立すべきか、西園寺首相が外務大臣の辭職にすら聲色を動かさずして、斷乎として之を斷じたるを視れば、吾人は爾か信ぜざらんとするも能はざる也、而して是れ亦伊藤内閣、桂内閣若くば山縣内閣、大隈内閣、松方内閣の能くせざる所にして、唯だ西園寺内閣の成功すべきものならん。

紛々擾々として是等の可否を論ずることを休めよ、僅々三ヶ月に滿たざる短時季に於て、斯くまで議論多き諸問題を成立せしめたるは、抑も新内閣の成効に非ずして何ぞ。

此の成効の由て來る所の原由は二三にして止まらざるべし、但だ之に由て新内閣の力量の凡常ならざることは、之を推知するに餘あらずや、彼れ若し自力のために自から蹉跌するが如きことあらば知らず、然らずんば其の運命必らずしも短ならじ。

政界の勢力者

政界に勢力を占めて內閣組織の地位に立たんとするもの、曾ては宮中の御信任と、吏僚の心服と政黨の助力とを必要としたるも、今や第一に宮中の信任を得、第二に衆議院に多數を占め、第三に貴族院多數の贊助を得ざる可らず、之を兼有するに非ずんば到底內閣に立て大政を鹽梅し實行することを得ず。

宮中の御信任厚きものといへば、何人も先づ指を伊藤侯に屈し、次に山縣侯を推さゞるを得ざるべし、井上伯は其の閥閲此の二侯に讓らざるも、多く宮中の御信任を得ざるがため、今に內閣の首班に立つに至らず、所謂憲政黨內閣の時、文部大臣たりし尾崎行雄氏が始めて宮中の御信任の缺く可らざるを感知したるがため、後竟に大隈伯を去て伊藤侯に往けりといふ、今の政事家動もすれば宮中を度外に措きて野性自から恣にするは、實に思はざるの甚だしき也。

衆議院に多數を占むると素より缺くべからず、唯だ未だ一黨を以て過半數を占むる政黨あらず、政友會の大を以てするも、憲政本黨と提携するか、大同倶樂部と協力するに非ずんば以て院議を左右するを得ず、黨派の領袖が動もすれば政權に渴して、千計萬策盡さゞる無きも、容易に志を得ざる所以知るべきのみ、且つ彼等假令幸に衆議院に多數を占むるも、貴族院を制せざれば奈何ともする能はず。

貴族院は政黨の外に超然たるが如きも、尙ほ多少の與黨なきに非ず、殊に勢力あるは清浦大浦等の諸氏にして乃ち所謂山縣系とす、山縣系が今の政界に在て隱然一敵國たるは、單に桂、兒玉、曾根、芳川、清浦、大浦、寺內、野村、青木、小村、山本、平田、松平の諸氏を有して內閣組織の人物に豐かに、兼て都筑、末松、岡部、千家、堀田の諸氏と親善なるが故のみに非ず、又實に貴族院に大なる根據を有すれば也、蓋し貴族院は、其の形式並びに實質に於て衆議院と同格同勢力たり、政界の分野を橫斷して正さしく其の一半を占有せり、故に假令衆議院に多數を占むるも、貴族院の

反對を受くれば百事成ると難し、伊藤侯も曾て七重の膝を八重に折りて愁訴し哀願したるも、山縣系に宜からざるがため竟に之を奈何共するを能はざりしに非ずや。

貴族院の勢力の斯の如くなるは、憲法制定者たりし伊藤侯と雖も稍々意外に感じたるが如し、現に侯は貴族院の組織を更改する目的を以て憲法の改定を企てたるも、日露戰役に次で韓國統監の職に就けるがため、未だ志を遂ぐる能はず、私かに懊惱しつゝありと聞く、遮莫事實は事實なり、政界に勢力を占めんとするもの、必らず貴族院を算外に措く能はざるのみ

今の總理大臣西園寺侯は、少時至尊に近侍し奉りて、幾んど行幼友達の關係あり、隨つて宮中の御信任の渥き言を俟たず、其の人と爲りまた侯爵の班位にあつて風格高く、學問識見共に全くして玲瓏の才あり、剛斷にして末節に拘泥せず、而して其の關係たる原敬氏は常識に富み世故に長け、松田正久氏は重厚にして自から衆心を收むるの德あり、寺内正毅氏、齋藤實氏共に陸海軍中の老練家たり、坂谷芳郎氏、山縣伊三郎氏は、精刻人に過ぎたるものなく、又多くの覇氣を缺くも、共に循吏たり、人に憎まるゝ性質には非ず。是れ共に貴族院に於て不人望ならざる一原因なるべし、何ぞ況んや山縣系は、其の政見及び政略より陰に陽に之を援助しつゝあるをや

西園寺侯は衆議院に於ける政友會の總理たり、政友會今や年來の經驗に依り。圭角漸く磨せられて進退大抵節度あり、現に獵官の如き弊風を追はず、幹部には大體に通ずる人多く、黨員の多數尙ほ野性あれども議論少く、且つ比較的に首領信認の美風を有す、憲政本黨の議論多くして首領を信ぜず、常に屑々として衆を容るゝ能はざるに比すれば頗ぶる美あり、政友會既に大同派と提携する以上、西園寺侯は衆議院の多數を占む、多く憂慮すべき所あるを見ざる也

新聞紙上往々山縣系が西園寺内閣を構陷すと傳ふるものあり、是れ恐らくは離間說か、然らずんば見當違ひの迂說ならざる可らず、山縣系に大志ありて再び内

閣を取らんとせば、必らず衆議院に於ける政友會の援助を得ざる可らずして、政友會の援助を得んとせば、常に好意を西園寺内閣に捧げて、能く之と結托するに如かざれば也、山縣系若し果して智人策士あらば、何ぞ漫りに西園寺内閣を構陷するが如き愚を爲さんや

西園寺内閣はまた戰後の難局を擔當して、成敗利鈍を顧みざりしといふの故を以て、頗ぶる國民の同情を有す、而して其の宮中の御信任、及び貴衆兩院に於ける勢力や斯くの如し、其の地位の牢固なる、恐らくば世人意料の外にあるべし、吾人は思ふ、西園寺内閣が僅々兩三月間に於て、十億餘圓の大豫算を成立せしめ、國債償却基金、戰時税繼續、鐵道國有の如き大問題を解決し得て、綽々として餘裕ある毫も怪むに足らざることを

吾人は總ての上に超越す、常に善意を以て時事を解釋し、公正不偏の批評を下さんと欲すれば、當さに然らざることを得ざれば也、而して吾人の西園寺内閣を視る上の如し。多く俗論に同じからずと雖も、敢て之を以て識者の教を請はんと欲するのみ

文藝の將來

金子筑水

理想主義（アイデアリズム）と現實主義（リアリズム）とは思想變遷の二の形式又は其の兩端とも謂ふべきか。廣く理想主義とは、現在當面の人事に想ひを寄せんよりは、むしろ主として、遙に高遠にして、遙に深奥なる生活に想ひを潜むるの謂ひ、現在當面の瑣々たる世態よりは、むしろ主として、高く美はしく、清淨にして純潔、壯大にして富麗なる生活に興味を感ずるをいふ。廣く現實主義とは、清淨純潔にして壯大富麗なる理想的生活よりは、むしろ主として、現在當面なる實生活其のものに想ひを潜むるの謂ひ、現在當面なる物的生活、眼前直接なる世態人情、全生活の地盤なる尋常普通なる生活に興味を覺ゆるをいふ。理想主義を採れる者の眼は常に天上にむかひ、現實主義を採れる者の眼は常に地上にむかふ、彼

れは高く空中に翔り、此れは低く地上に這ふ。理想主義と現實主義とは、人類の情意の動く兩端とも謂ふべきか、歷史の一時代は主として理想主義に傾き、又他の一時代は主として現實主義に傾く、理想主義に傾きては更に現實主義に返へり、現實主義極まりて、更にまた別種の理想主義に返へる、これ思想變遷の歷史ならずや。

我が文藝界及び思想界は、目下果たして孰れの方面にむかひて進みつゝあるか、或は理想主義の方向に進みつゝあるか、或は現實主義の傾向を取りつゝあるか、或はしかく一定せる方面には向かはずして、尙混沌曖昧なる境に彷徨しつゝあるか、我が文藝界及び思想界の將來は、果たして孰れの方面にむかひて進むべきか、將來の我が文藝界及び思想界は、果たして如何なる進路を取りて其の特有なる光輝を發揚するを得べきか。此等重大なる疑問を解決せんとせば、先づ泰西の文藝界及び思想界の潮流が、今や孰れの方面にむかひて動きつゝあるか、彼れの思潮は果たして如何なる形を取りて流れつゝあるか、將來まさに如何なる進路を取りて發展せんとしつゝあるか、此等の諸點に充分なる注意を要すべし、蓋し我が文藝界及び思想界は、もはや泰西の潮流より全然獨立して孤獨なる態度を保持する能はざるべければなり。然らば泰西の文藝界及び一班の思潮は、今や孰れの方面にむかひて動きつゝあるか。思ふに、これ極めて重大なる疑問にして、しかも亦頗る尨大に失せるの嫌ひあるもの、極めて獨斷的ならざるかぎりは、容易に答辯する能はざる疑問なるべし。讀者よ、茲には簡單に獨逸文壇の最近の思潮をさぐらしめよ、必しも歐洲一體の大文壇とは謂はず、單に獨逸文壇の最近の大體の傾向をさぐらしめよ、而してまた敢て讀者の寬恕を請ふ、我れは最近獨逸文藝の全體に精通せる者にあらず、たゞをり〳〵翫味せる文學上の著述に就きて、之れより大體的傾向を推測するに過ぎざる也。

十九世紀就中其の後半期は、嚴密なる意義に於て所謂現實主義の時代なりしと言ふまでもなし、十八世紀

の末より十九世紀の初に現はれたりし理想主義の大傾向と相對して、十九世紀後半期の現實的傾向は、げに史上には甞て類を見ざりし强大なる力もて其の勢を逞うしたりとも謂ふべきか。社會全體の風尙は、彼の淸淨純潔にして壯大富麗なる人生の光明的方面には何等深大なる興味を覺えずして、主として直接なる眼前の實生活其もの、直接なる眼前の生活問題、此の生活問題に關係せる世態人情等、すべて普通尋常なる事柄のみに感興を覺えたり。斯くのごとき全體の風尙の變化は、固より政治上の動搖、實際的生活の困難、社會問題の勃興、民主々義の擴張、階級思想の打破、下層社會の眞相の暴露等、種々なる原因に基けるものあらん。十九世紀の後半期に於ては、世の趣味又は好尙といへるものは、前代の理想的又は光明的なりしに反して甚しく現實的となり、すべて現實的なるものにあらずば、何等の感興だも與ふるを得ず、ゲーテ、シルレルすら既に古典式又は舊式の詩人に數へられて、ひとへに直接なる實生活のみが世に注意せられ世に深き感興を與ふるに至れり。之れを思想界に徵せんか、シエリング、ヘーゲルの雄大壯觀を極めたる宇宙觀は、もはや過去の美はしき夢とのみ感ぜられて、何等の深甚なる感興を與ふるの力なく、學術界はひとへに自然科學の局部的研究のみに走りて、また昔日の理想的哲學を觀る者なく、直接なる經驗的智識又は現實なる物理的知識にあらずば、一班の學者に取りては何等の價値なきものと感ぜらるゝに至れり。されば、ゾラの寫眞主義又は科學主義は、其の當時如何ばかり大なる影響を一班獨逸文壇に及ぼせしぞ、寫實主義といふ聲は、俄に文壇の彼方より此方に響渡りて、世人はさながら一種の魔力に魅せられたる者の如くなりき、當時少壯文學者は絕叫して曰はく、久しく沈滯せる獨逸文壇は、寫實主義によりて革命刷新の新氣運に導かるべきなりと。ゾラが寫出だせる如き現實なる社會の腐敗、疾病、汚毒、腐爛、若しくは其の他の直接なる實生活に關するものにあらずば、もはや世人は何等の深甚なる興味を感ずる能はざりし也。

現實主義や寫實主義や、必しも眼前主義又は近眼主義として一概に排斥せらるべきものにあらず、生活問題の根底又は實際生活の根據を明瞭に意識し、又は之れを靈活に寫出だすは、むしろ自然にして必然なる思想の成行きにして、斯くの如き直接なる世態人情を看過せる理想主義は、空なる理想主義、根據なき理想主義、堅固なる地盤を缺ける砂上の理想主義なるべきは勿論なり、ひとへに古典式なる文藝が、吾人に深大なる感興を與ふる能はざる所以は、主として其等の文藝が現實なる世態人情に觸るゝ所少きに基かずんばあらず。されど、現實主義や寫實主義や、直接にして眼前なる世態人情の上に、光輝ある理想的生活を建設するをもて其の本來職とすべし、此の本來職を忘れて、ひたすらに、唯現代社會の實相のみを赤裸々に暴露せんと力むるに於ては、遂に極端なる現實主義又は極端なる寫實主義の弊に墮せずんばあらず。極端なる現實主義又は寫實主義の弊は、ひとへに現代社會の闇黑面の暴露、就中現代下層社會の爛熟腐敗等あらゆる醜態劣情の赤裸々なる暴露をもて、其の唯一の能事、唯一の本來職となすにあり、人生の光輝ある理想的方面には一切眼を閉して、たゞ社會の闇黑面のみを人生の實相と觀ぜんとするにあり、人生を舉げて劣等なる動物的生活と觀ぜんとするにあり。果然二三十年前の獨逸文壇には、斯かる極端なる現實主義の弊風凄しき勢もて吹きわたりぬ、心ある者は眉をひそめぬ、識者は將來を氣づかひぬ。恰も社會黨は未曾有の勢力もて社會の前面に濶歩し來たりぬ、所謂上流社會の腐敗爛熟は、赤裸々に世人の面前に暴露せられぬ、下層社會の闇惨たる光景は、活けるが如く公衆のまのあたりに映出だされぬ。全體の趨勢既に斯くのごとし、此に於てか、痛苦、呻吟、悲觀、厭世の大傾向は防がんとして防ぐ能はず、抑へんとして抑ふる能はざるの勢もて世に廣がりぬ、先きには冷々一笑に附せられしショペンハウアー、ハルトマンの厭世哲學は、俄に大なる活氣を帶びて世間に傳播しぬ。一斑の文藝界は悲觀的厭世的傾向もて蔽はれぬ、全般の社會は將來如何に開展し行くべ

きか、人生は畢竟此の儘に墮落腐敗の底に沈淪し行くべきか、嗚呼人生を如何せん、人生を如何せんと、これ其の當時の全體的傾向たりし也。

一言もて最近獨逸文壇の重なる傾向を盡さんか、現實主義の根據は牢として最早拔くべからず、しかも其の極端なる現實的傾向の弊にえ堪へずして、何等か一道の活路を求めて、人生の光明ある理想的方面に就かんとする、これ其の重なる傾向にはあらざるか、而して此の重なる傾向を最も明かに代表せるものはワグナー、ニーチエ、ハウプトマン、ズーダーマン等にはあらざるか、請ふ少しく此等諸家に就きて語らしめよ。

リヒァード、ワグナーは詩的天才を備へたりし最近代の大音樂者たりしに相違なし、しかも詩人としては彼れは尙時代の見たりしを免れず、現代に先きんじて現代を統率すべき大天才にはあらざりしなり。彼れは深く時代の悲觀的厭世的傾向に養はれ、ショペンハウアーに教へられ、又身みづからつぶさに現世の辛酸痛苦を味ひて、現在の人生墮を落腐敗の極と觀じたり、デゲネラチオンの極に達せるものと觀じたり、彼れは現代を呪咀せり、現代の生活に絕望せり、現代社會にして、此のまゝに進み行かんには、永久に浮ぶ瀨なき奈落の深底に沈淪すべきものと觀じたり。されど、ワグナーは流石に人生の趣味を味ひたる詩人なりしだけに、人生全體を擧げて、之れを妄念視し又は之れを否定するの絕對的悲觀には陷らず、斯かる絕對的悲觀に陷るには、彼れは餘りに多く人生の眞味を味ひたり、假令現代の社會を爛熟腐敗の極とこそは呪ひたれ、假令現代の社會を人生の正路をはづれたるものとこそは觀じたれ、眞の人生は其の本來の自然なる姿に於ては、尙美はしく貴とくして、充分吾人が生存を價ひすべきものなるを確信したり。一切の同胞に捨てられ、永久に生土を離れ、一切現代の社會より己れを杜絕して、無限の苦痛と呻吟とを胸にたゝみて、よるべなき大海の波浪に一身を托せるフリーゲンダー、ホレンダーは、幾度か現代の生活を思ひ諦めて、屍を怒濤の深淵に沈め去らんと決心したれども、人生の眞味は尙之

れを永遠の闇に埋沒し去るに忍びず、人生を捨てんとしては再び之れに返へり、返へらんとしては亦之れを捨てんとし終に現世のかなた一種不可思議なる境にセンタの神秘なる戀愛に懐かれて眠る、これワグナーが人生觀なりしにあらずや。」現代生活をデゲネラチオンの極と呪へるものから、尙いづこにか一種の活路を開きて、再生復活(レゲネラチオン)の敎を垂れんと苦悶せる、これワグナーが心事なりしにあらずや。現代の現實的傾向の弊にえ堪へずして、いづこにか眞の人生の理想的光明を求めんとせる、これ彼れが苦心慘憺の蹟なりしにあらずや。さればワグナー崇拜者は、ワグナーが藝術品のうちに人生未來の理想的發展の光明を求めんとし、ワグナーをもて將來の獨逸文壇の指導者と仰がんとしたり、ニーチエの明を以てすら、尙一たびはワグナーによりて新なる理想的人生觀を得んと期せしにあらずや。されどワグナーは竟に吾人に何等確實なる新人生觀を與へざりき、現代の人心を一轉せしむべき何等明確なる理想的光明を與ふる能はざりき。彼れは其の藝術品就中ニベルンゲンの歌、バーシフアル、トリスタン、イソルデ等のうちに、現代の人心を一轉せしむべき一種强大なる暗示を與へたり、現代の闇黑的方面より理想的方面に轉ずべき一種の暗示を與へたり、啻に然かのみならず、彼れは人生の一種神秘なる理想的方面を發揮せんと試みたり、神秘なる戀愛の理想的方面を發揮せんと試みたり。吾人は彼れにむかひて其の心事を多とすべし、されど、彼れが發揮せんと努めたる一種神秘なる理想的光明は、むしろ極めて曖昧摸稜なるものにして、吾人に何等靈活にして明確なる感銘を與へず、ワグナーはたゞ現代趣味とは異なれる或漠然たるものに神秘なる衣を着けしに過ぎず、されば彼れが書ける所は、彼れが强大なる生活欲又は彼れが感性的生活欲を一種神秘的に標象せるに過ぎずと評せらるゝ、また已むを得ざるなり。ワグナーが藝術觀に就きては、吾人は尙大に學ぶべきものあらん、されど其の詩的價値に就きては、直に之れを將來の藝術を指導すべきものとは見るを得ざるべし。斯くの如くして彼れ

は極端なる現實的傾向より解脫せんとして、而して未だ確實なる理想的傾向を示す能はざりし者也。

次にニーチエに關しては、こゝに多言するを要せざるべし、此の奇矯なる天才に關しては、其の本質に於てすら、初の間は辯難區々として定まらざりしも、今や其の眞價の認められしと同時に、其の缺點も亦明らかに示摘せられたり。ワグナーと同じく彼れは時代の見にして、時代に先きんぜんとして而して未だ時代を率ふべき明確なる新人生觀を示す能はざりし者、極端なる現實的傾向の弊にえ堪へずして、何等か一大清新なる理想的方面を開かんとして暗中に摸索せる者と謂ふべきなり。彼れは現代社會の腐敗を觀破せり、上下の階級を通じて、何等清新なる理想的精神に動かされずして、たゞ直接にして眼前なる物質的生活の醜く賤むべく悄むべき妄念に支配せられつゝあるの慘狀を目擊せり、所謂道德は我欲を滿足せしむべき俗習的方便となり居れるさまを實驗したり、何等の識見何等の自信もなき、劣等動物と大差なき賤民が、次第に社會の前面に濶步し來たりて、政治道德宗教等一切の社會的活動は、此等無識なる賤民によりて左右せられんとする淺ましき趨勢を觀破したり。悲觀厭世の傾向は、彼れ之れを抑壓せんと欲して欲壓する能はざりしや自然なり。ワグナーと共にニーチエは現代社會を呪ひたり、ワグナーよりは更に強大峻刻なる力もて、既往及び現在の社會を其の根底より打破滅絕せんと試みたり、紛々擾々たる賤民生活は、腐爛せる物の周圍に群がり來たる五月蠅の生活にも劣れるものと觀じたり、彼れは斯くして半ば狂亂的に現代の賤民生活を怒罵して餘す所なかりしなり。然らば彼れがツアラツーストラは、吾人に何等か清新なる一大理想的光明を與へしか、人生の光明的側面を發揮して、新代を統率すべき明確なる精神活動を書出だせるものなるか。彼れは個性の重ずべきを敎へたり、天才の貴むべきを敎へたり、一切の優柔不斷なるものを退けて、強大なる意力、剛毅なる勢力に充滿せる偉人の貴むべきを敎へたり、然り、現代の一切の群小賤民を一種進化の階段として、ユー

バー、メンシュの出現せんを理想的人生の目的と主張したり。此等の主張のうちには、吾人を現代の闇黑面より理想の光明面に轉ぜしめんとする一種の暗示は含まれたり、極端なる現實的傾向より一種快活にして自由なる理想的傾向に世態を轉ぜしめんとする一種の暗示は含まれたり。されどニーチエが預言的口吻もて主張せる人生の理想面は、將來の思想界を統率せんには餘りに空漠に失せり、彼れはワグナーと同じく未だ確實にして鮮明なる新人生觀を與ふる能はざりき、未だ具體的に將來の人生の光明面を發揮する能はざりき。彼れはワグナーと同じく、極端なる現實主義の弊にえ堪へずして、しかも未だ明確なる理想主義を建設する能はざりし者也。

飜りて獨逸文壇目下の立者なるハウプトマンに及ばんか、彼れが今後の發展は未だ容易に速斷すべからざるものあるも、單に從來此の作者が示したる傾向より判ずれば、彼れも亦極端なる現實主義の社會に養はれ、寫實主義又は自然主義に薫化せられ、現代社會の闇黑面の直寫に立脚して、悲觀厭世の傾向を鼓吹せる者、而してまたワグナー、ニーチエと同じく、斯かる闇憺なる人生には滿足する能はずして、いづこにか其の光明面を認めて之れに轉ぜんと苦悶せる者と謂ふべきか。彼れは初めゾラ、ドストエウスキーの自然主義を標榜して文壇に現はれたり、「エーバー」の一篇は遺憾なくゾラ式を完成せるもの、職工社會のあらゆる慘絶悲絶なる實相を赤裸々に直寫し出だして、人をして人生は畢竟辛酸痛苦大闇黑のかたまりにはあらずやと疑はしめたり。若しハウプトマンにして單に「エーバー」一篇の作者なりしならんには、彼れは人生の闇黑面を解して、未だ其の光明面を會得せざりきと判ぜらるゝを免れざりしなるべし。然るに彼れは自然主義の價値の所詮は比較的にして絶體的ならざるを覺りたり、極端なる現實主義の終に人生の最大事にあらざるに想ひ至りたり、飜然として彼れは快活にして自由なる人生の光明面に向かはんと力めたり、「沈鐘」はすなはち此の心機一轉の情趣を標象せるものにあらずや。

單に一種の情趣を標象する、これ未だ詩の大なるものにあらず、所謂標象主義(シムボリズム)が單に名狀すべからざる或物を假に具體的に表白するの意ならんには、其は到底藝術の最高主義たるを得ざるべし、人生を案內し統率するを得べき高く美はしき精神活動を書出だすこそ藝術の本意なれ、ハウプトマンにして此の境に達せざる限は、未だ明らかに理想的傾向を取れりとは謂ふべからず。「アルメル、ハインリヒ」は「沈鐘」以上、たゞの標象に加ふるに多少一種の理想面、一種光輝ある精神活動の發揮を試みたるもの、現世を厭離せるハインリヒがオッテゲーベの一種奇異なる宗教的戀愛によりて救はるゝ所一種の妙味はあり、されど未だ現實的基礎の上に理想的精神活動を發揮せるものとはいふべからず、理想主義に轉ぜんとして未だ一種の標象主義の境を脫する能はざるもの也。

最後にズーダーマンに關しては、我れは多くを語るを得ず、實は我れは此の詩人の作に於て未だ大なる詩的興味を感ずる能はざればなり。旣に彼の地の批評家の公言せる如く、ズーダーマンは或は單に讀者又は看客の一種センチメンタルなる情を動かすに妙を得たる者、又は舞臺的効力を深からしむる事に一種特別なる技能を有せる作家にはあらざるか、「エーレ」のごとき又は「スッルムゲゼレル、ソクラテス」のごとき、皆此の種の作にはあらざるか。成功の最も大なるものゝ一に數へらるゝ「フラウ、ソルゲ」すら、假令其の主人公の最後の發展に於て多少理想的傾向の暗示は含まれたりとするも、尙全體より言はゞ、一種奇異なる、一種センチメンタルなる人物を書きて、讀者の一種奇異なるセンチメントに訴ふる氣味あり、吾人は其の裡に一種偉大なる光輝ある精神活動を味ふ能はざるなり。其は兎もあれ、此の作者も自然主義の弊に墮して、詩材を尋常普通平凡なる世態に取り、宛かも之れのみにては詩的効果の全からざるを見て、頻に一種奇異なるセンチメントに訴へて、其の缺點を補はんとするが如き觀あり、これ將た理想主義に轉ぜんとして未だ其の工夫の全からざるものにはあらざるか。

されば最近獨逸文壇の趨勢を一言もて盡せば、現實主義は一ト先づ其の進むべき極所まで進みゆきて、遂に其の弊に墮し、此の弊にえ堪へずして、其の反動として、再び理想主義に轉ぜんとしつゝあるにはあらざるか、普通尋常平凡なる人情、痛苦凄愴悲慘なる人生の闇黑面には次第に飽き來たりて、別に光輝ある高く優れたる精神活動を翹望しつゝあるにはあらざるか。ワグナーの神秘的象徵性的戀愛、ニーチエの「ユーバー、メンシユ」、ハウプトマンの標象主義、此等は未だ明確なる理想主義とは謂ふべからざるも、少なくとも、此の方面に轉せんとする傾向を示せるものにはあらざるか。之れを最近獨逸思想界の趨勢に徵するに、全體の傾向のおのづから文藝界のと相一致するものあり、すなはち學術界の趨勢は、最早部分的研究なる自然科學の知識、極端なる唯物論又は物質的文明のみには滿足する能はずして、更に進みてイデアリズムスの建設を催しつゝあり、世は再びイデアリスチツシならんとすと絕叫せる學者少なからず。若し夫れ果たして前代の理想主義に優りたる大なる新理想主義が文藝界及び一班思想界に建設せらるべきや否や、これ尙將來の大なる疑問なるべし。

翻りて我が文藝界及び思想界の趨勢を顧るに、種々なる傾向又は主義互に複雜に入り亂れて雜然又混然、其の主なる傾向は果たして孰れなるや、我が文藝界は將來果たして如何に變化し發達し行くべきや、容易に判斷すべからざるものあり。此等雜駁なる傾向中には、西洋より流れこめるものも多かるべし、されど彼れと我れとはおのづから國民性を異にせるが故に、西洋に動きつゝある傾向を推して、直に我が文藝界の現狀及び將來を判斷すべからざるものあり、蓋し假令西洋の種々雜駁なる思想傾向が我が文藝界及び思想界に入り込むとも、此等の傾向は直に我が國民性に同化せられて、西洋に於けるとはおのづから別殊なる狀態を取來たるべければなり。明治時代は西洋の最近代にも似て、極めて現實的なる時代なるべし、我が國の歷史に於ては他に比類なき現實的時代なるべし、一班の時尙

は、最早昔日の花鳥風月に美はしき想ひを寄せしとは異なりて、主として直接なる生活問題にむかへり、壯大富麗又は豪宕不羈なる精神よりは、むしろ質實にして細密なる實際的傾向を喜ぶに至れり。さもあれ、我が國に於ける現實的傾向が、果たして西洋の其れのごとく極端まで發展すべきか、例へば我が國の社會主義が果たして西洋の其れのごとく激烈なる程度にまで發展すべきか、我が國の悲觀的傾向が果たして西洋のの如く猛烈なる勢もて傳播すべきか、大なる疑ひなくんばあらず。寫實主義又は自然主義は我が文壇にもあり、されど此の自然主義は西洋のそれのごとく極端なる程度にまで實現せらるべきか、一時流行を極めし所謂深刻小說は、最早文壇の過去の傾向として數へらるゝにあらずや。我が國民性は西洋式の極端なることと又は激烈なることを嫌ふ、激烈性を喜ばんか、世界のあらゆる文明を同化するといふが如きは望むべからざるべし。斯くのごとく、一面に於て、我が國の現實的傾向は、未だ西洋の其れのごとく激烈ならざるに、早く他の一面に於ては、理想的傾向の次第に高まり來たれるを覺ふるにあらずや、活氣ある青年の好尙は漸く理想的方面にむかひて進みつゝあるにあらずや、現實的又は物質的なるものよりは、何等か大なるもの、優れたるもの、高きもの淸きものを得んと望みつゝあるにあらずや、而して斯くのごとき理想的傾向がむしろ近時の著き現象ならずや。文壇に於ても既に標象主義の徵候あり。神秘主義の徵候あり、又近時の宗教的自識のごときも、一面より言へば、此の理想的傾向の端緖とも見らるべきにあらずや、坪內博士の「浦島」「かぐや姬」の如きも、明らかに此の傾向の變化を示すものにあらずや。されど是れたゞ理想主義に轉ぜんとする徵候のみ、たゞの現實主義より漸く理想主義に向かはんとする徵候のみ、未だ二十世紀の新理想主義にはあらざる也。

我が國目下の文藝界の趨勢は尙頗る混沌たり、玆には此の趨勢に關して妄に輕卒なる判斷を試みんとはせざるべし、むしろ將來の文藝の發展に關する平生の希

望を述べんか、曰はく、二十世紀の新文藝は、須べからく高く新理想主義を掲げて、雄大にして富麗なる精神活動を創造すべきなりと。鋭利なる觀察眼もて現代生活の精を發き微を穿つは固より妨なし、寫實主義又は自然主義に頼りて、人生の弱點汚點等すべて賤劣醜惡なる方面を深刻に描寫し出だすは固より妨なし、されど偉大なる文藝は常に理想的(アイデアリステツク)なり、光明に滿てる雄大富麗なる精神活動を創造し出だして、はじめて偉大なる文藝となる、堅固なる現實の土臺の上に、人生の尊嚴(ダイグニチー)を發揚すべき高貴なる精神活動を發揮し得て初めて貴むべき文藝となる。日常生活の上に現はれたる瑣末なる人情世態や、一種センチメンタルなるいとも小さき事件や、尋常人の弱點や缺點や、精神生活上の賤民の醜態や劣情や、此等は如何に深刻に寫出ださるゝとも、若し此等人生の闇黑面が單に闇黑面として寫出だされ、之れによりて些の人生の光明面又は理想面の發揮せらるゝなくんば、斯かる文藝は到底偉大なる文藝、二十世紀の新文藝として、誇となすに足らざるべし。偉大なる文藝は人生に關して偉大なる教訓を與ふるものに限らる、偉大なる教訓とは、人類の尊嚴を發揚すべき偉大なる精神活動を味はしむるをいふ、偉大なる精神活動は人生に潛在的に含蓄せられたり、之れを開發し之れを發揮するが藝術家の使命なり。今の藝術家に向ひて、直に斯かる光輝ある人生の理想面を發揮せよといふは、希望の餘りに大なるに過ぐる者あらん、されど世の藝術家にむかひて、又は將來出現すべき藝術家にむかひて、又は世の藝術を愛づる者にむかひて、次第に斯かる光輝ある人生の理想面の發揮に近づかんを望むは、決して過分なる希望にあらざるべし。新理想主義の傾向を取るにあらずば、如何にして將來の文藝を百花爛熳の境に發達せしむるを得べきぞ、新理想主義を取るにあらずば、如何にして將來の我が文藝を他國の文藝に比較して遜色なからしむるを得べきぞ、新理想主義を取るにあらずば、將さに大に勃興せんとする國民の文藝を如何にすべきぞ。偉大なる藝術は、必や時代精神に先きんじて而して時代精神を率

ふ、今や有力なる新代は將さに勃興せんとしつゝあり、將來の藝術にして、此の有力なる新代を統率するの力なくんば、そは二十世紀の藝術にはあらずして、時代に率ゐらるゝ憐むべき藝術たるに過ぎざる也。

二十世紀の藝術家たらんとする者よ、如何にして光輝ある人生の理想面を發揮せんかと妄に苦慮するなかれ、徒に自然主義に頼らんか將た標象主義に頼らんかなど苦慮すとも何の甲斐かあらん、眞に光輝ある偉大なる人生の理想面を發揮せんとせば、先づ藝術家みづから偉大なる精神活動を經驗するを要す、先づ身親しく人生の尊嚴を味ひて、初めて之れを他に味はしむるを得べし、偉大なる藝術は偉大なる人格の反映なり、偉大なる人格を離れて、いづこに偉大なる藝術の出現を期すべけん。眞の藝術は眞の薫陶者なり、藝術家の人格先づ偉大にして、初めて眞に世道人心を薫陶するを得べき也。

單に光輝ある偉大なる精神活動といふ、此の語尙頗る茫漠に失せるの嫌あらん、玆には之れを精說するの追なし。たゞ世間或は下のごとき疑惑を懷く者あらんか、精神活動とは要するに情意活動の意ならずや、人情は古今を通じて一なり、人類を通じて根本的にして普遍的なる情意活動あり、豈時代を異にするによりて、新にして高く優れたる情意活動といふが如きものあらんやと。これ未だ情意活動の眞の進歩發達の意義を解せざる者の言なり、げに古今の人類を通じて普遍にして根本なる情意活動あらん、されど此の普遍的情意活動は、其の內容(形質)に於て將た力に於て、万代を通じて同一なるにあらず、此の普遍なる情意活動が次第に高大に、次第に富贍に、次第に深强なるさまに其の潜勢力を開發し行く所に、人生の發達進歩は存せずや、人生の發展進歩を斯く觀ずる所に眞の理想主義、眞の光明主義、眞の樂世主義は存せずや。此の光明主義又は理想主義の傾向のもとに、文藝は初めて偉大なる光輝を人生に放つを得べし、將來の文藝は此の光明主義又は理想主義に頼りて、初めて將來の偉大なる文藝となるを得べき也

(完)

社會主義論

安部磯雄

余は第一に社會主義の主張を陳べ、第二に社會主義の起る所以を論じ、第三に社會主義の實行方法に說き及ぼさんと思ふ。

○社會主義の主張

社會主義とは何てあるか。若しこれを精細に論ずれば種々なる困難も起るてあらうが、其要點を摘んて話をすれば左程の面倒もない。何れの社會に於ても多少社會主義の行はれて居ない所はないが、社會主義は唯其範圍を廣くせんと主張するのである。我國でも煙草專賣とか鹽專賣とかいふことが行はれて居るが、社會主義は其區域を押し擴げて、あらゆる生產機關を國有とか市有とかにしようと言ふのである。故に社會主義が實行せらるゝに至れば穀物の生產は勿論のこと、紡績とか燐寸とか、麥酒とかいふ、あらゆる農業、工業は悉く公有となるのだ。亦交通及び通信の諸機關も悉く公有とせねばならぬのであるから、鐵道國有などは眞先に實行せられ、街鐵や船舶の如きも悉く公有となるのだ。別言すれば現今の如き個人的事業がなくなつて公共的事業ばかりとなるのである。一面より見れば國家が資本家となつて、我等が勞働者となるやうに思はるゝが實際は決して左樣なるものでない。我等は寧ろ共同の資本を有して勞働する者であるといふ方が適當てあらう。我等は社會といふ一大會社を組織して、我等各其株主たると同時に勞働者となるのである。故に社會主義の世に於ては何人と雖も自己の資本を以て獨立の事業を經營することは出來ない。我等は社會といふ共同團體の一員として働かねばならぬ。されば社會主義の實行せらるゝ社會に於ては資本家と勞働者といふが如き區別がない。從つて貧富の懸隔もない。平等主義は完全に行はれ、生活の保證は充分に與へらるるのである。生存競爭がないから戰爭の起る筈もない。貧富の區別がないから高慢とか嫉妬とかの生ずる餘地もない。

○社會主義の起る所以

社會の進歩するにつれて種々なる不都合なることが湧いて來る。經世家は百方力を盡して其匡正策を講ずれども其効がない。今や姑息手段に賴るべき時てはなくて何等か根本的の改革を行はねばならぬことゝなつた。余は少しく產業界の事に付きて陳べて見たい。世の中に無駄な事があるといつても自由競爭の如きものが亦と他にあるであらうか。實業家は廣告とか福引とかいふ手段を以て競爭して居る。米國などにては或會社は常に數百名の社員をして國中を巡回せしめ、以て其得意客を增加せんことを勉めて居る。國際的戰爭の爲に巨億の富を浪費することは珍らしくないが。實業家が競爭の爲に浪費する所のものも實に驚くべきものだ。米國酒類會社の副社長ブラッドリー氏の計算に依れば、合衆國に於ける酒類が製造者の手より消費者の手に渡るまで每年四千萬弗程の浪費があつたそうだ。其は何の爲てあるかといふに酒類製造家の間に激烈なる競爭があつたゝめ、廣告や賣り弘め人の費用を多く要したからてある。然し今は酒類業者のツラストが出來たので此浪費もなくなつたそうだ。我國に於ても廣告の爲め景品を出すことは多くあるが、米國の商人のやり方は隨分大袈裟てある。此頃或廣告を見たが、某石鹼會社は拾弗程の石鹼を購ふ人には同じく拾弗の價ある安樂椅子、寢臺、ランプ、乳母車等を景品として與ふるといふのである。亦或香料の製造者は三拾七弗五拾仙の買物を爲す人には四拾弗の價ある時計を景品として與ふべしと廣告して居る。此等は實に極端なる實例てあるけれども、如何に競爭の激甚なるかを察することが出來る。米國に於ける石鹼業者だけでも年々數百万弗の廣告料を使つて居るといふことだから、あらゆる廣告料を總計したならば必ず數億万弗に達するであらう。而して自由競爭の弊は啻にこれのみてはない。弱者が强者の爲に倒さるゝ時は幾万乃至幾十万の財產は消滅するのであるから、これが爲め社會の損する所は決して少小てはない。故に實業家は逸早く合同の策を講じ。此等の浪費を免れんと企てゝ居る。我國

に於ても麥酒會社及び燐寸會社の合同を見たではないか。歐米の所謂トラストなるものは全く自由競爭の弊に堪へぬところから起つたものである。吾人の見る所に依れば産業の合同は自然の勢であつて、終に社會主義に到着せざれば止まないのである。或人は歐米に於けるトラストの失敗を見て産業界の大合同は到底實行すべからざるものだと論ずるけれども、彼等は未だトラストの眞相を解して居らぬのではあるまいか。吾人は今日實行せられて居るが如きトラストの失敗を見て怪まぬ。何となればトラストの多分は其資本の呼高を大きくして居るから、其に對するだけの利益を得ることは六ケ敷いからである。原來トラストの起原は投機者流の經營に在るのだから其基礎の確固でないのも決して無理ではない。然しトラスト其れ自身が此の如き性質のものでないとは一方に充分成効せるツラストのあるのを見ても分るではないか。スタンダード石油會社の如く合衆國に於ける石油事業の九割位を占むるに至れば、最早其成効は疑ない。若しあらゆる實業がトラストに依り經營せらるゝに至れば、更に一轉してこれを公有となすは實に容易の事である。吾人は經濟界の要求として社會主義の起るは決して偶然でないと思ふ。

吾人此世に生れ出でたる者は生活するの權利がある。從つて勞働するの權利がある。古來勞働は吾人の義務であると說いたものは多くあるが、勞働を以て人類の權利なりと喝破したのは恐らく社會主義が始めてあらう。然し現今の社會組織に於ては此權利が充分に認められて居らぬ。今日の貧者を以て悉く懶惰の結果なりと言ふ人あらば其は大なる誤解である。勞働を求めてこれを得ざるは全く其人の罪ではなくて、社會組織の罪であると言はねばならぬ。失業者問題は實に文明社會が何處にも遭遇する所のものであつて、慥に文明の大汚辱、大汚點といふべきである。英國の現內閣が組織せられて間もなく、ロンドン市の失業者數萬は首相邸に押し懸けて其解決法を迫つたではないか。吾人は怠惰の結果貧者となりたる者に對して同情を寄す

るの必要を見ぬけれども、職業のなき爲に苦悶して居る人を見てはこれを等閑視することは出來ぬ。然れども今日の社會は吾人に職業を與ふるの保險を與へぬのてある。故に職業のなき人は誰に向つて勞働の權利を主張することが出來ようか。彼等は餓死するか、他人の慈善に依頼するか、若くは監獄に入りて衣食の途を得るか、三者其一を擇ばねばならぬ。是れ決して空論てはない。何人と雖も若し自己の事に思ひ及ぼさば、全く生活の保險といふもののなきに心付くてあらう。よし目下何等かの事業に從事しつゝある所の人ても一朝病に罹りたる時は如何、彼には病中自らを支へるだけの餘裕があるか。若し亦一朝此世を去りたる時は如何。彼は其遺族を養ふだけの貯蓄をなして居るのであるか。斯く考へ來れば人類の多數は生活上殆んど何等の安心をも有して居らぬといふて差支はない。吾人は此の如き社會を以て人類の目的に合へるものと考ふることが出來ぬ。社會主義が起るに至つた理由の一は慥に人類に生活の保險を與へんとするにある。

第三の理由として吾人が陳べんと欲するのは、現社會の組織は富者をして益富ましめ貧者をして益貧ならしむるといふことてある。或人の語にパリ市の富者が食する雞肉は貧者が食する牛肉よりも廉なりとあるが、是は世界の何處に於ても同樣てある。富者は一度に多量の品物を購ひ、且つ現金を以てするが故に何時ても廉價て物を得ることが出來る。是は單に一の實例に過ぎないが、富者が種々なる場合に於て思はぬ利益を得つゝあることは明てある。若し或會社が炭鑛などを發見して一村落を購ひ潰すといふが如き場合には、會社は先づ村落中の有力者二三名に相談し、彼等の土地は一坪二十圓若くは三十圓の割合にて買收し、而して彼等の力を利用して他の地主の土地は二三圓若くは五六圓にて買收するが常てある。二三の有力者は自らも一坪三四圓にて賣りたりと僞るのであるから、他の小地主は容易に之が爲め欺かるゝのである。亦彼の銀行家なるものを見よ。貧者は年一割若くは一割五分の高利を拂はざれば借金するの途がないが、銀行家は年

五分位の利子を拂ふて幾十万乃至幾百万の金を預り、之を有利の事業に投資して莫大の利子を占むることが出來る。日露戰爭の爲には多數の國民は重税を負擔して居るけれども、三井三菱が此戰爭に依りて得たる所のものは幾千万圓といふ巨額であるそうだ。これを以て見れば現今の社會制度は殆んど少數の富者の爲にのみ利益を謀るように出來て居ることが分る。吾人は社會主義の起ることを以て至當の事と思ふ。

○社會主義の實行方法

社會主義を實行するには鐵道を買ひ上ぐるが如くあらゆる生産機關を買ひ上ぐるのである。これを買ひ上ぐるには始め公債を以てし、悉く買上げを終るまでは相當の利子を支拂ふことになるであらう。いよ〳〵社會主義が實行せらるゝに至れば漸次これを切符(社會主義の行はるゝ時には金銀貨を用いずして紙幣の如き切符を用ゆ)と引換へ、一定の年限を定めて其切符の使用を許すことゝなる。されば其年限の後には今日の所謂資本家なるものは全く其跡を絶つに至るのである。而して生産機關の買上げを實行する前には政治上の運動がなくてはならぬ。即ち社會主義者は政黨を組織して議會に代表者を送り、終に議會に於て多數を占むることに勉むるのである。獨逸に於て政治運動の盛なるは全くこれが爲めである。

吾人は序に社會主義に對する疑問に少しく答へて置きたい。世には社會主義を以て無暗に富者を敵とするものと考へて居る人があるけれども、社會主義は決して左樣な量見の狹いものではない。社會主義は富者の位地を下げて貧者と同樣にせんといふのではなくて、寧ろ貧者の位地を富者の其の如く高めんとするのである。前に陳べたる如く社會主義は何人にも生活の保障を與ふるもので、富者もこれが爲めに大なる安心を得るとが出來る。今日の社會に於ては富者と雖も決して安心する譯に行かぬ。破産といふこともあらう。貧民の憤怨が欝積すれば革命の起ることもあらう。彼等は兎に角貧民の怨府となるのであるから餘り心持の善いこともあるまい。されば社會主義の福音は貧者の爲の

みてはなく、亦富者の爲であることが分る。

社會主義に對して何人も起す所の疑問は若し生活の保障が與へらるれば人々は勢い怠惰に陥るてあらうといふ懸念てある。成程今日の如く人々が衣食の爲にのみ活動して居るのを見れば、此自由競爭がなくなると同時に社會の進歩も停止すべしと考ふるのは無理もない。現に生活の保障を比較的多く有して居る我國の貴族中に懶惰者少からず、有爲の人物は殆んど皆無といふ有樣てある。然しこれは未だ一を知つて二を知らない議論てはあるまいか。我國の貴族中より一人の學者若くは政治家を出さないのは生活の保障あるが爲てはなくて、勞働は賤むべきものなりてう觀念が彼等を支配して居るからてある。現今の社會組織ては遊んて衣食の出來る人が紳士てあつて、終日營々として勞働して居るものは勞働者として輕視せられて居る。且つ現社會に於ける勞働には苦痛の觀念が伴ふて居るから貴族の連中は尚ほ更これに遠かるのてある。然るに社會主義の世に於ては徒食の人の存在を許さない。何人も必ず何等かの勞働を爲すべき義務があるから、今日の貴族の如きは社會的制裁を受けずして無事に日を送ることが出來ぬ。且つ勞働時間も四時間位に減縮せらるゝに相違ないから苦痛といふ觀念の伴い來ることもあるまい。故に社會主義の世に於ては勞働は義務であり、榮譽てあり、快樂てあるから活動の動機がなくなるといふが如きは一の杞憂に過ぎない。抑も文明の進歩は衣食の競爭より來るものてはなくて、知的の競爭に依るものてある。文學、美術、科學の進歩は衣食の競爭より來るのてはなくて、衣食の爲に心を勞せざる時に最も多く來るのてある。衣食の競爭は下等動物時代及び野蠻時代に行はるべきもので、今日は最早此等の競爭を脱却して精神的競爭に入るべき時機てはないか。吾人は進化論にも亦進化がなくてならぬことを信ずるのてある。

聖者を論ず

福來友吉

蓋し現下の紳士として活動の日本に要地を占めつゝある人の尙青年者として思想を養成せんとするの時に當りてや、彼等は初めて西洋の物質的文明の輸入に接し、其の事相の意外なるに驚駭し、其の利益の廣大なるに感嘆するの餘り、人生の福祉は唯物質的文明の發達によりてのみ增進し得べしと信じたり。道德は陳腐なり、宗敎は空談なり。此の如きは有爲青年者の顧みるべき事にあらず。仁義とか禮智とかの煩瑣なることに齷齪して顏回の屢空を學ばんよりは、寧ろ經濟學を修めて貨殖の實利を得るに如かず。成道とか、見性とかの如き茫然たることを思念して佛陀の無爲を倣はんよりは、寧ろ物理化學を極めて工藝の實益を收むるに如かずと感じたり。物質的科學の開けてより未だ幾許もなくして、甞ては天の秘密として窺知すべからざりし自然の勢力も、今や着々として人智の支配下に使役さるゝに至れり。斯く發達して止まざる時は、人は終に宇宙の諸勢力を利用して、人世は無上完全の幸福を得るに至るべしと信じたり。物質的科學なる哉、物質的科學の前には神もなく、佛もなしと信じたり。斯くて狂熱的賛嘆を以て物質的文明を渴仰したりし三四十年前の吾が青年者は、至大至深の希望を以て之を輸入するに汲々として足らざるを是れ恐れ、其の結果各自自己の精神に對する回光自省を忘却し、操守氣節の如き、安心立命の如きは舊弊なり、陳腐なり、「バンカラ」なりとして之を輕蔑し。苟も日新的文明の潮流に浴すべき有爲青年者の心意を勞するに足らざることなりとして之を斥くるに至れり。斯くて日本の文明は玆三四十年の間に長足の進歩をなせり。而して甞て操守氣節や安心立命を舊弊なり、陳腐なり、「バンカラ」なりと嘲笑したりし當年の有爲青年者は讀者諸君の見らるゝ如く見事立身出世して、大道狹しと天下を横行し、德義の有無よりも金錢の有爲を問ひ、品性の高下よりも官位の高下を問ひ、確信の强弱よりも知識の厚薄を問

ひ、冷淡、薄情、殘酷にして、金錢と位置と知識とを利用して唯我利を是れ事とするもの、即ち當世の所謂紳士となれり。嗚呼、今の世は此等不信にして、多才なる紳士の手に飜弄されつゝあり。不幸なる良民は、彼等爪牙の爲めに傷けられつゝあり。次代の紳士たるべき現下有爲の青年者よ。發憤して至思切想せよ。

現下の紳士の病は已に深く膏盲に入れり。神醫と雖、殆んど救ふべからず。唯瞻望すべきは次代の紳士たるべき現下有爲の青年者なり。若し物質的文明の世間に身を處すべき經驗と知識とより言はゞ、勿論未成の青年者は已成の紳士に比すべくもあらず。然れども青年者の精神は紳士のそれの如く疾病に罹り居らず。假令幾分か罹り居るとするも、未だ紳士に於けるが如き慢性のものとなり居らず。今の紳士は物質的文明の知識の果實を餘り多く食ひ過ぎたり。物質的文明の果實必ずしも夫れ自身に於て有害にあらず。然れども此果實は常に精神の果實と共に食せらるゝを要す。人は其の胃腸に於て雜食を要するのみならず、亦其の心に於ても雜食を要す。現下の紳士は物質的文明の果實のみを專食して成長し、精神的文明の果實の甘味を忘れ、以て不信多才の動物となり終りたり。若し夫れ青年者に至りては、其の心的胃腸は其の父兄たる紳士の胃腸にかぶれて幾分か疾病の氣味なきにあらずと雖、尙精神的文明の果實の甘味に對して全然感覺脫失せるまで物質的文明の果實によりて傷けられざるなり。現下の紳士が尙青年者たりし時に當りて、物質的文明は極めて嶄新にして驚駭するに堪へたりと雖、現下の青年者に取りては決して嶄新にあらず、寧ろ陳腐なり。嶄新なる滋味の食物は身體に必要なる程度を超へて、終には疾病を生ずるに至るまで貪食せらる。現下の紳士は嘗て物質的文明の果實を嶄新なる珍味として飽くことを知らず之を貪食したりと雖、現下の青年は此に付きて何等嶄新なる珍味を感ずる所なし。彼等は別段他に食すべきものなきを以て之を食しつゝありと雖、彼等は未だ此によりて充分なる心的食慾を滿足せしめ居らざるなり。彼等は物質的文明の果實の外、別に何等か或

るものを食せば可なるが如く感じつゝあり。然れども物質的文明の果實の外、父兄によりて何物をも給與されざる哀なる彼等は、其の食せば可なるべき或るものの何たるやを知らざるなり。恰も乳汁のみによりて養はれて之に飽き、其の身體は隨分ある食物を要求すれども、此に付きて何等知識なき兒童が、唯何となく不安を胃腸に訴へつゝあるが如く、現下の青年者は物質的文明の食物に飽きて、彼等の精神的胃腸は他の或るものを要求しつゝあるにも拘らず、此の或るものに付きて何等知る所なき彼等は唯何となく頻りに不安を訴へつゝあり。現下青年者の思想界に於ける一大缺陷は即ち此の不安の感に外ならず。現下青年者の胸裡に響きつゝある招喚の聲は即ち此の一大缺陷を充さんとする希求の叫びに外ならず。

此の一大缺陷を充すべきものは實に唯精神的文明の果實是のみ。所謂精神的文明の果實とは文學にあらず、美術にあらず、哲學にあらず。此の三者は精神的文明の特産物にあらず。物質的文明の世にも、亦物質的思想より成る文學あり、美術あり、哲學あり。故に文學、美術、哲學は精神的思想を發表することによりて初めて精神的文明の世のものたるべし。併此等とても亦精神的文明の果實其物にあらずして、之を食したる人の書き遺したる果實の記載なり、理論なり。果實の記載、理論、必ずしも惡しきにあらず。然れども只視るべきもの、聞くべきものにて、食するを得るものにあらず。實際の滋味なし。精神の腹を飽かしむる能はず。食して滋味あり、精神の腹を飽かしむるに足る實際の果實は往生の實驗なり、見性の實驗なり、見神の實驗なり。單言すれば實在の感證なり。

實在の感證は凡ての宗教を通じて一貫するが如し。若し夫れ其の教理に就きて論ずれば、千百の宗教には千百の差別あり。然れども千百の教理的差別を一貫して過たざるものは實に實在の感證なり。苟も宗教と言はるゝものにして、眞に生靈の苦悶を根本的に救濟するの實力を有する以上は、其の教理の如何程不合理なるにも拘らず、皆其の根元は皆實在を感證したる偉人

の胸裡より出でたるもの也。故に千百の教理的差別は唯一の實在の感證に對する解釋の個人的差別なり、時代的差別なり。故に甲の人には甲の解釋あり。乙の人には乙の解釋あり。古には古の解釋あり。今には今の解釋あり。未來に於て更に新しき解釋を生ぜん。然れども其の說明の微分子說たると、エーテル振動說たるに拘らず、光線たる事實は永久吾人の見るが如き事實にして、其の生物に及ぼす利益に於て何等變化する所なきが如く、其の解釋の個人的に差別し、時代的に差別するにも拘らず、實在の感證は永久同一實在の感證にして、其の人類の苦悶を根本的に治療するの點に於て何等損耗する所なかるべし。故に余は此の實在の感證を以て宗教の生命となす。其の教說の不合理なるは、其の應用の狹き點に於て缺點なりと雖、若し眞に此の實在の感證を以て其の中核とする以上は、是れ以て眞の宗教となすに足るべし。其の教理が如何程巧妙精緻にして系統整然たるべきも、唯是れ丈に止りて實在の感證を中核とせざるものは、是れ唯通常の哲學、科學にして、宗教とは謂ふべからざるなり。

實在意識の何物たるやに至りては言辭の說明を超絕す。難者曰はく、凡そ意識に經驗する所あれば、必ず之を表明すべき言辭なかるべからず、之を分別すべき思慮なかるべからず。今已に實在の經驗を以て言辭と思慮とを超絕すと稱す。是れ所謂實在なるものは空なり、非有なり、非現實なり、存在せざるものなり。存在せざるものが人類の苦悶を根本的に救濟すと言ふに至りては、天下の愚見蓋し是より甚しきはなしと。余謂へらく、天下の愚見、蓋し是れより甚しきはなし。是れ其の誤謬たることを悟りて見れば、餘り馬鹿馬鹿しくて自ら笑ふに堪へたる愚見なり。此の如き愚見は結局一種の學者病より來る。所謂學者病とは高慢の事なり、我執の事なり、其の既得の經驗と之によりて立てられたる理論とを最上唯一のものとして之に執着し、自分の經驗と全然其の趣を異にし、自分の理論によりて說明すべからざるものは病的なり、忘想なりとして一笑の下に之を拒絕する事是なり。宙宇の如何に

大にして人間の如何に小なるかを思へ。時間の如何に長くして生命の如何に短きかを思へ。古來確乎不動として信ぜられたりし理論の如何に多く變動したりしかを思へ。此の如き大なる宇宙に此の如き小さき人間として生れ、此の如き長き時間に此の如き短き生命を享け、何を苦んで未來永劫確乎不動として保證もせられざる一定理論を頑守し、之に合はざるものは病的なり、妄想なりとして一概に之を拒絶するが如き齷齪たる態度を採るに及ばんや。誤解すること勿れ。余は理論を立つることを全然無價値として冷笑するにあらず。理論を立つる甚だ可なり。人は理論を立てざるべからず。若し解脱者ありて、人間の小く、其の生命の短く、其の立てたる理論の確乎不動ならざるを理由として世の學者を誹謗し、其の研究を無用無價値として學問の撲滅を主張するものあらば、是れ偏狹なり。野狐禪者の主張なり。大悟徹底者の言ふべきことにあらざるべし。余は學者に與みせんとす。人間は小く、其の生命は短しと雖、三世を通じて生々無斷なる大精神の假現なりと信ず。假現なりと雖、決して偶然にあらざるべし。佛教にては三世を一貫する大精神を海水に喩へ、個々の精神を苟且に現はれたる泡沫に喩ふ。余は此の比喩の眞意を知らずと雖、さりとは人生を餘り偶然にして無意義のものと見すぎたるが如く感ぜらる。吾人の信ずる所を以てすれば、個々の人間は此の感覺世界を唯一絶對の世界と執着する人の想像する程意義深きものにあらざるべしと雖、さりとて亦海水の泡沫程無意義のものにもあらざるべし。泡沫の浮現は全く偶然なり。前泡沫の消失して後泡沫の浮現する過程には、器械的關係はあるべきも目的上の關係なし。從つて衆泡沫の生滅滅生は唯同一事相を反復するのみ。一定の目的を追求する。向上的進化にあらず。後泡沫は前泡沫に比して何等向上する所なし。人間は然らず。彼は向上するものなり。進化論者の言ふ所によれば、脊索動物進化して頭索動物となり、頭索動物進化して顎口類となり。肺魚類となり、有羊膜類となり、擬猴類となり、猴類となり、狹鼻類となり、類人類となり、終に

今日の人類となりたるものなり。人類たる間は進化の一大階段なり。然れども同じ人類たる範圍内に於て、亦無限の進化的小階段あるべきなり。而して個々の人間は、此の向上進化に於ける最小なる一段階と見るべきなり。何故に此の如く進化するか。進化論の大家ヘッケル氏の如きは之を單純なる化學の器械的作用に歸せんとす。極めて甚だしき謬見なり。是れ單純なる器械的作用にあらず。是れ生活せんとする意志（Will to live 但し此の意志は個々人の自覺内に限られたるものにあらず）即ち大精神が器械的作用に依りて實現したるものなり。生活せんとする意志にして初めて目的あり。目的ありて初めて進化あり向上あり。有極的實在、即ち大精神は進化向上の必要不可缺的原因なり。意志なき所には變化あれども進化なし。目的なき所には反復あれども向上なし。有極的實在を離れたる器械的作用は唯變化するのみ、反復するのみ。之によりて進化向上を説明せんとするは斷じて不可なり。故に子々たる極微細胞の存在と雖、單純なる化學の作用による物質の集合たる丈にて、夫れより以上何等の意義もなきものと見るは否なり。是れ三世に亘りて生々無斷なる向上的大精神の假現なり。大海の泡沫の如く、浮現するも意義なく、消失するも意義なきが如きものにあらず。其の生るゝや、祖先細胞の經驗を遺傳して來る。其の存するや、自己の經驗すべき分を經驗して立つ。其の死るや、祖先より受けたる經驗と自己の經驗とを併せて其の子に授けて去る。而して是れ皆向上なり。一個の細胞は大精神の向上の爲めに生れ、向上の爲めに存し、向上の爲めに死す。一細胞已に然り。況んや人間をや。渺乎たる直立歩行の動物。其の身は大海一滴の如く、其の命は電光一閃に似たりと雖、其の存在は向上一路の階段なり。其の意志も徒爾にあらず、其の情緒も徒爾にあらず、其の知識も徒爾にあらず。若し知識なるものにして、大精神の向上的過程に向つて何等必要なからんか、何故に研究心なるものが一の性質、而も重要なる性質として人間の精神に具はり居るやの理由を解する能はず。研究せよ、學者。研究して經驗

を說明すべき理論を立てよ。然れども既定の理論に拘泥する勿れ。既得の經驗に執着する勿れ。勿論既得の經驗を單に事實として之を承認するは元より可なり。然れども此の經驗を唯一の經驗となし、之を憑據として理論を立て、此の理論の範疇に合はざる者を幻覺なり、妄想なりとして一概に拒絕するは是れ實に甚しき拘泥なり。執着なり。元來感覺機は生物の進化と共に複雜となり行くものなり。人間とアメーバとを比較せよ。人間には、視機あり、聽機あり、味機あり、嗅機あり、觸機あり。情性あり、欲性あり。アメーバの如く漠然たる運動感覺機と營養機とのみを具へたるものとは甚だ異なれり。故に人間には色、聲、香、味、觸の五世界を經驗すと雖、アメーバは唯混沌にして不完全なる觸世界を經驗するのみにして、他の世界の經驗は全く之れ無し。故に若しアメーバにして其經驗せる觸世界と意世界とを宇宙の全體となし、之によりて一種の哲學を立て、人間の所謂色、聲、香、味、情、意の經驗が此の唯觸的哲學に合はざるの故を以て、人間の經驗を幻覺なりとして、其哲學を妄想なりとして之を一瞥、否一觸の下に拒絕する事ありとせば、天下の滑稽蓋し之より甚しきものはなかるべし。然れども忘却する勿れ、吾人人間は元此の如きアメーバ樣の生物より進化し來りたるものなり。吾人の五官二性は七種の世界によりて全宇宙を經驗し盡くすべく、神の惠によりて殊別に與へられたるものにあらずして、進化の結果として七種の世界を經驗するに至りたるなり。觸意世界のみを經驗するものよりも、觸世界と味世界と意世界とを併せて經驗するものが廣き宇宙に生活するなり。觸味意の三世界の經驗より、觸、味、香、意四世界の經驗に移り觸、味、香、意四世界の經驗より觸、味、香、聲、意五世界の經驗に移り、觸、味、香、聲、色、意六世界の經驗に移り觸、味、香、聲、色、情、意の七世界の經驗に移るに從て其生活する宇宙は次第に廣くなるなり。而して斯く世界の廣くなり行くことは、生物の進化階段と比例し行くものなり。故に一方面より言ふ時は、進化とは狹き世界より廣き世界に移り行くことゝとして定義し得べし。

而して現今の所、吾人人間は最も進化せる位置、即ち最も廣き宇宙に住息す。勿論經驗世界の數より言へば、人間は犬猿等より高き位置にありと言ふべからず。蓋し高等動物も人間と同樣に五種の感覺機と二種性とを有すればなり。然れども人間の五官と二性は全體として動物のそれよりも精微なり。從つて人間の七種の世界の各自は動物のそれよりも廣大なり。此の意味に於て人間の宇宙は生物中最も廣し。然れども誰れか人間を以て進化の絕對的止處となすか。混沌として不完全なる唯一つの觸世界のみに住息したりしアメーバ樣の生物より進化して七世界に住息するに至るまで進化したる人間は、更に進化して八世界に住息するものとならざるの理あらんや。實に精神は無限の向上をたどるべきものにして、進化は此の向上の過程にすぎざるものと信ずる余は、必ず現下の人間は更に進化して八世界に移り行くの時あるを信ず。然らば現下の七世界に住息する人間は更に進化して如何なる第八新世界に向上すべきものなるか。從來の七世界のみに局限せられたる余は、此の第八新世界の何たるやに付き何等積極的知識を有せずと雖、古來豫言者の垂教する所によりて朧氣ながら之に付き大體の憶測を有せずんばあらず。

キリストの教へし所は如何。彼は自ら神の子なりと宣して、凡ての罪あるものを神の前に導かんとせり。釋尊の教へし所は如何。彼は清淨法眼涅槃妙心實相無相微妙正法を迦葉に附し、佛法の心印を彼に許したり。モハメットの教へし所は如何。「言ふべからざる皇天の殊祐に由り、余は今悉く萬理を悟れり。此の上は疑問も無く、迷暗も無く、只大悟徹底あるのみ。……天上天下唯一神。吾人は宜しく一切の偶像を捨てゝ此の神を仰ぎ見ざるべからず。神は獨り偉大なり。他に一の大ある無し。神は即ち實體なり。」彼は斯く宣して、イスラムと劍との孰れか一を擇取せざるを得ざるべく人に迫りたり。誰か之を幻覺妄想なりと謂ふ。誰か之を枯木死灰なりと謂ふ。誰か之を權謀瞞着なりと謂ふ。此等の三聖の世に現はれしより、天下生靈の根本的に救濟され、之によりて以て生き、之によりて以て死し

たるもの幾億萬。夫れ幻覺妄想には實なし。死灰枯木には活なし。權謀瞞着には誠なし。實なく、活なく、誠なきものにして天下幾億萬の生靈を根本的に救濟すと言ふ。天下何の沒理か之に如かん。余は斷じて信ず、夫の三聖は吾人人間の住息する七世界を超越して、共に第八新世界に進入したるものなり。此の第八新世界の經驗に付きて、三聖は別段具體的記載を與ふる所なし。實は之を具體的に記載すべき言語なきによるなるべし。然れども後世の聖者の不完全なる記載によりて稍其の光景を想見すべし。今トレヴォール氏の實驗談を掲ぐれば次の如し。氏は曰はく。

精神的生活(第八新世界の事なるべし)は之に住息せし人に向つて夫れ自身を立證す。然れども之を理解せざる人に向つては、何と言つて之を示指すべきか。少くとも余は次の如く言ひ得べし。該生活は之を經驗したる人に向つて現實として證明せらる。蓋し該經驗は經驗者が生活の客觀的現實と最も接近したる時にも、尚彼と共に同伴して離れざればなり。夢想は此の試驗に堪へ能はず。吾人の醒覺すると共に、吾人は其の單なる夢想にすぎざることを見出すべし。過勞したる腦髓の昏迷は此の試驗に堪ゆべからず。神の現前に關する此等經驗は稀に現はれて短かりしなり。……余は此等經驗の價値如何を嚴酷に檢査せり。余は腦髓の空徒なる妄想の上に余の生活と事業とを建設せんことを怖れて、何人にも此の經驗を語りたることなし。然れども各種の疑問と試驗とを經たる後の今日に於て、余は此等經驗が余の生活中の經驗中最も現實なるものにして、凡ての過去經驗と凡ての過去成長とを説明し、統一する所の經驗なることを見出せり。實に其現實性と其の幽遠なる意義とは今や益顯著分明となりつゝあり。此の經驗の現はれたる時、余は最も充實し、最も堅强なる、最も正當なる、最も深遠なる生活を生活しつゝありき。……現實的實在の現はれたる時は、最も現實の時なりしなり。此の時、余は神の無限海洋中に游泳しつゝありしことを記憶す。

其の他基督教信者の見神の實驗なるものを見るに、結局其の要點は此の七世界よりも一層信實、一層充實、一層現實なる世界に入りたることとの感證に於て相一致するが如し。佛教家殊に禪僧の所謂見性の實驗に至りては、所謂不立文字、敎外別傳と稱して、之を七世界の言辭によりて言ひ表すことの全然不可能なることを唱ふるを以て、(嚴密に言へば實際不可能なるべし)、彼等の言說によりて見性實驗の何物たるやを想見するに難しと雖、亦彼等の片言隻辭の中には、吾人をして如何に彼等の見たる所のものゝ、七世界よりも大に信實充實現實なるやを想はしむるものなきにあらず。日菴和尙の宗通居士に示したる法語に曰はく、

夫れ心迷へば佛即衆生となる。心悟れば衆生即ち佛となる。是故に佛と衆生と全く別なし。只是迷へると悟れるとの見異なり。迷悟の見異なければ、心にもあらず、佛にもあらず、物にもあらず。一切の道理を離れて、通身一條の生鐵の如し。出生入死只是暫時緣にしたがふのみなり。去來なく、蹤跡なく、所依なく、所住なし、鏡の像に對するが如く、谷のひゞきを受くるに似たり。内に主宰なく、外に境緣なし。地獄天堂心に任せて遊戲し、苦樂逆順處にしたがひて自在なり。なんの生死の恐るべきがあり、なんの禪道の求むべきがあらん。大千世界は海中の漚、一世の聖賢は電拂の如し。

禪者の謂ふ所は、甚だ抽象的にして見性せざる吾人に取りては殆んど理解すべからず。然れども其の抽象的なるは、蓋し其の實驗の至純絕對なるが爲めならずんばあらず。凡て實驗の至純絕對なるものは常に說明の境を超へたるものたるを知らずや。吾人は禪者の言辭の餘り抽象的にすぎて其の一々を理解し得ずと雖、此の理解し得ざる言辭を發する當體の決して尋常一樣のものにあらざるを思はずんばあらず。此の當體や至大至硬の實在なり。然れども所謂大とは空間上の大にあらず。所謂硬とは岩石の硬さが如きにあらず。乾坤蹤跡を絕し、三界形相を超ゆ底の實在なり。所謂去來なく、蹤跡なく、所依なく、所住なく、鏡の像に對

する如く、谷の響を受くるに似て、內に主宰なく、外に境緣なき底の實在なり。換言すれば七世界の經驗を規定する根本的範疇たる時間と空間とを超絕したる實在なり。時間と空間とを超絕する底、是れ感覺的七世界に住息し、之によりて立てられたる理論に執着する人の之を聞きて驚駭措く能はざる言なるべし。彼等は之を以て沒理無意義の最も甚しきものと思ふべし。蓋し彼等は謂へらく、古來此の如き言辭を使用して世人を驚かすもの、即ち哲學者ありと雖、是れ唯虛榮心と不眞面目との結果のみ。時間を絕し、空間を超ゆ。何ぞ其の言の高尙にして玄妙なるが如き。然れどもコケ威しのみ。夢の如し。何等實體なし。幻の如し。何等根基なし。虛榮心强くして不眞面目なる哲學者は何等實體根基もなくして高尙玄妙なるが如く聞ゆる此等言辭を弄し、以て人を驚かして快とするのみと。彼等の謂ふ所必ずしも故なきにあらず。然れども乞ふ之を以て余を推すこと勿れ。余は筆のすさぶに任せて此の如き言辭を弄するものにあらず。余は心理學上の立脚地よりして、時空を超絕せる境界の經驗し得べきことを信ずるものなり。元來時間と空間とはカント氏の言へるが如く經驗の主觀的形式にすぎず。着色眼鏡にすぎず。此の如き形式が先天的に吾人に具備し居るは、是れ進化の結果にすぎず。大精神の向上する爲めの手段として生じたるものにすぎず。唯夫れ手段なり。故に吾人は此の時空の二形式より獨立したる境界の經驗も充分可能なるべしと信ず。而して見性の境界は正に此の時空超絕の新地なるべきなり。シモンド氏は自己の實驗によりて此の境界を記して曰はく、

余は實に人をして之を理解せしめ得べき言語を見出し能はず。該經驗は時間、空間、感覺及び吾人の稱して我と呼ぶ所のものを規定すべき多數の經驗內容の順を追ふて速に消滅することより成る。此等尋常意識の條件の滅却するに從つて、根抵的或は本質的意識の感念は其の强さを得たり。宇宙は形相なく、內容なきものとなれり。然れども自我は留存せり。驚くべく鮮明なる銳機を具へて留存せり。

シモンド氏の茲に所謂自我なるものが、佛教者の所謂眞如實相なるものよりも稍不純なるが如く想像せらる。然れども其の僅に不純なる部分を除却せば、眞に眞如實相と一致するが如く感ぜらる。而してシモンド氏の實驗せる自我は時空を兩つながら超絶したるものなり。故に時空の超絶は假想的空理のものにあらずして、聖者の實驗せる大事實なり。己に時間を超絶す。故に現在にして直に三時に通ず。已に三時に通ず。故に常恒不變なり。已に常恒不變なり、故に不生不滅なり、無量壽なり。又空間を超絶するが故に一所は直に一切處を盡くす。故に一切處遍在（Omnipresence）なり。宇宙との冥合なり。ビエック氏は此の境界を自ら實驗して曰はく、

何等の前兆もなく、忽ちにして余は火焔の如き色の雲を以て包まれて余自身を見出せり。暫時の間、余は失火に付きて考へたり、其の大都會の附近なる或る所に於て大失火あることを考へたり。次に余は、火は余自身の內にあることを知るに至れり。忽ちにして、言語に絶したる知的光耀によりて伴はれたる意氣軒昂、即ち大喜悅の感念は余を襲ひ來れり。特に大書すべきは、余は宇宙が死的物質より成立せずして、生活々たる實在より成立することを單に信ずるにあらずして、現に之を見たることと是なり。余は余自身の中に、永久的生命を意識せり。是れ余は永久的生命を持つなるべしと信ずるにあらずして、現に永久的生命を持つことを自覺したるなり。余は凡て人間の不死なることを見たり。宇宙萬物は相互全體の善に向つて共働することの必然疑ふべからざることを見たり。世界否凡ての世界の根本的原理は吾人の所謂愛なることを見たり。各自及び全體の幸福は畢竟絶對的に確實なることを見たり。

宇宙との冥合（或は神との冥合）一切處遍在、無量壽（即ち靈魂不滅）不生不滅常恒不變。此等は宗教家の常に口にする所なり。時空の世界に執着する人にして宗敎に同情なきものは、此等言辭を以て無意味の譫語とし、或は單純なる想像より出でたる詩的形容となし、

論議を待たずして直に之を拒斥せんとす。時空の世界に執着する人にして宗教に同情を有するものは、科學の知識によりて此等觀念の眞理なることを證明せんとす。之を譫語とし、之を詩的形容として拒絕するもの、勿論非なり。科學の知識によりて其の眞理なることを證明せんとするものに至りても、其の科學にして時空世界に限られたる經驗を唯一材料とするものたる以上、是れ又全く非なり。其の非なる、恰も盲目が觸覺の經驗材料によりて色彩の事實なることを證明せんとするの非なるが如し。色彩の眞意は唯之を見ることによりて直知せらる。宇宙との冥合、一切處遍在、無量壽、不生不滅、常恒不變。聖者は時空を超絕する實在を經驗することによりて、直に此等を感知するなり。人間の爲すが如く、科學的推理によりて之を信ずるにあらずして、明目者の色彩を見るが如く、直接に之を感視するなり。色彩に關する明目者の言辭は、唯明目者にして之を會得すべし。盲目者は絕對的に之を會得し得ず。盲目者の思想には色彩なし。盲者の辭典には色彩の文字なし。故に色彩は盲目者に取りては言辭を絕し、思慮を超ゆ。實在の感證に至りても亦此の如くならんのみ。心眼を開きたるもの相遇ふ時、其の間實在の經驗を相談ずる言語なからんや。昔は圓恕の獨湛老人に謁するや、湛問ふて曰はく「儞、即今何れの處にか在る」。圓恕即ち左手を握つて少しく揚ぐ。湛驚きて曰はく「儞は是れ眞箇淨業の人也」と。又昔、臨濟は黃檗に問ふて曰はく「如何なるか、是れ佛法的々の大意」。檗則ち打つこと二十棒す。三たび問ふて、三たび打たる。臨濟解せず。則ち去りて大愚の許に到る。問ふて曰はく「某甲、如何なるか、是れ佛法的々の大意と、三たび問ふて、三たび打たる。過ありや否や」。大愚曰はく「黃檗與麼に老婆心切なり。儞が爲めに徹困す。什麼の有過無過を問ふや」。臨濟言下に大悟して曰はく「黃檗の佛法、造作なし」。大愚則ち驀胸に把住して曰はく「儞、適來は有過無過を問ふ。今は還りて佛法造作なしと云ふ。是れ何の道理をか見たる」。臨濟則ち大愚の脇下に於て築くこと三拳す。大愚托開して曰

はく「汝が師は黄蘗なり。我事に預るにあらず」と。世尊拈花衆に示したる時、迦葉破顔微笑せり。具胝は學者の參問に對して一指を竪立せり。古來、見性者の問答する所、大抵此の如し。其の左拳を擧揚する所、其の打つことと二十棒する所、其の脇下三擂する所、無言拈花する所、一指竪立する所。凡て是れ聖者の言語なり。然れども此の言語や、只實在を感證せるものにして初めて之を會得すべし。餘人は能はず。故に聖者言語なきにあらず。有りと雖、餘人に通ぜざるなり。聖者思慮なきにあらず。有りと雖、其の物たるや餘人のそれと全然其の範圍を異にする所あり。其の言語を絶し、思慮を超へたりと言ふの故を以て、直に之を拒けて空とする勿れ、非有とする勿れ、非現實とする勿れ、存在せざるものとする勿れ。是れ其の手に觸れざるの故を以て、直に色彩なしと斷ずる盲目者の論の如くならんのみ。果して空なりや、非空なりや。白隱和尚曰はく、

謂ふ事なかれ、然らば則ち是れ所滅の所見なりと。

是れ斷なりや、是れ不斷なりや。眞正見性の上士にあらずんば輙く知る事能はじ。眞正清淨の無我に契當せんと欲せば、須く嶮崖に手を撒して絶後に再び蘇つて、初めて四德の眞我に擂着せん。嶮崖に手を撒すとは何ぞや。一人あり、錯て人迹不到の處に到つて、下無底の斷岸に臨めり。脚底は壁立苔滑かにして湊泊するに地なし。進むことを得ず。退くこと得ず。只一個の死あるのみ。纔に賴む所は左手に薜羅を捉へ、右手は蔓葛にすがつて且らく懸絲の命を續ぐ。忽然として兩手を放撒せば、七支八離、枯骨も亦無けん、學者も亦然り。一則の話頭をとつて單單に參窮せば、心死し意消して空蕩々、虚索々、萬仞の崕岬に在るが如く、手脚の着くべきなし。去死十分、胸間時々に熱悶して、忽然として話頭に和して身心共に打失す。是れを嶮崖に手を撒する底の時節と云ふ。豁然として蘇息し來れば、水を飲んで冷暖自知する底の大歡喜あらん。是を往生と名づけ、見性と云ふ。

已に掲げたるが如く、月菴和尚は「地獄天堂、心に任せて遊戯し、苦樂逆順、處にしたがひて自在なり。なんの生死の恐るべきあり、なんの禪道の求むべきあらん。大千世界は海中の一漚、一世の聖賢は電拂の如し」と言へり。トルストイ伯は實在を感得したる時の實感に付きて次の如く言へり。

余は記憶す、早き春の一日、余が其の神秘的噪音に耳を傾けつゝ森林の中に唯獨り佇みたることを。余は傾聽せり。而して此の過ぐる三ヶ年間、余は如何なる事に向つて鞅掌しつゝありしかに付きて回顧せり。謂へらく、神の訊問なる哉。然らざれば何んすれぞ此の觀念に想到することあらんや。

此の思想と同時に、生活に對する悅ばしき希望の忽然として胸間に現出するありき。各事各物は醒覺せり。意義を受け取るに至れり。　內容の聲は余に問へり。曰はく、汝何故に遠きを望むか。神、彼によらずして一も生活し得ざる神は目前に在り。神を認識することゝ、生活することとは一致不二なり。神は生活なり。可なり、生活せよ。神を求めよ。彼なくして生活はあらず。」

斯くて三年間、憂欝の犧牲となりたりし伯の精神は生活々たる靈光に浴するに至れり。凡て時空を超絕せる實在界に入りたるものは、之によりて無限の活氣と無限の安易を得、あらゆる七世界の危窮困阨の境に居りて泰然として動せざると山岳の如く、自若として靜なること森林に似たり。所謂安住不動如須彌山とは此の境界を謂ふか。若し人にして最初より此の實在を感じたることなからんには、彼は其の經驗する所の世界を以て實相の世界と感じ、之に付きて何等の缺點を見出し能はざるべし。恰も視的世界に付きて絕對的經驗なき盲目者は其の住息する世界を唯一の世界と思ひ、之に付きて何等不都合を感ぜざるべきが如し。然れども一たび視的世界を經驗したる人の失明して盲目者となりたるあらば、彼は明目者たりし古を忍びて、現下の不自由を感ずること轉た切なるべし。失明は只肉眼に限られたることにあらず。一たび心眼を開きて時空を超

絶せる實在界を見得たりし人の後精神的に失明して無限の靈光を失へるものあり。此の場合に於て、曩きには一木一草も深奥なる神祕的意味を有する靈語を囁きて、無限の勢力と無限の慰籍とを與へたりし天地は、今や悽愴慘憺として何等の滋味もなき荒野と變現すべし。此の實驗に付きてゼームス氏に報告したる或る科學者の談話は右の事實たることを證明す。彼は曰はく、

二十才より三十才に至るまでの間に、余は次第次第に斷見を去りて非宗教家となれり。然れども余は尚現象の背後に於ける絶對的實在に關してスペンサー氏の能く説明したる「漠然たる意識」までも失ひたりとは斷言するを得ず。余に向っては、彼（漠然たる意識を指す）はスペンサー氏の哲學に所謂不可知なるものにあらず。何となれば、勿論余は神に對して小供らしき祈禱者たることを止め、決して彼に對して形式的祈禱を捧げずと雖、尚近來に於ける余の經驗によれば、余の彼に對する關係は、事實上祈禱者の神に對するものと同一なればなり。今日より思ひ出せば、何等かの困難の起りし時、殊に家政上或は事務上の件に關して他人と爭ひたる時、或は精神の沈降し、或は心配に陷りたりし時、余は常に此の根本的宇宙實在に對して余の感じたる此の奇異なる關係より救濟を得べく歸依しつゝありしなり。困難に遇ふ毎に、彼は余の側にありき。或は余は彼の側にありき。而して彼は常に余を強め、彼の根抵的支持的現存を感ぜしむべく無限の活氣を與ふるが如く思はれたり。實に彼は生活々たる正義、眞理、力の無盡藏泉なり。衰弱せる時、余は本的に彼に依り、而して彼は常に余を蘇生せしめたり。余は今余と彼との關係の個人的なりしことを知る。何となれば、近年に至りて彼と交通する能力は余を見捨て、爲めに余は充分特定なる缺陷を感じ居ればなり、嘗て余が彼を訪ふ毎に、余は必ず彼に遇ふを得たり。其の後幾年の間、時として彼に遇ひ得たりしも、時としては全く彼に接近するを得ざりき。余は暗中に此處彼

處と徘徊し、夫の高等なる精神に關して熟知せる感覺に遇ふべく精神的に搜索せり。恰も彼は路前に立ち塞りつゝ、救護を與へつゝ手許間近くあるが如く思はれたり。然れども終に電氣的感流に觸れ能はざりき。彼の在りし所、徒に空位を殘すのみ。余は何物をも見出し能はざりき。五十に垂々とする今日に於て、彼と接する力は全く余を見捨てたり。悔らくは、大救護は余の生活を遺し去れり。生活は不思議にも死灰槁木の如くなれり。乾燥無味となれり。今より見れば、余の古き經驗は基督正教の祈禱者のそれと全く同一なりしなり。只余は余の經驗を斯く名けざりしのみ。余が彼と名けたるものは、實際上スペンサー氏の所謂不可知にあらずし、正に余自身の本能的個人的神なりしなり。余は高き同情に向つて彼に歸依したり。而して今や亡し。

實在より見捨てられたる人の、天涯孤獨の身となり絕對的寂寞を感ずる此の如し。之に反して新に實在の感證を得たるの人にありては、荒涼たる死灰枯木の世界を出でゝ、日月淸明に、風雨適順し、百花開き、衆鳥歌ひ、萬物新なる生命を得て、目睹耳聽する所、一々妙音を放ちて無限の神祕を說法しつゝあるが如き大天地に入るを得べし。聖者ダヴィッド、ブレーナードの實驗に其の最も顯著なる實例として見るべし。彼は曰はく、

一朝、平素の如く人なき場所を逍遙しつゝありし時、余は忽然として余自身の救濟放解に向つて立てられたる余の企圖計畫の全然無効なることを悟りたり。余は全く自失して進退谷まるの境に立てり。余は余自身を救ふことに向つて、永久何事をも爲し能はざることを見たり。余は無窮に對して余の爲し能ひし凡ての嘆願を爲し盡くしたることを見たり。余は常に自利の爲めに祈禱したれども、曾て神の名譽の爲めに祈禱したることなきを以て、余の嘆願の凡て無効なることを見たり、余は余の祈禱と神の慈悲との間には何等の必然的關係もなきことを見たり。余は余の祈禱が余の上に慈悲を送るべき微少の義務だも

神に負はざりしことを見たり、余は余の祈禱に何等の德も善もなきこと、恰も余の手を以て水を攪亂することに異らざることを見たり。余は神の名譽の爲めにと、公言し、又實際斯く考へつゝ、斷食、祈禱を行ふこと神前に余の誠意を捧げつゝありたりと雖、其の實余は曾て誠心誠意に之を願ひたることなくして、唯余自身の幸福のみを願ひたることを見たり、余は曾て神の爲めに何事をも爲したることなくして、唯僞善と假裝とのみを行ひたるの故を以て、滅亡の外、神に向つて何物をも要求すべき權利を有せざることを見たり、斯くて余は自利の外、何事にも注目せざりしことを明に悟りたる時、余の日常の行爲は賤むべき假裝と虛僞の連續にすぎざるものとなりて現はれたり。蓋し萬事は自我崇拜と神の濫用とに外ならざればなり。

余の記憶する所によれば、余の金曜日の朝方より次の週の日曜日の晩方まで右の有様にて連續せり。此の時も、余は前と同一の寂しき場所を逍遙し居れり、此の所に於て、余は悲むべき憂鬱の狀態に於て祈禱を企て居りたるのみにて、其の他の勤行に至りては更に之を行ふべき心を持たざりき、從來の業務、儀式、宗教的感動は全く消散したり、余は神の聖靈が全く余を見捨て去りたるものと思惟したり余は尙未だ苦悶する程には至らざりき。天にも地にも余を幸福にするもの無きが如く思はれて心陰閉せり。斯くて余は甚だ遲鈍に無意味に祈禱すべく勤めつゝ凡そ半時間を經過せり。其の時、余が茂りたる林の中を步行しつゝありし間に、一種言ふべからざる光明が余の精神内に開くべく始めたり。所謂光明とは外界的光明にあらず、亦發光體に關する想像にもあらず。是れ實に余が曾て抱懷したることなき、亦已に抱懷したるものと何等類似する所もなき、神に對する一の新しき見解是なり。余は三位一體に就きて、又は神父神子、聖靈に就きて何等特殊なる人格的見解を持たざりき。然れども今余の感じたるものは、神的光明なるが如く現はれたり。此の如き神、此の

如き光明ある神的實在を見ることによりて、余の精神は言說に絕えたる歡喜を以て滿されたり、余は此實在が永久凡てのものを支配する所の神なるべきとを心中に喜び且つ滿足せり。余は神の優超の爲めに精神恍惚となり、全く神の中に吸收さるゝに至れり。少くとも余は余自身の救濟に就きて更に考慮せず、余自身の如きものゝ存在することさへ殆んど思惟することさへなきに至れり、余は此の內部的喜悅、平和及び驚愕の狀態に於て繼續せり、暮れ方に至りて、余は余の見たる所のものを查檢し、之に就きて思考し始めたり。而して其の晩方、余の心の凡て平和なることを感じたり。余は新世界にあるが如く余自身を感じ、余を圍繞せる各事各物は從來と全然異りたる光景を以て現はれたり。此の時、無限の智慧と適當と優超とて以て、救濟の道は余の眼前に開かれたり。余は何故從來他の救濟の道に就きて考へたるや怪めり、余は何故早く余自身の計劃を放棄して、此愛すべき、幸なる、卓越なる道を採らざりしやを驚けり、假令從來余の企てたる余自身の勤行、或は他の道にして余を救ひ得たりとするも、今となりては余の精神は全然之を謝絕すべし、余は何故に全世界はキリストの正義によりて行はるゝ此の救濟の道を見もせず採りもせざるやを怪めり。

之を要するに一たび見性或は見神の實驗を經たる者は之によりて死中に無限の生命を得、暗黑中に無限の光明を得、苦悶を去りて無限の平和に入り、恐怖を消して無限の勇氣を得、意味なかりし世界に無限の意味を發見し、趣味なかりし世界に無限の趣味を感知するに至る。無限の生命、無限の光明、無限の平和、無限の意味、無限の趣味。此等は凡て生活せんとする意志(Will to live)に向つては無上の生存力なり。生活せんとする意志に向つて無上の生存力を與ふるものは是れ此の意志より見たる實在なり。若し此をしも實在にあらずと言はゞ、最早實在と稱すべきものは無るべきなり。余は此の意味よりして見性或は見神の狀態に入りたる人の得たる所を實在の感證と名けたり。而して此

の實在は七世界の經驗的事實を唯一材料とする知識を前提として論證的に得らるべきものにあらずして、心眼を開きて直視さるべき第八新世界なり。勿論七世界の論證的斷定が此の第八新世界に入ることに向っての緣となることは之れあらん。然れども斯くあればとて第八新世界が七世界の論證的斷定の必然的結果と見るべきにあらず。蓋し念佛にても、題目にても、坐禪にても、共に此の新世界に直入することとの緣となることに於て、論證的斷的に同一なればなり、否寧ろ之れよりも更に良好なる緣となるものなればなり。而して聖者は此の第八新世界に直入して、無限の生命、無限の光明、無限の勇氣、無限の意味、無限の趣味を獲得し來りたる人なり。換言すれば彼は時空を超絶する世界を實驗して、時空的世界に限られたりし時よりも、更に強大なる生存力を得來りたる人なり。更に換言すれば彼は尋常人間よりも更に廣き世界に住み、更に健なる存在を得たるものなり。故に聖者は人間の進化したるものなりと信ず。古來豫言者の豫言する所は、地震の豫言にもあらず、ペスト病の豫言にもあらず、日露戰爭の豫言にもあらずして、正に此の第八新世界の現出を豫言したるならんと信ず。

以上に於て聖者の境界に付きて、余の言はんと欲したる大意を盡くしたりと信ず。勿論其の詳細の點に至りては、餘り煩瑣に亘るを以て之を略したる所あり、又余の思想の及ばざる所なるを以て之を言はざる所あり。殊更聖病に至りては全く之を省略したり。聖病とは聖者に能くある病なり。聖者の中には其の新に直入したりし第八新世界を唯一眞正の世界として之に執着し、此の舊七世界に對して絶對的嫌惡を感じ、妻子を捨て、職業を捨て、朋友を捨て、此の世界的事物に接するとを恰も糞尿に觸るゝが如く感ずるものあり。逃るべからざるの災難に逢ふて限りなく愚痴をこぼし、到底出來得べからざるとを成すべく無暗に要求するは勿論迷執なるべきも、さりとて亦住まば住むべき此の世界を斯くまで嫌惡するも亦迷執なるべきなり。若し聖病患者にして人間を我執と言はば人間は聖病患者を我

執といはんのみ。唯其異る所は、彼は第八新世界に執着し、此は七世界に執着するにあるのみ。視覺を得たればとて、聽、觸、嗅、味の四覺捨つべきにあらず。要は、四覺の爲めに視覺の德を傷けざれば可なり。オーガスチン聖者曰はく「若し偏にして唯能く神を愛せんか、偏は偏の凡ての偏向に從ふて可なり」と。是れ蓋し最も健康なる聖者の態度ならん。故に余は第八新世界に於ける抽象的生活に執着するものを以て病的聖者となす。古來其の例少からず。此の如き事實に付きては亦特に論ずべきものありと雖、今は之を略したり。唯聖者の中にも病氣あるを示し、以て後の聖者たらんものに向つて聊注意し置くのみ。

外交の現狀

竹越與三郎

ポーツマス以來我國民は大病を煩ふた人の如く、外交については全然其耳目を閉ぢて居るかの如く思はれて、世の論客は殆ど外交を忘れたのではあるまいかと思はるゝ程である。又中には日露の一戰によつて外交の事大に定まつて十年の平和を保障することが出來るなどと信じて居るものもある。然しながら外交の事は決して定つたのではなく、寧ろ戰爭以前と大差なき有樣に歸らんとしつゝあるのは現時の狀態であつて、外交の形勢は日夜に推移するといふよりは寧ろ刻々に變化しつゝあるといふ方が適切のやうに思はるゝ。

世人は滿洲の戰爭によつて露國は敗亡者の位置に立たかの如く思ふのみならず、外交に經驗ある政治家すらも露國は再び東洋に於て覇を爭ふの力なしと信ずるものもないではない。蓋し加藤高明氏の如きも其一人ならんと思ふが、彼も外務省に入て其文書を見、露國の書記官等が如何に揚々として自尊心を以てやつて來るかを見たならば、定めて意外の感ありしならんと思ふ。加之露國は淸國に對して依然としてアッセンデンシー（Ascendency）を保ち、滿洲森林の採伐、黑龍江の開放などについても頑古に反對を表して居るといふ

有様である。而して更に國家革命の狀態にあるに拘らず、其大功のある人を日本に送て日露の交情の回復を計らんとし、又我本野公使が露國に入るや、特別汽車を仕立てゝ歡迎するなんど、なか／＼用意周到のことをして居る。其中にはコンノート殿下の來聘せらるゝあり、陸海軍の大名を有して居る軍人を率ゐて來るなど、外交の變化の機會が此間に包まるゝは何人も否定すること能はざるべしと思ふ。要するに日露戰爭によつて外交のこと大に定れるにあらず、又世人が妄想したるが如き得意の位置にもあらざることは掩ふべからざる事實である。而して此外交の危變を孕むものは矢張支那であらうと思ふ。是れ我國民の須臾も注目を怠るべからざることである。

眼を轉じて歐羅巴の形勢を見れば獨、佛の兩國は今やモロッコ問題に就て互に虎視眈々として居る。是が爲めに歐洲外交社會の警鐘は頻りに亂打せられて列國の外交家、軍略家は互に兩國の陸海軍を比較して、一旦事あるの日、孰れが勝つてあらうかを推測するに忙しい。然しながら要するに兩國は容易に刀の鞘を脱することはあるまいと思ふ。が然し神ならぬ身のかくいひつゝある間に何時火藥に火のつくことがないとはいへぬが、若し獨佛の兩國の政事家の期するが如くモロッコ問題が平和に終局することが出來たならば、其結果は獨佛が爭をせぬといふに止らず、幾分か話合のつくことゝなつて、獨乙が退くならば必ずや他の方面に於て獨乙が利益を收むるに當りて佛國は之を妨害せざるべしといふアンタント（Entente）が出來ての上でなければならぬと思ふ。扨此時に當て獨乙は如何なる方面に於て其東隅の利益を收めんとするであらうか、蓋し大地を打つ槌は外るゝとも、彼が全力を盡して支那問題を起し、揚子江の沿岸に於ける英國の利益權力を蠶食せんとし、山東省を基本としたる獨乙の勢力範圍の擴張を計らんとの斷言は決して外るゝことなかるべしと思ふ。是れ亦支那問題の産出を促す一の有力なる原因である。

歐洲列國は今や頻りに支那に於て第二の團匪を生ず

るの危險ありといひ傳へて居る。予は支那が果して利權擴張の運動より一轉して第二の團匪を生ずるに至るべきや否やを豫知することは出來ぬ。然しながら歐米列國が支那問題を起さんとするの志あるは之を斷言して憚らぬのである。世人の知るが如く亞米利加は支那の團匪に備ふるを名として非利賓に於て陸海の重兵を駐頓せしめて居る。これは何の爲めであるか。支那に團匪再發の恐あるが故なりといふて居るが、予は米國の志更に之よりも大なるものあるべしと思ふ。而して此米國の大志を挑發し、刺戟し、促成し、寧ろ勸誘し、又しつゝあるものは獨乙なるを信じて疑はぬものである。獨乙が此五六年來亞米利加を誘うて其味方たらしめんとして壓弄溫存至らざる所なきは世人の知る所であつたが、今や此外交は着々として其効を奏し、ボーツマスの前後に至て兩國の間極めて接近して來たのである。此接近は更に友情となり、更に意思利益の交換となり、今や獨乙が支那に於て將さに成すあらんとするに當り、米國は獨乙にとつて無二の味方なるかの如く信ぜられて居る。獨乙は頻りに支那に於ける團匪再發の憂を大聲疾呼し、米國に對する支那人の反抗心は即ち其徵候なりと號し、之を機會として米國をして進んで支那に對して積極的の手段をとらしめ、米國の積極的手段を利用して支那に於て米獨聯合運動を生ぜんとするのが獨乙の術策である。獨乙はかくの如き野心を支那に有しながら尚天津より兵を引上ぐるといふが如き猫撫聲を放て居る。此猫撫聲が極めて高き代價なりしことを支那の大官等が悟るの日は楊子江と山東省の間に於ける最も重要なる地點が獨乙の旗の下に落ちたる時に於てゞあらうと思ふ。是れ亦我國人の一刻たりとも注目を怠るべからざる問題である。

獨乙の禍心は斯くの如くであるが、若し日英米が支那に於ける握手の度合強くして到底其禍心を遂ぐるの餘地なしと見れば、必ずやジャバ問題を惹き起すに相違なしと思ふ。ジャバは印度洋と支那海とを扼する喉であつて、北、シンガポールを扼し、南、ジャバのシユリエバワを扼すれば東西兩洋の關門こゝに塞がつて

兵事貿易皆此關門を扼するもの丶威力の下に落ちねばならぬ。これ即ち十七世紀に於て和蘭が雄を世界に爭ふ時に於てジャバを以て其最も有用なる根據地とした所以である。其他英國が威力によつてシンガポールを取り、合せて自由貿易を行ひ、其後に至て船舶の構造、亞細亞大陸の發達等のために、ジャバの軍事上、貿易上のインポータンス（Importance）は大に減ぜられたが、今や歐洲列國が英國の後塵を拜するに止らず、出來得べくんば海上に於て英國と雄を爭はんとするものを生じたると共に、東西兩洋兵事上の形勢は又更にジャバのインポータンスを復活して、今や列國皆ジャバに注目するに至つた。中にも獨乙は此七八年來ジャバに對しては垂涎ともいふべき熱切なる心情を以てジャバを和蘭の手中より奪はんと欲し、二三年來和蘭の皇室と獨乙の皇室との間に婚姻を通ずるといふとを計りつ丶あるのも亦此ジャバを取らんとするがためなりといはれて居る。彼は已に亞米利加西班牙の戰爭に乘じてカロライン島を奪て南洋に於ける海軍根據地とした。彼は已に膠洲灣に於て支那海の海軍根據地を得た。彼は已に江海の亞丁近傍に於て船着の場所を得た。此江海の船着場所とカロライン島とを連絡するものはジャバの外はない。彼は兵略上、政治上、商業上是非共ジャバを得ねばならぬ必要に迫られて居る。然らば彼は何等かの機會を利用して此島嶼を和蘭より奪はねばならぬといふのは亦勢の昭々乎として明かなるものである。而して此問題は必ずやモロッコ、支那等の問題と關聯して利益の交換となつてあらはれて來ぬといふことは何人も保障の出來ぬこと丶思ふ。若し獨乙にしてジャバを取れば、是れ日本にとつては實に由々しき大事である。日本は決して之を傍觀することは出來ぬのである。是れ亦我國民の一日も注目を怠てはならぬ問題と思ふ。要するにモロッコ問題なるものは獨り歐洲の問題たるに止らずして、此問題の解決以後獨乙が其鐵腕を亞細亞に振ふべき機會を生ずべきものである故に、此問題の解決以後東洋益々多事となるべきは爭ふべからざる形勢である、夫れ故に予は此等の

形勢について卑見を開陳して、我國民が外交の現狀に情然たらざらんことを望むのである。

內外の形勢斯くの如くなるに當つて、功名心に富みたりと稱せらるゝ政事家が、外務大臣の席を鐵道問題の爲めに抛つに至たのは、我其甚だ無謀にして、或は此形勢の危險を見て、而して之に處して捗々しき事業を試むるの機會なきを慮り、逃げ且つ走たといはれても、之を辯護するの言葉なかるべしと思ふ。兎にも角にも我國民は外交の形勢前日よりも更に危險なることを認めて、之に處するの道を考へて置かねばならぬと思ふのである。(三月十八日筆記)

伴食宰相論

文學博士 建部遯吾

內閣大臣の進退は、我邦に在りては格別世人の注目を惹く程の價値は無い。露西亞の如きは、專制政體に伴ふ一ッの利益でもあらうか、國務大臣の更迭は滅多に之を見ることの出來ぬ所から、一大臣の更迭も世人の注目を惹くことが甚だ大であるが、我邦に於ては、立憲政治に伴ふ一ッの不利益かも知れぬが、大臣の進退更迭の甚だしく頻繁にして、人をして送迎に遑あらざらしむるは聊か遺憾とせざるを得ぬ所である。

此頃我々は二大臣の殊に注目すべき進退に接したのである、一人は即ち前文部大臣久保田讓氏であつて、今一人は即ち前外務大臣加藤高明氏である。此兩大臣の辭職は一は頗る取るべき點に於て、一は頗る取るべからざる點に於て、共に吾人の注目を値する所の出處進退と謂はなければならぬ。

加藤高明氏が今回外務大臣の冠を掛けたのは鐵道國有問題に關する自家の政策上の意見が內閣のそれと一致しなかつた爲と傳へらるゝ。加藤高明氏は外務大臣である、而して自家の所管にも屬せざる鐵道國有問題に於て議の合はざるが爲に直に冠を掛けるに至つたのは、或は自家の職責を重んぜざるかの如き淺陋なる見解を以て非難されぬとも限らぬ、併ながら吾輩を以て

之を見れば、加藤氏の進退は實に立憲政治の國務大臣たるを辱しめざるものと謂はなければならぬ。今更事々しく擧くるまでもないが、立憲政體に於ける國務大臣は、一面に於て各其所管の局省の長官であると同時に、一面に於ては身を以て內閣に列し國務に參與するの重任を辱うして居るものである。若し加藤氏にして單に外務の長官たるに止らしめば、氏の進退に關する如上の非難は或は其當を得て居るかも知れぬが、加藤氏にして既に立憲國の國務大臣として國政の大綱に向つて責任ある地位に立てる以上、又鐵道國有問題が國政の大綱上重要なる問題の一つとして數へらるべき價値の確認せられたる以上、氏が此問題に於て時の內閣と議を合し歩調を一にする能はざるが爲に、斷然冠を掛けて勇退の處決に出でたるは實に國務大臣の性質職務を辱しめざるものと謂はねばならぬ。

然るに此事は憲政の本義に於て平々凡々たることたるに拘らず、我邦從來の來往去就する幾多の大臣等には甚だ重視せられざりし所の點であつたのである。加藤氏は其平凡なることを斷行するの勇氣を以て、過つて世の識者の過賞を買ふべき幸運を荷へると同時に、日本立憲帝國は今日に於て尙ほ此平凡事に向つて讃辭を呈するの已むべからざるが如き初等なる政治的道德の段階に止るの不幸を暴露せるものと謂はねばならぬ。

之に反して久保田氏の文部大臣の位置を去りたるは吾輩特に氏の爲に遺憾なき能はざるものである。思ふに久保田氏は久しく官海の閱歷を經、而して後又頗る久しく帝國議會の上院議員として、常に敎育上の抱負を述べ、侃諤の議論を以て一方の雄鎭となつて居つた所の注目すべき人物である。此人にして自家の平常の政派とは甚だ親近なる緣故の無い所の所謂小山縣內閣に這入つたのは、孰れ國政、少くとも敎政の大問題に向つて多少の抱負を伸べむが爲めにせるものと解釋せざるを得ぬことである。果せるかな道路の傳ふる所に依れば、氏は多年の懷抱たる學制改革の大問題を此入閣の際に於て實地に解釋せんと期したものといふこと

である。吾輩も亦氏の必ず偶然にして內閣に入り徒爾にして內閣を去らざることを期待しつゝあつたのである。然るに氏の爲には幸か不幸か所謂大學問題なるものが持上つて、而して之が爲に氏が遂に其位を去らざるを得ぬことになつた、其時に氏の辭職の理由として傳へらるゝ所は、「監督不行屆の爲に、大學百有餘の教授連をして常度を失はしむるに至りたるは如何にも恐入る次第なるに依つて骸骨を請ふ」と云ふことであつたさうである。併ながら是は何事であるか、我々は一向其意を得ぬのである。

抑も官守ある者が其職を實行せんとする際に多少の災厄の來ることあるは是れ誰にも免る可からざる所のものである、而して這般の災厄に回復す可からざる性質のものと回復す可き性質のものとあるは、苟も自家の職責を重んずる者の精密に顧慮せざる可からざる所の點である。例へば鐵道經營の責に任ずる者が、不慮の災厄に依り尊敬すべき貴き人物の旅行に向つて不測の危害を及ぼさんとするに至つた場合の如きは、是れ如何にも既に出來た時變にして回復す可からざるものであるが故に、是は直ちに其職務に顧て進退何を提出するの外處す可き途の無い場合である。然るに大學教授連の連名陳情書なるものが果して常度を失せるものなりや否やは暫らく措き、假に常度を失せる擧動なりとするも、是は人間を相手の仕事であるからして十分回復の餘地の在る事柄ではないか。若し文部大臣にして眞に大學教授連の擧動を以て甚だ不穩當であると認めるならば、其爲めにこそ大臣なる者は監督の職責、職權を有するものである以上は、之をして常度に回らしむることを一應再應全力を以て試みなければならぬのである、然るに何等斯の如き擧に出でずして、大學教授連の連名陳情書に接するや、倉皇「恐多い」と云ふことを辭として逃げ出すが如きは、抱負を以て內閣に入れる久保田氏の擧動として、餘りに輕忽に失することを痛惜するのである。蓋し久保田氏にして若し確たる自信ある人ならしめば、此時に於て斷然赤心を以て大學に出馬し來つたてあらう、而して斯く言つたてあ

ちう「諸君にして若し久保田を斬らむと欲せば即ち斬れ、久保田は眼中唯帝國の教育あり帝國の國運あるのみ、久保田既に至誠を以て帝國の爲に施爲せる以上、不幸にして諸君と見解を異にせるは是れ已むを得ぬ所である、併ながら諸君の斯の如く連名陳情書の擧に出たるも亦固より天下の爲めに社稷の爲めにせることを疑はぬ、既に天下國家を念とする大要の所期に於て諸君と久保田と歸を異にせぬ以上は、希くは赤心を披いて諸君の說を聞き、又久保田の見解を諸君に語るを得たい」と。若し氏にして斯かる態度に出づるならば、大學敎授連にして狂氣に陷ゐらざりし以上は猛然として反省するの機會を得たに相違ないのである。又若し彼等が眞に一たび其常度を逸せるにも拘らず。遂に反省に至らずとするならば、是に於て氏は十二分の責任を以て斯かる不逞の亂民を鎭撫するの策を講じなければならぬ、而して此策を講じて立派に始末を付けたる以上に於て、氏は聖明の世、斯の如き事變の出來せるは、假令其跡始末は殘りなく治めたるにせよ、實に聖明に對して恐懼の至なるを理由として骸骨を乞ふ可きである。若し果して斯の如くであつたならば、久保田氏の出處進退と云ふものは實に皎々として日月と光を爭ふものと謂はなければならぬ。然るに之に是れ出てずして大學敎授連百有餘名の陳情書なるものに遭ふや倉皇として骸骨を乞うて去るが如き、吾輩は甚だ抱負を以て内閣に入れる久保田氏の爲めに取らざる所である。

大學敎授連の果して常度を失せるや否やは鐵道國有の政策上の當否と同じく吾輩別に意見を有して居るけれども、此處には之に立入るの要なく、乃ち暫らく之を見合せて置かう。夫れ久保田氏の内閣に入るや多少の抱負を以てせるに似たるにも拘らず、其去るや趨走の吏が其官を去ると大差なかつたのは實に惜む可きことと考へるのである。

加藤氏の辭職と久保田氏の辭職とは强ち正反對なる事件と云ふことは出來ぬ、併ながら加藤氏の辭職は如何にも立憲政治の國務大臣を以て自ら任ずる者の態度

に相應しきものである、久保田氏の辭職は全然立憲政治の國務大臣の態度に相應しからざるものありしは吾輩の敢て斷ぜんと欲する所である。

抑も立憲政治の國務大臣は謂ふまでもなく自家所管の政務に通曉せざる可からず、又自家所管の政務に就いて多少の抱負を有するならば之を一貫し之を實行するに勇ならざる可からず、然れども啻に斯の如きのみにては猶未だ立憲政治の國務大臣の資格に於て完全せりとは謂へぬのである、立憲政治の國務大臣は更に治く天下の樞機國家の大政に關して獻替翼贊する丈の識見と氣略とがなければならぬ。此三つの資格に於て其一つを缺いて居るならば、彼や到底立憲政治の國務大臣たるの適任者とは云へぬ。

久保田氏の如きは自家所管の政務に多少の抱負を懷いて居つたでもあらう、又之を敢行するには多少の勇氣をも抱いて居つたであらう、併ながら國務大臣としては氏有るも可、氏無きも可、國家の大政天下の樞機に關して氏の去就は敢て輕重する所なかりしてもあつたであらうか、少くとも氏は此資格を具有して居つたらしかつたにも拘らず、氏の去るに於て內閣は何等の痛痒を感じなかつたかの如くに見えたのである。加藤氏が外務省所管の政務即ち外交に關して有せる抱負若くは其抱負を實行するの氣略に於ては、吾輩不幸にして未だ之を實地に拜見するには及ばなかつたのである、併ながら加藤氏は能く國務大臣が天下の樞機、國家の政務の爲めに其抱負を誠實に押し立てなければならぬと云ふ一大原理を十分に飲込んで居つたと見えるのである。氏の去就の爲めに西園寺內閣が如何ばかりに痛痒を感じたかは吾輩の忖度する限りに非ずとするも、上御一人に於かせられては勿論天下は明かに西園寺內閣が其最重要なる政綱の一ッとして揭げたることに於て、當初大命を受けて組織せる內閣の閣員其の者の統一を保持すること能はざりしの實跡を認めざるを得ぬ次第である。

吾輩は久保田氏を文部大臣として見るに於て特に何等の悲觀す可き所以を見ぬ、併ながら氏の末路に鑑み

れば、氏の桂內閣に於ける位置は如何なる位置であつたかと云ふことを想見するに甚だしき困難を感ぜぬ。從來屢々新聞紙等の惡口に伴食宰相と云ふ名目が出て居ることであるが、久保田氏が果して伴食宰相の一人たるや否やは吾輩の知らぬ所であるが、伴食宰相を內閣員中に置くことが果して大命を拜して內閣を組織する首相其人の至尊に對する政治的道德に對して缺くる所あるや否やは吾輩の寬假せざる疑點である。

凡そ內閣といふ渾一體の失體に際して或一大臣の免黜を以て事濟にせんとするが如きは明かに政治的道德の蔑視である、而して斯かる蔑視の槍玉に擧げらるゝ所の人は之が恐らくは惡口新聞記者の所謂伴食宰相の悲しさであらう。吾輩は世の伴食宰相なる者に向つて一掬の涙を吝むものに非ざると同時に、伴食宰相を槍玉に擧げて靦然たる所の首相其者の態度をば政治道德の規範に照して甚だ之を惡むものである。

我邦敎政の振はざるや久し、世人は屢々文部省の各省對立に於ける位置は殆ど比較にならぬ程輕いと云ふことの話を聞くのである。戰爭の結果は凡そ國家を擧げて軍國主義の社會に化するの危險が在る現下の時勢に際して、本來重きを爲すに足らざりし所の敎政機關が此機運の爲に更に一層の蔑視を受くることは、啻に當該局省の不幸なるのみならず、實に我社會の不幸と謂はねばならぬ。此時に際して文部に大臣たる人を迎へむと欲せば最も先づ伴食宰相たるの危險少なき人物を迎ふることに注意を拂はねばならぬ。是に於て將來我邦の文部大臣たる者は固より敎化行政に關して抱負と識見とを有し且之を實行するに勇ある人たらざる可からざるのみならず、又外交に軍事に財政に凡そ國家樞要の政機に關して十分に献替贊襄の責を盡し得る人物でなければならぬ。若し是等の資格其一つを缺くならば彼は忽ちにして伴食宰相たるの危險に瀕するものと謂はねばならぬ。而も若し是等の點に於て十分の資格を具備する以上は、假令其出身の藩閥たると藩閥たらざるとを問はず、其系統の伊藤たると山縣たると伊藤山縣たらざるとを問はず、彼は十分に至尊の御親任

を辱うして内閣員の一人たるに十分の貫目を備ふるものであるてあらう。若し果して斯の如き貫目ある人物を文部に大臣として迎ふることが出來るならば、我教政の刷新は期して待つ可く、而して我社會をして幸に軍國主義の畸形的社會たるの危險より免れしむることも出來るてあらう。

凡そ出處進退の大節の忽がせにせらるゝは實に我現時の社會の通弊である。官吏も其出るや利の爲にし其退くや利の爲にす、議員も其出づるや利の爲にし、其退くや利の爲にす、斯の如くにして辱くも至尊の重命を荷ふ所の國務大臣の如きもが其出處進退は殆ど一に自家の都合を本位となし、然らずんば自家が黨緣阿附する所の親分の御都合の爲にし、出所進退の大節の忽せにす可からざるが如きことに關しては殆ど何等の顧念を費すことなきが如く然りてある。夫れ文部大臣の地位は國務大臣の中に在りても殊に一國敎化の一中心點として、萬衆の仰ぐ所、至尊の御憂慮を垂れさせたまう所である、然るに大臣自らが此重要なる地位を以て一個の事務官と心得るやうては、到底我邦教政の刷新、我邦敎化の進步は覺束ないことゝ謂はなければならぬ。

伴食宰相ありて弊玆に止まらず、近頃はどうやら伴食內閣が頻々と出そうにある。伴食內閣によりて經營せらるゝ國家は、終に世界列國の伍伴に在りて伴食國家たるの憫むべき結果に立至るの虞はないてあらう か、識者は社稷の爲に幾微を愼み、乃ち先づ夫の作俑の徒を罪するの必要もあるてあらう。

藝術としての哲學

丘　淺治郎

此頃は青年間に宇宙觀とか人生觀とか云ふ樣な哲學めいたことが大分流行して、女學生までが哲學書を讀むと云ふ噂てあるが、雜誌屋の店先に數多く列べてある何々論とか何々觀とか題する書物の中には、迷ひ込み樣によつては隨分當人又は社會のために迷惑の生ず

るものも少なくない樣に見受ける、斯樣な際に當つて我等の如き自然科學を修め、直接に自然を研究しながら、傍ら哲學書をも好んで讀む者が、如何に哲學を見て居るかを發表するのは敢へて無益ではなからう、

今日の所では書物を讀み字句を解釋することを哲學問と稱して居るが、眞理を探求せんとする純粹の學問の中にも、研究の方法を標準として分けて見ると慥に二組の區別がある、即ち第一の組に屬する學科では經驗に重きを置かず、專ら人間の持つて生れた推理の力のみに依つて先から先へと理を推して進む方法を用ゐて居るが、從來の哲學や倫理學は全く此組に屬する、之に反して第二の組の學科では推理力は素より用ゐるが、常に經驗に重きを置き、先づ實驗觀察に依つて成るべく正しい經驗を成るべく廣く集め、之を基として一般に通ずる理法を確め、更に理を推して考へを進めるに當つては必ず一段毎に實驗觀察に依つて推理の結論の當否を試驗し、略ゞその正しいことの見込みが附けば尙其先へ理を推して進むのである、物理學、化學、生物學等の如き所謂自然科學及び其應用の學科は總て此類に屬するが、此等の學科では實驗觀察の結果が推理の結論と矛盾する場合には、一先づ理論の方を差控へ、何故斯かる矛盾が生じたかを追究して推理の方法の足らざりし點を發見しやうと務め、理論と實際とが一致した上でなければ尙其先へ理を推して進む如きことをせぬのである、

斯くの如く學問研究の方法に二通りの別があるのは何故かと云ふに、之は人間の推理力を信頼する程度如何に基づくことで、第一の組では人間の推理力を絕對に信頼し、其導く所には決して誤はないと信じて掛かる故、何事を研究するにも a priori 的推理法のみに依つて眞理を探り出さうと務めるが、第二の組では斯くまでには推理力を信頼せず、推理力の效用は素より認めながらも尙愼重の態度を取り、用心に用心を加へ、經驗と矛盾せぬ範圍内に於てのみ推理の結論を承認するのである、抑も人間の推理力を絕對に完全なるものゝ如くに思ふことは、地球が動かぬといふ考へ、動植

物の種屬が永久不變であると云ふ考へなどと同性質のもので、何時誰が唱へ出したでもなく、人智の開けぬ間は唯當然のことゝして少しの疑をさへも起さずに滿たし來つたのであるが、今日の如く學術が進歩して、人間も他の動物と同じく共に下等の生物から進化の法則に從ふて現在の有樣までに進んだものであることが明瞭になつた時代から見ると、腦髓の働きの一部分なる推理力を斯く絕對に完全なものと見傚すことの誤りなるは勿論である、自然科學では常に實物を取扱ふ故早くから此邊の理窟に氣が附き、實驗觀察に依つて推理力を監督しながら之を働かしめる風俗が生じたのであるが、哲學や倫理學の方では對象物が摑まへ難いだけに、斯かることに氣の附くのも晩く終に今日まで未開時代の遺風が其儘に殘つて、相變らず a priori 的推理法のみに依つて研究して居るのであらう、

腦髓の構造と働きとを種々の動物に就て比較研究して見ると腦髓も肺、肝、胃腸等の如き他の器官と同樣に自然淘汰の結果、今日の生活に必要なる程度まで進化し來つたものなることは明であるが、此事を知つて後に人間の推理力の價値を考へて見ると、斯樣なことを知らぬ前の考へとは大に違い、推理力を何所までも絕對に信賴することは出來なくなり、普通の俗人的生活を營んで行くには今日の推理力で間に合ふが、それ以外の方面に用ゐる場合には如何であらうかと大に疑ふ樣に成つて來る、我等の考へでは人間の推理力は譬へば馬の如きもので、働く力は慥に有るが、之を適當に働かせるためには監督を要する、即ち俗人的生活と云ふ荷車に縛り附け、經驗に依つて監督しながら挽かせれば十分に役に立つが車から離して唯尻ばかり敲き監督なしに走らせては何所へ行くか甚だ危いものである、學問の研究に推理力を用ゐるときにも理窟は全く之と同樣で常に實驗觀察等に依つて一段毎に檢査し監督して進むだけの用心を取らねば、終には如何なる間違つた結論に達するか解からぬ、然るに從來の哲學では單に馬のみを走らせる如き研究法を用ゐ來つた故、往々飛んでもない議論を考へ出し、普通の人間の常識

とは正反對の結論に達することもあるが、元來人間の推理力を絶對に信頼して居る人々のこと故、斯かる場合には無論常識の方を捨てゝ自分の編み出した自分免許の「眞理」の方に執着し、「常識なき學問は馬鹿の二倍」と云ふ諺の活きた標本と成つて仕舞ふ、斯かる人が大勢あり、斯かることが度重なると、世間からは學者と云ふものは迂遠なものである、學理と云ふものは實際とは全く無關係のものであると云ふ評判が起り、己れに學問のないことを自覺して居る連中は此機に投じて、學問と常識とを恰も相對立すべきものゝ如くに説き、常識を以て自分等の旗章として學問に對抗しやうとする、昔から常識と云ふ名前で無學を押し包み、學理に反抗して、世の進步を妨げた例は幾らもあるが、斯くの如く無學者をして常識と云ふ旗章を舉げ得せしめたのは、實は一口に學者と名けられる者の中に以上の如き種類の學者が含まれて居る故である、

經驗に依らず單に推理力のみに依つて先から先へと考へる論法を假に懷手式推理法と名けて置くが、東海道膝栗毛の中にある六部爺の懺悔話しは實に遺憾なく此論法の危いことを示して居る、其六部は次の如くに考へた、先づ江戸へ來て見た所が毎日非常に風が吹いて往來が砂だらけである、斯く砂が舞へば必ず人々の眼に砂が這入つて盲目に成る人が大勢出來るであらう、盲目になれば退屈であるから必ず三味線を彈くに違いない、左樣すれば三味線が澤山入るから猫が皆殺されるに定まつて居る、猫が皆殺されれば鼠が暴れ出して箱を殘らず嚙み傷けるに相違ないから箱商賣を始めたら必ず大繁昌をするであらうと考へて、大小種々の箱を澤山に仕入れて店を出したが一向に賣れなかつた故、つくづく浮世が嫌になつて、六部に成つたとのことである、之は素より一場の笑ひ話して、間違い方が餘り明かである故誰も此論法に釣り込まれるものはないが、事柄が稍複雜であるか或は用語が抽象的であると、隨分之に劣らぬ樣な間違い話しでも一應は尤らしく聞こえることが往々ある、此頃新聞や雑誌等に澤山出て居る文學者連の人生觀や宇宙觀の如きも右の六部

爺の論法を聯想せしめぬものは恐ら少くなからう、

實驗觀察に依つて直接に自然を研究する者の特に感ずるのは自然の公平て正直なことてある、骨を折つて研究すれば骨折に對するだけの事を自然は我々に敎へる、五だけの研究に對しては五だけの知識を與へ、十だけの研究に對しては十だけの答をして、誰が研究しても其方法さへ適當てあれば、決して答へぬと云ふことは無いが、其代り研究するだけの勞力を取らぬ者に只て知識を授けて吳れる如きことは決してない、此事は自然を直接に研究する者の氣が附かずには居られぬ點てある、自然研究者は往々若干の事實を基とし、推理力に依つて其先を考へ自分ては明論卓説と信ずる樣な理論を考へ出し、竊に心の中で誇る如きこともあるが、其當否を實驗觀察に依つて檢査して見て、事實が之と矛盾して居ることを發見した場合には、如何に口惜くとも理論の方を直に捨てゝ更に考へ方を改めなければならぬ、これは研究に對して自然が考へる智識以外の訓練とでも云ふべきものて、其品性に及ぼす影響は決して少くない、孰れにしても自然は骨を折つて研究するものには、それだけの答をして智識を與へるが懷手をして居るものに只は儲けさせぬとのことだけは斷言が出來やう、寒さを防ぐために衣服に綿を入れること、暖爐にて室を温めること、その暖爐に煙突を附けること、其他日常に爲すことは總て長い間の經驗の結果て、凡そ人間の有する確實なる智識は悉く經驗に基づくものてあるに、獨り學問のみに於て机上の空論て眞理を發見しやうと試みて居たのは、大なる誤てある、

從來の哲學の研究法は即ち懷手式てある、哲學とても之を修めるのは決して容易てはないが、其骨の折れる點は實際を直接に研究するためてはなく、昔から大勢の人が懷手式に考へたことを書き綴つた書物が非常に多く溜つて居るのを讀むためてある、元來懷手式論法は經驗を重んずる研究法とは違い、推理の一段毎に實驗觀察の勞を要することがなく先から先へと速に走つて行く至て安逸な方法てあるが、前にも述べた通り

監督なしに馬を走らせた如くてある故方角次第て如何なる結論に達するか解らず、人々によりて各々其結論が違い、何れも自分の説を眞理と見做して、互に相駁すると云ふ有様になるは當然のことてある、現に哲學ほど相反する多數の學派が列び立つて互に爭ふて居る學科は他にはあるまい、自然は懷手をして居るものに只儲けさせる如きことはせぬと信ずる者の眼から見ると斯かる研究の當にならぬは無論のことてある、前にも述べた通り我等が好んで哲學の書物を讀むものは決して之に依つて眞理を探り求めやうと欲する故てはない、哲學書に依つて宇宙の眞理を求めやうとするのは木に據つて魚を求めるよりも尙一層甚だしい見當違いかとも思はれる、然らば何故に好んで哲學書を讀むかと云ふに、之は全く哲學を一種の藝術と見做して其巧なる所を味ひ樂むために過ぎぬ、音樂が耳を慰め、繪畫が眼を慰める如くに、巧みに造り上げた哲學系統は人間の持つて生れた智識慾を一時慰めるものである故、眞理を求める方便としては至て不適當な哲學も、此方面から見ると決して捨てたものではない、

抑も人間の智識の現在の有様を考へて見ると、恰も暗夜に小さな提燈を下げて徘徊して居る如くて、前も後も、左も右も、極近い所の外は全く見えず、又自分の足元と雖ども精密には到底解らぬ、智識の光を以て照らせば何事と雖も明瞭に解らざるものなしと大聲に演說すれば聽く者は愉快を感じ云ふ者も得意てあるが、實は之は坊は利口だと云はれて嬉しがる子供の愉快と同じてあつて、全く一時の幻覺に過ぎぬ、實際我々の智識と稱する所のものは薄暗い提燈の樣なものて、唯足元の廻りを僅だけ照し、大怪我なしに前へ步くことの出來るに足りるだけのものてある、其證據には如何なる問題ても少しく先まて尋ねると何所も必ず解らずて仕舞ひとなる、例へは場所も少しく遠い所のことは全く解らぬ、時も少し昔のことは全く解らぬ、未來のことは尙更てある、大きいことも或る際限を超えれば全く解らず、小さいことも或る際限を超えれば全く解らぬ、又原因結果の關係を考へても其通りて一

の事に對して原因である事が知れても、其原因の起る原因は何であるか、其原因の起る原因の原因は何であるかと順々に尋ねれば忽ち行止つて仕舞つて仕舞ふ、凡そ人間の智識なるものには斯くの如く甚だ狹い範圍内に限られ、四方ともに未知の暗黑界に依つて包まれて居る次第故、何時の代でも何所の國でも神秘と云ふ考への絕えることは到底ない、然しながら小さいながらも之だけの智識のあるに依り日々生活を營んで行くことが出來るのであつて、此生活用に足りるだけの智識は全く先祖代々からの經驗と自分一個の經驗とを基として獲た所である、今後とても生存競爭場裡に立つて他に負けぬ樣にと務めるには矢張經驗を積め、之より理を推して智識を增し進め、更に之を實地に應用するの外は無いであらう、扨人間が斯くの如く先祖から代々智識を增し來つたのは素より生存の必要上より起つたことであるが、其近い原因は智識慾の働きと云ふことが出來やう、恰も眼や耳が自然淘汰の結果、今日の如き巧妙複雜な働きを爲し得る程度までに發達し來つた如くに、此智識慾なるものも人間生存競爭に於ける有力なる武器である故、長い間に漸々發達し來つたものであるが一旦或る程度まで發達した以上は之に或る刺擊を與へて働かせることに依て一種の愉快を感ずる樣になる、音樂を聞いて耳で樂み、繪畫を見て眼で樂む如くに、我々は哲學書を讀んで智識慾を慰めることが出來るが、我等が哲學書を讀むのは即ち此爲である、

下手な音樂が聞かれぬ如く、又下手な繪畫が見られぬ如く、下手な哲學論は到底讀まれたものではない、又哲學書を多く讀めば其間に自然に哲學を味ふ力も發達して、最初感服して讀んだ書物も後には甚だ淺薄に感じて一向に面白くなくなることもある、此等の點に於ても哲學が藝術の性質を帶びて居ることは明に知れる、カントとかショペンハウエルとか、スペンサーとかヘッケルとか云ふ樣な、數多くある哲學書の中で特に世間から喧しく持て囃される類は孰れも藝術としては上等の作品で、確實なる智識の範圍以外に在る際限

なく廣き暗黒界を懐手式推理法によつて讀者を引張り廻し、終に宇宙の第一義とやらまで達して、宇宙を解じ盡したかの如くに感ぜしめる手際は實に巧なものとして褒めなければならぬ、特にヘッケルの如きは經驗に依つて獲た確實な智識を多く並べそれより何時とはなしに懐手式推理法に移つて讀者を釣り入れるのであるから、恰も實物を前の方に置き、見物人に知れぬ樣に繪畫と繋ぎ合せて、遠方の景色までも巧に實物の如くに見せ掛けるパノラマと同樣て、藝術としては中々面白いものである、懐手式推理法で進むと人々に依り全く違つた結論に達するは勿論であるが、哲學を藝術として其巧なる手際を味ひ樂む者から見れば、結論の如何に拘らず上手な哲學ならば孰れも面白く感ずる、喜劇には喜劇の面白味があり、悲劇には悲劇の面白味がある通り、樂天的哲學説でも厭世的哲學説でも、之を藝術作品として其こじつけ方の巧な點を味はへば孰れもそれ相當の面白味はある、

以上述べた如き心得を以て讀みさへすれば、哲學書は誰が讀んでも決して害は無からう、繪畫、音樂、芝居、淨瑠璃、若しくは圍碁、ピンポン、ローンテニスと同樣に、單に暫く娯樂を得るための方便と見做して哲學を味ふに於ては何の妨げもない、尤も過度に耽ることの有害なるは他の藝術に於けると同樣で、素より言ふまでもないことである、今日の世の中で淺薄な哲學的書類が青年輩を誤らせるのは全く世間一般の人々が哲學の眞價値を誤解し、藝術なるべきものを學問の如くに見做し、之に依れば宇宙の眞理まで達することが出來るもの丶如くに思ひ誤つて居るのに基くのであらう、芝居は役者が造つて居ると知つて居ても悲しい幕には自然と涙が出る位である故、哲學書の如く論法の巧に組み立てヽある書物を讀んで、今日の懐手式推理法の發達する樣に教育せられ來つた青年が自然に書物に釣り込まれて仕舞ふのは避け難いことでもあらうが、此點は特に注意せぬと當人のためにも社會のためにも隨分迷惑が生ずる恐れがある、實際の世の中と哲學の理論とは別物である故、實際日々の生活には經驗

を基とし、經驗ある人々の考へを參考して方針を定め、其上哲學に趣味を有する人ならば一種の娯樂として餘り耽らぬ程度に之を玩ぶが宜しい、一生を哲學に費さうと云ふ人は無論別問題で、之は俳諧の宗匠芝居の役者と同じく一心に其藝術を勵むべきであるが、其他の者が、哲學の結論と宇宙の眞理とを混同して、一身を誤るが如きは實に愚の極と云はねばならぬ、

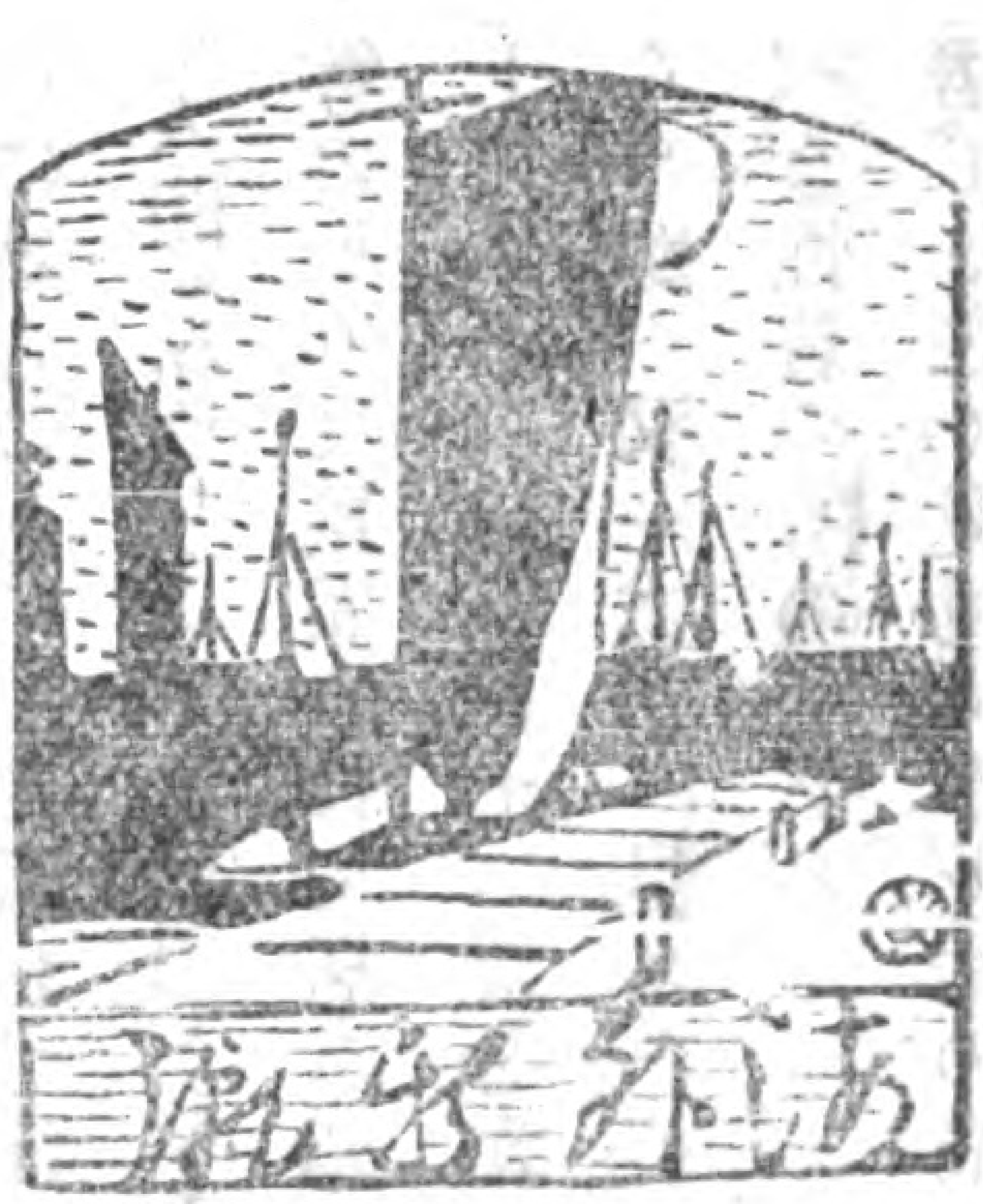
世の中には往々人間の經驗の不完全なること、其範圍に狹き制限あることを說き、區々たる人間の經驗を以て宇宙の眞理を知り盡すことは到底出來ぬと論ずる人があるが、之だけならば我等とても全く同感である、併しながら、之より推して不完全な經驗を基とした科學よりは、經驗を度外視した哲學論の方が優れりと云ふ如き結論に陷る人があるならば我等は其論法の謬りを正さねばならぬ、人間の智識が今日の程度までに進んだのは種々に工夫を凝らし、手段を廻らして、人間の出來る範圍内で成るべく正しい經驗を成るべく廣く集めた結果であつて、今日以後の進歩も此方法に依るの外は無いのである、素より不完全な經驗には違いないが實際の正確な智識を獲るためには、之が唯一の方法である故我々は益々此方面に力を盡して、生存競爭に於ける優者たる樣にと務めねばならぬ、此節は青年間に煩悶など丶云ふ言葉が流行して、科學に滿足が出來ぬから、哲學に移るとか、哲學に滿足が出來ぬから宗教を求めるとか云ふことを續々聞くが、此等は皆學問と藝術との區別、實際と夢との區別を忘れたための誤りである、自分が人間でありながら人間の經驗は不完全なもの故頼むに足らぬと考へて經驗以外の邊に滿足を求めるのは、恰も近眼の人が我眼は遠くが見えぬから頼むに足らぬと云ふて潰して仕舞ふのと同樣で、常識ある人間の決して取らぬ所であらう、今日哲學研究の入場劵の如くに見做されて居る認識論の如きも已に藝術としての哲學の始めて、幾分かの眞理は含んで居るであらうが、又一方から見ると迷ひの入口とも見做され得べき性質のものである、

田舍の芝居では往々見物人が芝居の筋書に釣り込せ

れ舞臺へ飛び出して敵役の役者を打つことがある、菅原天神記で道眞公を流さうとする所へ見物人の中から博勞の與五左と云ふ男が飛び出して「天神樣には罪はない、天神樣の尻は此與五左が持つ」と云ふて相手の時平に擲つて掛つたとのことが或る滑稽本に出て居たが、若し厭世的哲學書を讀んで自殺する人があつたならば、其人の行爲は此與五左と滑稽の度が殆んど同じである、人間の生活にも競爭は益々劇しく成り、世路は益々困難に成る故、悲觀的境遇に居る人の多いのは據ないことゝて、自殺者の年々多く成ることも亦到底避けられぬかも知れぬが、斯かる世の中に生れて來たものは、益々學問と藝術との區別、實際と夢との區別を明にし、實際の世の中で奮闘するの心掛けが必要である、徒に煩悶などゝ稱して怠けて居ると、其間には眞に生存競爭に負けて、益々悲觀的の境遇に陷つて仕舞ふ、

青年の愛讀する雜誌や青年の筆に成れる論文に哲學めいたものゝ甚だ多いのを見て、我等の如き考へを世に公にするのも或は參考の資となるかと思ひ、此所に揭げた次第である。

（終）



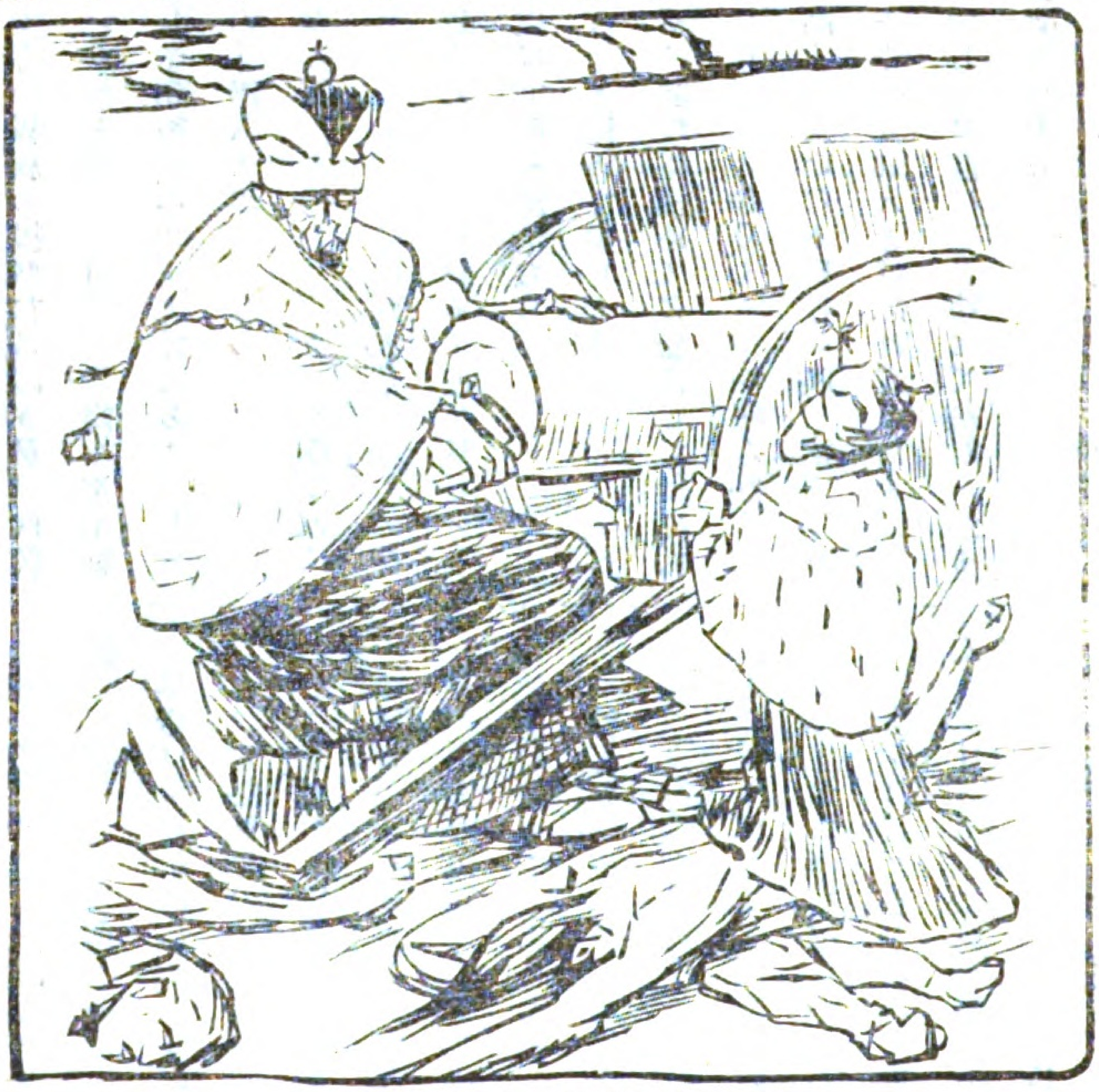
西太后と支那の宮廷

「トリビユン」

吾人は今日初めて西太后の人物について充分信實なる智識を有することを得たり。今日まで彼女の周圍には神秘の雲深く棚曳きたり。夫れ故に吾等西歐の人の想像は頻りに馳せて制すること能はず彼女について實に奇怪にして妄誕なる物語を聞かんことを寧ろ樂みたるの觀あり。歐洲又は米國の新聞紙に就て彼女の人物又は政策に關する記事のあらはるゝことあらんか、世人は頗る之を重要視して彼女の智識を得るに汲々たりしなり。然れども吾人は終に實に貴重すべき一書を有するに至りたり。彼女の日常生活は明かに記され、彼女の性格は詳かに描かれ、彼女の帝國に於ける位置、皇帝との間の關係皆精密に叙述せられ、且つ北京宮殿內部の華美光彩も殘りなく描寫せられたり。

「此書の著者は米國の女美術家にして西太后の最初の肖像を描くべき空前の名譽を負ひたる人なり。女畫家は二三ヶ月の間宮殿内に住し、殆んど日々西太后と親炙したるを以て、よく親しく彼女の性格を觀察することを得たるなり。而して物語は明晰にして趣味ある仕方に於て書かれ、華麗、繪畫に似たる文體は東洋流の壯大なる光景を寫して、而かも誇大に流れたるを見ず。此書の如き實に一頁と雖も趣味横溢せざる處なしといふも可なり。

女畫工の名はカザリン、カール孃、一千九百三年の夏、北京駐在米國公使の夫人コンガーの紹介を以て初めて宮中に入れり。其後カール孃は博覽會に出すべき肖像のみならず、其他三枚の肖像を書かんことを托せられたる程西太后の歡心を得たり。孃の初めて彼女に遇はんとするや、何となく驚くべき人物に接するが如く心ときめきたり。然れどもその豫想は全く當らざりき。次に掲ぐるは孃が初めて西太后及び皇帝を見たるときの感情なり。



REPRESSION IN RUSSIA.
CZAREVITCH: "Stop father, or there will be nothing left for me!"
—*Rire* (Paris).

彼等の出御は甚だ簡單にして甚だ手輕きものなりき。予が頭を擧げたるとき美しき小作りの貴女はにこやかなる笑を湛へて慇懃コンガー夫人に挨拶せり。侍女の一人は「陛下です」と呼げり。されどかく聞きて後も予は信ずること能はざりき、かく穩やかに見ゆる貴女、かく人なつかしげなる笑を湛ふる貴女が、世人が傳ふる殘酷にして剛慢なる暴君、千九百年以來世界の人の唇頭に上りたる恐るべき「老えたる」西太后ならんとは如何にしても信ずること能はざりき。

最初の感情は後親交を加ふるに從て訂正せらるゝこと屢々なり。されどカール孃は西太后の常に愛すべき親切なる人物なることを見たり。西太后がカンヴアスの前に立つや、孃はつぶさに彼女の容姿を研究することを得たり。孃の記する處次の如し。

完全に釣り合ひのよき身體かな。首と肩との形整ひ、姿勢は甚だ正し、手は美はしとも美はしく、小さくして形のよさ譬へんに物なし、やゝ大いなる耳、均正にして形よき頭、美しき廣き額の上に滑かに分るゝ眞黒なる髪、黒くして光ある眼、支那の貴族の摸型たる高き鼻。沈毅の氣象をあらはせる上唇、やゝ大いなれど美しき口、白き歯を掩ふ紅き唇、笑へば愛嬌溢るゝ其頬。若し予が彼女の六十九才なることを知らざりせば確かに四十歳位の元氣ある婦人と思ひしなるべし。

皇帝についても吾人は全様に精密なる描寫を得たり。カール孃は彼について研究するも面白きことなりとしたるも、彼には西太后の如く人を魅し人を惹き附くる態度の乏しきを認めたり。孃が初めて彼を見しときは彼は三十三才なりき、次に記する處は此時の感情なり。

皇帝は人を惹き附くる性格を有すること極めて少し。彼は決して人に趣味を感ぜしむることなし。西太后は其性格極めて多面にして世界的なり、皇帝は一面にして純東洋的なり、身の作りも五、四呎を超えずして痩せて美し。頭の形よく、額高く、大いなる灰色の眼、寧ろ下りたる唇を有して、形狀及び動作は全くの支那人とは思れざる所あり。其鼻は高くして所謂貴族式なり。而して身體は寧ろ痩せて細しと雖も何となく大なる生氣を蓄有するが如くに見ゆ。

而して我等歐米人に最も多く興味を有するは實に西太后と皇帝との間の關係なるべし、西太后は千八百九十八年政府の統轄を司ることゝなりたるがこれ皇帝が進歩を欲して向ふ見ずのことをなせんとみ恐れ、「支那の最も賢明なる政治家等の熱心なる歎願」によりてなりたるものなりといふ。或はいふ皇帝の西太后を尊敬するは其天性に出づるものにして、西太后の欲する所は何事と雖も拒むことなくして之に從ふなりと。兎に角二人の間には毫も悪意なきことは事實なるが如し、支那の行政のことに關して孃の記する所次の如し。

皇帝は現今行政に關して殆んどその主張を提出することなきが如し、されど謁見等のことは彼の司る所にして獨り官吏のみに之を許す。勅令は西太后に協議することなくして彼獨立に之を發布するも、重大なる事件あるに至れば大官等の會議に附し、其時は必ず西太后の出席を見、二人の協議によつて決定さるゝが如し。西太后と皇帝の居る室に使節の至ることあらんか、彼等は先づ西太后に書類を渡し、西太后の一瞥したる後、次に皇帝に渡すを常とす。彼は之を注意して讀みたる後、之を彼女に返す。之れ皇帝が此事件について不知なるより起ることにあらずして、西太后の老練なるに委任せんとの心よりするなり。

女畫工が肖像を描きつゝある間、西太后は茶を飲み、煙草を喫したり。又西太后は甚だ花を好み、從者は熱心に之を培養し、又彼女の寵遇を得んと欲するものは珍花を送るを得策とすると傳へらる。彼女の愛好する今一のものは犬なり、犬は恰かも王者の如く飾られて宮中にあり、而して猫については除程嫌悪の情强きが如し。

宮中に於ける國際上の事件については槪れ宦官によつて處理せらるゝといふが宦官にも種々の階級種類あるが如し。而して宦官の首長と目す

べきもの二人あり、始終皇帝及び西太后の傍にありて大勢力を有す。獨り宦官等に對して勢力を有するのみならず、外界に對する權力も非常にして彼等の一諾一拒は概れ事件の成否を決するに足るものあり。殊に西太后の傍に侍する宦官長は佛國ルイ十三世の朝に於ける「ソン、エミナン、グリス」の位置と似たるものありといへり。而して彼は現今六十二歳なるも七十五歳の如く見え、宮中に於ける最老の宦官なり、彼の宮中に入れるは僅かに十歳の時なりといふ。

吾人は此外支那人の日常の風習及び婦人の地位等に就て面白き記事を見たり。例へば女は己が階級を下すことなくして再婚すること能はず、又小兒の時に許嫁とせられし少女は未だ結婚を行はざる前に其夫たるべきもの死するも寡婦として取扱はる。カール孃の著書は趣味あること限なくして、若し一々之を記せば殆んど紙の盡くるを覺えざらんとす。孃の如きはよく好機を捉へて面白きことを企てたる人といふべく、吾人は孃に與ふるにマルコ、ポーロ以來初めて支那宮廷の内情を記述せる外人なるの名譽を以てせんと欲するものなり。



THE CONFERENCE AT ALGECIRAS.

PEACE: "It was quite unnecessary for you to come here. You ask me to preside, and yet you are secretly plotting against each other. If you get your deserts, not one of you will get what he wants."
—*Amsterdammer.*

露國の智力上の覺醒

『リテラリー、ダイジエスト』

巴里のオイロッペーンに掲げたる、ネスザチイ氏の説によれば烈しき革命の熱情、痛ましき政治的不平の苦痛等、露國革命運動者の希望、失意取り混ぜたる心情は、奇しき智力上の一機運を印刷器、出版業者の間に轉下せり、彼等は熱心に快活に、或は小冊子を以て、或は小紙片を以て、或は滑稽畫を以て、に今起りつゝある事變の眞相、又はそを混じて寫したるものを民衆の眼に供しつゝあり、氏は此頃巴里に露西亞學校を開設したるトラッチエフスキー教授が、「吾人は文化の一點に於ては人後に落るものと雖も、政治的思想に於ては現時は其領袖たり」との言を引用せるが、實にや國民の全精神は政治の上に集中せられ居るなり、一般智力上の生活、即ち科學や、其他の學問や、教育上の研究に至りては實際猶ほ躊躇の態度にあるものなりと雖も、現時の革命的事變と將來の方策並に向上等に關する著述は、プランプロザの葉の如く繁く印刷器

より現れつゝありと、左に氏の文を引用せん。

露國に在つては秩序ある智的活動は中止せられたり、科學は其研究を止め、凡ての大學は閉鎖せり、文學藝術は極力政治問題に身を委れたり、多くの出版所は他國の著述の飜刻や、飜譯や、或は現時偶發せる經濟上、政治上、歴史上の問題に關する輯集書撮要書等を發行するに至り、其題目は罷工同盟普及、議會政治、各國選擧法、勞働規定、土地平分問題等にして、成るべく容易に貯蓄少なき貧困なる勞働者にも其論説を手にするを得しめんと努めたり、予は、政府より凡て法律に違反せりとて閉鎖を命ぜられたる、彼の有名なるパラモノツフ家の公刊物を此處に有せるが、そは斷片錄の名の下に、全露國の小册子、或は民撰議員とは何ぞや、或は普通選擧、或は匿名投票、或は人民政治等の名を以て論ぜられたるものより成れり、

猶ほ氏は續けて曰く、多くの新聞雜誌は、彼等が有する不安の顧慮、又は罷工同盟の結果として購讀申込者の數甚だ減少せり、何人も送金に對して受くるものなくして終らんかを危みて、前金盡くるも更に之を支拂ふものなし、されど革命、紛亂、激怒と敏活なる智力上の多感性とは諷刺的性質の畫解公刊物を甚だ盛ならしめたる觀ありと、斯くして又曰く

革命前の生氣なき慘憺なる狀態を悩げに描ける一二の滑稽ものより判斷せんには、何人も斯ゝる奇智と斯くまでの諷刺的才能とを露人が潛有すべしとは想及せざりしところなるべし、然るに革命初りてより所謂版權の自由は抑壓せられ、爰に實に强烈なる諷刺書類は其敵に對して崛起せり、革命前には警察官吏若くは政府の小屬吏ならでは攻擊したることなかりしもの、今は極力其鋒をトレポッフ、ウィッテ、ポベドノステッフ大公、及びツアールにすら向けたり、而してそは吾人の言ふを待たず、此等の新聞紙は其現るゝや否や發行を停止せらるれど、せらるれば直に之に代るものあり、そは又順次に死し去るも其實唯異なる名の下に前者の復活し來るまでにて何等の効果あるなし、此等の戰慄すべき紙片の一なる、セントペテルスブルグのブリムストン紙幷に其中に在る圖樣に就きて一記事を得たり、曰く、

本紙は實に其詩に小說に畫解に及び諧謔に何れも寒心すべきもののみなるが、それにには反抗的運動に關係せる多くの活動者は、殘酷に取扱はれ、鞭撻せられ、愚弄せられ、虐待に曝されつゝあり、之によりツアールに對して含まれたる暗刺は極めて明瞭なるを得るなり、其凡ての圖樣は誠實に且つ巧妙に露國に行はれつゝある悲劇の慘境を描出しあり、恐らくは彼等の最も不祥なる狀態を記述せしものなるべし、ペテルホッフ或はツアルスコエセロの宮殿寫出され、荒涼空漠の蕭寂なる感觸が、屋宇を支ふる大圓柱の遠景畫によりて現はされ、其大圓柱の間に獨り孤寂の感におびえて、それに得堪えて遁げ出てんとするかの如く、誰も居ぬ處室に小銃を空射しつゝ足早に步みつゝあり、實にそは巧妙に且つ想像的構想なりとす、

羅馬加持力教布教地としての日本

『リテラリー、デジエスト』

英國のカソリック、トルース、ソサイチー、幷に其姉妹教會より、此頃日本に於ける宗教に關し、一小冊子を公刊したるが、機に合へる興味ある報道を含めり、そは伊國知名の教父、カサルテリ氏の筆にて、内容は盡く氏が直接に得たるものより成り、新日本は基督教布教地として將來有望の地なりとは、稍言ふ能はずとの意見を示せり、伊國傳道者は、不信仰幷に無神教的精神は泰西の物質的文明の進歩に踵き來れるを確言し、且つ基督教教義にとりて便よかりし、日本人固有の素朴の性著しく減少せるをいへり、現今日本にて弘布せらるゝ書け、帝國大學教授にして、曾て伯林大學に遊びしことある井上哲次郎氏が著、極めて非基督教的



THE POOR CZAR.

GRAND DUKE: "Write what I dictate—or . . ." RUSSIAN DEMOCRACY: "Write what I dictate—or . . ."

—*Simplicissimus* (Munich).

のものなりとす、此書は誘發力に富み、當り難き論鋒にて書かれたるものにて、大なる成効を收めたり、即ち佛教に於ける汎神論に被するに獨逸哲學の上衣を以てし、再び佛教の天下に甦らんことを勉めたるものにて、且つ全體の骨子として、基督教は日本の國體幷に家族の安寧に害意あるものなりとの意を述べたり、即ち基督教は非日本的にして、眞の日本の宗教は、愛國主義なりと確言せり、此 に對して傳道師、リグニウル氏の試みたる辨明書は、日本政府の爲に禁止せられたり、斯くも近年推移せる驚くべき變象に就いて、教師カサルテリ氏の所説は左の如し。

日本人に與へられたる文明は、不幸にも唯純粹なる物質的文明に止まり、恰も印度に於けると一般、歐洲教育、即ち破壞的批評主義の精神は彼の國古來の宗教にけ於る信仰を潰滅したれど、其自己の幼稚と迷信とに對する自覺餘りに明自に過ぎ、更に精神を開展すること難く、舊信仰

は倒れて、新信仰の未だ之に代るものあらず、其結果として今有るものは暗黒なる懐疑論、即ち純粋なる消極的合理説のみと、

カサルテリ氏は彼の十七世期の昔における、即ち二十年間猛悪なる迫害を受け、次いで千六百十四年に發布せられし基督教撲滅の禁令により驅逐せられたる、日本に在りしカソリック布教者に就いて述ぶるところあり、其語るところによれば、昔時日本にありし最後の教會の監牧師は、千六百二十四年、生けるまゝ焚殺せられ、此迫害此殉殺の時代より以後、日本の基督教は全然寂靜に期して餘喘復た聞くべくもあらずなりぬ、氏の更に記せるところによれば、百八十万の改宗者は盡く其跡を根絶せられたりと、現時日本にある四教區内の計算なりとて、氏の示すところを見るに、ローマンカソリック教信者の數は五万の上に達せり、現在未來の狀態に就いて、氏は更に述べて曰く、

日本に於けるカソリック教の將來には、暗澹たる密雲前路を掩へり、直接迫害の時代は過ぎたれども、迫りつゝある危殆は迫害者の火鐵よりも更に恐るべきものにあらざるか、甚だ疑ふべし、多くの監牧師が報告は寧ろ此等の危殆を以て充たさるゝにあらずや、東京にある監牧師長は、カソリック教の進路を碍ぐる重なる原因として四個を擧げたり、佛教僧侶の烈しき抗敵心、各宗派の反目、政治的煽動と外人嫌惡の念の漸長、特に非カソリック主義の新聞之なりと、

東京に在るカソリック教の傳道師、クラウザアス、フアーランド氏は、一月發行のフイラデルヒア市のセ、エックレシアスチカル、レビユー誌に同一問題に就いて筆を染めたり、氏は一般日本に於ける思想は、カソリック教の思想に醞釀し、且つ泰西諸國の形體を一變せしめたる精神的發展、感化の中心たる神の教義には反對なりと許し、且つプロテスタント教傳道者が、彼等が謬認し豫期したるにもあらざれど、無神教的合理説は今は教育ある階級に隨處に流布せられ、日本國をば其絶望の潮流に投入するに至れり、之れ其諸多の原因中最大なるものなりと論じたり、氏は確言せり、日本人の鋭き智力には、基督教の王國は自ら二分せられたりと、吾人の聞くところによれば、カソリック教の新洗禮者の數は、每年四、五千の間に在りといふ、之に就いて氏は又言へり、吾人の感化は未だ日本の上流社會に及び居らず、詳言すれば、文武官、使臣、判事、辯護士、教授、及び學生等に及び居らざるなり、此事實は考察に値するものなりと、

トルストイ翁の精神的革命論

本年一月二月の兩月に亘りて「フオートナイトリー、レヴユー」誌上にあらはれたるトルストイ翁の「現代の終局」（ゼ、エンド、オブ、エヲ）と題する論文は論旨堂々、文字雄大、確かに近時の思想界に於ける最も注目すべき作なりしなり。「每日」の松堂居士なる人之が忠實なる翻譯をなして每日紙上に連載せり。吾人其一部なる精神的革命の將來を論じたる所

を抜萃して讀者と共に此偉大なる哲人の言を味はんと欲す。

過去に於ても將來に於ても、切迫せる革命の根本的原因は宗敎的なるもの是れなり。普通、宗敎と云ふ語は見る能はざる世界の或神秘的の定義として、或儀式として、人生を扶け、慰安し奬勵する所の禮拜儀式として了解せらる。然らずんば宇宙原始の說明として、若くは神の指導によりて制裁せられたる人生德道の法則として了解せらる然れども如何なる時に於ても最大の幸福を與ふる所の總ての人々に共通なる最高法が未だ開示せざる以前に於て、眞の宗敎は存するなり。

基督敎義の未だ存せざりし以前に於てすらも、各種の國民間に最高なる宗敎法なるものは唱導せられありき。こは實に各人生活の爲めに存せしにあらずして共同生活の爲めに存せしなり。例へば佛陀、イザヤ、孔子、老子、ストイック派の如き是れなり。一千九百年前、基督敎は現はれたり、基督敎は共同服務の法則を新らしき力を以て創設したり、而して猶ほ進んで此法則は何故に未だ完全ならざりしかとの理由を說明したり。

馬太傳第五章に曰く

目にて目を償ひ、歯にて歯を償へと云へることあるは爾等の聴きし所



POLITICAL CAKES.

Russian cake—with fire crackers. Colonial cake—most delicious. Vatican cake—a little too salt.

— *Fischietto* (Turin).

なり。されど我れ爾等に告けん、悪に敵すると勿れ人爾が左の頬を撲たばまた外の頬をも轉らして之に向けよ。爾等を訴へて下衣を取らんとする者には上衣をもまた與へよ。人爾等に一里の公役を強いなば、之と共に二里行け。爾に求むる所のものは與へ、借らんとするものを斥くること勿れ。

此敎訓は判事が訴訟事件に關して、暴力が許さるゝ時に、暴力を用ふる所の人なりし場合ならば、其所には暴亂の制限無きことを指示せるなり。また此故に暴亂無からん爲めには如何なる口實にても暴亂をなすべからざること、殊に復讐と云ふ最も普通なる口實を以て暴亂をなすべからざることを指示せるなり。

此敎訓は罪惡は罪惡を以て斷滅する事能はずとの單純なる自明の眞理を創定したるなり、暴亂の罪惡を杜絕するの唯一手段は暴亂より沈默することにあり。

此敎訓は明かに表示せられ確立せられたり然れども人生の必要條件としての復讐を正義とする所の過りたる觀念は既に深く根底あるものとなれり、多くの人民は基督敎敎訓を知らざるなり、只だ偏りたる形狀に於てのみ之を知る。即ち基督の法則を享受せる人々にして猶は暴亂の法則を奉持しつゝあるなり。而して基督敎國の指導者等は

人類共同生活に對する全教訓の鍵石を構成するの『無抵抗』の教訓無くして共同服務の教訓を享受し得るものなりと思へり。

復讐即ち罪惡に對する罪惡の報酬が不利益にして不道理なることは獨り基督教の敎ゆる所なるのみにあらず實にこは眞の自由を得べき唯一の手段なり。既に爭鬪に投ぜんか、其瞬間其人は自由より驅逐せられたるなり。若し彼がたとひ其場合に勝利者たるも遂に再び更に强者によりて征服せらるべければなり。即ち基督教は最高法に服從する事の外、人の完全自由法を主張す也。

馬太傳第十章第二十八節に曰く

「爾等は爾の身を殺す人々を恐るゝこと勿れ、彼等は爾の靈魂を殺すこと能はさればなり。只だ靈魂と肉躰とを共に地獄に投ぜんとする者を恐れよ。」

と此教訓は只最高法に服從するものは他の總てに服從することより自由なるべしと云ふに在り。邪教徒の間に少數なりし初期に於ては、此の如く基督教徒は行ひたりしなり。彼等は最高法即ち神法と呼ばれたるものと兩立せざる事實に於ては政府に服從するを拒みたり。而して彼等は刑せられたり然れども彼等は人に從はざりし、而して自由なりき。然るに暴亂によりて支持せらるゝ國家組織の中に住居する國民が洗禮と云ふ形式的の儀式によりて基督教徒と承認せらるゝに至りたるの時、基督教徒と政府との關係は全く變じ來りたり。是に於て政府は賤しき僧侶の輔助によりて復讐若くは被壓制者、弱者を保護する爲めには暴亂及び殺戮を許さるべきものなりと人民に說込むに至れり。かくして基督教徒として暴亂及び殺戮を爲し得るものなりと信じ、基督の唱導せる所の自由に代ふるに、又た暴亂を忍ぶべき義務に代ふるに、直接之に反對する意味に於ける義を了解するに至りぬ。彼等は卑しむべき意味の平和的忍耐を保持するに至れり。政府の權力に服從するを以て彼等の最も神聖なる義務にしてまた名譽なりと思ふに至れり。此の如くして彼等は奴隷となり畢りぬ。此等の傳唱によりて敎育せられ、彼等は政府の奴隷たることを愧ぢざるに至りしのみならず、却て奴隷として其主人の大を誇るに至りぬ。

駐日露國公使の人物

左に載するは「ノーオエ、ウレミヤ」に出でたる論評なるが、かく新公使の人物をあしざまにいふもの、全く全紙が現政府を攻撃せん爲めなりと傳へらる。吾人は此論評の當否孰れなるかを知らず、只之を將來に於ける新公使の手腕成績の如何によつて判ぜんと欲するなり。

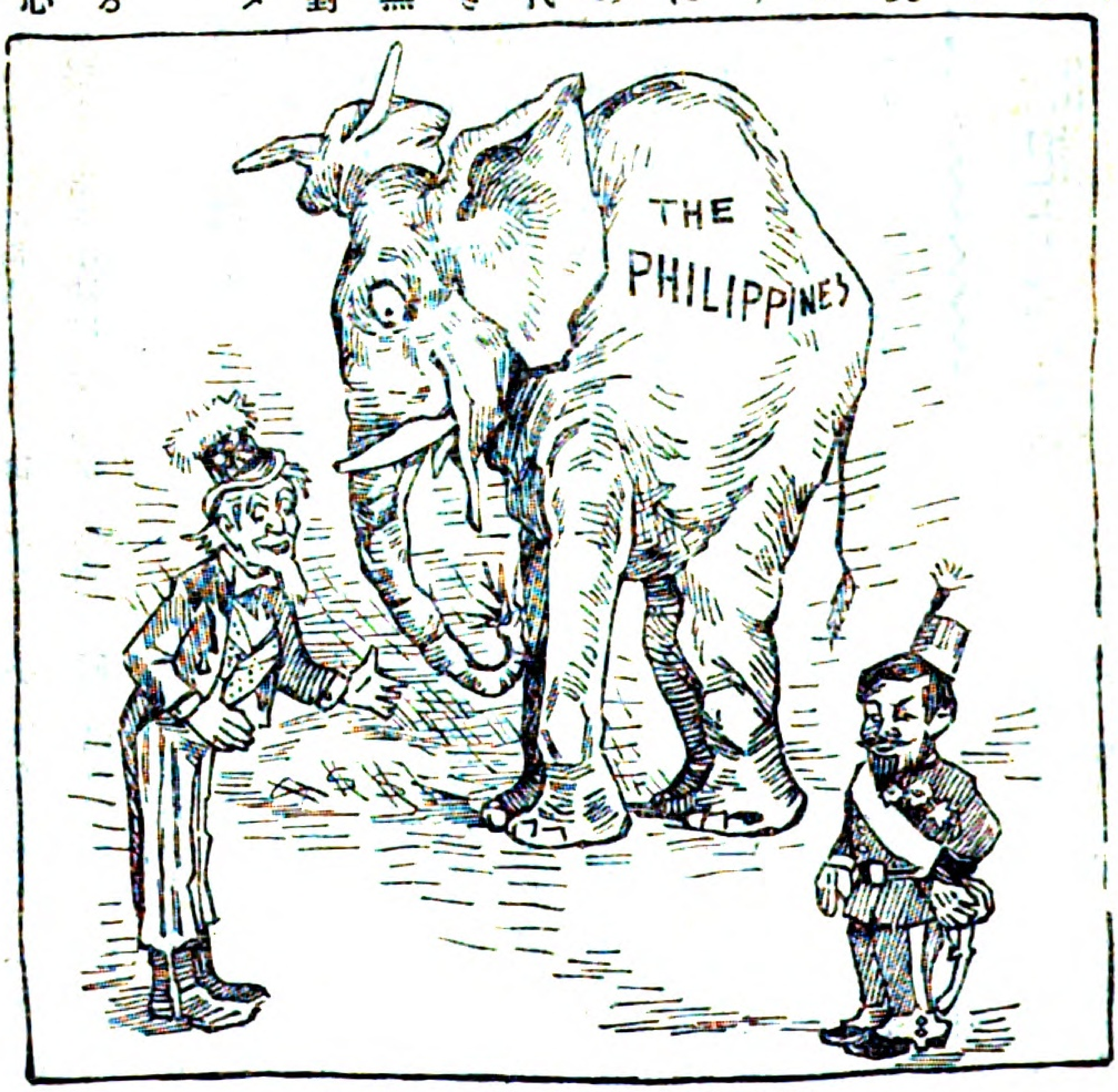
我國内の事情は如何に醜態を極め又現今露國の遭遇し居る危期は如何に困難なりとも內國の混雜の爲めに外國に對する我が必須の利害を忘却するは最も不可なり特に極東に關する事情に於て然りとす。

傳聞する所に依ればソフイア府駐剳の現任公使バフメテフ氏は近々日

本に於ける我露國の代表者に任命せらる可しと言へり嘗て氏は北京公使館の書記生たりし事あり在任幾何もなくして巴里公使館の秘書官に任ぜられ間もなくアテンの上席秘書官に轉任せりバフメテフ氏希臘に在ると十三年にして一八九七年に故ムラウイヨフ伯に識られバルガリヤの外交事務官（公使）に任命せられたりバフメテフ氏が淸國若くは佛國に在りたるは今を去る二十五六年前の事にて即ち我極東の重要なる利害問題の如きは未だ風說さへも無かりし時代なり希臘に於ける我外交問題の如きは若しクリート問題を差措かば皆無も同樣にて外交官の仕事は王室に對する親善を溫むる位の者にてバフメテフ氏は能く其任に當りしなり

ブルガリヤは少しく事情の異なる者あり同國はマセドニヤの勢力中心點として大なる趣味を有し特にスラウ民種の邦國なるを以て我國の外交上甚だ重要なる者あり然し一般の說に依れば我が外交事務官は同國の外交界に在りて敢て問題となる程の事もなかりしなり若しそれ維也納並にコンスタンチノーブルの我公使は外務省側に餘り好評ならざりし所以を問はゞ吾人は左の一事を記述するの徒勞ならざるを認むる者なりストイロフ氏大臣在職のバフメテフ氏の外交はラムスドルフ伯に依りて政府の方針と一致せざる者なる事を認められたる其時バフメテフ氏は一時休職となりラムスドルフ伯は其代理公使に命じてバフメテフ氏等の外交方針を公然排斥する事を命じ其事は實行せられ社會に對し政府の外交方針は前任者の方針と反對なる事を發表せられたり政府が斯の如き事を爲したるは果して政府の威信を保持する所以なりや否やは玆に論ずる必要なきも兎に角に斯の如き大聲疾呼に類したる事件のありし事はバルカン半島に於ける一切の事情を說明する者にて是れ世に隱れなき事柄なり。

然るに外交家外の凡人には殆ど諒解す可からざる何等かの意見に依りてバフメテフ氏は再びソフィア府に歸任を命ぜられ是に依りて氏は甚だ



THE ELEPHANT THAT CAME TO US.
UNCLE SAM: "Awfully nice elephant!"
—Bartholomew in the Minneapolis *Journal*.

侮辱せられたる位置に置かれ従て又我國の代表者たる公使の威信も損毀せられしなり若しそれパブメテフ氏がミュンヒエン、メキシコ或はブラヅルの如き國の公使にても任命せられなば氏も亦斯の如き地方に在りて能く露國の代表者たる名譽を保つを得べきを以て何人にも責む可き事なく吾人も亦之を以てパフメテフ氏の光榮ある出世を妨げたる外交の失態とは思はざるなり。

然るに露國對日本の關係は重大なる國家の問題を有するを以て日本には特に敏腕家を要して尙未だ鮮かなる傷痍を醫し且つ實驗に富み明確なる頭腦を以て事を處理し極東に於ける我が外交の强固なる地盤を武裝せざる可からず這般の大事業を成功せんが爲めには經歷を有する健闘者を要し我が昨日の敵國たる日本と其隣邦との事情形勢に精通せる政治家を要するなり日本に於ては最も該博なる專門的の準備ある外交家を要するなり斯の如き人物にして始て昨日の敵意を一變して深厚なる友誼たらしむるを得べし我が外務省たる者その自ら選任せる人物が果して是等諸般の條件を滿足せしむ可きを能く保證するや否や我が外務當局はバフメテフ氏に負はしむるに其力に耐へざる任務を以てせる者に非ざるか云々。

樂長は樂譜を暗記すべきか

『エヒヨー誌』

こはレビュー、ムヂカルが音樂界の一問題として、諸大家の意見を徵したる題目なり、佛國の有名なる樂長カミーユ、シュピラミル氏が、之に對する解答は大要左の如し、曰く、樂長が樂譜を暗記して指揮すといふことは、單に用意周到にして手際よき演奏といふより外に、更に樂長樂手の態度などにも多大の注意を拂へる聽衆の一部に向つて、常に或る一種の晴れやかなる快感を與ふるのみならず、オーケストラの各樂手をして常に其注意を緊張せしむるの長所あり、何となれば樂長が譜表を見ることなく、全局を指揮する場合に於ては、樂手は何となく其眼光の常に己れが上に向けられ居るが如くに感ぜらるゝものなればなりと、然るにフエリックス、ワインガルトナー氏は之に反對せり、氏の意見によれば、樂長の音律暗記は全然不必要なり、元より演奏指揮の際に、樂長が十分能く樂譜を了解し置くべき必要あるは勿論なるも、さればとて樂長が、常にその前に譜表を供へて指揮をなすも、決して演奏そのものに不滿足なる影響を及ぼすことなかるべし、予は一度たりとも暗記する目的を以て、如何なる音曲をも研究したることなし、その音局を十分深く我記臆に刻するに於ては、演奏中譜表を用ひざるも尙ほ能く之を指揮するを得べし、されど此場合に於ては、その記臆の再現には著しき努力の感を具ふるものにして、從て其發現の態容は、非藝術的、不合理的色彩を帶び來るべき傾あるを記せざるべからず、樂長は單に藝術家の思想の忠實なる通辯人たるを以て、其任務とせざるべからず、彼は作品によりて自ら空想中に醒起せられたる影像を、最も明瞭に、最も素朴に、最も完全に再現せしむることを努めざるべからず、その他の點に至りては殆ど枝葉の論なりと、

雑録欄



左の一篇は博士が昨年々頭某所に於て朗讀せられたるものなり

蛇の說（一名巳歳所感）

法學博士　和田垣謙三

巳の字は、蛇が鎌首を擡げつゝある形象にして、（說文曰、巳爲蛇象形）蛇（虵又は蚰に作る共に俗字也）の字、及び蛇の古字たる它亦象形的文字たり（說文曰它、「它篆文」、象宛曲垂尾形）其の體の細くして長きより、本邦にては古之を帶と稱し、（莊子齊物論曰蝍蛆甘帶、註、蝍蛆蜈蚣也、帶蛇也）、今は俗に長蟲（チエン、チヤン）といふ、本邦にても御殿言葉に長蟲（ナガムシ）あり、其の「クチナワ」と稱するは、口繩即ち口ある繩の義か或は其の形狀の朽繩に類せるが爲めならん、邦音「ヘミ」「ヘビ」「ハメ」（和泉及伊豫の方言）「ハビ」（紀伊の方言）又大蛇（ウハバミ）ノハミ或は韓音「ペーム」と語源を同じうするには非ざる歟、姑く玆に疑を存せん、英のSnakeは語源未だ審ならず、英佛のSerpentは「サンスクリット」のSarep（這ふの義）より轉化し來りしものにて、拉典のVepere（昆蟲）は英のreptileと語源を同じふするが如し、獨のSchlangeはSchlingen即ち巻き付くの意なるべきか、

蛇族の數約一千、我邦に在りては陸種約二十、海種六七に過ぎずと云ふ、是れ專門家の說く所なるが、今之を生物學上より研究せん乎、頗ぶる多趣味の事ならん、例へば蛇と龜とは一見太だ縁遠きに似たれとも、若し學理的眼孔より之を見なば、存外近縁也、近親也akin也Kindred、頭躲して尻躲くさずてふ俗諺あるが、今兩者の尻を躲し單り頭のみに就いて、較一較せば、蛇か龜か龜か蛇か、殆ど識別すべからざる程、酷肖せるにあらずや、其他所謂冬眠の事や、從つて長

時間絶食に耐ゆるの件や、極めて興味ある類似の點あり、然れども門外漢なる予は、到頭十分に之を論述するの勇なし、又要もなし、――專門外の事なれば、――若し予が如きJack of all trades に專門外の三字が何等かの意味を有し得るものとすれば、

故に予は、皮相的膚淺的Skindeep的蛇膚淺的 Snake-Skindeep的の譏を顧みず、先づ審美學上の見地より、此の動物に就いて考一考し、次に彼に依りて吾人が如何の教訓を得べきかに論及し、以て諸君と共に、悠遠なる學業の行程に於ける自警反省の資に供せんと欲す、

夫れ蛇は動物也、靜物に非ざる也、生物也、死物に非ざる也、抑も動や靜や生や死や、之を美の一點より看察せん乎、何れも美的要素を具備せざるはなし、靜にして動かざる、ヒマラヤの如き、アルプスの如き、泰山の如き、富嶽の如き、是れ雄壯偉大崇高靈嚴莊重の美にあらずや、故に仁者は山を樂む、動いて止まざる、ナイヤガラの如き、華嚴の如き、流れは絶えずして、然も元の水にあらざる蟬の小川の如き、狂瀾怒濤去つて又來り來つて又去る青海原の如き、誰か之に對して無量の美的觀念を惹起せざらん、動の美、活動の美、激動の美、萬化千變の美これ也、故に智者は水を樂む、生固より美、而して死も亦美也、蓋し生の美は動の美也、死の美は則ち靜の美不動の美也、而して死と靜との美は消極的にして、生と動との美は積極的也、而して消極美は相對有限にして、積極美は絶對無限なり、

夫れ然り果して然らば、蛇は確かに美の一大要素、即ち絶對無限の積極美を享有するもの也、加之その一居一動極めて圓轉滑脱にして、其の盤結するや、美事なる七重八重の輪ring を渦して巧みに正格輪狀を畫し、其の直進するや、乍ちにして嚴正なる幾何的直線を形成す、其の蜒蜿として蠕動するや、ノ字の如く、乀字の如く、之字の如く、左曲右折意の如くならざるなく、一屈一伸唯心の欲する所のまゝ、須臾に變じ倏

忽に化し、人をして趨蹌に違なからしむ、奚ぞ爾く其動作の千態萬狀なるや、採蘭襍志に曰く

魏宮中有一綠蛇。甄后每日梳粧。則盤結一髻形后前。后異之。因倣而爲髻。故后髻每日不同。宮人擬之。十不得一二。

知る可し、后の髻の毎日同じからざりしは、蛇髻の日々新樣を盤せるが爲めなりしを、噫支那の古麗人一たび新粧を蛇髻美に學んて、三千の後宮顏色なし、借問す今日幾千の貴夫人頭上蝦茶式部髻邊、日々新樣の束髮美を縮出する、果して彼れ古麗人の如きを得るや否や、何ぞ去つて粉本を榛莽荊棘の畔に求めざる、

倫敦市ハイド、パークの長蛇池 Serpentine pond の如き又庭園の曲線的波動狀の徑路、即ち Serpentine walks の如き孰れも蛇美式を標本とするものに外ならず、(但し酒客が放歌長吟醉脚蹣跚、右に左に左に右に、をつに美術的に、所謂ハッタリ步き的に大道狹しと濶步横行する樣を以て、是ぞ則ち Hebe-like 即ち蛇的にして蛇美主義を理想となすものとの說あれども、予は與みせず焉。何となれば彼輩には所詮何等の主義主張あるべからざれば也、縱令一步を讓り、彼等飲仙にして、果して本性的有意識的に、其の步調の浮足ながらも、如何に審美的原則に協ふものあるかを、世の俗客醒人輩に誇示せんとの發心理想を抱藏するものとするも、「左へ々々」の道路規程最と嚴重なる今日此頃、惜ひ哉、之を現實するの餘地なきを如何せん試に夫の李白をして今日に生れしめんか、その一大不平家となり了せんこと炳焉として正宗の鏡にかけて見るが如し文明の弊此に至りて極れりと謂つべし噫吁)

次に蛇の外皮、即ち天賦の被服たるや、色采の華麗なる、光澤の絢爛なる、是をしも美といはずんば、夫れ將た何物をか美といはん、殊に夫の縞蛇の如き、恰も綾羅錦繡を纏ふと一般、古人が文章陸離彩服靚莊など丶形容せし、良に以なきにあらず、夫の蛇の眼の傘の如き、天井の蛇腹の如きは言はずもがな、古今東西の美術

家が裝飾上の意匠圖案に於て、如何に蛇文を利用するの多きかを看ずや、看よ宇宙最上の美術家、良工中の良工たる造物主に於て、業に已にSerpentin蛇文石の佳作あるにあらずや、聞說く、曾て市加俄市に上流婦人の一大會合あり、婦人服裝模樣の極美なるものは何ぞや、との問題提起されし時、大多數の決議は如何なりしぞ、實に蛇と蠑螈と青蟲(玉蟲)との模樣にてありしと云へり、又一昨年の聖路易世界大博覽會に於て、婦人用裝飾品として「グラン、プリー」を得しは、巴里市某が出品に係る。八俣遠呂知然たる八股の蛇の胸懸にして、开は金と七寶と數種の寶石とを以て、巧みに蛇文を現じ出だせしものなりき、又同博覽會附屬の賣店にて活ける蠑螈を販賣し居りしが、そを鎖にて縛しつゝ、胸間にぶら下げ、公衆の前に得々たる美人夥多ありしとなり、諸君、這の夾嚢を看よ、其の物質は大蜥蜴の皮なれども、這は予の所謂る蛇文式に屬するもの、如何に其の文の美はしきことよ、思ふに這裏に收められたる幾千萬文の阿堵物より、幾百幾千倍の美を有するものならん、

歐人某、曾て世の婦人に對し、三箇條の「如くあれ、又如くある勿れ」てふ警句を發ちたり、其の一に曰く

凡そ婦人なる者は、其の怜悧にして而も靜肅なること、願くは蛇の如くあれ、されど財產の全部、―善盡し美盡したる晴れの衣裳をば、是れ見よがしに背上に纏ふこと、決して蛇の如くある勿れ、

と、蓋し蛇は衣裳道樂也、

萬物有一癖、我癖在衣裳

誰も彼も一つの癖はあるものを我にはゆるせ

衣裳道樂

とは、蓋し蛇公の心意氣ならんか

次に彼の心的技能的方面を觀察せんにWise as Serpents など云へることありて、蛇智慧てふ熟語さへある程に、彼はなか／＼怜悧なるものあり、其の足なくして奔ること、孔方兄の如き、其の卷き付く力の强大

なること、餐緣附炎の處世家の如き、其の眼光の鋭利なる、烱々人を射るの槩あるが如き、其の焔に似たる舌の、世の氣燄家をして顏色なからしむるが如き、豹と人とは死して皮を殘し名を殘すも、彼は生きながらにして、幾度か其の蛻皮を殘すが如き、而かも其の輕羅レースの美衣裳を脫却するや、さながら弊れたる衣を脫ぎすつるに似たる意氣態度、世の俠客者流をして後に瞠若たらしむるが如き。又騎者を倒さんが爲めには路に當つて先づ馬蹄に嚙み付くべしとの老猾なる兵法即ち先射馬の兵法の本家本元と稱せらるゝが如き、巧妙に音樂を奏するrattle Snake 鈴蛇の如き、若くは印度地方の蛇使ひに使用せらるゝ彼の一種の、善く笛の音色を聽き別け、巧みに兩の頰を膨らしつゝ、品好く舞ひ狂ふて、音樂的聽官に加ふるに舞踏的姿勢を以てするが如き、何ぞ天賦的靈能の爾く多方面なるや。又聞く彼の一種に盲蛇ありと、是ぞ則ち吾人々類と其の病を同ふする者なり、俚歌に曰く

瘡痕あるので人間らしい、犬に瘡痕があるものか

と、彼は復に狗兒輩と其撰を異にし、進んで萬物の靈たる人類に對し、同病相憐の特權を有するにあらずや、若し夫れ明人

蛇雖蟄物。亦靈物也。在常山者。名曰率然。在華山者。號爲肥遺。既能呑象。獨不可以化龍乎哉。第當是時。或遇夫興漢之英主。而斷之于劒。或遇夫佐宗之直臣。而斃之于笏。此妖也幻也。無庸齒也。若夫盤于帳上。而蒙遜旋師。繞于柱間。而煬宮肇祀。鬪于鄭門。而厲公率入。出于泉宮。而聲姜遂亡。玆非蛇之靈乎。故馬援之徂落。蛇爲之露其精魄也。杜預之哇吐。蛇爲之呈其異像也。竇武之誕育。蛇爲之共其胞孕也。職此而論。是蛇亦不足以爲異者。故叔敖之陰德。轉禍于兩頭者可鏡已。薛濤之功名。考祥于二角者可睹已。不然綬罰有赤。胡爲而爲邊將也。笑夫樂廣之客疑影。舍人之畫添足已。

と賛せる文藻の如き、易に「龍蛇蟄以存身也」とし、詩に委曲自得の貌を狀して「委蛇委蛇」とし、夢蛇を以て女子之祥とし、周禮に「龜蛇爲旐」とし、儀禮の註家、君子を以て蛇に喩へしが如きは、姑らく「ちやんから」先生の考證に任せんも、其の進退出處の常に宜きを得、穴に入るの季に至れば、早くも蟄伏して跡を晦まし、啓蟄の節に達するや、やをら穴より出でゝ、のそり〱、によろり〱と、野山を匍ひ廻ること、下手の弓術家(俗に蛇弓の語あり)の如き、出沒自在容易に捕促す可からざること、我元老諸公の如き、噫彼は洵に智慧者なりけり、又聞く阿弗利加西岸に「だんふ」てふ語あり、這固と蛇の義にして、同時に併呑(蛇呑か)を意味すと、は是彼が併呑主義の大王たるを以てにあらずや、語學上に於てまで、何ぞ彼が意勢と權幕との爾く物凄くも亦すさまじきことや

彼は是の如く、其の動物たる點より、又動物として一種の藝能を有する上よりして、優に積極美を具備するもの也、又其の外皮即ち onter cont の眞個美文的美術的なる、決して夫の似て非なる鰻、海鰻(あなご)、鱧(はも)、八目鰻一輩の、足許(若し彼等にありとすれば)にも寄り付き得ざる所也、果して然らば、吾人々類は、這の受造物、這の同類(吾人も受造物動物の一種に外ならず)に對し、相當の尊敬を拂ふや、其の美姿麗色に醉ひ、其の才智藝能に服し、之を珍重優待することを憚らざるや、

Ophilotry 蛇崇拜、蛇敎は、古今東西殆んど其の轍を同ふせり、則ち古代に在りては、例せば希臘全盛の時代に於て、アセンス市にアセナ寺あり、一種の guardian Spirit 守護神として最も鄭重に飼育されしものは、實に彼にてありしなれ、今日に在りても、途上蛇に逢ふ者は最敬禮を爲すべし、殺す者は罪死に當する等の法規を勵行する蠻族あり、否な必ずも之を古に徵し遠きに求むるに及ばず、現に我邦――我輦轂の下に在りても、之に類似せる迷信的習慣の行なはれつゝあるにあらずや、夫の柳島の妙見の如き、本所一の橋の白

蛇の如き、神靈視して彼を崇敬し、彼に對して幾多の祈願を籠むる者多きを看ずや、又夫の春日の鹿に於ける、熊野の烏に於ける、八幡の鳩、山王の猿、稻荷の狐に於けるが如く彼を目するに辨才天の御使姫を以てし彼を尊信すること辨才天に等しきを看ずや、又右の迷信的崇敬に加ふるに、一種の實利主義を以てし、彼を屋内、就中米倉等の中に飼育し――寧ろ其の棲息を德とし利とし、――彼に猫兒の代理を命じて、鼠族取締の任務に服せしむるの地方多きを看ずや、尙一層實利的に即ち食道樂的に、彼を口腹齒牙の慾に供する者あるを看ずや、夫の蝮蛇を無上の良藥なりとし、藥用上の目的下に、或は酒精に浸し、或は付燒として、飲食するの一事は別問題として、夫の雉子鶉鴫の屬と其の嗜好を一にし、各種の蛇族を捕へ去つて、白燒にし、付燒にし、乃至蒸燒味噌漬にし、之が常食に舌鼓うつて、得々たるもの尠からず、青大將の如き美味中の美味なりと云へり、數年前の事なり、動物學熱心にして、殊に Ophiology 蛇科專門の外國紳士あり、我某地方に旅行中、蛇族の殊更に棲息するを見、其旅館に投ずるや、直ちに二三頭所望の旨を主人に傳へ置き、翌朝發するに臨んて、督促に及びしに、主人は脫からぬ顏して

主人「御所望に應じ、夙に差し上げました筈なるに：……」

客「イヤ、予は慥にまだ受取らぬぞ」

主人「デモ昨晩澤山召上がり、殊の外御賞翫遊ばされしと、召仕共の申し居りましたるに」

客「ブー南無三……扨は昨夜の鰻の蒲燒、近比の珍味と思ひ、思はず舌打ち鼓らして、代りをさへ注文したるは……蛇にてありけるよな――」

その後の科白は之を略せざるを得ず

以上臚列し來りし幾多の實例は、如何にも實例に相違なきも、其は例外中の例外にて、獨り我日本人といはず、凡そ生とし生ける世界幾億の一切衆生中、彼を忌み嫌はざるもの果して幾何かある、現に「蛇蝎視」て

ふ套語すら存在するに非ずや、美なること彼の　く、萬物の靈長たる人間をして其の美を模倣して得々たらしむること彼の如くにして、何が故に嫌忌せらるゝこと、是の如く夫れ激甚なるや、予曾つて「松風颯音」てふ題下に、幾多の問題を掲げ、各階級に渉れる交遊に就き、其の愛憎の好惡を探求せしことあり、而して「最も嫌いなもの」てふ題下に得たる答を見しに、十中の八九は、彼にてありき、蛇にてありき、敢て問ふ是れ何の故ぞ、何に由つて然る、是れ一問題也、一疑問也、一難問也、

今試に古今東西の歴史上文學上に現はれたる彼は如何にと云ふに、我邦に在りては神代の頁に於ける八岐の大蛇を始め、雨夜物語、俗曲道成等、美少年錄等に、印度に在りては、遺敎經等に、歐洲に在りては、ラオコン、ミネルヴ、メヂユサ等の傳說等に、猶太に在りては、エヴ誘惑の一段に於て、彼は常に猜疑、詐僞、嫉妬、邪淫、嗔恚、陰忍、毒惡等、あらゆる人生暗黒面のemblem たらずんばあらず、是れ其の故果して如何、又夫の打叢出蛇、藪蛇、A Snake in the grass（叢中蛇）A snaka in the cup（杯中蛇）の如き和漢洋に於ける熟字成語典故俗諺等に看よ、悉く是れ彼に取りて、有難からざる意味に於て引用せらるるにあらずや、

要するに、美の事たる獨り客觀的に之を說明し去るべからず、又主觀的に之が說明を爲さざるべからず、而も佛者の能所一如、能所不二と說破せるが如く、主觀客觀併せて、之を達觀し通觀し齊觀し大觀し無差別觀せざる可らずと雖も、抑も嗜好といひ、趣味といひ、好惡、愛憎といひ taste, geschmack, gout といひ、其性質上何故にの質問に答ふること、決して容易の事にあらず、美や妙や、一方より之を見れば、到頭是れ不可分析、不可端倪、不可思議!!

故に予は不可解をば、不可解として、姑く之を擱き、唯彼は彼の如く、美麗にして且つ多技多能なるに拘はらず、一切衆生に嫌忌せらるゝは、不可動不可疑不

可抹殺の事實なることを斷言し、更に一歩を進めて、吾人は彼に就ひて、彼に鑑みて、學ぶべきことなきや否や、自警反省すべきことあるや否やを考一考せんと欲す、空なる好奇心を滿足せしむることをば抑制し去つて、實なる品性の修養法鍛錬術に就き、大悟徹底する所あらんことを希はんと欲す、若夫れ天關象緯の逼る處、獨り空中の樓閣に高臥して手に星斗を捫し、若くは仙槎一棹、直ちに天の川邊に遡ぼり、若くは月白く風清きの良夜、鵲の橋の欄干に腰打ちかけ、雙眼遙に下界を瞰下しつゝ、己を大とし乾坤を小とする、壯は則ち壯、快は則ち快ならん、さはれ是はちと浮雲なき藝當なり、君子は由來危きに近よらず、寧ろ手對へ否足對へある Solid Earth大 地を踏み轟かし、鐵杖に石橋を叩いて渡るの、安全にして、而も吾人々類に適切なるに若かず、予は此の點に於てDe Staelと共に

"I tramp in the mire with wooden shoes whenever they would force me into th cloud"(人の予をして强ひて雲霧に攀ぢ登らしめんとするものある時は、予は寧ろ木履を穿つて、泥土を踏破せん)と欲す、

熟ら惟みるに、人と蛇、蛇と人、兩者の太だ相似たること往々にしてあり、蛇の人に似たるか、人の蛇に似たるかは、自ら別問題となし、予は人間の一人として、人にして往々蛇に似たるものあることに就き、徐ろに諸君と共に攻究一番する所あらんと欲す、借問す人にして蛇に似たるものありとは、畢竟何の謂ぞ、

世には智識あり、學問あり、地位を有し閲歷を有し財産を有するの人たるに拘はらず、何となく人好きのせぬ一種の輩あり、「いけすかぬ奴だ」、「氣障な代物だ」、「氣に喰はぬ」、「蟲が好かない動物だ」などゝ、衆目の觀る所、十指の指す所盡く之を蛇蝎視す、彼に長所なきにあらず、美點なきにあらず、而も其の長所美點、却つて益々萬人嫌忌の度を高むるの材料となるに過ぎず、是れ實に不可思議也、されど彼は依然不可思

議にも人に好かれぬ人物として存在することそをかしけれ、一概に之を不可思議の四文字中に葬り去りなば夫迄なれど、苟も不可思議の不可思議たる所以を明かならしめん乎。不可思議必しも不可思議にあらず、蓋し不可思議とは因果關係の不明を謂ふ、因あれば茲に果あり、果あれば茲に因なくんばあらず、因果律は天律也、天法也、天則也、唯其の何れか是れ因、何れか是れ果なるを的確に看破し了つて誤るなきを難しとなすのみ、

蛇が外見絶だ美にして、雅美學上幾多の方面に於て確かに美的要素に富めるに拘はらず、あらゆる人をして、一種言ふ可らざる不快の念を生ぜしむること、及び人にして彼と同じく、あらゆる人をして一種のたまらぬ鼻向けのならぬ antipathy を抱からしむるものあること、是則ち直覺的「インスチンクト」的感觸にして、別に七六づかしき論理的連鎖に縛り付け括り上げたる心理的論結に非ずと言はば言へ、其の人をして直覺的「インスチンクト」的感觸を起さしむるもの、豈に何等原因の伏在するものあるなくして可ならん哉

予は常に以爲く、顏と心と、表面と裏面と、外容と内容と、天地霄壤の差ある、夫の外面如菩薩内心如夜叉、口に蜜腹に劒、A tiger in sheep skin（羊皮虎心）、の形容詞を冠せらるゝ底の換言すれば、溫良恭謙の假面の下に、巧みに毒蛇の正體を隱蔽する底の、僞君子的、表裏反覆的、巧言令色鮮矣仁的態度動作は、人をして自から嫌忌の念を起さゝるを得ざらしむ、之に反して木地をむきだし、さらけだし、粉飾なく、假裝なく、天プラ金プラの臭味なく、看板に僞りなきものは、設令其の外貌醜なるも、見る者をして左までに其の醜を感ぜしめざる也、矧んや表面より裏面、外容より内容の層一層美はしく奥深きものあるに於てをや、言に訥にして行に敏なるもの、夫の無言將軍モルトケの如き（予は往年獨逸に在るの日、幸にして幾度か這の無言將軍の風采に接するを得たり、彼は啻に無言なるのみならず、一見又頗ぶる無能なるが如き矮少なる梅干面の、是が國家の干城かと怪しまざるを得ざりし程の漢子に

てありき、然れども一旦掉舌の必要に迫られん乎、其の黄金的沈默は、咄嗟に豹變して、懸河瀉水滔々數千萬言の一大雄辯となり、其の無能的外見や、イザ鎌倉、否セダント云ふ一段に至りなば、處女脱兎、忽地に變化し來つて、無所不能の大手腕を揮ひしことを記せよ）其緘默的無言は乍ちにして千言萬語より有力なる雄辯宏辭となり、其の外觀的無能の裏、能ある鷹は爪を隱くすてふ俗諺の眞味を含蓄せるを見ずや、

是に由つて之を觀れば、蛇の美たる、一面太だ美なるものありと雖も、他の一面太だ不美なるものあるが故に、表面美半面美が如何にも美なる丈、其れ丈益々人をして不美不快嫌忌憎惡の念を長ぜしむ、人に於ても亦然り矣、

嘻學問文章一世に冠絶す、豪は則ち豪、然れども是文豪のみ、未だ以て眞男子となすべからず、攻むれば必ず取り、戰へば必ず勝つ、勇は則ち勇、然れども是武勇のみ、未だ以て眞丈夫となすべからず、是れ所謂一藝の士也、藝術家也、藝人也、藝者也、美は則ち之あらん、然れども偏美のみ、藝美のみ、決して全美にあらざる也、未だ以て全美、眞美、神美、と稱するに足らざる也、若し夫れ其の質は鬱々たる湖畔の松の若く、其の文は灼々たる園中の花の若く、才や流水、德や春風、犯すべからずして而かも親しむべく、近づくべくして而かも狎るべからず、東亞に所謂智仁勇兼備、西歐に所謂 a perfect man にして、始めて以て軍事に政治に學問に實業に、あらゆる紛糾錯雜の人事世故に處して、能く其の職を盡くし、其の分を完ふし、其の績を擧げ、以て人中の人たるに愧ぢざるを得ん、故に蛇の偏美、僞美、半面美、表面美に倣ふなく、全面的完備的眞美を最高理想とし、共に與に心を一にして、屈せず撓まず、遼遠なる學界の前途に勇往邁進せんこと、是れ予が已の歲なる本年に於て、悚然襟を正ふして、諸君と共に自彊不息の實を擧げんことを誓はんと欲する所以也、

但憾む一閑を百忙中に偷み來つて、咄嗟篇を成す、是を以て乎、行文固より常山の蛇勢なく、反つて蛇に

縁ある竭式たるを免がれず、和や漢や洋や、雅俗混淆にして往々百廻蛇行の觀を呈し、末段殊に掉尾の妙なく、議論論理支離滅裂、さばれ懐裏坦々、直ちに肝膽を傾倒して、毫も蛇氣を夾むなく、不可捕捉の底、別に確乎たる一片の誠と乾然たる一種の主張なくんばあらず、頗に微意の存する所を平談平凡なる筆墨之外に求めらるれば則ち可也、和漢洋の駄作三章、更に蛇足を畫いて、畫龍、否畫蛇の點睛と爲すと云爾す。

穴賢こ、辨財天の御託宣
　下手長蟲の蛇の御談義

說來說去舌將爛。奪問駄論長似蛇、滿座諸君幸休咎。先生講釋思無邪。

A long winding discourse did I venture on snake,
"By Jove, alas! your jokes are too too bad and *stake*[1]
Sure you're gone quite mad why this nonsense, sir?"
　you ask.
"*Dy Jove*,"[2] I'll retort, "'tis to keep us wide awake."

(1) 'Jap. word, meaning "extreme" (2) Jap. exclamation.

俳優養成所の話

藤代禎輔

一方には文藝協會といふ會が起り、東西古今の藝術を研究して文運の振作、社會風尚の高進を謀ると共に演藝刷新の實を擧げんとして居るし、今一方には大劇場を設立し俳優、音樂者、道具方まで洋行させて演藝の改良を謀ると云ふ企てもある今日、俳優養成に關する外國の例を調べて置くのも無益では無からうと、先づ手始めに獨逸俳優學校の中二三を紹介して見樣と思ふ

一　マリー・ゼーバハ學校

マリー・ゼーバハは千八百九十七年に歿した有名の女優であるが、其遺言狀に遺產の中から俳優學校設立の爲め八萬マークを伯林の王立劇場主裁部に托する事があつたので、頓て普魯西國王の裁可を經て此學校は出來上つたのである。學校設立の目的は才能ある若き男女を俳優に養成するにあつて、須要の授業を施し、王

立劇場の舞臺に出演練習する機會を與へてある。王立劇場に出演するには無言の端役から進歩の程度に應じて段々重い役に進ませる、又王室俳優が稽古の樣を見せたり、王立劇場の興行を出來得る限り見物させる便宜もある。以下此學校の規則を摘譯して見れば

○此外操音術、體操の授業を施し必要に應じ禮式、舞蹈、劍術、を授く

操音術教授は發聲機官の育成と模範的發音を主眼とし發音法は千八百九十八年四月十四日より同十六日まで劇場主宰ホ、ペルク伯を座長として開きたる獨逸舞臺發音に關する會議の成績に依るものとす

體操教授は好良なる姿勢と四肢の運用とを教ふ

劍術は所謂劇場式劍術と身體の敏捷とに限る

共同教授に編入すべき生徒の員數は學校長之を定む

○學校長は王立劇場の技術長之を兼ね、此職は名譽職にして無俸給とす。但し劇場主宰の見込に依り他の劇場所屬員に依囑することあるべし

○學校長指導監督の下に學校奉職の教官中少くとも一名の男教員並に一名の女教員及び一名の劍術教員は規定の課程表時間表に由り授業すべし、舞臺出演の際は一名の後見學生監督の任に當ることとす

○マリー・ゼーバハ學校の授業は無報酬とす、學生は何等支出を要せずと雖授業時間は謹直に出席し學校長の指揮命令に從ひ熱心精勵劇場の稽古及び興行に協力すべし。此場合に於て主宰部は王立劇場所屬員と同等の範圍内に於て必要なる服裝を貸與すべし

學生は學校規則及び王立劇場規律を遵守すべきものとす

○修學期は毎回王立劇場の興行期間十ヶ月とす。學生の入學は毎年晩夏に於て學校長に依り行はる。志望者は戸籍謄本、學校卒業證書及び在學中家事係累なき證明書を差出すべし。入學には試驗を要し、入學許可は特別の賦才ありと認定せる者に限る。此認定は學校長並に教員二名(或は其代理者)愼重誠實に之を行ふ。但し其判斷は後日一層精細なる考査を經て修正することあるべし。

○各興行期の終りに試驗を行ふ。試驗の成績は學生の望に因り證明書を交附すべし。

學生成業の見込なきときは學校長敎員の合議に由り除名すべし。其他學校規則及び規律に屢々觸れ、或は重大なる違犯を爲す者は半途退學を命ずべし。

右の規則中王立劇場所屬員とは王室御抱への俳優で、演藝敎授は此等俳優の擔當である。此學校が出來てから未だ七八年にしかならないが大分好成績を擧げて居る相だ。唯王立劇場の附屬物に成て居て規模が小さいから、年々五人宛の男女學生を入れるが關の山て、それ以上の員數を收容することの出來ぬが遺憾だと云はれて居る。

右に述べた所で此學校の成立ちと、職員學生の事は略分つたが、學科の内容に至つては、肝心の演藝其物に深い關係を持た科目が毫も知れない。マリー・ゼーバハ學校の規則書には此等の點が全く載て居ないから、他の學校規則を見て類を以て推すより外仕方がない。

二　ドレースデン王立演藝學校

此學校はコンゼルワトーリウムを名乘て、索遜國王陛下を大總裁と仰ぎ、王族方を名譽幹事に戴いて、中々嚴めしい學校である。通例コンゼルワトーリウムと云へば音樂學校であるが、爰では音樂者と俳優と兩方仕立てるのみならず、説話術の專門科も設けてある。其中俳優に課する科目は左の通り

説話術　文學史　臺詞練習　舞臺(伎藝)演習　唱歌
佛語　劍術　舞踏　身振(表情術)

から並べて見た所で臺詞や、身振や、技藝の練習をドウ云ふ風に仕込むものやら、實地を見なければ見當が附かないけれども、兎に角是れ丈の科目を授けることゝ爲つて居る。そして此全科目の授業料を一年三百五十マークと定めてある。此授業料を徴收する所はマリー・ゼーバハ學校と全く異なる點だ。それから一科目を一週何時間位授けるものやら、是れも時間割を見なければ分らぬが、選科生に對して各科目の授業料と、中には授業期の掲げてあるものもあるから書き拔いて見やう

文學史　三十マーク
說話術　二百マーク（補助科トシテハ六十マーク）
唱歌（小學科　六十六マーク
　　　中學科　百五十マーク
　　　高等科　三百マーク
臺詞練習　百五十マーク
舞臺演習　百五十マーク
佛語　四十マーク
劍術、舞踏、表情術（各科四ヶ月卒業）四十マーク宛
禮式（一ヶ月卒業）十マーク

これでも細かい事は迚も分り樣がないけれども、各科目の輕重難易の度合は略ゝ推察が出來る。修業期の長短は各學生の賦才、素養、普通教育、勉强、健康、年齡、性質等によつて一樣に行かぬから極めて置く譯に行かぬとある。但し在學の最短期が定めてあつて、正科生には一學期としてある、若し學期の途中で入學すれば其學期の殘りと次學期全體とを最短期とする。選科生に對しては一學期に相當する期間、即ち三ヶ月半を以て最短期としてある。選科生には學期の途中で出入を許してあるものと見えて此樣な極めがある。

演劇科入學は滿十六歲に達したるものに限り、專門の素養は要せずとある。

官公立の學校は此位にして置いて

三　私立學校

に移つて見樣が、私立の學校は各地に散在して其數も中々多い樣である、が印刷した規則書を送つて寄越した學校は頗る少數だ。其中で前に擧げた學校と模樣の變つた點丈け搔摘まんで見樣なら、同じドレースデン市にゼンフ・ゲヲルギーと云ふ人の建てた演劇、話術學校がある。其科目は前の王立學校と大同小異であるが、科外として文學史の外に演劇史、服裝史の講義が設けてあることゝ、學校附屬の舞臺で伎藝の演習を行ふ事、及び學校の舞臺並びに特約の劇場で來賓を招待して、大小の演伎を行ふ事が規則面に載せてある。尤も王立學校の方でも無論王立劇場に於て此に相當する演習の便宜を與ふる事と思はれる。又此私立學校では一年卒

業の組と、二年卒業の組があつて、一年卒業の方は年に六百マーク、二年卒業の方は年に三百マークの授業料を納める。一年、二年の相違はあれど卒業年限を極めてある所が王立學校と趣を異にして居る。

今一ッ有名なる温泉場キースバーデンにある演藝學校の話をして見やう。校長はドエッチングルと云ふ人て、此學校てはグヲルキーに一歩を進めて、美術史、文學史、演劇史、心理學、服裝學等の講義を置いてある。其他の科目も名稱が大分外とは異つて居るが、大體に於て內容の相違はないらしい。此學校は授業料が高くて、年に九百マークを徵收する。ドレースデン王立學校に比べると二倍半以上だ。併し十分見込があつて學資の乏しいものには、無報酬て仕込んて遣る途も立て居る。

以上は一夜漬けの急拵へて、至つて疎雜な紹介てはあるが、これ丈の事からても、我邦演藝の將來に參考すべき廉が色々あらうと思ふ。

先づ公立私立を問はず入學者の才能に餘程重きを置いて、眞に俳優となれる見込なきものは、容赦なく拒絕することてある。これは大に注意すべき點と思ふ、何の業にしても之を選む人の適、不適を見るのは最必要の事てあるが、殊に藝術は生れ附きのもので、一寸小手の利く所から無暗に己惚れたり、人の煽動に乘つたりして、浮々と迷ひ込むと一生を愆まる事になる。これは此藝道に身を委ね樣とする當人が各深く思案すべきことてはあるが、之が養成の任に中る人は猶々愼重の態度を取つて、人の子弟を過らない樣にせぬければならぬ。併し此鑑定はマックス・グルーベも云ふ通り、未來の名優を本能的に嗅ぎ分ける事て、中々難事だ。名優だからと云て屹度之が出來るとは限らぬ物だ相な。けれども其道には夫々立派な鑑識家もあらうし、古來の先覺者が言うて置いた中にも大に味ふべき事があるに相違ない。現に右に云うたマックス・グルーベや、エルンスト・フォン・ポッサートなど云ふ獨逸の俳優は、藝道熱心な研究家て、此等の點に關し、大分有益な事を書いて居る。古今東西の名優劇通達の實驗談、苦心談等を

竟めて大成したら、一種の鑑定法が出來上るだらう。

此人物鑑定は演藝學校入學生に限つた事ではない。留學生選拔などには殊に愼まなければならぬ。今回大劇場設立を發起した富豪連は、俳優を洋行させる考だと云ふが、外國語も碌に操つれない手合が、遙々出懸けて通辨に引き廻されて、上面ばかり見て來たのでは、大金を掛けた功能はあるまい。前に列べた樣な演藝學校に入學し得る學力がある人が、最も望ましい。ドレースデンの王立學校などでは、外國人の爲めに大に便宜を謀る樣に見向けられる。斯う云ふ學校へ這入て、一年なり、二年なり正式の訓練を受けたら、向の藝風がシツカリ腹に這入て、歸朝後我演劇を刷新する上にも、後進を誘掖する上にも、多大の効果を收め得らるゝことゝ思ふ。或は事情學校入學の出來ぬ樣な人を洋行させるにしても、責めて西洋の戯曲を、原作に就いて味ひ得る程の素養がなければ、洋行の資格が無いと云ふ風に爲て貰ひたい。さう云ふと、或は今の俳優にそんな資格を備へて居る者があるものかど、云ふ人もあらうが、なければ作るがよい、若手の役者で見込のあり相なのを引き拔いて、シツカリと敎育して遣ればよい。又俳優以外にも、外國文學を專攻した連中に、今から役者に爲つて舞臺で一花咲かせ樣と云ふ元氣の人も存外多いかも知れない。これは毫しも心配にはならぬが、今の富豪連の家庭には、一種の俳優が勢力を占めて居る向があると云ふから、其等が其魔力を利用して、情實上如何はしき人物が洋行の候補者に立つ樣になりはせまいか。これは充分喰ひ止めて貰ひ度いものである。

さて愈大劇場が出來るからには、夫れ相應の俳優が要る。其俳優を造るには、右の洋行と云ふ事が慥に有力の方法であるが、內地でも俳優養成の設備が必要である。單に舶來の藝道ばかりでなく、日本固有の演劇術なり、表情法なり、説話術なり、旨く順序を立てゝ、飮み込み易い樣に敎ふる事が是非なければならぬ。今の俳優とか、劇通には、切れ切れの智識をシコタマ貯へてる人は多からう、人の思ひ到らぬ工夫を積んで居

る者もあらう、併し之を纒めて、青年子弟養成の上に利用し、好結果を奏することの出來る人があらうか、若しあれば如何にも結構だ、何も云ふ事はないが、それが出來ぬとなると、此金玉の工夫、知識を蒐めて、秩序正しく敎授材料に仕組む人がなくてはならぬ。これが出來た所で、此れ丈けでは足りない、矢張り西洋のも取らなければならない、それは右の留學生が土産に持つて歸る。若し留學生丈けで用足りなければ、外國の專門家を聘するも宜からう。併し當分の所、ドーしても東西兼學の達人は得難い。彼に委しければ此に暗いと云ふ風に、ドチラにか偏する。ヨシ偏した所で、甲の爲めに乙を排する人てなければまだしも、劇通や藝道家には、得て他流を目の仇に思ふ樣な排他心が强い。ソー云ふ連中に未來の藝術を指導する重任を負はす事は如何なものであらうか。併し其貯へ積んだ工夫知識は飽くまで尊敬しなければならぬ。又其人の亡ぶると與に其工夫、知識が湮滅せぬ樣な方法を立てなければならぬ。單に敎授材料として計りてなく、本邦演藝史の材料として保存せなければならぬ。此本邦固有の材料と、西洋各國の材料と折衷調和して、渾然たる一大藝術を造り出さなければならぬ。夫れには一大天才の出現が最も望ましき事には相違ないが、又多數の人が熱心に、眞面目に研究し、工夫して、大天才を敎育する準備をせねばならぬ。それには丁度文藝協會と云ふ適當なものが出來て、濟々たる多士が夫々各方面を分擔して居るから、着々成績が上がるだらうし、又是非上げて貰ひ度ものである。

序でに今一ツ文藝協會に望みたい事は、團、菊、左と云た樣な明治の名優の詳傳を早く編纂することである、否傳記は直ぐに出來なくとも、其材料蒐集に速かに取掛る事である。今の分ならば、此等名優の言行から藝風、口跡に至るまで、親しく見聞して記憶して居る人が遺族は更なり、役者の側にも、見功者連中にも、其他種々の方面に幾らもあるだらう。例へば團十郎を理想として一意其藝風を學ばうとした女優もある、雜誌歌舞伎の關係者中には、團、菊兩優の科白について細か

な取調をして居る人もある樣だ。落語家の中にも隨分參考に爲る觀察を爲て居る者があり相に思はれる。これらの連中には、其人が居なくなると同時に、其蘊蓄が消えて仕舞ふ恐れのある向もあらうから、早く方法を講じて取り留めて置きたいものである。又聲色遣などが決して擯斥すべきものでなく、就いて名人の口跡を硏究して置くのも決して徒勞の業ではあるまい。斯く種々の方面から、名優の人物、經歷、藝風等の知識を網羅して、傳記を編むことは日本の演藝史上是非必要であるのみならず、將來俳優養成の上にも缺くべからざる事と思ふから、文藝協會で適任者を選び、早速着手して貰ひたいものである。

以前の俳優學校に立ち歸つて、演藝史、美術史、文學史、服裝史、心理學、聲音學、體操、舞踏、音樂、劍術、粧飾術等は無論科目の內に加へられる事と思ふが、是等は其道の專門家に賴んで差支ない事と思ふ。但し出來る限り、東西古今の例を比較硏究する必要のあるは勿論の事である。

最後今一つ大劇場設立發起者に注文したい事がある。それは此劇場設立の趣旨中、外國から國賓、貴賓のあつた折、精神的娛樂の場所が無いからと云ふのが、重なる動機に爲つて居る樣聞き及んだが、夫れならば、西洋のオペラを其儘日本で見られる樣な仕組も一つあつて宜からうと思ふ。勿論日本の國劇で何處の誰に見せても恥かしくないと云ふ立派なものが出來れば、此に上超す事はなけれど、當分ソンナ物は出來相にない、否出來ても西洋人に趣味を感ぜしむる事が六ヶ敷い。シテ見れば、向ふの物をソツクリ移して、向ふの人を悅ばす設備が出來れば、遠客饗應の趣意に一番叶ふだらう。のみならず、我日本國とても世界の一等國に仲間入りする以上は、歐米各國に共通な藝術は、早晩入れて然るべきことゝ思ふ。ワグネル物などは、英、佛米は更なり瑞典嗹馬邊に至るまで、夫々其國の語に飜譯が出來て、劇場で興行して居る。我邦でも其歌詞を飜譯しても宜し、或は原語の儘でも宜からう、兎に角ワグネル其他音樂大家の傑作を、新築の大劇場で演ず

ることが出來たら、國の光りを增す許りか、國民の好尙を進むる上に、ドノ位功能があるか分らない。此事を實行するとなると、役者は何如すると云ふ問題が直ぐ起る。大劇場發起者中には鉅萬の富を積んで居る者が多い相だが、西洋の役者を都度々々買入れる事は迚も出來まい。矢張り歌劇の藝人を仕立てる必要がある。併し其師範役に爲る人も、差向き心當りがないから、留學生を出さなければなるまい。一時に澤山出すことも出來まいから、洋行歸り丈けで興行する樣になるのは、前途遼遠であらう。が併し上野の音樂學校にも、歌劇研究會といふものがあつて、二回までオペラの演奏を爲た事がある。何か事情があつて其儘中止になつて居る樣だが、あの會などに保護を與へて、オペラの指南役を外國から聘し、役者を仕立てたら、當分間に合せの物位は乾度出來樣。其内には留學生も追々歸つて來て、段々改良進步を加へたら、今まで名許り聞いて涎を流して居たオペラと云ふ者を、立派に日本にも見る事が出來て嘸宜からうと思ふ。大劇場設立發起者は資力に事を缺かぬ人達だから、眞に藝術に熱心なる所より思ひ立つた事で、此位の事が出來ぬ樣なら、日本富豪の名折れと思つて、切にお薦めするのである。

（明治三十九年三月十四日夜稿）

文士生活と書肆（下）

佐々醒雪

これを考へて見ると、今の文士は結構なものだ。敎育界にも月八圓の準訓導がある、官吏にも巡査がある。勿論文士中にも校正掛があるべき筈だ。投書文士、懸賞文士の不平は彌勒の世にも絕えまい。予輩は唯、紐育生命保險に加入した文士、預金のある文士、自分の家屋に住む文士、株劵を持つた文士乃至、文魚や香以の保護をかりないで、立派に中流社會に立つて行く文士があることを、明治の慶事とせねばならぬ。尠くとも二十行二十字の原稿が一圓二圓或は三圓といふ値で以つて賣れ行くといふことは、日本に於ては未曾有の

現象である。予輩は明治の文士が日本の過去に顧みて、あまりに贅澤をいひ得る義理でないと思ふ。

去かし、これは實は一面の觀察で、若し歴史を離れて單に文壇の現狀を觀察して見れば、決して滿足すべき狀態ではない。試に、單に文藝上の作者として、又は批評家として――文藝以外の知識であるとか、肩書であるとかいふことを計算以外にして――其の原稿一枚が、何時でも一圓紙幣にならば交換し得るといふだけの價値の確立した文士は、日本中に幾人あらうかといふと、實に憐なものだ、恐くば五十人にも足るまい、或は二三十人かもしれない。かう考へると、又頗る覺束ないものではあるまいか。一枚一圓とすると、日曜も大祭日もなしに、毎日三枚宛書なければ百圓の月收もないのである。一日平均三枚といふことは、經驗のある人は御存知だらうが、普通以上の健筆家に數ふべきである。だから、見渡す所、少し工面のいゝ文士といふ文士は、大抵何か兼業して居る、幸に幇間といふ柄は見えぬが、新聞雜誌の編輯か、教員か、出版業か、さもなくば和歌發句のお師匠樣かで、單に筆の先で生活して居るといふのは、殆んど十指にも足らぬ位、兼業がなくてこの十指にもれた男は大抵借金を兼業にしてゐるのである。

ところが、翻て他の社會を見ると、實業家といふ資本家は別として、眞に腕一本口一つで捗いて居る官吏とか教員とか、其他書家彫刻家などの類で、一月に百圓位の收入のないものは、殆んど一人前ではない。ことに官吏とか教員とかいふものに至つては、何等の異才天禀があるではなく、只人間一人前の頭腦さへあれば、甚しい馬鹿でない限は――官立學校でも卒業して四五年經つ間には、自づと百圓位の月給は高等官何等とともに下賜せられる。こんな風の仕入物は職員錄でも見れば、文字通りに、僕を更へねば數へ切れない程ゐるではないか。それのみではない、現に新學士のまだ湯氣の立つ樣な男でも、ノートの朗讀か、讀書のおさらへかを一時間やれば、私立學校でも一圓は呉れる。して見ると、堂々たる文士五千萬中に五十人しかない

文士の一頁一圓は、誠に御安値至極ではないか。それが確かに買人があると定められないといふのは、眞に情ない話だ。

成る程新學士連も窮して居る者が多いが、去かもまだ、文學士の純文士が少いのは、流石に需要供給から來る市價の原理に通じて居るからで、ことに彼の一圓紙幣にも、時とすると小銀貨にも交換しえない原稿の振り賣と來ると、天下の愍然なるものだ、中には隨分相當の市價のあるべき原稿であつても、博文館にも金港堂にも春陽堂にも、まだ印刷せられない原稿が殘つてをる、ところへ盆か正月が近ついたと來ると、直ちに需給の比例から價値が保てない。こゝに一種の中買がある、平常は小さな高利貸もする、文士にも一種の交際があるところから、田舍新聞であるとか、小雜誌社であるとかといふお得意を持つてをつて、この振賣の賣れ殘りとか、或は廢刊雜誌の原稿を見切り物的に買ひ倒すのであるが、其の原稿が又意外な手筋から、普通の相場の半分にも足らぬ金で、大書肆の手に渡ることがある。するとその文士の價値は直ちに書肆に疑はれる。其次からは稿料減額の談判が起こる。現金ならまけてもよからうといふ談判が起こることがある。文士こゝに至つては全く手間取りと選ぶところがないではあるまいか。又これと反對に、文士同盟罷工といふ風で、一派の文士が結合して、いはゞ新米の書肆に對して稿料の値上げを迫ることもあつた、だがこれも、其の中間の苦しがりがまづぬけ賣りをする、賣り崩す、同盟は半歳の間に雲消霧散となるが常だ。つまり今日の原稿料は今日の市況に對しては、俄に動かし難い價格であつて、寧ろこの新雜誌發生の好況を通りこしたらば、今か―引き締りそうな市況とも見える。尤も、何有數な逸品のみは、これは別物で、市況に拘らず、何程も需要があるのであるが。

堂々たる東洋の英國が、月收百圓以上の文士は五十人位しか養ひ得ないといつては、あまりに不思議にも聞こえる、文士志願の青年諸氏などは、必ず信用しまいと思はれる。だが、更に本屋の内面から其の收益の

有様を檢べて見たならば、恐くばなる程と合點がゆくだらう。

現在の日本の戸數は(臺灣を)除いて僅に八百何十萬てあるから、木曾の山奥も擇捉のはても、平均に百戸に一冊需要があるとしても、僅々八萬に過ぎぬ。だから、小學の教科書か日刊新聞以外に十何萬など丶號するものは、すべて「兵百萬と號す」の類て、戰國的虚喝と斷言してよろしい。元來文學書類といふと、まづ半分か乃至は三分の一までは東京て賣れるといふのが、經驗のある書肆の常にいふところて、東京の戸數といふと、ざつと四十二三萬、其内には勿倫新網も山伏町もふくまれてをる、新版の文學雜誌ても買はうといふ家は、まづ十軒に一軒あるかないかてあつて、其の一軒が又、下「やまと新聞」の愛讀者から、上ゴルキーに限る先生までに別れてゐようといふものだ。して見ると、今、一種の雜誌を賣り出して、其の四萬軒中の四分の一に必ずお氣に入らうといふのは容易の仕事てない、氣に入る入らぬといふ上に、又お客の懐都合といふのもあるとだから、東京市中に一萬部が賣り切れないといふのは、決して雜誌編輯者の恥辱てはあるまい。地方の有様はこれを以つて推すべして、まづは生意氣盛の中學生、三號雜誌の發刊ても企てようといふ文士志願者位が常得意て、其外、小學先生は三四人て一部を講讀するが關の山、中學先生にしてからが、赴任の當初こそ、お江戸の進歩に後れまいなと丶力んては見るもの丶、大祭日再び來つてフロックコートの工面なほ未だ成らず、細君の一張羅や丶古びたりといふ段になると、まづ雜誌は二部に減じてといふ順序は爭はれぬ。こ丶に至つて、憐むべし、お江戸に一萬未滿なるものは、必ず地方に二萬未滿といふが落ちてある。さうてもなからうといふ人は、物は試し、東海道の一筋も本屋まわりをして見給へ。まづ人口の五萬もあつて市といふ名のつくところてなくては、新刊雜誌をアテなしに店先に積んて居る店は見當らぬ。一萬二萬の町村ては雜誌屋といふものもないのが常だ。つまるところ、かういふ有様て、三萬賣れるは上々吉、巻頭か總軸と

いふ所で、その三分の一の一萬が稍成功した雜誌といつてよい。其の又半分の四五千でも、勿論不成功の部分ではないので、どうにか維持が出來るといふ部分だらう。

そこで、まづ一萬を評準にして、本屋の計算にとりかゝらう。今日では文學雜誌の數が增へて、紙數や表紙口繪の競爭がはげしい（勿論その競爭に加はらぬ帝國文學や早稻田文學もあるが、これ等は、多分、片手間文士の仕事だからこゝには省かう）、從つて定價の半分以上は紙印刷製本畫料彫刻等にかけねば見すぼらしいので、今定價を二十錢とすると、本屋の豫算は次の如きものである。

一萬部の定價が二千圓、小賣屋に卸すに八がけ（二割引）として、これに運賃を拂ひ、見本や獻本其の郵稅から、返り荷、掛け倒れ、資本回收までの日步などを集めて一割と見ると、本屋の手取りはざつと三割引の千四百圓と見積らねばならぬ、內元價の千圓を引いて、四百圓が純益といけば結構だが、まだ〳〵廣告費編輯費を引き去つて、其殘りが初めて本屋と文士とに分割せられるのだ。

廣告費は際限がないが、四十行位の極めてケチな廣告でも荷も東京新聞ならば一回十圓前後はとられる（勿論割引をさせて）、それが五つとして五十圓、其外、雜誌の廣告、小賣屋の立看板など意外に金額の上るものだか、都合よくば其の雜誌にも廣告がとれるから、差引いて五十圓とする。次は編輯費だ、毎月一回一萬も出るものをまとめるまでには、原稿や挿畫の催促から、版屋印刷所などの往復、それに體裁を調へる、餘白を埋めるなどに、如何に少く見積つても五六十圓はかゝる、すればいよ〳〵殘つて三百圓これが十分切りつめた所なので、實際上はとてもこれではすまぬ、且つ勿論本屋としての手數即ち賣捌の手數はこれに加はつてゐない。若し本屋と利益を切半すれば、原稿料といふのは百五十圓だ。」

て、この二十錢雜誌は、今日の普通から見れば、少くて二百頁はある、其の半分以內が一段組で、一頁九

百字前後、他の半分以上が九百六七十字から千字、一冊の原稿が四百字のもの四百七八十枚を要する。但し投書や埋草て七十枚は減じるものとしても四百枚、それが百五十圓とすると一枚平均三十七錢五厘にしかならない。それにこの中から所謂第一流の一枚一圓二圓といふ稿料を幾分か引き去られるとすると、第二流以下は眞に南京米にもありつけない譯だ。

これてはいかにしても原稿の書き手がない、本屋も止を得ず、一萬部位の賣れ高ならば、利を見ようとはしない、一ぱいにさへ行けば店の景氣にもなり。他の書物の廣告にもなる位にあきらめてをる。文士たるものもこの以上は望めないわけだ。そこてこの三百圓を其儘に原稿料にするといつたところて、平均が一枚七十錢、これが寧ろ本屋の好意でもつて今日の文士が儲け得る最高額といつてよからう。つまり今の文士は、この平均額以下の中て一流二流の按分比例を爭つてをるので、實際は一萬以下の雜誌の方が多いこと勿論だから、文士生活を立てゝをる人の原稿料ても、平均して見たらば、五十錢に上るかどうか、それも覺束ない。

一冊の中に種々の材料を集めて、種々の方面のお客を引く上に、御安値な雜誌が既にこの通りだ。況や箇人の著作としては、一萬以上といへば例外に數へられてをる。可なりといふ所では二三千だらう。單行本は贅澤な表裝が流行して高價なるものが賣れ行くといつてからが、一圓位が普通の所だ、これが二三千部賣れて一割の印税をとつたところて、二三百圓。やはり原稿料に見つもれば一枚が一圓以下だらう。但し新聞雜誌に賣つたものを更に單行本にするといふ策もあるが、これは寧ろ第一流の特權だ。

どこまで勘定をして見ても、つまるところ一日三枚宛かいても百圓に足らぬといふ結論である。されば、若し文士生活の向上を要求する勇氣があるならば、讀書社會を擴張することが唯一の方法だ、これは勿論教育の流布にもまたなければならぬが、又今の文士にもこの心がけが足りないと思はれる。今のやうに、漫りに批評家や本屋の番頭に結托して、七十錢の按分比例

の間に爭つてをるようでは、文壇の將來も覺束ない限りて、寧ろかの美學論的の批評家に傾聽したり、新聞雜誌の批評に一喜一憂することを止めて、直ちに現代の趨勢に着眼し、單に東京の角帽や蝦茶の嗜好を逐ふことをやめて、全國の中流社會に讀者を求めることを心懸けたいと思ふ。僅かに全國の四十分の一しか人口を有してゐない東京の、二三倍しか、他の地方には讀者がないといふことは、最も讀書界の擴張に就いて着目すべき點である。

さらに詳言すれば、文士たるものは、喰道樂の流行や、故櫻痴居士や涙香氏が、意外な讀者をもつてをつたことなどを漫りに冷笑することを止めて、國民の嗜好がどこにあるかといふ觀察する材料にするがよからう。これに眞似よとはいはない。しかし流行するものには何等かの意義がある。所謂る小說雜誌の讀者は、過半小說よりも雜錄とか社會觀とかを歡迎する。日に複雜になつた社會には、夢の樣な空想の美よりも、隣人の心理狀態に感興することが深い。沙翁劇の流行は既に去つたと傳へられる、ファウストは唯學者のみにたゝへられてをる。知己を千載に待つ人は結構な月日の下に生れた人のみなし得るところだ、文士といふ職業に活きようとする人は、銅臭紛々たる書肆の經驗にも、傾聽する必要があるではなからうか。（完）

獨逸のオペラ

波多野精一

右は今回獨逸より歸朝せる文學士波多野精一氏が同地にあるの日佐藤紅綠氏に送りしオペラ觀察記なり元と私信に屬すと雖も兩氏の承諾を得て左に揭ぐ

御手紙に接し相變らず御健勝の由承り喜び申候且つは相變らず劇道熱心に御研究の程更らに嬉しく存候。當地の劇に就て語れとの仰せ、小生如き門外漢の垣覗きを申上げたりとて貴兄の研究に何程の資する處やあるべき、猶ほ更ら學業の餘暇とてなき身、精密なる研究を缺き候へば淺薄なる觀察多かるべく日本劇に疎

き小生の事とて比較論など思ひも寄らず候、其等は大兄既に御合點の筈に候へば遠慮は扨て置き素人考を申立て申候。

劇といふても通常の劇はシェークスピアやシルレルやレッシングの作を少しばかり見たるのみにて比較的多く見たるはオペラ(樂劇)にて候、先便申上候通り兼て音樂好きなる上に日本に歸りては再び見る事を得ざるものにて候へば、觀劇の時間ある時には自からオペラの方に足を向け候。

オペラは御承知の如く科白の代りに歌を用ひ舞臺の前面にある樂隊之に伴奏するものに候が、全然歌のみを以て修始すると限れる譯にもあらず、喜劇的のものには科白を交うるもの多く又た左までに喜劇的ならぬ作にてすら科白を交うるもの有之候。オペレッテと申してたわいもなき筋に音樂を附したる小作は科白を交ふる事普通にて候

小生の觀たるものゝ中にてもモーツアルトの諸作やロルツィングの「ウインディーネ」やベートーヴェンの「フィデーリオ」やヴエーベルの「フライシュッツ」の如きものは立派なオペラにて左までに喜劇的ならざるも科白を交へ候一概には申難く候へども悲劇的なる大物は大抵科白を用ひざるよう覺え候、伊太利ものにては科白の代りに「セッコ、レチタチーヴ」(Secco-Recitativ)といふを用ひ候、是は半ば歌の半ば科白と申しても宜しきものにて伴奏も簡單にてアッコルドを打つ位に止り候

獨逸にては伊太利ものを演ずる際にもセッコレチタチーヴの代りに純粹の科白を用ひ候小生は唯一度ベルリンに於てモーツアルトの「ドン、ファン」興行の際、獨逸語のセッコ、レチタチーヴを聞きたるのみにて候、科白には通常伴奏なけれども罕には極簡單なるを用うる事有之候、是はモロドラムとか申す由にて小生は「フイデーリオ」獄屋の場に於て之を聞き候、

音樂は情緒を寫し出すには適するも、深き情緒の伴はざる對話や平常の物語りには不適當かと存じ候、喜劇に科白を交うるも蓋し此爲めにや候はんか。若し深

き情緒の伴はざる對話若くは物語に科白を用ひざらんには實に冗贅の多き音樂となるべく、斯る場合には寧ろ對話も物語も省くが至當にて候べし、樂劇は動作自然に普通劇より簡單に且つ内的になり行く傾向あるべきものと存じ候、ワグネルの「トリスタンとイソルデ」の如きは其最も著るしき例にて候べきか。

樂隊は前に申上し如く舞臺の前に陣取り候席は一段低く出來居り候へど、土間の前や階上の席より音樂者の樂器を操つる樣眼にうつり感興を損ね候、且つ前方の席にては該樂隊の奏樂餘りに強く又各樂器はなれはなれに聞え、舞臺上の唱歌と調和を缺く傾有之候、ワグネルは此弊を矯めん爲め樂隊の席を床下低く沈めて其姿が見えざる樣になし且つ各樂器が右床下にて合したる上にて始めて聽者の耳に觸るゝ樣致し候、されども此裝置はバイロットのみに止まり候事遺憾に不堪候

大劇場にては五六十人の演奏者あり皆第一流の人々を網羅せる大樂隊故中々に聽きものに候、大抵のオペラには序樂あり、是は幕の開く前に演ぜらるゝものにて聽者をして豫め開幕後に現はるべきものを解する準備をなさしむるものといふて可なるべく候。序樂より第一幕の音樂に接續するもあり又獨立の一曲として存するも有之候、後の場合にては曲全體の序をなすもの多きやう覺え候、小生の如く音樂の横好きのみにて其方の智識に乏しきものには一々妙味を感ずる事能はざれど、同し曲を數回聽く間には朧ろげながらも首肯する節も有之候例へばワグネルの「タンホイゼル」はタンホイゼルといふ主人公がヴエヌスの洞中にて肉體的の快樂に耽る處より彼が次第に其快樂に飽き再び活世界に出でゝ純潔なる處女エリザベートの献身的愛によりて悔改し遂に救ひの至れるを描ける作に候が、序幕はタンホイゼルの罪の救はれしを感謝する順禮の合唱歌に始まり申し候、詰り全曲の旨趣が罪の救にある故かと存じ候、其次はヴエヌス洞中の肉體的快樂を寫出てたる音樂となり、更に悔改調の響くと共に快樂の音は次第に鳴り止みて遂に莊重なる順禮歌に終り申候、音樂家より或は笑を買ふやも知れざれど序樂と本曲との

間に係る關係あるものかと素人耳に感じたるまゝ竊かに大兄まで申上候

樂隊は序樂の外に猶ほ絕えず伴奏をなして舞臺上の唱歌を助け候、器樂の進步と共に樂隊益〻重要の位置を占め唱歌を助くといふより寧ろ唱歌と相俟て全曲の旨趣を發揮すといふべき位置を占め居り候、曲中の人物の心中の縺れや、人物の動作、運命の緣因成行なども寫出し候、又有名なるワグネルのWaldwebenやFeuerzauberの如く自然現象を寫出すものすら有之候。

曲を演ずる唱歌者には獨唱者と合唱者と有之候、合唱隊と申し候ても決して舞臺の動作に與からざるものにては無之、或は村の若者や娘子や、大名、武士や其他曲中の人物に扮し又曲中の人物として感情を歌ふにて候獨唱者も時としては二人三人數人と聲を合せて歌ふ處も有之候、ワグネル以前の曲には斯の如く歌のみに重きを置き劇として曲の進行上全く無意義なるのみならず却て妨害となる如きもの多かりしかば彼は此弊を矯めんと試みたるなりと心得居り候、例へば劇中の人物が動作を中止して觀客に向ひ二人三人數人相並びて合唱するが如き又は數人にて同じ文句を幾度も繰返すが如き、音樂と歌とのみを主として劇といふ事は此等の方便に過ぎざるやうの傾有之しやう覺え候、ワグネル自身の言ひし如く彼れ以前のオペラと彼れのとは爾く異れるものありや否や專門家にあらざれば判斷し難き事にて、小生の如き素人考には左まで異れるやうにも覺えず且つは彼以前のオペラとて一概には言ひ難く候へども、兎に角劇として不自然なる、無意義なる音樂的裝飾を除去し、音樂を劇の手段となしたるは全くワグネルの力として着目すべき事にて候、在來の作に於ては歌ふといふより寧ろ語るといふに近きレチタチーヴとアリエと稱する獨唱の歌と二人三人數人の合唱或は掛合ひと合唱隊の合唱との間には明なる區劃あり、全曲は幾多の係る小曲の綴り合せの如き觀ありしをワグネルは全曲を一貫したる一劇として音樂に作り出すとを力め候、從て歌は比較的に純粹の歌たる資格を失ひ殊に後年の作に於ては調子簡單となり、デクラメー

ション式となれる場處少からず候其結果として曲折高低に乏しく聽いて倦屈を覺ゆる節も出でたる事と思はれ候例へば「ヴアルキユーレ」の有名なるヴォータン物語の場の如き小生之をフランクフルトに聽き候節は第一流の歌ひ手が演ぜしにも拘はらず少しく睡魔に驅られ申候、是れ或は小生が素人故ならんと思ひ一音樂家に尋ね候處、此場を懈弛ぬ樣に演ぜん事は稀世の人ならねば不可能と申居り候

西洋の劇の背景の壯麗なる事と光線の應用の巧みなる事とは既に人々の知れる所、今更ら申上る迄もなき事と存じ候、オペラは特に此點に意を用ひ居るやう覺え候、稀には只だ徒らに派手がましきものも有之候へど、中には甚だ詩的なるも有之候、ワグネルも此點に於ては他に優れ居るかと存じ候、彼れに於て特に多とすべきは背景をして劇の內容と親密なる關係を有たしめし事にて候はん、一例を擧ぐれば例のタンホイゼルにて候、彼の墮落時代には、いかにも華美を盡くせしも、洞窟內の事とて華美の中にも何分地上の長閑なる空氣に乏しく滑らかなる光線の入り來らざる樣な背景にて候、而して彼が魔界の汚れたる夢のごとき快樂を厭ひ、地上の生新なる生活に憧かれて洞窟を去らんとするや、舞臺は次第に濃き霧に包まれ彼れを惑はす魔女の艶なる姿も隱れたりと思ふ一刹那、全景一變して春光麗かなるヴアルトブルグの谷となり、彼方の岩角よりは若き牧羊者が春來れりといふ樂しき調子の歌響き渡りて、希望の光を仄見しタンホイゼルは此處に立ち居り申し候、舞臺面變化と主人公の內的經驗との同化實に面白く見受申候、タンホイゼル赦罪を乞はんとてローマに趣きたる後、彼の爲に身を献げマリアの像の前に死の祈りを捧ぐるエリザベツトの跪けるは矢張り同じ谷にて候へども、此時は淋しき哀しき秋の光に充ち居り候、空は次第に暮れ迫りて夕の景となれば、歌ふものは彼の年若き牧羊者にあらずして、宵の星に心の痛を訴ふる世波に長けるたる詩人にて候、斯くて垢面蓬衣、罪の赦しをローマに得ず悶々として絕望の淵に沈みつゝ彷徨ひ來れるタンホイゼルの現はるゝ時には

四面全く夜を以て鎖され候へども、其れよりヴォルフラムの口より出てたるエリザベットの名が彼を最後の墮落より救ひ彼の心底一點の愛の温氣を感じ希望を抱て落命するや、次てエリザベットの葬式行列となりタンホイゼルの救ひを傳ふる順序歌なるに及んで東天次第に白み渡り申候、大兄にして之を見ば恐らくは絶唱措かざらん。

オペラには曲中舞踏(バレット)あるもの少なからず候特にフランスものには之を用うるが例となり居る樣にて候、派手好きの婦人の好尚より來りたるものと存じ候、劇の上より言へば舞踏は決して必要のものにあらず只だ或る程度內に於て許すべき裝飾ならんと存じ候ワグネルが劇といふ立場よりして舞踏の使用に制限を加へたる跡は歷々として明かにて候。

「リエンチ」は全く佛國式のオペラ故別物として其他の作にて(「パルツイフアル」は觀ざりし故姑らく之を措く)舞踏らしきものあるは「タンホイゼル」と「マイステルジンゲル」とのみにて候、前者の舞踏はヴエヌス洞內の肉慾的生活を示すに必要の手段なるべく、マイスデルジンゲルのも單に從弟等の喜び樂しむ樣を示すに止まりバレットとして專門の舞手を要するが如きものには無之候、又何れも舞踏として觀客の眼を喜ばしめんとするが如きものにては無之候。

オペラの脚本は大體に於て文學的價値あるもの少なく候、グーノーのフアウストの脚本をゲーテの原作に比せば其徑庭の如何に甚しきかは明かなるべく、又之れによりて大抵のオペラ脚本の文學的價値を推測するを得べく候、モーツアルトの樂劇の如きすら音樂としては皆類ひ稀なる不朽の大作なれども文學的作品としては「フイカロの婚禮」を除きては殆んど何等の價値もなきものゝみにて候、此點に於てもワグネルは新機軸を開きしものといふべく優れたる詩才を有したる彼は、劇といふ立場のみならず文學的方面より見るも立派なる脚本を自ら製作致し候、彼以前にはロルツイングなどの例外はあれど、音樂と脚本とは別人の手になり音樂が主にて脚本が其の副へものとなり居りしが、

彼の稀有の天才は詩と音樂との兩者を提げて劇の上に光耀眩ゆく立ち得たる事、實に永久忘るべからざる功績と存じ候。

小生は矢張り最も獨逸のォペラを好み候、英人の作にてはジョーンスの「藝者」といふオペレッテの外は一も聽かず候、又實際此作の他には聽くに足るものなき由にて候、伊太利人の作にてはヴエルヂの作に趣味深きあるは氣附き候へども、ロシーニやドニゼッチの作の如きはメロディーは如何にも美く候へども淺薄にして且つ肉感的のやうに思はれ好むに至らず候、佛人の作にてはビゼーの「カルメン」にて音樂の劇的にして且つ強く健かなる節あるが氣に入り申候、グーノーの「ファウスト」やトーマの「ミニヨン」の如きはメロヂー美くしく好んで聽き候ひしかど何となく餘りに情感的、抒情的に過ぐるやうに思はれ候、併し佛伊の作は多く聽かぬ故一概に判斷出來かね候、獨逸ものは最も多く聽き候、メロデーの方面よりはヴエーベルの「フライシユッツ」とモーッアルトの「ツアウベルフレーテ」とを最も好み候、メロデーが肉感的にも情感的にも流れず、健かに單純にして深さのあるは獨逸の特徴と覺え候、此二作は幾度聞き候ても飽くを知らず候、ワグネルの作は素人ながらも其偉大に打たれ候へども何分とも小生の事なれば、彼が後年の作の如きは實に解し惡く數多聽きし中にて「タンホイゼル」と「ローヘングリン」を最も好み申候、此二は前二者と合して小生の何よりの好物にて候、此事を當地の一音樂家に語りしに、左りとては素人らしき事よと笑はれ候、素人は素人に相違御座なく候へば笑はれても詮方御座なく候、傑作の或ものに興味を感ずる丈にても藝術の利益を素人なりに得候事と自ら慰め當地に來りし幸運を喜び居り候今日は是にて筆を止め申候此次には當地の宗敎に關して觀察せし所を申上度存候。

新生活

飯牛の客

一家の革命

（在京の諸友に示す）

身世轉蓬の如しと古人はいつたが、端的自分の身上てある。少年時代に郷里を出てから、三十餘年の間、或時は朝鮮に、或時は支那に、或時は南洋に、或時は歐洲に、殊方異域に種々の生活を試み來た。去りながら小さくとも「ホーム」は東京である。千里萬里の遠きに赴き、二年三年の久しきに彌つても、歸り來る所は東京てあつた。世は「フェミニズム」を尙ぶ世となつても、主人の頑固と貧乏とが因となり果となつて、我妻は何時も家憲的家内の位を正して居つた。主人は學者てあるから、字義の講釋をする。家内とは讀んで字の如く家の內てあるぞ。家の內に居て働いて家の外に飛歩くものては無いと、嚴かに掟てゝある。彼女も人間てあるから、若い時分などには隨分迷惑てあつたらうと思ふ。時にはそれを察しない事も無い。氣の毒に存じた事もある。現に歐洲の空に在つて、主人はノンキに暮らした際などには、坐ろに惻隱の情を催ほして、

伏廬に、糠味噌すゝり、瘦せにけん、妻の命を思へば、乏しも。

と讀んだ時代もあつた。――が、彼女も舊式の家庭から我家に嫁し、其上主人の世帶心に乏しいのに慣れて、何時となく習ひ性となり、左のみ苦にもしないて、二十餘年一日の如く家內て遣り通して來た。從て彼女の遠航力は東京を中心として三十里以外に出た事が無い。然るに今度は主人が突然の命令を以て、家を擧つて九州に移ると宣言したから、「ホーム」の間に一大革命を起したのてあつた。主人は專制君主てあるから、一たび斯うと極めた上は、綸言汗の如してある。一時は妻兒ともに一驚を喫したが、是れでも夫と賴み、父と恃める殊勝さは、左まて厭やな顏着きもせず、參りましやうと孰れも同意して、落行く先は九州相良の少し手前、福岡に移轉する事となつた。旅行……此旅行

を勢一杯に文學的に自賛せんと欲するも、銀婚式時代の蜜婚旅行、可笑しくもあらず。斯くして拿破崙一世じや無いが、我寤寐にも親愛する隅田河畔の京を立出てた。

未聞の味噌汁

主人は都人に非ず、鄙人に非ず、四方の人、妻と兒とは東京の土人。新に加はつた下男が四國人で、下女は福岡の近在人。是等を集めて新らしい生活は始まつた。此擬は些と過大に失するけれども、バベルの塔を築き掛けた古代の各種族の集合を回想せしむる氣味がある言語の佚離はドノ道免かれない。主人は何時も通辯役にして、往々三譯を重ねることがある。併しながら君子は庖厨を遠け給ふが故に、臺處の事までには干渉せぬ。從て意外の失敗が意外の邊から擡ち上る。新居を構へた翌朝の事であつたそうな。下女は奥さん（此の處にては目下の手前敬意を表し置く）に向つてレンギを買つて下さいと申出た。奥さんは上に陳べた通り四方の人て無いから、レンギの何物たるを知らぬ。が、人は自己の智識の限りにて事物を理解する。奥さんも此大法には漏れず、レンギと聴いたから、即坐にレンゲと速了した。今に捜して遣ると答へたまゝて、其日は過ごした。翌朝も翌々朝も同じ請求を繰返した樣子なれども、引越のゴタ〳〵に追はれ、同一の答辯を以て、三日間を空過した。扨第四日目の朝となつた。下女は泣面をして、レンギを買て下さらねば、もう遣り切れませぬと迫つたそうな。奥さんも少々腹立氣味にて、自ら立つて此處に在るじやないかと、戸棚からチリ、ンゲを取出して與へた。すると下女は聲を勵まし且つ兩手を以て棒大の物を握りたる手眞似を爲し、味噌をば擂鉢の中に納れ、かう〳〵擂る物の事ですと說明した。是に至つて奥さんも始めて擂りこ木の事であることを發明して、大に驚いた。若し早く此事が主人の耳に這入たなら、主人は物識の難有さ、東に行はるゝ伊呂波喩の外に、上方に用ゐらるゝそれをも諳んじて居る。即ちれは「良藥口に苦し」の外に、「擂木で腹切る達者もの」をも御存じてある。例の通辯にて即坐

に分る筈であるが。生憎主人の干渉せざる臺處事務の事てあるから、此扞格齟齬を來したのてある。閑話休題、奥さんは下女の說明に由つて、レンギのスリコギたることを始めて理會すると同時に、忽ち疑問を發したのてある。前の三朝擂りこ木無して、如何してお前は大御おつけをこしらへた歟と尋ぬれば、下女は極めて眞面目となり、何程申上げても、買つて下さらぬから、毎朝〳〵掌て壓潰し、揑ね廻して、こさへて上げましたと申出た次第てあつた。口より出た物の駟も亦及ばざると一般、咽から這入つた物も同じく駟も亦及ばない。筆を把つて斯く書きつくる夫子を始め、三日の間、山出しの下女が胼胝の手を以て、手垢味噌を獻りたる味噌汁を、甘々啜らせられ了つた。是が田園生活劈頭第一の除幕式と思ひ給へ。

コントル、サンス

次いて起つたのが、焙烙の間違てあつた。妻は番茶を焙じ樣とて、今度は下男に焙烙を買つて來いと命じたそうな。下男先生委細合點と言はぬばかりの顏着きにて出て往つた。暫くする中に、彼は兩手にても拱らぬほどの火消壺を抱へて來て、奥さんの前に拋り出したのてある。奥さんは目を圓くして、是はハウロクでは無いじやない歟と怒れば、下男も亦脣を反らし、是がハウロクてはありませぬ歟と遣り返す。曰くハウロクじや無い。曰くハウロクです。火消壺を中央に圍んて、臺處に於て大議論の最中に、主人は外から歸つて來た。ハウロクは等しくハウロクてあれど、東京のハウロクは茶を焙じ胡麻を熬る器を意味し、九州のハウロクは火消壺を謂ふのてある。若し九州に來て、東京のハウロクを買はうと思はゞ、茶イロカシといはねば通じぬのてあると講釋した。理解を聽いて、妻も噴き出せば、小供も笑ふ。下男もおつたまげれば、下女も滾がる。漢文の文格て此を狀すれば、笑聲四隣に震ふと遣つて除く可き處てある。

土音土語

九州に入つてから、今更の如く可笑しく聞ゆるものは土語と土音てある。土語は千萬無量てあるから、一々

擧ぐるに遑がない。玆に土音の著るしいもの三つ四つを捕へて見やうか。薩摩人はリをイといふ癖がある。東京でも成城學校なとに居る鹿島の書生連が、八田翁の芳野山の歌を誦するに、耳を傾けてみ給へ。一調子張上げて、「見ゆる限いは櫻ないけい」と遣つて除ける。佐賀人は又神代の遺風其儘ともいはうか、濁音を用ゐない。否や用ゐないのでは無い、使へないのである。人あり佐賀人に向つて、何故君等は濁らないのであるかと問ふたれば、「とう濁ごろと思ふても濁ごれない」と答へたといふ話がある。早稲田伯は彼れほどの談客である。滔々汨々懸河の辯であるが、土音は矢張殘つて居る。伯は自身を吾輩と稱せらるゝが、其吾輩か「わか輩」即ち「若輩」と聞える。伯の席に侍坐して、御高論を承はるに、先生身を斜にして、右手を揮ひ、此「わか輩か……」と遣り出さるゝ毎に、そら亦お出てなすつたなと、獨りおかしく感ずるのである。但し伯の老ひて益々壯なる處、中々老輩のやうで無い。「若輩」が却つて適當かも知れぬ。更に肥後人に觀れば、ロをドといふ癖がある。吾々は孔門の遺書を繙いて、「ろんご卷の一」と讀むが、肥後人は「どんご卷の一」である。吾々は六六六を數へて、「ろつ百ろく十ろく」と稱ゆれと、肥後人は「どつ百どく十どく」と遣つゝける。之と正反對なのが、筑前人である。此奴はドをロと呼ぶ癖がある。否なそれのみて無い、ダヂヅデドをラリルレロと呼ぶ癖がある。就中是が婦女子に最も多い。例へば「どうである歟」といふ可きを、「ろうれある歟」といふ。下女に向つて、「酒はまだある歟」と問へば、「まらあります」と答へるのである、「まらあります」なんぞは、中々愛嬌では無い歟。

西來半月の後であつた。小供を近處の小學に入學させた。一日學校にて小麥の粉は何に用ゆる歟との問題を發せられて、小供が解答の順番に當つたそうな。小供は起つて、「それてうどんを作ります」と答へるや否や、同級の學童は一時にどッと笑ひ出した。先生も固よりお邦の仁であるから、同じく可笑しく聞えたと見えて、「それはうろんである」と直したのである。小供は無

我てあるから「東京てはうどんと申しますが……」と押返したそうな。すると先生も少々稀有になつたと見えて、何か書物を看られた後ち、一半は自分にも餘裕を取つて「あゝうどんても善い」と言はれたとの事てある。此の處は先生も少々うろんてあつた。淮南子に在る啞泉の例さへ、今更思ひ出されて、興味がある。

住吉の里

扨我僑居とし定めた處は、那珂川の下流の右岸てある。此川の海に朝する處は、三角洲を作して、之を中洲とも中島とも稱へ、博多と福岡との中間に介在する。今ては立派な市街てある。

夫子の居は、是より上、僅か四五町許に過ぎぬ處て、里の名を住吉といひて、縣社住吉神社の所在てある。我屋は其境内の一分を占めて居る。神社の祭神は表筒男、中筒男、底筒男の三柱て。神功皇后御征韓の際は、現人神として現れ給ひし住吉明神の本家本元てある。延喜式の神名帳にも筑前國那珂郡住吉神社三座（並名神大）と立派に見えて居る。本來から申せば、無論國幣以上の社格を保たる可き筈であるが、御氣の毒な事には、貧乏て御座る。尊嚴維持費の二萬圓とかを持合せ給はざるが故に、下賤の稻荷なんぞと伍して、縣社に列しておはすのである。何處やら誰かに似て御座る處があると思へば、一層お懷しい。此處に來つて我居をトしたのは、恐らく神意かも知れぬ。神人相應の地とは、此處の事てもあらう歟。表筒男の御呵護に賴つて、社會の表に翺翔せんことは思ひも寄らぬ。中筒男の御冥佑を蒙つて、中流に楫を停めんことも六ケ敷い。まゝよ底筒男の御神德を仰いて、底津巖根にひよろ柱細知立てゝ、永く御膝元に居て、御厄介に預らう。明神笑みため、祓ひ給へ、淸め給へ。

僑居は既に斯かる勝地てある。從て景色は絶佳てある。三面には遙かに立花宗茂の立籠つた立花山、高橋紹雲が奮戰した寶滿山扨は大伴旅人に詠ぜられた大城山、傳教大師等の所願せし背振山、珍寶拔けを出した油山等を望み、近くは一帶に麥浪菜雲を漂はす可き田園を控え、おまけに淸瑩透徹なる那珂川を繞らして、唐

齋の山水中にても見る可き一長橋を隔て、斯岸の住吉と彼岸の春吉とは相對して趣を添へて居る。天然の風景斯くの如くなるに、庭園の築山泉水なども、福岡博多に多く見ざる結構を盡してある。是だけは何人に對しても、從來誇矜を禁じない。兎いつて少しも主人の謙德を失ふ心配の無いのは、他人の持物であるからてある。此處が則ち借家黨の難有い處てある。そこて主人一首をやつた。

我宿は、那珂の流を、なかに見て、春は春吉、住ば住吉

油山の拔陣峯

遙に對する諸山の中、打向ふ度毎に、山も笑容を湛ゆるかの感あるは、油山てある。斯かる感覺を持ち來る原由は斯うてある。此山の麓は固より村落であるから、村民の多くは肥料を福岡に取りに來る。自分の幼時てあつた。此村民中の若者に、日頃、物の强い自慢の男があつた。或日村の甲乙と倶に各々駄馬を曳いて、福岡に來り、肥料を取つた歸るさに、例の物自慢は始まつた。孰れ劣らぬ血氣の者共てあるから、各々それを勃然たらしめて、其臂强に誇つたそうな。すると其一人が之を看ろとて、手にした端綱の捻を戻し、其間に物を挾み、物の力にて馬を曳きながら、拔込袖をしつゝ、何うだ豪らからうと誇りながら、例の油山の麓原に差掛つたと思ひ給へ。何ぞ知らん徑の傍なる躑躅がくれに居た雉の雌雄、人馬のけはいに驚いたか、物の壯大に驚いたか、ケゝンと一聲、脚下から飛び出した。此方の駄馬は亦其聲と羽音とに驚き、是もヒヽンと嘶いて驅出した。事變は不虞に發したから、若者は拔込袖から手を出すに遑あらず、由來大物八寸莖、根元から端綱の爲に拔き持ち去られたのてあつた。壯佼の遺憾それ果して如何ぞや。爾來其男が福岡に出て、馬を曳いて我等の門前を過ぐる毎に、子供朋輩聚つて、各々手を拍ち「油山の珍寳拔けや滅多に無い！」と囃立てた。此典故から油山が何となく可笑しく感ぜらるゝのてある。

前年九州に來た時、偶々犬養木堂の下向に邂逅した。何が扨進歩黨の總務委員といふから、同黨の諸豪、君を

水茶屋の第一樓常盤館に招待した。自分もお蔭てお客の一人となつたが、政事家の會合であるから、儀々堂々、孰れも天下の大勢を論ずる。山人辛氣臭さの餘り、木公に對して前の油山を指ざし、珍寶抜けの史實を話し聽けた。灑脱の木公大に喜び、爾來鄕人の公を早稻田に訪ふ毎に、油山の勝景を激稱して措かぬといふ事である。但し激稱するは善けれども、其度毎に件の珍寶抜けを日南が朋友だく〴〵と吹聽さるゝのは、拙者少々迷惑に存ずる。然りながら反省すれば、左まで抗議の申向けられた筋でもない。何となれば、彼は珍寶抜け、我は腑抜けなればなり。腑抜先生西來の後ち「油山之抜陣峰に題す」との一首を遣つた。

心ある歟、心あらぬ歟、油山、まうらが岳に、雲立ち昇る。

翡翠と夜鷹

此地に僑居してから、都會の生活にては夢想し得られぬ趣味を感ずることが日々ある。嘗て話に聞いた事があつた。兎の書を看れば、何ぞといへば木賊の側に蹲まつて居る樣が書いてある。そこで或人が多く庭に木賊を植えて、兎を放つて見た。すると兎は是は御馳走といはぬばかりに、其木賊を皆食ひ盡したといふ事てある。自分も之と好一對の失敗を最初に取つた。

我庭の泉水には二つの樋があつて、樋から樋に川水の流が往來する。平岡浩然來訪して、此狀を看取し、乃て多くの緋鯉、緋鮒及金魚を贈つて呉れた。初め放つ時遽々如たり。既に水を得れば洋々如たり。牛門逸民が矢來の庭などにて、看んと欲するも得べからざる所。是にて早く一兩日を樂んだ。居ること三日にして、泉水の彼方築山の上に在る三尺許の冬枯の枝上に、一羽の目覺しき小禽が見はれた。とみれば美はしき翡翠である。此奴何うするかと窺へば、長き喙を差出し、小首を傾けて、泉水の中心をじつと凝視する。其恣態といつたら、言ふに言はれぬ妙がある。前の兎の話と一般、應擧の幅か何かてより外に、看たことの無い景趣であるから、愉快で堪まらない。すると其翌日も翌々日も續いて遣つて來て、同じ木の同じ枝に宿つて、

同じ姿態を演出する。其れが面白さに、子供等が追はんとするを制しつゝ爲すが儘に任せて置いた。處が是が大失敗。彼の小首を傾けて、何時も泉水を凝視たのは、魚を睨つたのであつた。追々氣がついて見た時には、緋鮒と金魚を合はせ、二十餘尾を甘々爲て遣られた後てあつた。

魚を睨ふ奴は是のみに止まらぬ。月明の夜となれば、鳶大さの蒼々莽々たる先生が大空から下りて來る。此先生は金魚どころか、尺餘の鯉でも攫さらう。無作法千萬の先生と思ひ、近隣の人に其稱呼を問へば、此處らでは夜鷹と申しますと敎へて呉れた。是に至つて始めて發明した。東京の眞中に於て、あなた一寸者流を捕へて夜鷹と呼ぶのは、白晝に稼がず、夜中に稼くから、此稱を負はしたものと見える。

ここ　あなた一寸者流の夜鷹と呼ばれるのは、是て知れたが、自分自身が何時か東京に舞戻らば、そら掠鳥が遣つて來たと、人々に歌はるゝのは必然てあろう。之を思へば、自分も行々は鳥の仲間歟、鳳鳥到らず、河、圖を出ださず、已んなん〳〵とか、何とかおつしやいました人もあつたとやら。雀海中に入つて、化して蛤となる可くば、渡鳥の田舍に入つて、化して掠鳥となるくらゐは、今更ら何の不思議もなからう。京下の諸友！。書けば尙ほ千萬無量てあるが、書くも面倒、讀むも亦面倒だらう。此邊て餘は類推す可しと願うて置かう。

左樣なら

予の愛讀書

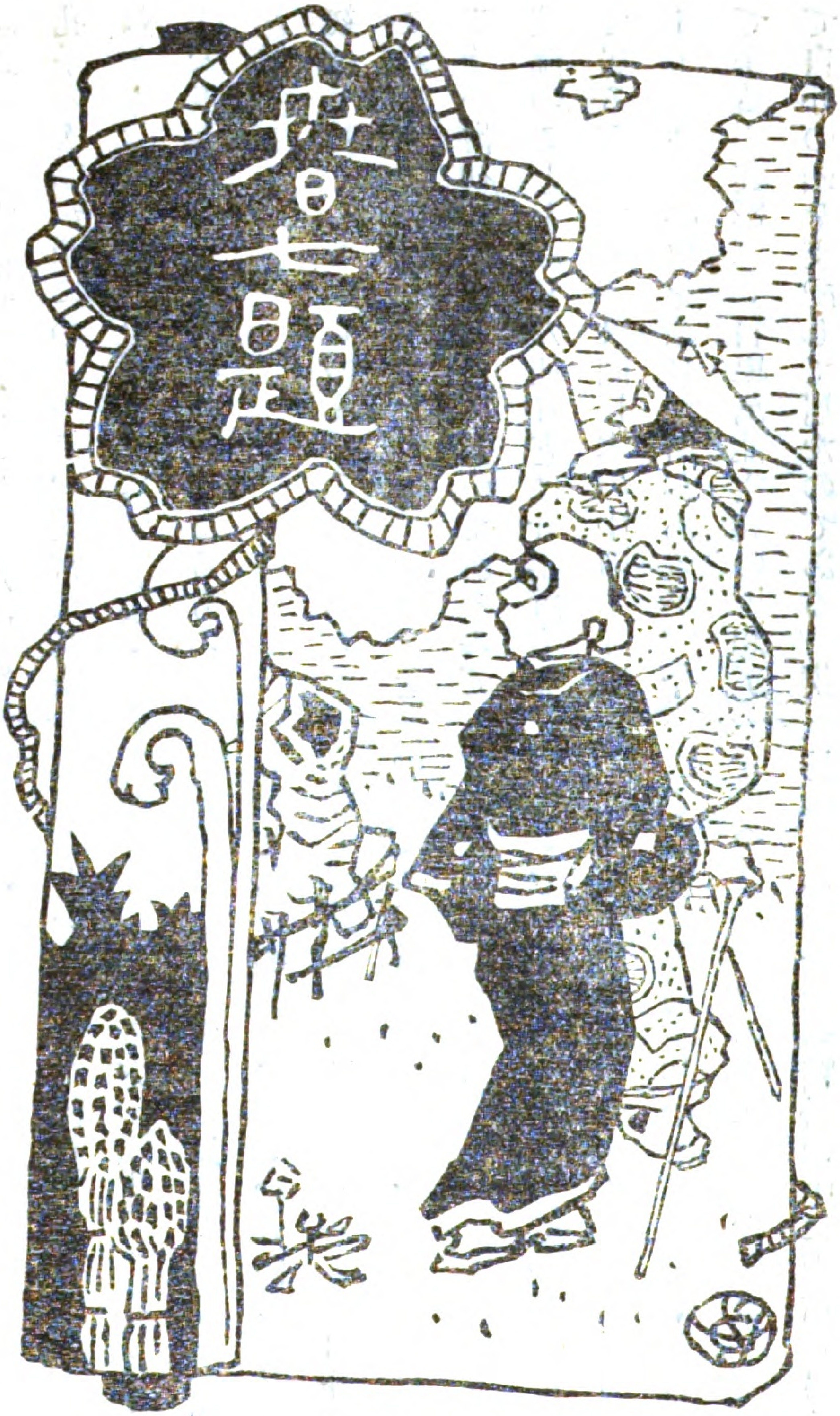
文學博士　姉崎正治

○

僕の考ては愛讀者といふのは始終其れを喜んて讀むといふのも固より其中に入るてあらうが、夫れと同時に亦愛誦するといふより寧ろ暗誦して居るもの、其書物が傍になくとも其書物を空てエンジョイすることの出來るやうなものを愛讀書といひたいのてある。こういふやうに暗誦して居る本、少くとも其書物のこと

を考ふると心に一種の響を與ふるやうな本は誰にでもなければならぬことゝ思ふ。

僕は小供の時分に漢學塾に入つて居たが其時分に教込まれたのは論語である。終始輪講をやつた、本文のみならず、註釋を比べて批評するといふのであるから、論語は其時分はよく暗誦したのである。註釋書も古學派のものでやつたが其外のものも大分讀んだのである。素より今は註釋書のことはよく覺えて居らぬが、それでも今尚自分の心に響く所がある。（例へば論語徴、論語古義、論語由、論語群疑考、讀論語、論語彙註の如きである）て論語をさういふ具合に讀んだのが論語其物の直接の利益は措いて論ぜずとするも、一つの本を暗誦するまで讀むといふことゝ、又書物の註釋書を版本たると寫本たると問はず競爭的に集むるといふ習慣を其時に養はれたやうに思ふ。尤も其本を集むるといふ習慣はよい



（其一）

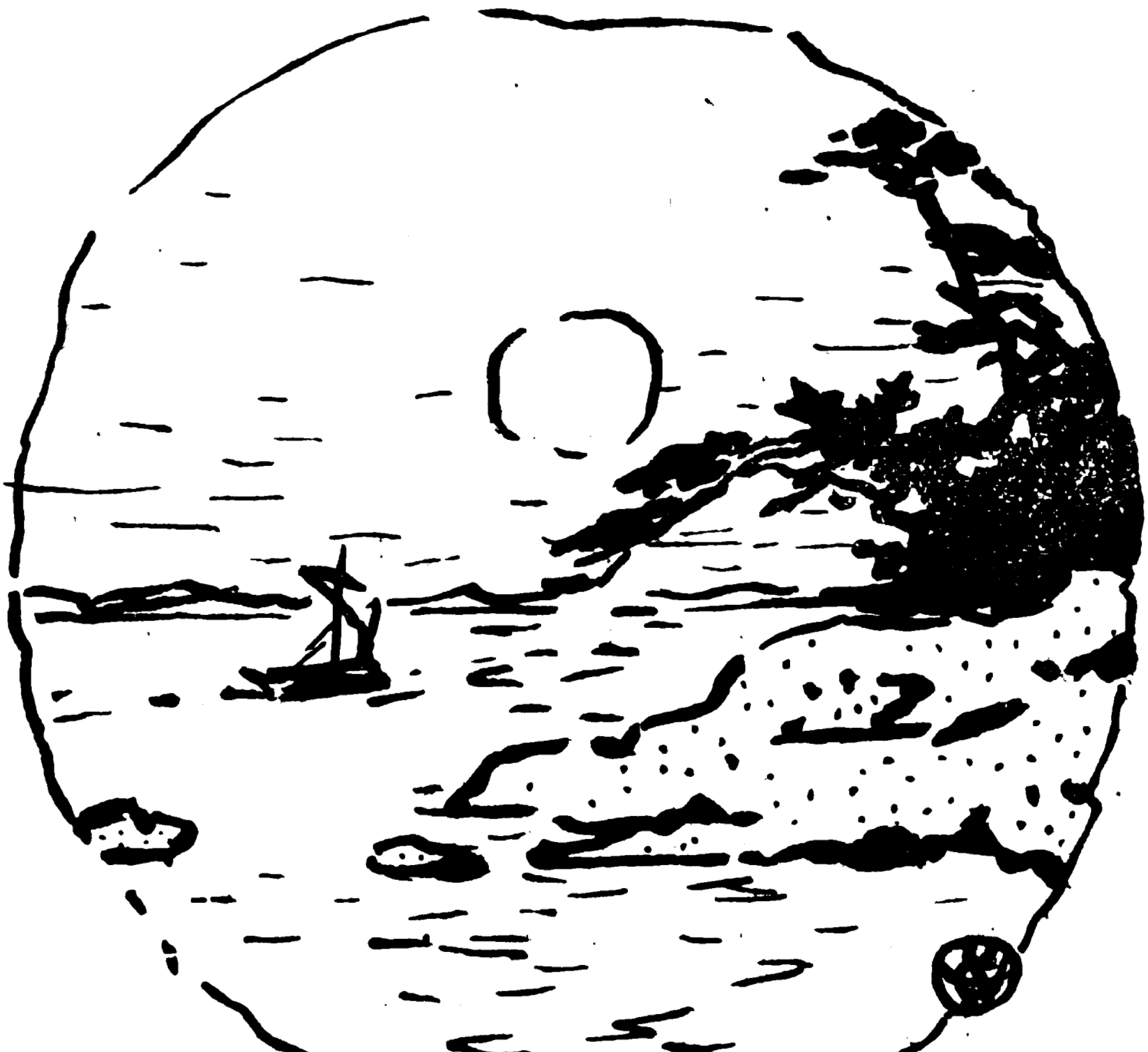
かわるいか分らぬので、隨分錢もかゝるし、或は却て不幸となつたかも知れぬが、とにかくさういふ習慣を養はれたやうに思ふ。其後十數年間讀んだことはないが、論語から得た孔子の人物が頭にのこつて、其言葉其儘に覺えて居らぬとも、其敎訓は自然に心に浮んで來る。夫れ故に論語は矢張り僕の愛讀書中の大切なるものといふて可なりと信ずる。

　其後英語を初めて暫くしてから讀んだのはスペンサーの敎育論でこれも所々暗誦してデクラメーションをやつたのである。一番初めのところに書いてあるのであるが實用と裝飾のことを論じた所などは廿年近くなるがまだ覺えて居るのである。又同じ本の中頃より少し後の方にサイエンスの必要を論じた所があるが、今でも心に浮んで來る。其影響で科學萬能主義の思想が大學を出るまで自分の頭を支配して居たのである。僕の讀書に關する習慣を養うたのは主として此二書である。それて今でも一の書物を捉へればそれを何處迄も讀み果せるくせが此二書によつてつけ得たのである。だからいはゞ此二書は僕の前生の愛讀書といふべきであつて其響が今に殘て居るのである。

　自分の中頃の愛讀書は今は略しますが、今日の所謂愛讀書といふのは二種類に別るゝのである。一は其れを讀んで樂を得る方、所謂エンジョイする方で、他の一は其れによつて自分の思想を導くとの出來るもの、即ち批評的の導きをなすものである。其二つとも自分の意味では其書物を持たなくとも、自分獨りで居て退屈の時でも、其書物のことを考へて其内容が自分に浮ぶものをいふのである。

　エンジョイする方のもので一番深く染み込んで居るのは約翰傳第十四章乃至十七章、即ち基督の最後の說法で信仰の眞髓は其中に遺憾なくあらはれて居る。又今一つはエペソの人にやつた手紙、これは同じ信仰を持つものが一つの精神の中に團結し得ること、いはゞ精神團結の充滿の狀態を遺憾なく書きあらはして居る。此二つは宗敎上の信仰の養、又精神上の慰といふことを求むる人に充分ならんと思ふ。僕は此外の新舊

約書の部も讀むことがあるが何れも日本文で讀む。佛教の中で愛誦するのは極く僅かであつて中阿含の聖求經に佛陀の所謂大悟徹底即ち成道の時の心持を佛陀自身の述べた所である。所謂聖道修行の標本ともいふべきもので、其大部分は自然に自分の心にも響き得るのである。又其れと關聯して律の中で佛陀が六十人の弟子を得て其れを四方に派遣する時の說法が自分の心に響く。即ち萬づの民を救ふといふ熱誠と覺心とがあらはれて居るので其說法を考ふれば自



（春七題其二）

分にも何となしに大いなる力を吹き込まれる。佛書の方はパーリ文で覺えて居る。其れは何故といふに漢文ではゴツ〳〵して大覺世尊が弟子を說き、弟子にコンマンドする態度で說かれた口調があらはれぬやうに思ふ。パーリ文の方は口調が流暢で、而かも莊嚴で自分の心に一番浮び易く一番に樂みになる。つまり新約書の方は人を信ずる方の養ひ、佛教の方は自ら恃む方の養ひとして愛誦するのである。又所謂エンジヨイメントの方でワグネルのトリスタンを愛

誦する。トリスタンは其れを讀むと同時に其處の音譜を聯想することが出來る。それで大きな聲を出して、例へば謠曲の出來る人なら謠ひをやる如くに讀む。又其方の側では外に平家物語、高山の兇後錄、沙翁のハムレツトなどあるが、然し前にいふたものに比ぶれば其れ程ではなく、到底暗誦する程ではない。

思想の側の方をいふと、これは愛讀といふよりは自分の導き、自分を批評するものとして讀むのであるが、これはいふまでもなく哲學書類である。哲學書の中で最も其用に適するものはカントなりと思ふ。若しカントをよく咀嚼して、カントはわが愛讀書也といへる位になれば其人は最早や充分哲學者たるの資格ありと思ふ。予はカントをそれ程までに味ふに至らぬ、味ひたいといふ考があるが其力がない。で其代りとして、いはゞカントの身代りとして使ふのはショーペンハウエルである。ショーペンハウエルの中でも意思の自由に關した論文、此論文は恐らくは近頃の哲學者の中での最も鋭利な批評、嚴密な思想の標本といふて可い。先づ意志の自由といふ觀念を批評して其觀念の中にある矛盾を明かにし、進んで事實上吾々の經驗する世界にて意思の自由といふやうな現象の存在せざるを證明し、說明し、批評の力を以て全く自由意志論を破壞して最後に殘りし結果、吾々人間の意思は根本では絕對の自由を有するが、現象世界では全く法則に支配せらるゝといふ結論に達して居る。其議論の結果や內容よりも、其思想の批評的の進み方が所謂快刀亂麻を斷つ風がある。其點で自分の思想上の檢査として讀みもし、又心に浮ぶることも始終あるのである。思想の方では印度哲學殊にウパニシャッドなどもあるが、ショーペンハウエルほど自分に親しくはまだならない。又先にいうた意味の愛讀書といふものにもまだなつて居らぬ。要するに思想の方面ではカントは自分の理想であるが、カントは餘り高過ぎるからショーペンハウエルばかりを見て居る。近頃の哲學者の書いたいろ〳〵の論文や敎科書はショーペンハウエルを讀んだ後に見れば、たゞ骨か石瓦かのやうに見えて少しも面白味はな

いから手にだに觸れやうとはせぬのである。

僕は愛讀書を二つに別けたが其兩方を一所にしたやうなものが一つある。それは印度のギーターである。これ丈けは幾分か暗誦して居るが、始終書物を持て歩いて樂みの方と思想の方と兩方の用に使ふ。それは何故といふと哲學思想の極く初めから道德宗敎の問題まて總て含まれて居るが、それが大きな敍事詩の一部分となり問答體で七百の偈から出來て居るから其中の何處を見ても、一つ〳〵を見ても其丈けの意味が各々にある。其故に閑な時は通讀する。汽車の中などでも其中の一偈を讀んで暗誦する。ドチラの用にも立つので其れ丈けは自分の傍をはなさぬ。然しながらこれをエンジョイする點になれば先きにいふたもの程極く親しいといふ程にはまだなり得ぬのである。

自分が愛讀したいと思うてまだ出來て居ないものはウパニシャッドやカントの外にプラトーンとダンテである。愛讀したいとは思うて居るがまだ出來ぬ。これは愛讀書にあらずして愛讀したい本である。

○ 笹川臨風

愛讀書と申すよりか、少々廣義に相成居候哉も難計候得共、自分の好きなものを左に開陳致候。

日本の古い所で好物なは、古事記と萬葉集。つゞいて源語の須磨明石の卷と宇治十帖。方丈記。太平記の大塔宮熊野落と正行の吉野參內。西鶴物にては、取り分け一代女。それに京傳の洒落本。日本外史の平氏、楠氏、豐臣氏などに御座候。讀本人情本は、小供のうちから御膳もたべないぞの方にて、片つぱしから耽讀し、娘節用と八犬傳とが、大の贔負なりしが、今はそれ程にても無之候。支那にては、文は先秦、詩は漢魏先秦にては莊子と韓非子とを推し申候。左傳もすき。史記の項羽本紀と荊軻列傳、資治通鑑の三國時代は、何度讀だか知れない程に候。蘇東坡は理想の文人にて、殊にその小品文は天下の絕品と存居候。詩は漢魏以後、六朝にては庾子山を好み、唐にては李白、明にては高青邱か大好きにて候、小說にては水滸傳、李卓吾もの

よりか寧ろ金聖嘆評のものを取り、傳奇にては牡丹亭還魂記を愛し申候。佛書にては法華經と碧巖錄。殊に後者は自分ばかりて一知半解を妙と致居候。西洋物にてはバイロンとラスキン。十三卷物のバイロン集と十三卷物のラスキン集とは隨時引くり返し居申候。中學時代の頃、宮崎夢柳の自由の凱歌などに養成せられたる爲めか、佛國革命史は大の氣に入りにて、カーライル、ミグネ、ミレット諸氏の革命史、皆嘗ての愛讀書にて候ひき。序に明治以後の小說家では、故人一葉女史と、露伴、鏡花二氏とが、至極蟲が好き申候。匆々。

○ 鳴雪

○論語

孔子の能く、情事理に通じ、酸いも甘いも辨へたる論說は、二千年の今日にも概ね當て篏まりて貴うとし。

○徒然艸

兼好の世を脱するが如くにして脱せず、雅俗の間に彷徨し、時に奇拔の說話を爲すがをかし。

○日本外史

古戰物語を漢譯して、原書以外の趣味を與ふるが面白し。

○唐詩選

渾厚雅撲の漢詩は此集にて盡くせり。

○俳諧七部集

俳句の唐詩選なり。

○教草女房形氣

八十歲の京山が江戸の風俗を寫し、傍ら教訓を兼ねて物せしなれば、灰汁拔けしたる點、今の小說の及ぶ所にあらず。

○ 戸川秋骨

愛讀の書がなければ讀書に關する事でもと言はれたのであるが、夫れも考がまとまらないので凡てお斷りを仕やうと思つて居ると、夜寢てから大學の試驗て答案に白紙を出して先生の不興を被り落第させると云はれ

た夢を見、公論へも白紙を送つて落第となつては大變と心附き、やむを得ず愛讀せざる書といふのを擧げる事に仕た。申すまでもなく愛讀せざるとは讀まないといふのではない、幾度か讀みはするのであるが面白いと感じないのてある。愛讀し得ざると云ふのが至當かも知れない。其第一は新約聖書てある。舊約聖書の方はむしろ面白いと思ふが、新約と來ては、山の上の說教の外は、一向駄目である。十二三の時支那譯のを讀ませられたのが始めて、內外人の講義はかりでも何程聞て居るか知れない、無論自分獨りでも幾度か繰りかへして隨分暗誦して居る處も少くはないが、一向難有く感じない。聖書の文學など、云ふのが自分には分からないのである。よく／＼度し難い人間と見える。



（春七題其三）

次はシエクスピアの戲曲である。此れも讀んでは居る。三十何篇通讀はまだ盡く仕て居ないが、中には幾度か繰りかへし／＼讀んだのもある、ハムレットの如きもそれてある。併し何處が面白いのか偉いのかまだ解らない。なる程と思はれる處が朧に感ぜられる事もないてはないが、所謂身にしむと云ふやうな事は少しもないのてある。

夫れからマローリーのモルト、ダアーサーてある。アーサーの話は疾くから面白いと思つて讀んでは居つたが、何れもセコンド、若くはサードハンドてあつた。マローリーのも今樣に譯したのてあらうが、讀むに樂しみどころか何となく苦痛を感ずる位てある。西洋の人が評してテニスンは物語をぶちこはして仕まつたと云ひ、マローリーを譽めて居るが、自分にはテニスンのなら分るがマローリーの原書は難物である。簡素の趣はあらうが親む事は出來ない。かうして見ると自分には宗教も文學も分からないのであるが、併し愛讀といへば實は何ても愛讀て、取り立てゝ言ふほどのものはない。强て言へば古い處てダンテ、新しい小說てスティヴンソン、評論てアーノルドは好きである。ロオマンチックとクラシカルのごた混ぜて、解つて好きなのか、解からないてなのか、夫れは解からないのてある。

○ 矢野龍溪

私にはこれぞといふ程の愛讀書はない。十八九の頃、まだ洋書を讀み初めぬ時分には和漢の歷史を好んで見ました。中にも宋名臣言行錄は最も好きて、幾度となく繰り返して讀みました。然し今考へて見ると、其爲めに得をしたこともあり、又損をしたこともあるのです。得をしたといふのは、言行錄の中には政事家大臣たるものは、獨り利祿の爲めのみならず、國家の爲め又は國人の爲めに盡すべきてあるといふやうな心得が書いてあつて、これが多少人の品性によき感化を及ぼすものと思ふ。確か錢若水の言と記臆するが、「高尙の士は名位を以て光寵となさず、中正の士も亦た窮達を

以て志操を變えす、其或は爵祿恩遇の故を以て忠を上に致すは中人以下のもの〻する所なり」などとあるが、これは政治家又は大臣たるべき人の心得べきことと思ふ。こういふ風のことが好きであつたので、普通の書よりも、いくらか熱心に讀んだ、勿論此等の言葉の万分の一も出來ないけれども、志の上には多少よかつたかも知れぬと思ふ。

損をしたといふのは、あれに書いてあることは支那の政治家の雛形であるから、東洋流の豪傑政治家の事柄が多くて西洋流の政治家のやり方と往々異つたる所がある。其れに拘らず、それを行ひたいといふ心が起るので、西洋流の人物風にならなければならぬのに、東洋流になつて疎大になつて且つ憲法的でなくなる、そういふ氣象になつたのは多少損であつたかと思ふ。然し當時は素よりそんなことは全く氣が附かなかつた。

其後西洋の書を讀むやうになつてから、一切西洋の風を取らなければならぬと思ひ、西洋の政事家の言行を知るに至て、初めて前の宋名臣言行錄にあることを取捨せねばならぬと思ひついた。然しながら政事家にならんとする人にはあの本は支那書の中では最もよい内と思ふ。

夫れから議論のものでは、若い時には東萊博議が好きで頻りに讀んだものである。なぜ東萊博議が好きであつたかといふに、あれは議論の仕方が餘程巧であると感じた。勿論多少酷に流れて居ると思ふ所もあるが、支那の本にしては實に巧妙なる議論の仕方というてよい。後、洋書も讀み、又政談、論説、文章をやる時になつても幾分か東萊博議が便利を與へて呉れた樣に思ふ。其議論はいかにも嚴正で、寸毫と雖も假借する所がない、其代り褒める時も極力之を賞讃して餘さぬ。議論の中庸は得て居らぬが、論法は巧妙であるのみならず、又學び易い文章である。であれは日本の演説とか文章を學ぶ人は是非一度讀んでよい本と思ふ。

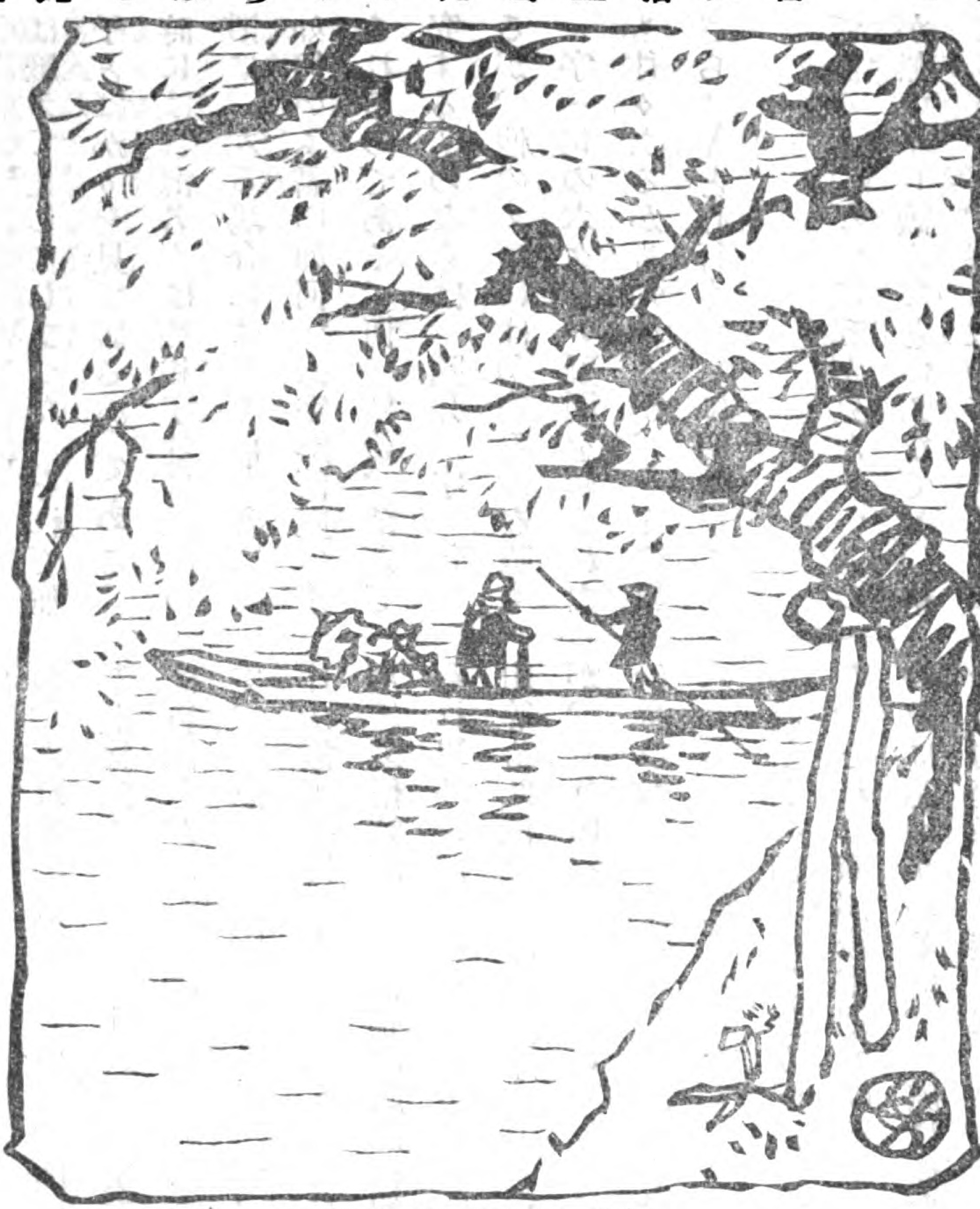
然し其後三十才から以後は、別にどの本が好きといふことがない。和漢洋の本は何でも好きである。私の

癖は近所にある本を手當り次第に讀むのを好むのである。一卷を初めから終まで讀まず。手に從て開かれた所を見る。いはゞ智識の博覽會に行た積りである。或時には日本のもの、或時は支那のもの、或時には西洋のもの、論文あり、雜書あり、歷史あり、政治書あり隨筆あり、一向無秩序である。が是れが即ち自分の一の樂みである。若し一冊の本を研究せんとするも始めから終りまで讀むのは退屈である。何となれば書いてあることの半分は大抵知て居ることとであるのが多い。然し和漢の書はどうも厭きるが、西洋の本は流石に面白くてやめられぬのもある。これは勿論西洋のものは多く涉獵し盡さぬ爲めかも知れぬが、どうも東洋のものよりも面白いやうである。今の青年の人達は勉めて洋書を見るが宜しい。若くても勉めて讀まなければならぬ。和漢の書は慰として讀み、洋書は研究として讀むべしと思ふ。

○　佐々政一

愛讀書と申して格別何も有りません、由來私は日本文學史を大成しやうといふのが今日の志望でありますから、日本文學に關係ある書物は廣く讀んで居りますが、扨て愛讀書といふ事になると、嫌でも讀む、研究的に讀むといふものではいけない、面白い樂しいと思つて朝夕机邊の友として備へて置くものでなければならん、無論近松や西鶴を多くは讀む、がことにそればかりを愛讀すると申す譯にはゆかぬ、先づ昔から絶えず今日まで机邊を離さずに讀んでをるものは、文章軌範ですな、之は文字と文體とを覺えたる爲なのです、それから今一つ孟子ですな、此等は孰れも流暢で、雄大で讀んで居る間に何となく詩吟の高調に誘ひ出さるゝ樣なよい氣持がするので、自然讀むことになりますので、他の書籍を見て倦いたと思つた刹那には、何時も直に此等の書に移るのです、私は元來詩吟などは出來ないのでありますが、以前に謠曲などを少々習つたこともありましたが、之も上達しないので止すことになりました、て自然其方面の趣味を此等の書の朗讀に得ることにも

なつて居るのです、それに小兒の時には漢學塾へ通つて居つたので、何時も輪讀といふことをさせられた、其遣り方は、四書とか五經とかいふ本を、先づ音訓捨假名等を極めて正格に讀むので、若し少しでも違つたら、直に次のものが用捨なく取つて讀むのであるから朗讀といふものはよく〳〵注意してやつたものだ、此等の習慣も慥に殘つて居るのであるらしい、又自分が文字に乏しいところは、何とかして、ヴヲカブラリーを殖す必要があるなど思つて、修辭の書物などを調べて見ますと、西洋の文人なども此ヴヲカブラリーを殖すに色々の苦心談があつて、或るものは字引を暗記する、又或るものは文章を暗誦するといふ樣なことが多い、これから思ひついて、自分も曾て藤井竹外の二十八字詩を見て、是ならば容易（やさ）しくも毎日幾首かを暗記



（春七題其四）

あり。僅少（わづか）でもあるからと思つて、

して、翌朝之を筆記し見ることに定めたが、扨て對照すると常に二字三字の誤謬が出來る、斯ういふ風で暫くはやつたが終には厭きて止してしまつた、それで唯例の文章軌範と孟子とばかりを見て居るのである、人は文字の分らぬ時には言海若くは英和字彙に謀るのであるが、私の習慣は、左る場合には多く前二書に謀るのである、大體如何いふ書の如何いふ字が何處の邊にあるかが察し得られるのである、何、精讀、精讀でもない、自分の研究するものならば、隨分一字一句の意味も委しく調べるが、他のものには勿論そんな暇もないので、若し、一字一句の六ケしい疑問を起されたなら、困るところも往々あるかも知れんが、そんな風の考でなしに、唯さら〳〵と心行くまゝに朗讀して快を取るまでゝす、

竹外の詩品は如何であると、なーに私が見たといふのは、唯難解の文字が無いから讀んだといふまでゝ、格別深い意味があるでもないが、然し彼の詩は才藻を以て優り、敍景を以て越えて居るのですな、子母鶴の詩、成る程讀みました、母鶴欲行還不行、玄裳如染縞衣明我雛能和長鳴否、引首風前詩一聲、といふんでしたね、あれ等は實に美しい日本的の敍景であります、之を其儘三十一文字にすれば優美な歌になりませう、彼は自然を左ながらに寫すといふ靈筆を持つて居つたです、其他、雪白比良山一角とか、曉鴉聲裡無多景、一片朱霞天半横、とか又能く人口に膾炙せらるゝのは、眉雪老僧時輟帚、落花深處説南朝、等、皆畫ですな、それ以外に何等の意味があるではありません、村上佛山等も此流で、平易と才藻とを以て優つて居りますが、もう山陽になりましても大に變つて居りまして、餘程ひねつたものになつて居ります、文字も書の多い六ケしいのが現れて來ます、

小説戯曲の類では矢張り近松とか西鶴に定つて居ますな、それに德川後半期では三馬が好きです、惣じて彼の筆は意地がわるい、其處に面白い處があるので、明治の齋藤緑雨は慥に彼を學んだものであらう、彼の奇警な皮肉な處などは、三馬より來て居るらしく思はれ

ます、馬琴は私は嫌です、馬琴の文には由來オリヂナリチーが欠けて居る、唯流暢であるといふ丈で、道行でも何でも、そこは近松の方が遙によいです、それに有名な彼の八犬傳でも、それは尤も五冊計りづゝ一纏めに、毎年一輯づゝ世に出した事であるから、世間でも大底忘れて居ると思ふからでもあらうが、同じ事柄や趣向や字句が幾所にも反復してあるのです、又、一體馬琴の作には同情がない、無理に自己の筆力や趣向で以て讀者を脅迫して、之でも感ぜぬか驚かぬかと始終責むで居る氣味である、そこへ行くと近松ですな、作中の人物に同情し盡して、自分が自ら其ものとなつて働いて居るから句々皆活きて居ります、西鶴三馬の方は又趣が異つて讀者を始終冷評して居る、此冷評といふ事も亦面白い、西鶴などは冷評すといつても、己れ超然として高處より他を見るといふではなく、被冷評者其中に自己をも入れて居るのであるから面白い、馬琴にはこの趣も勿論ない、惣體馬琴の作は、苟も馬琴を崇拜せぬ人が、自ら高く標置して下瞰するといふ體度で見たならば、實につまらんものとなるでせう。

西鶴の作中では、矢張り「一代男」や「一代女」がよいでせうが、是は誰も知る好色本なので、弊のみ學び易き青年に勸めるといふ譯にはいかぬ、然し之ならずともよいものは更に別な方面にある、それは「俗徒然」「永代藏」「胸算用」等であつて、之は一切男女間の痴態などを離れて、酒の害とか金錢上の事とか他の人事の上に成り立つてをる、而して時代からいへば、此方が近松晩年の作なので、死ぬ前四五年頃のものである、彼の好色本といつた樣なものは氏が初年の作である、尤も初年といつた所で氏の筆を取つたのは甚だ晩いのであるから、何でも四十一、二の頃からで、其前までは唯俳諧にばかり耽つたものです、之は尤も師の梅翁在世中で執筆の上の心遣もあつたらしい、梅翁逝いて後同じ年の十一日に好色本を公にしたのであります、西洋のものですか、そー見ては居りません、それには予の事業といふのが前にも申した通り、日本文學史の大成にあるのですから、又西洋のものを批評するとか、

愛讀するとかいふ事になると、其國語に精通を要する。は元より、時代、風俗、習慣、性格といつた樣なものにも明るくなければいけない事て、中々容易なことてはないが、すると如何しても我々の身邊を尤も遠かつて居るもの程正しく評隲することが六かしくなる、先づ日本のものでも分つたこととて、源氏物語を眞によく味ふといふことは、王朝時代の風俗習慣等十分通曉して居らなければならん、それ等に比較すれば吾々には德川時代のものが尤もやり易いのてあります、世には容易く、やれ、シエークスピアが如何の、ゲーテが如何のと八釜しく言ふけれども、之は一つは時潮に從て上下する、せなければ都合が悪いといふ樣な點から出て居るものもあるでせうが、實際能く分る人がそーたんとあるものでせうか、誠にシエークスピーアやゲーテのアクトの一節を切り取つて、注意して他の作中に混ぜて見たらば如何であらう、近い話が、紅露二家をして苦心して近松、西鶴を似せしめて、窃に其作中に交え置き、さる評家をして區別せしめたならば如何てせう、是が間違なくはつきり此うてあると言ひ切ることの出來る位の人てなければ、他の文章を十分に批評して、私は誰の作を愛讀するなどいふことは出來ないてすな、飲酒家に就ての笑話てあるが、何の酒出してもまづいまづい飲めぬ〳〵と大腕白をやつた先生が、最後に地酒を出されて、是は〳〵と舌鼓打つたといふ樣なこともある、世の評家には此ういふものは無いてせうか、眞に十分に人の文品を軒輊するといふことは、能く考へると容易なものてありません、てあるから外國のものなととなると尚更困難てありませう、實のところ私には、まだチーズの良否はわからないので、人眞似に名高いものをつゝいて見る位のことてあります。冷いビールや、苦い葡萄酒よりも、雪のふる日は日本酒にかぎりますよ、まづ我が愛する所は灘と伊丹なりとしておきませう。



貧民救濟策

『活動之日本』

添　田　壽　一

『記者一日添田氏を訪ひ、質すに貧民問題を以てす、氏は多忙の時を割き大要左の如く語られたり、文責は記者にあり』

(一)貧民の道德を維持すべき方法は、哲理倫理にては高尚に失し勢ひ宗教の感化に俟たざるを得ず。而して其宗派種類の如何は問ふを要せず畢竟彼等をして安心立命を得せしめ、信仰の牢乎として拔くべからざる程度にまで其人格を向上せしむれば足れり。人類に於ける信仰は即ち船舶の錨に譬ふべし。人をして社會の風波に漂白せざらしむる爲めには宗敎の錨に依賴せざるべからず。而して宗旨の異同を問ふが如きは、尙船舶の錨の物質形體を論ずるに似て抑も亦末なり。

(二)生活上に於ける物質的方面は即ち衣食住の問題にして、就中住は人生の最も缺くべからざる要求なり。而して貧民の住居として資本家が營利的に完全なる借家を供給するも可なれど、一歩を進めて其經營を市町村の公共團體に移し、之をして貧民の住宅を建設せしめ、相當の家賃にて賃貸せしむるを以て最上の策とす。其資金は之れを公債募集に仰ぎ其利子辨濟を標準として家賃となさば可ならん。此の方法は敢て民間の事業と競爭するの意味に於てするものにあらず、要は正當の範圍內に於て貧民に住居の幸福を與ふるにあり、斯くの如くせば需要供給の原則に支配さるゝ結果、家主に於ても暴利を貪るを止め衛生的施設を重んじて借主に滿足を與ふるに至るべきなり。況れや是れ國民の生計に關する大問題として、公益上より干涉し得べき性質のものなるに於てをや。

次に食物に至りては、下層社會は日常高價粗惡の物品を購ひつゝあり畢竟我が國に於ける市場組織の不備に基づくものにして、現存の魚河岸の如き全く中間魚商の集合所たるに過ぎず、故に各人は常に其購入品に對して仲買人及び小賣商の利益を加算したる高價を支拂ひつゝあり、且つ粗惡なる物品を以て滿足せざるを得ず。然るに西洋に在りては各市數多の市場を設け直接賣買の組織となせるが故に、一家の臺所は朝夕新鮮にして且つ安價なる良品を以て充足せらる。是れ實に則るべき經濟組織にして、宜しく市場開設を促し進ては地方團體にて之を公設し時間と金錢の浪費を省略し、一般特に勞働者に直接購入の便を得しむべきなり斯くの如くして彼等が團欒の夕餐に新鮮の食を上ぼし、彼等が乏しき財嚢に剩餘を殘し得ん。其他消費組合を設けて需要品の分配策を案んずる

が如き最も緊要の事に屬す。

以上陳述せる方法は推して之を衣服問題にも及してなり。

人類の幸福は有形のみにては盡きず、無形上亦巧究するを要す。無形の幸福を增進するには、現在の寄席劇場を改良するが如き、焦眉の急なりと謂つべし。

此等亦公共の費用を以てするを妨げず。斯くして高尚優美なる娛樂を衞生的に且つ安價に得せしめ、其荒びたる心園に一枝の紅を點ぜしめなば、之より生ずる利益は測知すべからず、又西洋に於て實行されつゝある「エキスカーション、ツレイン」即ち鐵道會社に於て勞働者の一般休日を期し、其賃銀を減じて彼等を目的地に運び、其處に健全にして且廉價なる一日の愉快を完くせしむるが如き、蓋し則るべきの良策なりと信ず、其他公共の費用を以て夜學校を建て圖書館を設くるが如き皆是れ彼等の品位を高め、之を善導する所以の方法たらざるはなし。

彼の貯蓄銀行、郵便貯蓄、貯蓄債券、の制度の如き今少しく簡易にし、之を普及せしめて零碎なる資金の蒐集に勉めなば意想外の効果を得べし所謂宵越しの金を持たざるを以て誇るが如きは抑も亦彼等が窮況に陷るの一大原因たらずんばあらず。

(三)貧民人口の增加は豫防せざるべからず、然りと雖も之を人工的に抑制すると云ふが如きは陳腐の論のみ。要は如何にして貧民の德義心を向上し得るか、如何にして其生計を完全ならしむるかにあり。換言すれば增加する人口を健全ならしむることを得べきやにあり。即ち前述の二問題に關連するや明瞭なり。生計裕かに品位良好ならば人口の增加は憂ふに足らず。若し之に反すれば其弊害や恐るべし。彼等の品位向上せば勞働に堪へざる不生産者の出生も減少すべし、思慮なき早婚等の通弊をも匡正し得べし。斯くの如くにして幸に善良且つ健全なる勞働者の增加するあらんか、啻に各人の幸福に止まらず、實に國家其ものゝ繁榮にして、多々益々可ならんのみ。不幸若し然らずして窮民貧民不具者虛弱者の增加を來さんか、國家は生産率を減じて徒らに消費額を增加し社會は厄介物の處理に苦しみ公衆の負擔を大ならしむるは勿論、實に國家の基礎を危ふくせんも知るべからず。貧民無職業者の問題は現今日本の如き經濟組織の未だ單純なる國に於てこそ其弊未だ大ならざれ。歐米の如き複雜なる社會に於ては實に刻下の緊急問題として政治家慈善家擧て其頭腦を惱ましつゝあるも未だ容易に解決を見る能はざるなり。其弊未だ激甚ならざるに先ち豫め此を巧究し以て之を豫防し之が解決するの策を樹立する豈亦最大急務ならずや。

無我と宗教

〔宗教界〕

齋藤唯信

釋尊の說き給ひし敎は、千差萬別なるが故に、容易に一概すること能はれ[illegible]も、其道德的精神に在りては無我なりと謂ふことを得べし。何となれば、無我は消極的に其名を得たる故、人或は活潑の精神無く放恣の

氣象に乏しきに名けたるが如く思ふものあらんも、若し積極的に其名を與ふれは、慈悲又は博愛の精神にして此精神は宇宙の眞理と相順するものなれはなり。何を以て之を謂ふか、先つ其所以を說明して以て宗教との關係に論及せん。

惟ふに此一大宇宙には生滅變化するものと、生滅變化せさるものとあり其生滅變化するものは現象界にして、生滅變化せさるものは實在界なり。而して其生滅變化する現象界の實相は如何、萬物各其依りて來る原因異なるか故に、其結果としての現はれ來るもの亦千差萬別なるべきは勿論なり。然れとも其差別せる萬物は其間に密接の關係ありて、互に相資助しつゝあることは恰も網の目の互に相依り相資くるか如く、萬物一として孤立獨存することなし(中略)既に宇宙の現象界は無限に相關せり、此相關は即ち是れ現象界の實相なれば、吾人は如何なる心に住して世に處すべきや、唯だ己れ有ることを知りて他を顧みざる利己的精神のみならは、此萬象關係の實相に相順すと云ふべらず、苟も此眞相に相順せんとせば、博愛慈仁の無我の精神に住せざるべからざるなり。

更に生滅變化せざる宇宙の實體に就て觀察せんか、現象界の事物は啻に相關するのみならず、其體同一なりと云ふことを得(中略)宇宙の現象界は千差萬別なれども、其千差萬別の裏面には平等の本體ありて、少しも異なること無し、之を眞法一如と云ふ。世界萬物其體一と云ふは、古今學者の齊しく認むる所、果して然らば、吾等は如何なる心を以て世に處すべきか、唯だ己れあるを知りて他を顧みざる利己的精神は、亦此萬物一體の眞理に相順すと云ふべからず、他人も禽獸も世界の總てが吾と同體無差別なる故、吾は博愛慈仁の心を發し以て彼等に接せざるべからざるなり。

此の如く宇宙の現象界は千差萬別すと雖も、而も互に密接の關係を有し、加之其體是れ一なるが故に、吾等は飽迄唯其己れあるを知りて他を顧みざる利己的精神を撲滅し、以て慈悲博愛の無我の精神を喚發せさるへからす。是れ佛教道德の精神は無我にして、此無我は宇宙の眞理に相順すと云ふ所以なり。

果して然らは、吾等は如何にして其無我の精神に住すへきや。有我は無我の正反對なれは、無我の精神に住せんとするものは努めて有我の心を撲滅せさるへからす。然るに其有我に種々の別ありて、分別の我あり、俱生の我あり、分別の我は意識的分別より起り來る我にして、俱生の我は吾人睡眠不覺の間と雖ども常に起りつゝある我なり。此中、分別の我は比較的撲滅し易けれとも、俱生の我に至りては容易のことにあらす。小乘教徒が五停心觀、別相念處、總相念處、煖、頂、忍、世第一法の修行をなし、而して後始めて撲滅し得るは分別の我なり。更に進んて預流一來、不還の三果を經、最後阿羅漢果に至り始て斷滅するの俱生の我なり。之を大乘菩薩の修行に見るに、通常菩薩の實踐修行の階級に五十一ある中、初の十信、十住、十行、十廻向の四十階級を經て而して後始めて撲滅するは分別起の我にして、更に漸次に修行して第四十八の階級即ち十地の第八地に至り始て斷するが俱生起の我なり。此第八地に至り俱

生起の我を斷すと云ふも、其由りて起る根本元子なるものは未た斷てるに非す、之を正しく斷滅するは唯た第五十一段の佛陀の位なりとす。果して然れば吾人有我を撲滅して無我の眞域に到達すること甚た困難なりと謂ふへし。

其れ既に困難なり、困難なりと雖も吾人迷界に沈淪し悟りの域に到達すること能はさるは、畢竟其有我の存在に基することなれは、吾人努めて其有我の精神を撲滅する方法を講せさるへからす。是れ即ち宗教否佛教起り來る所以にして彼の自力教といひ、他力教と云ふは、畢竟此有我を撲滅せんか爲めに外ならす即ち自力教にありては、其有我を斷滅するに就て他の力を借らす、自己の奮勵自策を以て撲滅せんと期し、他力教にありては其我の到底自己の力を以て撲滅すること能はさるを以て、佛陀の力に歸し、其佛陀の力によりて以て利己的精神を根本的に撲滅せんとするなり。無我の道理を聞て其を識知することは至りて易けれとも、其を吾身に實現することは甚た困難なり。然るに若し無我の道理を識知せるを以て、直に吾身に無我を證得せんか如く思ふ者あらば、是れ所謂天台の已己均佛の見にして、一の増上慢に外ならす。苟も修道に志すものは、其無我を吾身に實現せん爲めには、自力教に依るか、他力教に依るか更に實踐修行の宗教の關門に向て進まさるへからさるなり。之を要するに、無我は道德的一大精神にして佛教の諸宗之に依りて起き、亦佛教諸宗の最終目的とも云ふへきなり。

萬葉集にあらはれたる色彩の觀念

鴻巣盛廣

『日本美術』

萬葉全體を通じて色彩に關する語句を抽出分類すれば、白(四十一種)天然色(三十一種)白濱、白雲、白髮、白鬚、白雪、白露、銀、白眞砂白菅、白杜(かし)、白鳥、白鷺、ましらぶの鷹、川遠白し、白妙の羽、白つゝじ、椿の花、百合の花、李の花、いちしの花、蓮の花、尾花、卯の花、花橘、蕣の花、茅花、薺花、梅の花、橙の花、藻の花、人工色(十種)(天然色を用ひて造れる色彩ある物品、並に顏料をも算入す)白栲の衣、(袖、麻衣、襷)白麻衣、白玉、白酒、白眞弓、白塗の鈴、白木綿花、黑(九種)天然色(五種)かぐろき髮、大黑、黑駒、黑木、黑牛、人工色(四種)烏玉、黑沓、黑酒、橡(染料)赤(四十八種)天然色(三十六種)丹、赤根、あかとき、赤駒、あかし、あから引く日、あから引く敷妙の子、あから引く膚、丹のほのおもわ、明星、紅葉、丹なす子等、さにつらふ君、さにつらふ妹、さにつらふ漢女、あから橘、あかる橘、あから柏、紅花、丹つゝじ、瞿麥の花、馬醉木の花、姫百合の花、棟の花(?)椿の花、桃の花、燕子花、末摘花、萱の花、蓮の花、葵の花、うけらが花、唐棣花、韓藍の花、櫻の花、槿の花、合歡木の花、人工色(十一種)丹土、まそほ、黄土粉、(以上顏料、但紅花 橡、桃花、唐棣花等も染料に供せらる)赤裳、あから小舟

あけのそほ舟、さにづらふ紐、さに塗の小舟、さ丹塗の大橋、赤ぎぬ、桃花染のあさらの衣。無形物の色（一種）赤き心、青（十七種）天然色（十五種）あを、まあを、ひたをの駒、青雲、青柳、青淵、青浪、青海原、青馬、青駒、青菅山、青山、青垣、青れが峯、青菜山、人工色（二種）青き衣蓋、青旗、紫（十一種）天然色（七種）藻の花、薢の花、菫の花、葛花、藤袴、樗の花、萩の花、人工の色（四種）紫草（顔料）紫の大綾衣、紫の下紐、紫に染めてしかつら、黄（五種）天然色（四種）黄金、山吹の花、女郎花、松の花、人工色（一種）黄染のやかた、縹（三種）天然色、月草の花、紫陽花、人工色水縹のたへの帯、（但し、橡、月草は顔料として用ひらる）緑（二種）天然色、浅緑、（柳）緑子、藍（？）（一種）天然色、山藍もてすれる衣、となる。

以上を以て見れば色彩の名稱は白、黒、赤、（紅、丹、）青、紫、縹、黄、緑、藍（？）の九種に止まり、其使用度數の順序は、赤、白、青、紫、黒、黄、縹、緑、藍となる、此度數は即、我國民の奈良朝に於ける色彩の觀念を數字的に表示せるものにして、赤と白とが最多く用ひられ、青、紫、黒、黄之につぎ縹以下の色彩に就ては比較的輕視せられたるを知らむ。

赤、赤は最興奮性を有する色にして未開の人種最之を好み、又、小兒が此色彩を愛するは皆人の知る所なり。我奈良朝國民の此色に向て多大の注意を拂ひしは素より故なきにあらず。而して其現象は單に數字的にあらはれたるのみらず、後世に於ては色白きを以て美人なりとするに反し、此集に出てたる美人の形容を見れば、「丹なす子等」「さ丹つらふ君」「あから引く膚」「吾が戀ふるにのほのおもわ」等の如き、或は馬酔木、燕子花、權花等を美人に譬へたる如き、皆赤に就て大なる嗜好を有せる例證たるべきなり。又、熱をあらはす色として、「かくさはぬ赤き心」と言へるは進歩せる觀念といふべし。要するに、赤は公明、可愛、熱誠をあらはす色として愛せられたるものといふべし。

次に白は其種類數に於て、殆、赤と伯仲の間にあり。蓋、此色の純潔無垢なるは、清潔を尊ぶ國民性に合致せるものにして、今日猶、祭祀に此色を用ふるを見ても、白色を重ぜる古代の有樣を想像するに難からず。

白に次ぐものを青となす。但し此色は、緑、碧、青、等を含有せる名稱なるものゝ如く、青雲、青柳、青淵、等何等の區別なくして使用せられたり、蓋し青なる色は、其宇宙間に存在する分量に於て、遙に他色に超越し、又其性質より言ふも快感を惹起するものにして、之が萬葉詩人によりて比較的多く歌はれたるは素より當然のことに屬す。然れども此色は其調子、光澤の強きにすぐる時は人をして悽愴の感を起さしむるものにして、卷十六なる怕物歌に

人魂のさをなる君がたゞひとりあへりし雨夜久しくおもほゆ

といへるもの、即此情感をあらはせるものと云ふべし。

紫も亦、比較的重要視せられたる色にして衣服の色としては服制の第一に位し、又、美人の形容に「紫ににほへる妹」といへるは之を證するものといふべし。

黄は、「黄染のやかた」以外に人造物に使用せられたる例を見ざるも、

山吹、女郎花、の愛玩せられたるを見れば、亦、比較的愛せられたる色と見るを得べきか。

緑は月草の花より製せる色が、衣服には屢用ひられたる色にして、うつろひ易きものてふ觀念は集中至る所にあらはれたり。

黒は元來幽鬱の色なり。從て快濶なる國民、殊に奈良朝の如き華美綺麗即ハデを尊びシミの美を味ふの念なかりし時代に於て、此色彩を寧輕侮せるが如き形跡あるは蓋當然のことにして、橡の衣は此時代に於て墨色と稱して賤民の服色たりき（平安朝に入りては橡の色は四位以上の服色となれり。）又斧鉞を加へざる材木を稱して黒木といへる如きも、此色に對する觀念の一端をあらはせるものといふべきか。但し、此色彩の光澤を含めるは必しも幽陰の感を惹起さず、却て「烏玉のかぐろき髪」は美髪賞讃の辭たりしなり。

緑に關しては唯、緑子、淺緑、の二例あるのみ、淺緑は

淺緑染めかけたりと見るまでに春の柳は萌えにけるかも（八卷）

といへる一首に見えたるのみにして他に類例を見ず。緑子は色其物の觀念よりも、寧「瑞々しき」の意味にあらずやと思はる。然らば、集中を通じて緑の色をあらはせるは、單に淺緑の歌一首のみといふべし。而して當時の官制を見れば、緑は服色のうちに、六位、七位の定色として規定せられたり（大寶令）。是を以て見れば、此色に關する觀念は、青と混同せられ、或は其うちに沒了せられて、一般に用ひられたるものにもせよ、亦、特種の色彩をあらはす名として用ひられたるものゝ如し、こは明治の今日に於て、猶、言ひ得べき處にあらずや。

藍の色は其有無を明らかにせず。只、「山藍」てふ色彩の不明なるを以て暫らく茲に類を分てるのみ。

又染色の材料に就て一言すれば、多くは天然物を其儘用ひたるものゝ如く、化學的作用によりて製造せる顔料の如きは一も見えず、但、法隆寺所藏玉虫厨子に用ひたる密陀僧の如きは、酸化鉛なりと言へば、素より人造化合物の存在を否定すべからずと雖、是等種類の鮮少なりし爲、歌にあらはれざりしものか。今其材料をあぐれば

植物性……紅花、末摘花、桃花、橡子花、鴨頭草、水葱、榛、燕子花、山藍、紫草、橡、土針、萵苣、

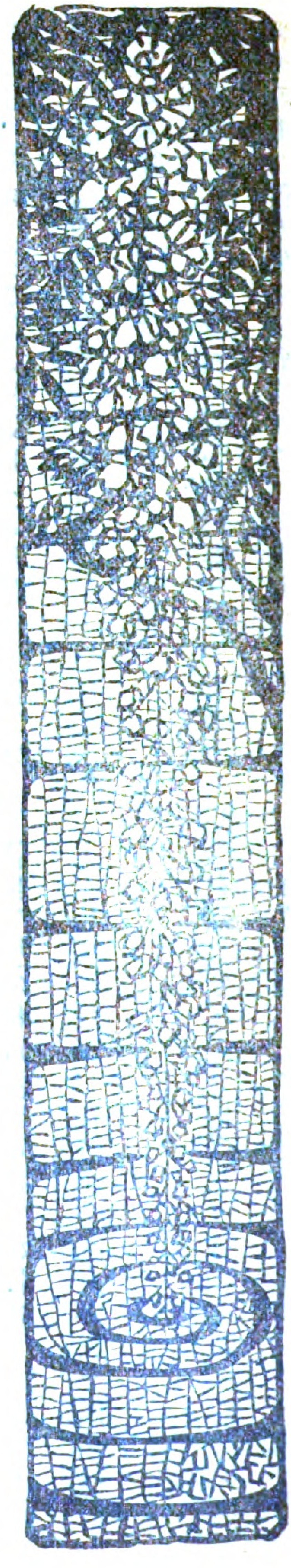
鑛物性……丹土、まそほ、黄土粉、

等なり、而して佛像、船等を塗るに用ひたるらしきまそほの外は皆衣帛の染料としてあらはれたり、色彩の觀念と共に吾人の連想するは繪畫に就てなり。繪畫の存在は、歴史が之を語るのみならず、法隆寺金堂の壁畫、藥師寺所藏吉祥天女の畫像の如き、其技術の如何に進歩したりしかを示すものなるが、萬葉中には

わが妻も繪にかき取らむ暇もが旅行くわれは見つゝしぬばむ

といへるもの卷廿に出てたるのみ。然ども其の歌の意味よりして、又其作者が東國の兇男たる防人の一人なることを思はゞ、既に此の技術が國民一般に廣まり、しかも彼等社會に於て、肖像を畫き得る迄に進歩せることを知ることを得む、然れども、其彩濡たるか、愚拙なるかを知る能はざるは遺憾なりとす。

文藝欄



二人畫工

（シエンキーウヰツ作）

魯庵生譯

第一回

アンテックと我輩とが共用に借受けた畫室の家賃は、一向拂はなかつた。一つには二人の世帯の資本が唯つた五ルーブルばかしてあるのと、二つには又元來家賃を拂うのが心から癪に觸つたからである。怪しからぬ咄て、我々の事を破落戸畫工だと云つてゐる。夫だもの、我輩の身になると家賃なんぞを拂うよりか飲んで了つた方が勝しである。

尤も家主は惡い奴といふでは無いが、何しろ二人て防禦策を講じた。

例の通り家主の阿爺が朝ッぱらから催促にやつて來ると、板の間へ直接敷きにした藁蒲團に轉がつて肖像の後ろ幕に使用う土耳古幕をスッポリ被つてゐたアンテックはむくと起直りつ、お葬ひ聲て、

「ヤア、御無事でお目出度かつた。實は昨宵、貴公が死んだ夢を見た。」

御幣擔ぎで死の字の大嫌ひな家主は喫驚すまい事か、ヘドモドして了つた。

アンテックは藁蒲團に仰向けになつて、兩手を胸に組合はしつ、足を蹈ん伸ばしながら、

『貴公、這般な鹽梅だつた。細ッこい長い指に白い手袋を穿めて、足には專賣の靴を穿めてゐた。其外は格別正の物と異らなかたッけ。』

其尾に踵いて我輩は直ぐ云つた。『這般な夢は善く的中るものだよ。』

家主の阿爺は眞蒼になつて弱り込んだが、果句は腹を立つてプン／＼怒り散らして、手暴くガタピシ戸を開けて、鶴龜々々と云ひながら逃出して了つた。

が、根は善人だから持餘しながらも執達吏を遣し得なかつた。と云つて外に詮術もなかつたが、縱令また店立を喰はして外の書工に貸した處で餘り芳ばしくなからうし、事に由つたら最つと非道い奴が來るかも知れないと覺悟めてゐた。

勿論、我々の惡辣手段も段々とお手柔かになつたし、家主の方も嫌がらせに馴れて來た。其頃アンテックは『死』、『埋葬』、『蘇生』の三書題でウュルッ風の作を工風してゐたが、自づから家主が此三書題の何れもの人物となるわけだ。

元來アンテックは緣起の惡い書が得意で、大中小の死骸を描き分けると自慢してる。之だからアンテックの書は買人が無い筈である。勿論書題は左に右く、立派な伎倆があるのだ。

アンテックも我輩も巴黎のサロンに出品した。アンテックのは『二つの死骸』といふので、我輩のは『ウキスラの猶太人』といふのだが、サロンの目錄では『巴比倫の猶太人』と改名されてゐた。二人ながら審査の結果に待焦れてゐたのだ。

尤もアンテックは所詮碌な事はあるまいと高を括つてゐた。審査員なんて奴は愚物の寄合だし、縱令審査員が愚物でなくとも、斯くいふ我輩が愚物である、アンテックが愚物である、我々の描いた畫は愚を極めてる、之が賞に預かるなんぞは實に愚の素頂邊であらう。

アンテックと一つ畫室に暮した此二年といふもの、如何程馬鹿な所爲をしたか、お話にならぬ。

アンテックの一生の希望は身自からが死骸の看板に成濟まして嫌はれ拔かうといふのである。仲間では飮酒家を任じてるが。實は任じるほどの酒量は無いので、小さな杯に二三杯もウオツカを飮つて、人が見てるかゐないかを看定めて、見てゐさうもないと思ふと、必ず其中の一人を肱で突いて、顏を顰めながら沈んだ聲で、

『善くも墮落したもんだ。こんな所爲が善く出來たもんだ?』と云ふ。そこで多勢が馬鹿だと云ふと、夢中になつて怒る。何が一番アンテツクを怒らせると云つて、アンテックの墮落を認めてやらないほど不機嫌な事は無い。が、其實、骨の髓までも正直者なのだ。

一度なんか、二人してツエル・アム・ジーの傍でザルツカンメルグートの山に迷ひ込んだ事がある。日が暮れて了つて步行が非常に難儀になつたので進退谷まつた。

『オイ君、』とアンテックは聲を掛けた。『君は俺より伎倆があるから、俺より生命が大切だ。宜いかネ、俺が先へ行くから蹤から隨いて來い。俺が落ちたら君は朝まで凝乎と動かずにゐるんだ。』

『君が先へ行く事は無い。我輩が行く。我輩の方が足元が善く見える。』

『俺の方は、所詮今夜死なゝければ何時か一度はお堀でお陀佛だ——何方の道同なじ事サ。』

こんな爭ひをしてる間に、益々眞暗になつて穴藏よりも暗くなつた。ドヾの結局が諸共に危險を冒さうと決して、用心しい〳〵出掛けた。

初めは道幅が廣かつたが、段々と狹くなつて、夜目に見ゆる限りは左右は深い淵て、多分底知れずかも知れない。

岨路は愈々狹く、搗てゝ加へて足元の石がごろ〳〵轉がり落ちて危なッかしい事此上も無い。

『俺は四つン這ひに這つて行くぞ。迚も最う協はん、』とアンテックは云つた。

實際最う足元が危なッかしくて仕方が無いので、二人共に猿のやうと這出した。

其中に這う事さへ危なッかしくなつた。岨道は愈々狹くなつて馬の背のやうになつたので、アンテックは馬乘に跨つて了ひ、我輩は其背後から目白押しに押して、二人ともに衣服を散三にするのを忘れて恐かな怯くりに這つて行つた。

するとアンテックは忽ち聲を掛けた。

『ウラデック？』

『何だ？』

『先が無くなつた。』

『えッ、行止りか？』

『行止りぢやア無い。先が無いのだ。崖の頂點に違ひない。』

『石を拾つて投げて見い。中る音を聞かう。』

眞暗の中だから眼には見えぬが、アンテックは岩の破片を拾ふやうな容子で、

『投げるぞ。能く聞いてゐろ！』

我輩は一心に兩耳を引立てた。

が、シーンとしてゐた。

『聞えたかナ？』

『いゝや。』

『大變な處へ登つたもんだ。必と何百尋といふ淵の上に違ひない。』

『最う一度投げて見い。』

アンテックは大きな石を拾つて投げた。

が、何の音もしない。

『コリヤ、如何いふわけだ。底知れずか、如何した事ッた、』とアンテックは云つた。

「最う仕様がない。夜の明けるまで座踞まひとするだ。」

と云つて二人ながら觀念して了つた。アンテックは更に二度まで石を投げて見たが、何の音もしない。

其中一時間經つ、二時間經つ。アンテックは復た聲を掛けた。

「ウラデック、睡ちや不可んぞ――紙莨を持つてるか？」

紙莨は持つてゐたが、燐寸を使用ひ切つて了つた。心細い事限りも無い。時刻は朝の一時ごろだらうか、夫とも猶だ夫ほどに更けぬだらうか。小雨がシト〳〵降り初して、黑白も分かぬ闇は愈々黑くなつた。市中や村に暮してるものは恐らく眞にシーンとする味を知つだものはあるまい。今夜此境の寂寞が眞實のシーンとしたので、シーンといふ音が耳の底に鳴つてゐる。自分の身體の血の環つてる音や心臟の鼓動が手に取るやうに聞える。初めは多少好奇心も手傳つて、此の如きシーンとした眞の闇の眞夜中に馬の脊の如き崖の頂點に跨つて幾百尋とも分らぬ底知れずの深潭に臨んでるは市中の俗物どもが夢にも理解せざる興味だと思つてゐたが、其中段々寒くなつて、何事をも仰山に捻くるのが好きなアンテックは徐々理窟を揑ね初めた。

「人生とは何だ？ 人生とは汚ないものだ。美術々々と云ふが、美術が如何した。美術とは自然を猿眞似したもんで下らんもんだ。俺は二度サロンを見物したが、畫工輩が善くも出品するワ出品するワ、あれだけのカンバスがあれば世界中に漂泊いてる猶太人に蒲團を拵へてやる事が出來るだらう。其畫といふ奴が何れも鼻持ならんもので、巧く俗物商人の氣に入つて、買つて貰はう、饑腹を肥さうとばかり

悶いてる。眞に混沌たるものだ。這般なものが美術だと云ふなら、寧そ卒中で死んで了つた方が可い。幸ひなる哉。此地球上には眞の美術といふものが無くて、唯自然あるのみだが、自然といふものからして元來汚ないものだ。であるから、一番の上策は爰から千仞の谷に身を投げて了うので、すれば萬事忽ち休して了う。酒を飮んでたなら俺は必と行つて見せるのだが、生憎とウォッカを持つておらぬ。俺の主義で、覺醒では決して死なぬと定めておるのだ。』

アンテックの空言には度々聞慣れてる我輩であるが、此の如き寂寞たる無人の地に、鼻を把まれても分らぬ眞の闇夜に、馬の脊の如き岩鼻に跨つて、シカモ下は何百尋何千仞あるか分らぬ底知れずの深潭に臨んでるかと思ふと、這般な癡言が心細くて堪らぬのだ。

幸ひとアンテックは饒舌り切つて止めて了つた。て、復た石を拾つて二度まで投げた。て、二度ながら『音がしない、』と繰返した。

夫から彼是れ三時間は二人とも無言になつた。すると軈て、徐々夜明間近になつたやうな氣がした時、偶つと物の氣合がして羽叩きの音が聞えた。

猶だ〳〵暗くて何にも見えず、一向正體が分らなかつたが、正しく鷲が此岩の上に輪を作つて舞下つて來るのは疑ひもなく、『から！から！』と力のある鳴聲が聞えたから、我輩は愕然として了ひ、今にも鷲の群が襲つて來やしまいかと慄然とした。が、能うこそあれ、如何ならうと儘よ、渠等の來るは夜の明ける告知である。

暫らくして岩角に握まつてる我輩の手が見えて來た。アンテックの肩が薄朦朧と分つて來た。周圍の眞黒なものが漸次に剝げて、一分毎に愈々淡くなつた。すると忽ち天の一角から鮮かな銀色の光線が流れて岩角からアンテックの肩へ射し、暫時にして此光線は忽ち四方に漲つて、丁度何者かゞ此黑夜に銀液を流し、液は次第に混和して黑から灰色、灰色から眞珠色に變化するやうな黯梅式だ。且又一種肅殺たる氣と冷然たる濕り氣を帶びてゐたが、啻に崖ばかりでなく、空氣が濕つてゐた。

一刹那毎に光線が增して來た。我輩は惘然としつゝ四方を見廻し。打變りたる景色に看惚れてると、アンテックは忽ち玉消る聲を擧げ、

『ちよッ、馬鹿ッ！』

と云ふかと思ふと、アンテックの肩が見えなくなつたから、

『アンテック、』と我輩は喫驚して、『やッ、何をする？』

『やい、騷ぐ勿！能ッく見ろ！』

と云はれて、我輩は首を伸ばして見ると、斯は如何に、下は平々とした平地て、我輩が跨がつてる岩の脊は僅に數尺の高さである。平地は一面に苔蒸してるから、石を投げても音のしない筈て、遙か彼方には道が見えて、鴉が何羽となく群がつてる。我輩が鷲だと思つたのは實は此鴉なのだ。山の奥の突兀たる巖石の上かと思ひの外、家へ歸るには唯つた五尺高い岩から下りさへすれば宜いのだ。

何の事は無い。最少し伸ばせば足の屆きさうな岩の上に四つン這ひになつたり蹈跨がつたりして齒の

根をがたつかせながら恐ろしい一夜を過したのだ。

今から數へると丁度一年半になるが、如何いふわけだかアンテックと二人して家主の催促を待構へてる最中、偶つと憶出して笑止しくて堪らず、思はずアンテックに向つて、

『記臆えてるかネ、那の時の事を。恐ろしい深い溪合の崖の上にしがみ付いてると思つてたら、直ぐ下が平地ぢやないか。今だつて此時と同じサ。斯うして無住寺の鼠然と小さくなつて、家主は追立てやうとしてゐると、何時運が向いて來るか知れたもんぢやアない。金や名譽の門が我々の爲に開いてるかも知れない。』

アンテックは其時藁蒲團の上に座つて靴を穿いてゐたが、人生てものは朝、靴を穿いて夜る靴を脱くものだ、人間は誰も首を縊る勇氣を持つてるが、若し彼れアンテックが何故今だに首を縊らないかと云つたら、圖抜けな大馬鹿てある上に意氣地が無いからだと理窟を捻くつてゐた。

我輩が暢氣な事を云出したので、理窟を止めて魚のやうな眼を釣上げ

『相變らずノホヽンだナ。また何か恐悅でもあるかネ。ツイ先日シユスローウスキイの阿爺に追出されて娘の仲まで割かれた癖に。まご〳〵すると今日あたりは家主の凸凹に追出されるかも知れねヱぜ。』

アンテックの話は虚誕ぢやア無い。情ないが事實である。實は三日前まてはシユスローウスキイの娘のカーヂヤと約婚の交てあつたが、左樣サ、火曜日の朝、突然カーヂヤの父親から次の手紙を遣した。

『拜啓。甚だ唐突ながら申入れ候。娘カーヂヤ事貴殿と御約束仕候處、右は本人の爲め將來不幸なり

と拙者共兩親の意見に從ひ、此度破談致し度旨申出で候ま丶左樣御承知相成度候。是れ畢竟貴殿が一家を經營する御資力の未だ足らざるを認め候故なれども一つには事每に蔽ひ秘し得ざる貴殿が輕薄の御性質萬事に看え透き候へば娘初め拙者共兩親も到底將來の見込なきものと見極めたる次第に候。草々頓首――シユスローウスキー。』

斯ういふ文句であつた。此中には吾輩自身が首肯くべき理由もある。例へば我輩が資力の足らざるは云ふまでもなく、今の位置では犬の靴さへ買ふ事は出來んのだ。だが、老猾の狒々猿めが我輩の性質まてを彼是れ云ふとは理由が解らぬ。何の洒落臭い、潛越極まつた咄だ。

カーチヤの頭の形狀は執政官時代の形を憶出させた。若し今風でなく其時代振に髮を結つたなら夫こそ何樣なに美しくなるか分らぬ。我輩は是非結つて見せて吳れと何度も賴んだが。カーチヤは全から其樣な氣が無いから駄目であつた。だが、カーチヤの面にはフアーチユニ(西班牙の畫工)の畫のやうな溫か味があつた。

我輩がカーチヤに戀したのは唯だ是れだけであつたが、父親から破談の手紙を請取つた時は丁度毒を呑まされたやうな氣がした。併し二日目になると稍や沈着いて斷念が付き、『出來んもんなら出來んのだ、』と定めて了つた。如何して斯う早く斷念められたかと云ふと、我輩の頭はサロンへ出品した『猶太人』の畫ばかりを心配してゐたからである。

アンチツクは此畫を輕蔑して必ずサロンから謝絕を喰ふ代物だと云つてゐたが、我輩は自から傑作と

信じてゐた。一年前から着手した作で、由來を話すと斯うである。或る夕方の事だ。唯つた一人でウヰスラの河畔を散歩してゐると、林檎が一と籠川へ流れて來るのを往來の亞刺比亞人が拾ひ取らうとしてゐる。岸には猶太人が全家見物に出て、手に汗を握つて一心に目瞬きもせず、雕像のやうに堅くなつて無言で川を凝視めてゐた。老爺株の慘澹らしい爺さんが在る。婆さんが在る。昔じのマツカビユース然たる筋骨逞しい若者も在る。雀斑だらけだが鼻から口元へ掛けて輪廓の上出來な若い女も在る。其外に小さい兒供が二人在た。

一面に黄昏の夕靄を罩めて、川はブロンヅ色に反射して神々しく物寂び、ザクセン島の森は蔚然と淡く、島を越えて見る限りは瀰漫たる水が汪洋と流れて紫から群靑、群靑から鐵色、夫から復た紫色、藤色と、種々な色を籠めた一道の空氣が流れて、陰慘の氣は全幅を蔽ひ、天地悉く是れ蕭殺凄殺森然閑然の極みを盡して、何の理由もなく涙が一杯に迫り來る。其中に猶太人の一群は畫室のモデルのやうに凝然としてゐる。

此瞬間、我輩の頭裡には油然として詩情を生じ、囁やいて云ふ、是れ我輩の畫なりと。

我輩は造次顚沛、如何なる時でも顏料鞄を離さないから、直ぐ其場所でスケッチを取らうとして猶太人に向ひ、

「オイ、動いちや不可んよ。一人前が一ルーブル宛だよ。」

猶太人は平氣で一方を凝視め、大地に根が生へたやうに凝然としてゐたので、我輩は思ふさまにスケ

ツチを取つた。すると恰も林檎を拾ひに川へ入つた亞剌比亞人は這上つて、我輩の背後から大きな聲で、

「ヤア畫工だ！　畫工だ！　盜賊をしながら發見け出したといふ顏をする奴だ。」

吾輩は渠等の無駄口を好い加減に應接つて、首尾よく側へつけたので、渠等も溫和しく居踞まつて仕事の邪魔をしまいと猶太人に惡戲さへしなかつた。其お庇に猶太人も思ひの外素直に描かして呉れたので、

「眞實にお氣の毒だナ、」と云ふと、婆さんの猶太人は、

「何のお前樣、氣の毒がる事は有りましねエ。一人前一ルーブル宛お貰ひ申すだもの。儲からねエ奴には口惜しがらして置くサ。」

我輩は動けば金を拂はないと脅かしつけた。夫から此處で二日間夕方續けて、其後は二ケ月間我輩の畫室に來て貰つた。

アンチツクには勝手な惡語を云はして置かう。我輩は飽くまでも傑作と信じてゐた。何故なら此畫には何處となく溫味があつて微塵も索漠たる氣味が無い。其上に自然其儘で少しも僞りが無い。若い女の雀斑さへ有の儘に描いて了つた。之より奇麗に描く事が出來やうとも、之より以上異物に肖せる事は迚も出來ない。

我輩は此畫にばかり屈托してゐたから、カートヂヤとの緣組が破談になつても一向驚かず、今も今、アンチツクの口からカーチヤの名を聞いてもズツト昔しの大昔しの話を聞くやうな氣がした。

其中にアンテックは片方の靴を穿き、我輩はサモワール(湯沸しの類)を湧かした。處へアントーニヤの婆さんが菓子を持つて來た。アンテックは一年も前から此婆さんに首を縊つて了へと、無効骨折の餘計な世話を燒いてゐた。

二人は相對ひて茶を飲んでると、アンテックは我輩の顔を見て、

『少と浮れてるナ、何が嬉しくて笑爾々々してる？』と復たお定まりの皮肉を云つた。

『我輩かネ、非常な大吉報が必ず今日來るのを知つてるからだ。』

といふ途端に書室の外に人の氣合がした。

『そら、家主の老爺だ。君の所謂大吉報が來た哩。』

とアンテックは云ひつゝ、ガブと熱湯を呑み、思はず涙を覆しながら飛上つて、奥の書室に逃込み、

『頼むよ、君に。君の方が凸凹に信用があるから、宜しくやつて呉れ。』

『渠奴めは君の引導て死んて了つた筈だが、』と我輩も後から逃込まうとして、『君、一番談判して呉れ。』

と、互に難場を譲り合つてる最中、ガチツと戸が開くと、家主でも誰でもなく、シュスローウスキイ家の下男の奴だ。

二人は漸と安心して書室の幕からのツと飛出して來た。

『お手紙を持つて參じました、』と下男は會釋しつ封書を出したのを、請取つて上書を見ると——やツ、是りや如何ぢや、戀しい床しいカーヂャからの手紙だ。

急いで封を切つて見ると、

「取急ぎ申上候。妾くし兩親共は必ず御前樣との前約を許し呉れ候事と存じ候へば少しも早く御入來下され度御待ち申上候。唯今公園の水浴より戻り候折から取敢へず申上候――カーチヤ。」

と云ふ文句だ。是りや夢のやうな話て、何の事か分らぬ。ツイ三日前に手嚴しい破談の手紙を遣したものが猫の目のやうに變るといふは奇怪極まつてるが、其樣な理窟を考へてる閑は無い。唯最う不意打を喰つて呆氣に取られて了ひ、無言て、アンテックに手紙を示しつ使介に向ひ、

「今、直ぐ行くからナ、孃さんに宜しく云つて呉れ――夫からお前に遣る使賃だが、生憎細かいのが無いから、此三ルーブル札を兩換して來て呉れ。一ルーブルはお駄賃に與るが釣錢だけは持つて來るんだよ。」

と、唯つた一枚の虎の子の三ルーブル紙幣を渡すと、橫着者奴が持つて行つたまゝ夫ぎり影を見せなかつた。我輩がシユスローウスキイに一目置いてる事情を知り拔いて、弱點に附込んで橫着を極込むんだが、我輩は夫どころの騷ぎでなく、有頂天になつて、

「如何だ、アンテック?」と鼻蓋めかすと、

「ふウむ、今年や南瓜の當り年かネ。」

畜生、何とか巧く言返してやりたかつたが、胸はワク〳〵して早速の知恵も浮いて來ないから、周章てゝ衣服を着更へて支度をした。

第二回

十五分經つてから我輩はシュスローウスキイの玄關の鉦を鳴らすと、カーヂャが自身と戸を開けて現れた。昨宵の睡眠の猶ほ重げなる、爽かな朝の清けさを淡色の靑い衣服の襞に包んだる風情、一としほ艶であつた。

今、帽子を脫つたばかりと見えて、髮は少と亂れてゐた。顏にも眼にも濕つた唇邊にも愛嬌を含んで嫣然と笑ひ、朝の女神其儘であつた。我輩は思はず其手を取つて接吻し、腕から肱へと心の行くまゝに接吻した。カーヂャは我輩の耳に吻を押付けて、

「這般なに可愛がつて下さる方があつて？」

て、我輩の手を引いて兩親の前へ伴れて行つた。シュスローウスキイの老爺は家の爲め國の爲めなら唯つた一人の兒供の生命をさへ犧牲にするを何とも思はない羅馬人の我慢の氣象を現してゐた。母親は有繫に女心の娘可愛しさにホロリと一と雫を咖啡の中に落した。が、カーヂャを先に我輩が來るのを見ると、二人共に座を離れ、老爺は嚴かな威儀を作つて、

「何事も道理と義理に從つて分別せにやならんが、併し親の情といふものもある。之が人間の弱點と云はゞ云へ、神は何と仰せらるゝか知らんが、拙者は親の情を除外にするわけに行かんワ。」

と屹と眼を釣上げて天を仰ぎ、神の法庭が若し調書を作らうとしたなら、直ぐ答辨しやうといふ身構へをした。我輩は一生の中にコルソで賣つてる饂飩の外には之ほど羅馬的のものを決して見なかつた。

此瞬間實に情の頂點に達してヒッポ、タマスてさへが感に堪えて泣かずにはゐられなかつたらう。母親はオロ〳〵泣きながら震へ聲で、

「お前達も世の中へ出て萬一の事があつたら、何時でも關はない、妾の此處へ頼つてお秘れなさい。」

と云つて自分の胸を指した。

人ウ、我輩を白痴にしやうッたつて爾う甘く行くものか。全じ事でもカーチャが云つて呉れたのだと違つた心持もするだらうが、併しシュスローウスキイ夫婦の善人なのにも感心する。我輩は心中感謝に堪えなかつた。

て、嬉しさの餘りに咖啡を何杯も續けざまに飲んだので、老人夫婦は心配さうに咖啡の急須とクリームの壺とを等分に瞻めた。

カーチャは怠たらず注意けて、我輩の咖啡茶碗が少とでも減ると、後から後からと注ぎ足した。其間に我輩はテーブルの下に足を伸ばして人知れずカーチャの足に觸らうとすると、カーチャは引込まして秘と首を傾げつ下司な笑方をした。後で考へると、能く先ア我輩が如此な下卑た忌味ッたらしい笑顔を見て辟易して逃出さなかつたものだ。

一時間半ばかり此席に在たが、我輩は愈々最う歸らなければならぬ。と云ふは弟子のボーブスが既くに來て待つてるだらうからて、――此ボーブスは畫の稽古に來るのだが、來る度に家の定紋を付けた色繪を一枚宛必ず殘して行く。勿論我輩は大抵失くして了つた。

愈々暇乞をして歸る時、カーチヤと母親が玄關まで我輩を送つて來た。面白くも無い、母親なんぞは來ずともの事だ、カーチヤ一人に送つて貰ひたかつたのだ。其口元の可愛らしさと云つたら！

歸り路に市の公園を通り拔けると、丁度水浴戻りの人が逍遙してゐたが、我輩を見ると衆目顧盻つて、中には、「マゴーリスキーが來た。マゴーリスキーてのは彼の人だ。」と秘〳〵私語くのが小耳に入つた。(マゴーリスキーとは我輩の事だ。)

衣服の上から肉づきの丸やかな身躰の輪廓を見せた花やかな色メレンスの身輕な扮裝でシヤナリシヤナリしてる若い女達は我輩を流盻に見て、宛も『入來ッしやい！お座敷のお掃除が出來てます、』とお愛想するやうな鹽梅式だつた。

畜生、我輩が其樣なに高名なのか！ヘッ、ヘッ……何時の間に流行ッ見になつた！何故我輩を物珍らしさうに見るのか、如何しても我輩には合點めなかつた。

が、到る處皆同じ鹽梅式で、我輩を顧盻つて目送るものが中々多勢あつた。勿論輕蔑したり冷笑したりする素振は誰にも見えなかつたが、何だか氣に掛つて、漸とこさと家へ歸つて入らうとすると、出合頭に家主の老爺に邂逅はした。船が暗礁に乘上げたやうなもんで、そら又、家賃だ！

處が例もは苦蟲を嚙潰した老爺がニコ〳〵者て、

「やア先生、今までは度々御無理を申上げたが、併し先生、御安心なすつて、下拙最う何にも申しませぬから、今までの御無禮は何分とも平に御勘辨を……」

と云ひつゝ、吾輩の頸に噛り付いて喜んだ。解つたワイ、合點めたワイ、アンテック奴が我輩の婚禮咄をして聞かしたので、渠奴めは我輩が之からは家賃をキチンキチンと拂ふものと早合點したに違ひない。爾う思ふなら爾う思はして置く分の事だ。

我輩は跫音高く階子を登ると、我輩の書室はワイワイ云ふ騷ぎだ、架と部屋へ入ると、莨若の烟が一杯で、リシンスキーだのボーテルゲウヰチだのカルシンスキーだのボイテックだのといふ連中が五六人、スリユーデッキイの老爺までが好い齡をして美少年のボーブスを追廻してゐたが、我輩を見ると、息も絶え〲なボーブスを書室の中央に捨て置いて、人間並で無い破鉦聲を合はしつ、

「萬歳！　萬歳！　萬歳！」

と叫つた。

「胴上げ！」

といふ聲が掛るや否、我輩は忽ち多勢に捉つたかと思ふと宙に擔ぎ上げられて、グル〲〲ツと一と巡りしてから下された。

我輩は懇ろに禮を陳べて、婚禮式には一同列なつて貰ひたい、殊にアンチツクは介添人に前以てお頼みして置くと云つた。

「此唐偏朴めが婚禮を祝うのだと思つてやがる。」

「夫ぢやア何を祝つて呉れるンだ？」

『呀々、此奴、知らないンだナ。』と衆人は怪訝な顔をした。

『知らないよ。何か有つたかネ?』

「カイト」(新聞の名)を見せてやれ、」とボーテルケウヰチは云つた。

て、新聞を我輩に取つて呉れると同時に一人の男は聲を掛けた。『電報欄を見ろ!』

我輩は手に取つて電報欄を見ると、

『特電――マゴリースキーの作「巴比侖河畔の猶太人」は本年のサロンの大金牌を得たり、衆批評家は此作家の天才を評する言葉を知らず、ヒルシ男爵は一萬五千法を以て購はんと申出でたり。』

とある。我輩は殆んど氣が遠くなつた。惘然と失神のやうになつて口が利けなかつた。我輩の作が必ず好評であらうとは豫期してゐたが、是ほどな大成功を得やうとは夢にも思はなかつた。

て、ツイ茫然として新聞を落すと、朋友は拾ひ取つて別項の電報註釋を讀んで聞かした。曰く、

「(一)余輩が作家たる氏の口より直接聞く處に由れば作家は此書を龍神園内にて再び公衆の縱覽に供する筈なる由。

「(二)美術會副會頭が此大作をワルソウ市の展覽會に出品する計畫ありや否と氏の意嚮を問ひし時、ワルソウにて展覧する能はずんば寧ろ巴黎にて賣れざるも可なりと答へられしと云ふ。冀くは氏の此言を永久に氏の碑文に傳へられん事を欲す。

「(三)氏の母は此電報に接し、感極まりて病床に就きたり。

『(四)氏の母の病氣は次第に革たまる由。
『(五)氏は歐洲各市の展覽會より製作出品の勸誘を受けたり。』

何れも是れも誇大に捏造した嘘の皮ばかりだから、我輩も漸と氣が付いて來た。「カイト」の記者のオストリンスキーといふはカーヂヤの前の候補者であつたが、如此な途徹も無い嘘ッぱしを書く處を見ると確かに氣が觸れてるに違ひない。我輩の畵をワルソウで展覽に供するといふは當然だから、之だけは我輩の口から聞かずとも想像出來やうが、美術會の副會頭から意嚮を訊かれた事も無ければ返答をするわけも無い。第一、我輩の母親は九年前に死んで了つた。夫から歐洲各市は啻か、未だ何處からも出品の勸誘なんぞ受けた覺えが無い。

此調子から推すと、電報からして頗る怪しいもんだといふ考が偶つと生じた。若し註釋の五ケ條と同樣のものなら最う何も彼もお終ひである。オストリンスキー奴、半年前にカーヂヤの親を巧く納得さしたが、肝腎の本人が首を掉つたのを根に持つて、其腹慰せに我輩をちやうさい坊にして吳れやうといふ氣が無いとも限らぬ。何とも分らぬ。其樣な事なら何かの芝居の文句ぢやないが、『渠奴の素首を貰ひ受けにやア勘辨出來ぬ。』

が、友達は吾輩を和めて、註釋だけはオストリンスキーの細工かも知れぬが、電報は必ず確實な信ずべきものだと云つた。

處へ「クーリヤー」の今朝のを持つて來たものがあつた。同じ電報が矢張載つてゐるので我輩も漸と

安心した。

友達からは更めて喋々しく賀詞を陳立てられた。腹黒の猫冠りのスルデッキイの古狸は仰々しく我輩の手を掉つて、

『拙者は平生から君の天才を信じて始終中君の贔負をしてゐた。(其癖影では我輩を鈍間と云つてるのを我輩は善く知つてる。)だが君――イヤ、君などゝ同輩呼ばゝりするのは甚だ失敬だが、ツイ口癖になつてるので、何卒君といふだけは免して呉れ玉へ。』

我輩は心中糞でも喰へと思つたが、挨拶する間もなくカルミンスキーは我輩を手招きしたから、書室の隅で秘々話すのを聞いてやらねばならぬ。て、何を云ひ出すかと思ふと、

『若し君、金錢の要る事があるなら何時でも遠慮なく――すれば君――』

此男は矢鱈と親切振を見せるのが得意で、『金錢が要るならツイ一寸と一と言、』といふのが例の定文句である。勿論、此男は實際金錢があるのだ。我輩は愈々工面が出來ぬ萬一の時はお願ひ申しますと云つて置いた。

夫から入交り立代り挨拶に來て、兩脇が痛くなるほど代る／＼に我輩を搾めつけた。最後にアンテックが出て來たが、例の瘠我慢て故と平氣な顔をして傍若無人に、

『君のは大に猶太人臭いが、併し俺は君の成功を祝する。』と云つて退けた。

『君のは大に間が抜けてるが、併し君の祝辭を感謝する、』と云つて二人は互に抱合つた。

ポーテルケウキチは咽喉が渇りついて來たと云出した。生憎我輩は一錢も持つてをらなかつたが、アンチックは二ルーブル、外の連中は最つと持つてたから、各々が出し合つて、夫からポンスだ。

一同はポンスを擧げて我輩の健康を祝し、復た一回我輩を胴上げした。

我輩はシュスローウスキイ家との緣談が纏まつた顚末を吹聽すると、一同はカーヂャの爲に更に祝杯を擧げた。するとアンチクは我輩の傍へ來て、

『オイ案本丹、氣を付けねエナ。あの狸爺いめ、君が金牌を貰つた電報を見てから娘に又來々々を極めさしたんだぜ。』

畜生、また瑕瑾をつけやがる。一方が明るくなつて日が煌々して來ると、一方から惡魔が雲を吐いて暗くしやうとする。咄、三十棒を啗はしてやりたい處だ。併しシュスローウスキーの奴原と來たら、何でも仕兼ねまじきお揃ひだが、だが那のカーヂャに其樣な算盤が取れるだらうか。

が又、考へれば有り得べき咄で、多分公園の水浴て電報を見ると直ぐ手紙を寄したのかも分らぬ。斯う思ふと矢も楯も堪らず、直樣シュスローウスキーへ駈付けて面のあたりに當つて見やうかと思つた。が、お客を振棄てゝ行く事も出來ないから詮方なしに尻を落付けてる處へ、オストリンスキイが訪ねて來た。

オストリンスキイは頗るハイカラな、一見冷酷な自惚れ强い男で、手袋を穿めてゐた。丁度火花が火から出るやうに狡猾が滿面に漲つてゐた。尤も禮服を着てる破落戸だもの、當然だ。閾を跨ぐや否、ス

チツキを掉りながら、

「お目出度う！　拙者が賀詞を陳べる！」

と拙者といふ字に馬鹿力を入れたのは、渠奴の口から褒められるのは、外の者より十倍の難有味があるとでも思つてるのだらう。

「君は中々話を作るのが名人だ。お庇で我輩も君の新聞で自分の履歴が悉皆解つた。」

「我輩は一向關せず焉だ。」

「第一、我輩は誰も書を展覽する話なんぞ仕た事は無い。」

「だが、君は必と何處かで見せると言ふよ、」と一向平氣なもんだ。

「夫から此男には、」と傍からポイテックが堪りかねて喙を容した。「阿母が無いンだから、病氣になりやうわけもない。」

「其樣な事は君、」とオストリンスキーは傲慢な顏をしつゝ手袋を脫つた。

「併し、電報は眞實かネ？」

「眞實とも。」

之で漸く我輩も安心して、其禮心にポンスを注いで遣ると、オストリンスキイは杯を擧げて、舐めるやうに杯の縁から一と口喫んて、

「先づ第一に君の健康を祝する。夫から次に誰の爲に杯を擧げやうか。云はずとも君は善く知つてるだ

らう。拙者は君の爲に二重の祝盃を擧げる！』

我輩は怪訝に思ふて、

『何處から君は聞いて來た？』

『何處からでも無い、今朝の八時前にシュスローウスキイの老爺が編輯局に來てゐたのだ。』

果然、アンテックの想像通りシュスローウスキイの老爺は電報を見てから我輩を呼ぶ氣になつたのだ。アンテックは夫れ見ろと云はぬばかりに、、、、ブックサ下根の奴を罵つてゐたが、我輩は最う辛抱が出來ず、シュスローウスキイの面の皮を引剝いて與れうと、急いで帽子を取つて出掛けた。

オストリンスキーも踵から隨いて來たが、途中で別れて我輩は、夫より二分經つと再びシュスローウスキイの玄關の案内の鉦を鳴らした。

カーヂヤは戸を開けて現はれた。兩親共に不在であるさうだ。

『カーヂヤ』と我輩は凜乎となつて、『貴孃は我輩が金牌を貰つた電報を知つてるかネ？』

『知つてますワ、』とカーヂヤは沈着いたもんだ。

『だが、カーヂヤ！』

『知つてれば如何するの？ 不思議は無いワ。自家のお父さんやお母さんですもの、貴郎と夫婦になるのを許して與れるには何か道理が無くちやア、當然ですワ。』

『だが、貴孃は？』

「妾くし？　妾くしは此機會に乘じて兩親の許可を得たんですワ。それが惡くつて？」
之て疑團は悉く晴れて了つた。だが、カーチャの言ふ事は頗る一理がある。平たく云ふと如何して我輩は狂人のやうに飛込んで來たものだらう？

カーチャは我輩に飛付いて肩に頭を押付けた。我輩は腕を伸ばしてカーチャの腰を抱いた。カーチャは我輩の腕に横面を壓付けながら眼を閉ぢて薔薇のやうな可愛らしい受け口をしつゝ、低言て、

「嫌よ、今仕ちや嫌よ、御婚禮が濟んだらばネ。」

我輩は唇を押付けて呼吸の續く限り接吻した。カーチャは恍乎とした薄眼を開いて見たが、忽ち恥かしさうに兩手で顏を蔽しつ、

「嫌だッて云ふに、痛いワー」

と我輩を睨付けた可憐の嬌態に我輩は蕩けて了つて、矢庭に再び接吻した。女に戀慕した時は何よりも先づ暗雲に接吻したくなるは誰にも性來の自づからの人情で、我輩は身も魂も忘れてカーチャが可愛く、一生の間生命の有らん限り、イヤ死んでからも、盡未來際カーチャを愛する。カーチャを我が物とするか、然らずんば寧ろ何者をも愛さないのだ。

カーチャは甘へ聲で、我輩が遠慮も作法も無くなつたと恨みを云つた。可愛いぢやアないか、ヽヽ、タワイもない事を云ふ。我輩は精一杯和めて漸つと眞面目な話をするやうになつた。

夫から二人の間に相談が出來た。若しカーチャの兩親が我輩が訪問した後に彼の電報を聞いた事に表

面を作つて吳れたなら、何事も我輩は知らぬ振をしてゐやう。之て相談が整つて、復た晩に來るからと約束して別れた。

實は何を措いても我輩は取敢へず美術奬勵會に駈付けなければならんのだ。此會の手を經ればサロンの幹事と極容易しに通信が出來るからである。

（未完）

LINES

WRITTEN IN EARLY SPRING

I heard a thousand blended notes,
While in a grove I sat reclined,
In that sweet mood when pleasant thoughts
Bring sad thoughts to the mind.

To her fair works did nature link
The human soul that through me ran;
And much it grieved my heart to think
What man has made of man.

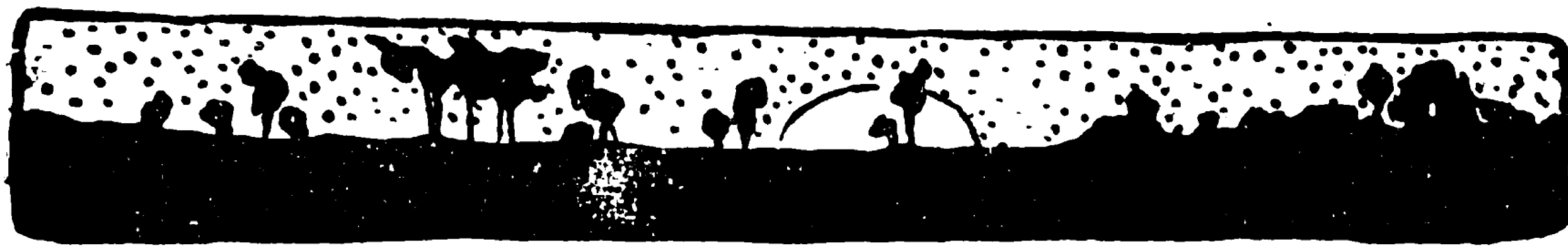
Through primrose tufts in that sweet bower,
The periwinkle trailed its wreaths;
And 'tis my faith that every flower
Enjoys the air it breathes.

The birds around me hopped and played;
Their thoughts I cannot measure:—
But the least motion which they made,
It seemed a thrill of pleasure.

The budding twigs spread out their fan,
To catch the breezy air;
And I must think, do all I can,
That there was pleasure there.

From Heaven if this belief be sent,
If such be nature's holy plan,
Have I not reason to lament
What man has made of man?

—Wordsworth.



驛路

春雨

（上）

長い鬣が、痩せて扁平い頸に亂れかゝり、惣體、骨の刺々した、處々毛の擂り切れた年喰馬を、鬼のやうな赤面の馭者が又しても鞭を振つて慘酷に打たゝくので、その度、膨れ上るやうな臀の痛さに堪えかねて、馬は飛上りさうにするから、ガタ〳〵と車體は激しく搖れ返つて、腰掛は浪のやうに、臀の下で動搖を打つ、乘客は天井で頭が危くつい顔を見合せて『何んでもこれぢやア堪らねえな』と呟きの聲が大きくなる。

『何アに、今少と許行つたら、道が平坦になるから、こんな事アねえだよ』と、馭者は臭い煙草の烟を雲のやうに吹かしながら、しきりとピシャリ〳〵やる。

十間許り前を、ガタ〳〵と左右に搖れながら進んで行くガタクリ馬車が、見る中に、スーと快く走り出したので、もう樂だと、車中の者がホッと安堵したやうに息を吐いた時に、

『眞實に太い阿魔てねえか』と、最前から話しつゞけてゐた、色の赤黑い、眼の圓い、獅子鼻の、づんぐり肥え太つた、百姓らしい男子が、煙草を一服、詰めかへて、烟をすぱ〳〵吹か

せながらいかにも無念で堪らぬやうな口調で云ふ。

『イヤ、そりや尤だよ、打斬つてやるべえ思ふのも、無理ぢやアねえだが、まアまア腹の蟲押へてこゝは大目に見逃してやるが善えだ、それが男子だつて云ふものだつぺえよ、あんな根性の腐つた阿魔つちよに、未練殘すがものねえてねえか』と、眞白な頭髮を小いチヨン髷に結つた、もう七十の阪に手の屆さうな、澁紙色の、皺の奇麗に寄つた老爺は、しきりと相手を宥めてゐる。

『イヤ、何んにも未練なんか殘しちやゐねえんだ、あんな阿魔つちよの事、もう此小指許も思つちやゐねえんだが、白晝日中、公然に、夫婦氣取りで道行なんかしやがるなんて、その圖太い根性が如何にも憎いてねえかね、老爺さん、已アあの馬車が、谷ン底へ轉覆つて了やア善えがと思つてるんだ』呪の言葉を吐いて、凄い眼色で睨め据える、

前の馬車の、水淺黄色の幕が折々風に飄へつて、丸髷や、鳥打帽や頰冠の頭が、ちら〳〵と見えてゐる、自分も不思、その男子の眼の行つてる方を眺めやつたが、この車中には、今一人の近所の町へ奉公に行く十二三歲の小娘と、凡て四人の合乘てある。

老爺はハツハツハヽヽと氣輕に笑つて『あの馬車には、奴等親子三人の外に、罪も咎も無えお客さんがどつさり乘込んでるだによ、谷ン中へ落陷されちやア可愛さうだ、イヤ、そんな事云つてる間に、この馬車が谷底へ轉覆されんやうに用心する事だ、馭者さん、しつかり賴むぜ』

『大丈夫だハヽヽヽ』と馭者臺からも笑ひ聲が聞える。

『何しろ奴等に、罰の當らねえのが不思儀てなんねえよ、己が臺灣へ出稼に行つて、月々三十兩つてもの、三年の間送つて寄越したんだ、ねえ、老爺さん、三十兩つていふ金は、今時なか〳〵儲けられやアしねえよ、村長さんだつて、一年に僅つた五十兩だ』

『ウム、何うして、そりやア生優しい事てそれ丈の金を稼出さりやしねえよ、內地にゐる時や、のらくら遊んて許暮してた汝が、そんねえな大金を送るといふ噂て、村の者、皆目のくり玉引剝いてをッ吃驚てゐたゃアよ』

『そりやア己も、內地に居る時遊んてゐたなア惡かつたゞが、ありやア全く友人が善くねえからだよ』と、一寸と言葉を切つて『何んしろ、彼地へ渡つちや好きな酒一つ呑まねえて、日がな一日、眞黑になつて働いたゞ』

『イヤ、そりやもう皆感心してたんだよ』

『村の人さへ皆そんねえに思つとつてくれたゞに、あの阿魔つちよめ』と、前の馬車を睨んて『生若い書生ッ坊なんかと姦通きやがつて、赤見まて拵へやがるたア、何んと思ひ返しても、生ちや置けねえ奴だ』

『汝にも似合はねえ、男子が一旦、思ひ切つたと云つたら、そんねえな未練がましい事を口へ出すもんぢやアねえんだつてば、もう〳〵そんねえな愚痴めいた事ア己も聞かねえだよ』と兩手て耳へ蓋をする、

小娘は譯もなく、クス〳〵笑つてゐる、

男子はヂロリと、自分の顔を眺めたが、直と又、老爺の方を振向いて『未練があるぢやねえ、あんな阿魔つちよなんか、唾引つかけてやり度い位えなもんだ、もう何んとも思つちやゐねえんだ』

『それぢやア、もう愚痴はふつゝり、廢止つせえよ』と老爺は煙草をすぱ〳〵

『何も愚痴なんか云やしねえ、愚痴は云はねえが、老爺さん、何と思ふても腹が立つだよ』と、鳩尾の邊を片手て撫る。

『人間だと思ふから腹が立つたんだ、畜生だと思へッ』

『畜生にやア違えねえだが、その畜生めに男子の面を泥足にかけられたかと思やア何んと考へ直しても、この腹の虫が納まらねえんだ、送つた金は鐚一文も殘らねえやうに使ひ果して了ふだし、自分より歳の十も違ふ、悴見たいな奴に姦通くだし、留守事に赤兒まで拵へるたア、何んと思つても堪忍がならねえぢやアねえだか』

『一つ事を何時迄云つてゝも、これが昔に返るぢやアねえだし、もう何にも打忘れて、今日、己が取持つ新田の阿魔つ子を一番見るが善えだ、年は若えし、働きはあるだし、汝には少と過ぎた代物かも知んねえだよハゝゝゝ』

『ハゝゝゝ』と同じく苦笑したが、『己ももう牛を馬に乗り返へる氣だから、何時迄も一つ事を繰り返さうたア思はねえだが、折も折、前の馬車へ奴等乘り込んでやがるて、胸が惡くなつたよ』と、車の外へしきりと唾を吐く

「恐い時乘合せやがつたもんだが、奴等は此から東京さ行く處だんべえにな、云はゞ、己等が鐘鬼さんになつて、鬼ども追ひ出すんだハ、、、然う思つたら、腹は立たねえだ」

『然う云やアそんなもんだ、けどもな』と云つて、男子は兩腕叉んで、何んだか塞ぐやうに下を向く

最前からの對話の樣子で、自分はこの男子が臺灣出稼中に、留守に殘した妻を生若い書生に奪はれ、その不貞な女は因果の胤の子まで產したのだが、しかもその姦夫姦婦は、前の馬車に乘込んで今現に上京の途中だと知れたので、この男子の一體朴訥らしい顏色が、憤怒の炎に燃えて、赤く血走つた眼中、異樣の光を帶びてゐるのを見るにつけ、何うも氣の毒で堪らない、身を焦がすやうな熱い日光の下で、汗膏を鍬の柄にぬらつかせて、漸く稼ぎ出した、血の出るやうな金を、留守居の女房は、姦夫相手の寢酒の料に使ひ果して了つたのかと、思ふと、この男子が歸つて來て、その不仕埒を見聞した時の心持は果して何んなであつたろう、自分は、血塗れ騷動の演じ出されなかつたのが寧ろ不思儀な位に思はれるのである。

馬車が、ガタリと一つ搖れたので、偶と氣が附いて、眼を上げると、この時砂埃で白くなつた風がザラ〳〵と車中に吹き込んだ、トタンに眼の中に入つた塵埃を手巾で擦りながら、見ると前の馬車の幕がぱつと上つて、丸髷の婦人と、年の若い書生とが、並んで腰を掛けてるのが、見えたが、何んだか二人とも急に、彼方へ顏を振つて了つた、

『畜生奴ッ』と、怒鳴る聲がする、例の男子が、凄い眼色で屹と向を睨んでゐた。

すると、馬車がハタと止まる、馬は腰を振り立てゝ、玩器の喇叭の如くビ、、、と放屁を連發する

『畜生奴ッ』と馭者が怒鳴る

『ハ、、、、畜生つて奴ア仕様がねえもんだよ』と老爺は呑氣に笑ふ。

自分もつい微笑んだが、見れば、男子は勃とした顏色で、莞爾ともせぬ、それにつけても、前の馬車に乘つてゐる姦夫姦婦が、自分は實に憎くてならぬ、書生と云へば、多少學問を噛つて倫理道德の片はしは辨へてゐるべき筈、それが何の顏あつてか、他人の妻を盜んだ上に、白晝公然、手を携へて上京の途中だとは、かゝる人面獸心の徒は、何んな色の血か躰に通つてるのだろう、ナイフでその心臟を抉り取つて見たい程な心地がする、自分は實に、彼奴の骨まで憎くてならぬのである。

馬車は又動き出したが、『もう驛だ、降りる準備しろよ』と老爺は注意する。

『はア』と云つて、始めて心附いたやうに、彼の男子は、傍の千草色の布呂敷包を確かつと結び直す。

『若い旦那、汝さんも此所で乘り換へて下せえな、この馬車は後戻するだからね』と馭者は振向いて云ふ。

『然うか』と、自分も降りる支度をする。

(下)

自分は、此の驛で前の馬車へ乘換える事となつた、彼の姦夫姦婦と、一つ庇の下に乘合はすのを心地惡くは覺えながら、又何となく一種の好奇心も起つて、早速にその馬車へ跳り込み、空席へ身を斂めた

が、直ぐ横手に、縞の鳥打帽を冠つて、茶色の小倉袴を胸高に穿いた、例の書生が居る、色の生白い、頭髪の艶々した、見るから忌な奴だと思つた、その隣席に、色つやの悪い、鼻の尖つた、狐のやうな顔をした、丸髷の大年増が、三才位な、栗蟲の如くくり〱と肥滿つた、兒供を抱いて、腰を掛けてゐる、これが姦婦だなと思ふと、何となく、鐵拳を加へたいやうな氣持がする。

車中はギシシリ、乘客で一杯になつた。

その時、最前の男子は、馬車の傍近く寄つて來て、血走つた眼で屹と二人を睨んだ、二人は赤くなつて、下を向いたが「コラ、早く來んか、何してるんだよ」と、例の老爺が後から肱を引いたので、そのまゝ彼方の岐れ道へ、後を振り返り〱、歩んで行く。

馭者は喇叭を吹鳴らした。

馬車は早動き始めたのである。

自分は、驛の茶屋で購めた「朝日」を一本、取出して吸うてゐると、隣席の、例の書生は、袂から巻烟草を取出して、一寸と叩頭んで火を借ろうとする、自分は、かゝる人畜生に、何等かの社交的關係を結ぶ事を肯じない、知らぬ顔して、わざと高く烟を空ざまに吹いた、

向は自分が氣附かぬのであろうと思つたらしく

「一寸と君、失敬ですが、烟草の火を…………」

「烟草の火？」云つて、自分は、蔑むやうに彼の顔を睨んだ。

書生も變な顔色をしたが、急に氣の附いたやうに、帽子を脱つて『失敬ですが、一寸と拜借出來ませんか？』

自分はその面に唾を引つかけてやり度かつたが、然う無法な眞似も出來ず、唯默つて返事をしなかつた。

『失敬ですが……』と、猶鐵面皮しく云ふので

自分は相不變、默つたまゝ、袂のマッチを手探りに探り出して、彼の膝に投げ付けた。

書生も少し勃としたやうな色を見せたが、思ひ返したやうに、溫和しくマッチを擦つて一服吸ひつけ、丁寧に叩頭して。

『何うも難有うございました』といふ

自分は、一度、彼の汚らはしい手に觸れた物、殊に一箱のマッチなんか、再び自分の手に取戻さうとする意志があつた譯ではないから、見向きもせずにゐると、

『何處へ置きませうか』と、聞き直す。

言葉をかけ度もなかつたが『そりやア君に進呈する』

ぶつきら棒に云はれて、書生は耳まで赤くなつたが『イヤ、御貰ひする譯はないです、何卒御納ひ下さい』と、少し言葉尻を慄はせてゐる。

『ぢやアそこらに打捨つて置き給へ』

隨分無愛相な事を云ふ人だと思つたのか、丸髷の婦人は、青白い顏をつき出して、シゲ〲自分の方を見る、抱いた子も、此方へ振向いた、眼の圓い、鼻の低い、金太郎のやうな、健康さうな子供である、書生は、火奴を自分の膝の上に置いたが、する〲と滑り落ちたので、又拾ひ上げて、此度は自分等の間へ置く。

隨分忍耐力の強い男子だと、自分は思つたが、書生は又、隨分意地の惡い人だと自分の事を思つたのだろう、もう此方は顏も振らず、婦人の方へ體を捻ぢ向けて

『もう少しの辛棒だ、これで汽車に乘込んだら譯はない』

『然うですね、今夜乘つたら、明日の晩には東京へ着きませうかね？』と云ふ言葉から、聲附から、田舍者ではないらしい。

『然うさね、そりやア着くだろう、東京の伯母さんは何と云ふか知ら、いづれ此方から手紙は出してるだろうが、まさか眞實にしやしまいね』

『然うですね、誰が何んな事を云つてやつてるか知れませんから』と、心配さうに額を曇らせたが『良人さへ、あんな事を信用してる位ですもの、伯母さんなんかも、眞實にしてるんでせうね』

『兎に角、困つたね、こんな度位困つた事はない、僕が病氣で折惡く歸省してたもんだからついこんな嫌疑なんか受けるやうになつて了つたんだ、お房さんも災難だが、僕も災難だ』

『イヤもう貴方に對して、私は何とも申譯がないのでございますよ、何時も手紙を讀んで貰つたり、書

いて貰つたりして、往來してたもんですから、つい村の若い者等に嫉妬れて、こんな濡れ衣を着せられるやうな事になつて了つたんですものね、私が不注意から、貴方の御名前に疵を付けて、眞實に濟みません」

「そう云はれると、僕が金の融通を頼んだのが、猶更惡いので、科は五分五分さね、あの金も、東京の友人が、高利貸に苦められて困つてるといふ再々の手紙だから、止むを得ず、御厄介を持込んだ譯だが、何うも僕も不注意でしたよ」

「不注意と云へば、双方不注意もありましたてせうが、この兒を貴方の胤だなんて、もう私は辯解するも馬鹿々々しくつてね」と低聲て云ふ。

「ハ、、、、」と苦しさうに笑つて『眼の圓い處、色の黒い處、甚平さんにそのまゝそつくらぢやアないか、自分が種を蒔いて出て行つときながら、他人の子だも隨分甚いね」

婦人は、子の顏を眤と眺めて『眞實に、あんまり酷うございますね、今日は何處へ行つたんてせう、後を追駈けて來たのてもなかつたてせうが」と、思案に沈んだ顏。

『然うさ、追駈けて來たにしては、横道へ外れやう筈がないが、兎に角怖い眼でヂロ〳〵睨んでゐたよ」

『餘つ程、怒つてるんてせうね、眞實に然う思つてるのなら、怒るのも無理がないけれども……」

云つて、ヂッと眼を瞑つて考へてゐたが、一層聲を低くして『それとも他に情婦ても出來て、それを引入れる爲めに、あんな濡衣など着せたのてはありますまいか」

「まさか」と、頭を揮つて「矢つ張誤解してるんだろう」

轣轆と軋り行く車輪の音の中に、その談話は一々、自分の耳に入るのである、自分はその誤解と云ふ語に、何んだか胸が慄ぐ心持がして、今更のやうに、その書生の横顔をのぞいて見た。

「兎に角、斯うなつちや止むを得んさ、伯母の家を便つて、かねての志願通り、看護婦になつて、こゝ二年と三年、待つてゐる中には、自然と甚平さんも誤解したといふ事が分つて、元の鞘に收まる事になるだろう、何、然う心配したものではない」

「それより他、策がないんですからね」

「今の中は、何と云はれたつて、打捨とくより外、仕様がない、自分さへ潔白であれば、神様が見てゐらつしやるから、何時か世間の誤解は日中の霜のやうに消えて行くさ、決してくよ〳〵思はんでもよい」

「私ももう覺悟を定めましたから、迷ひは致しません、甚平さんが、無實な罪を被せて濟まなかつたつて、詫びに來て下さるのが、目に見えるやうですよ、そりやアもう屹度、然うなるに違ひありませんでせうね?」

「大丈夫だ、安心してゐるが善い」云つて、煙草を氣安げに吹く。

自分は、何んだか夢の醒めたやうな氣がして、今更のやうに書生の顔を見ると、眉の凛々しい、口元の引締つた、いかにも男子らしい男子である、婦人の方へ目を遣ると、先には狐のやうに見えたその釣つた眼尻が濡んで、何んだか可憐しくてならぬのである、兒供は、乳房に縋つて、うと〳〵ともう眠り

かけてゐる様子。

アヽ自分は實に濟まなかつた、この罪もない、否、潔白な二人の男女を、苟にも畜生と心に卑しめ、煙草の火を請はれて言葉さへかけなかつたのは、實に我ながら恥かしい事であると、いたく身を責めて、改めて話しかけやうとするが何うしても、口が利けないのである、

アヽ誤解！この手が人生の運命の糸をさま〳〵に縺らせてゆくのではなからうか？、彼の甚平は妻を誤解した、妻は今、又甚平を誤解してゐる、かく云ふ自分は又、誤解せる彼等を更に誤解してゐるのではなかろうか？

自分は、甚平が今日、新妻を求めるべく見合に行つたんだといふ事を二人に告げやうとしたが、何とも口を切る機會がない、云はう〳〵と思つてる中に、馬車はやがて次の驛に着いた、其處はもう停車場である。

自分は遂に、彼等に何事をも告げ得なかつた、アヽかくて互ひに別れ〳〵に、人生の旅の驛路は過ぎて行くのである。

（完）



坦道

村山鳥逕

（一）

「自分の額の眞中に短銃の口を當てゝ、爆然と一發行つたら甚麽ものだらう。」

何も是と謂ふ白地の原因があるとも思へない、唯何となく、考へて見ればもう五六日にも亘つて、朝目が覺めると直に、小鳥遊孜郎の胸に、恁云ふ思想が浮ぶのである。然し床を離れて了へば、明日の朝迄は決して再び想ひ出さないのも不思議である。

寐て居る八疊の間は、表座敷と書齋と寢室とを兼ねた室で、本床には帛表具の繪の軸が懸けてある、臺の上に桃と連翹とを投込に生けた花瓶が載つて居る側に和洋の書冊が積んである、其床の前に桑の机

が文房具を程宜く載せて据えられて、前は三尺の圓窓の、障子は工の籠むだ棧格子である。床に對つて額が一面、長押の釘隠は赤銅の折鶴形、襖は芭蕉布の金箔散してある。

打見たる處、此座敷の内に、短銃を聯想させ、鋪いては額に銃口を擬するなどゝいふ思想を誘導すべき、道具類や書籍なども見えない。

それは孜郎は勿論聖人ではないから、厳密な意味で謂へば、常住罪を犯して居る。例へば手紙の取放し、約束違ひ、留守を遣ふ事や義理を缺く事も間々ある。酒も烟草も隨分喫る方で、已前は仲々放蕩もしたさうで、職務に對しても甚だ忠實だと云ふ方ではない、疳癪も起すし、細君と口論もするのである。それに時折は人生問題の、人は何所より來り、何の爲に生れ、何の處にか歸くなどゝ考へて、爲に書籍を繙讀した事もある。然し一體の氣質が、其等の爲に苦慮したり煩悶したり、所謂「悶えの人」では無く、那樣事は面倒に成る方である。况んや鐵砲自害など今迄本人夢にも思つた事はない、此頃の此思想も敢て自殺といふ事が望ましいのではなく、唯其こそ何となし額に短銃を當てゝ打つて見れば奈何だらうと思ふばかり、其先は考へない。去年勸められて入つた生命保險の保險金が、自殺では取れぬ事迄考ふるにも至らぬのである。

元は早稻田專門學校政治科の出身で、年齢は三十一歳、親讓りの財産を活計の足しにして、京橋の新聞社に彼是六年足らず二面の記者を勤めて居る。

朝々浮ぶ例の思想を、初二三日は氣が付かない位だつたが、四日目から氣にし初めて、五日目には有

繋に不祥と感じ、明日は萬望思ひ起さぬやうにと望んだ六日目の朝も目を開くと、何者か彼の寢覺を待つて床の側に座つて居たのが、そら起きたぞと寄つて來るやうに、例の思が猶豫なく起つて、

「額の眞中、此許へ、」と自分の顏を宙に書いて、其額を、又宙に書いた自分の指で押へて。

「短銃を當てゝ引金を、」と這度は床の中の本物の指を鈎にして、引く眞似をしながら、

「恁いふ倶合に引いたら奈何だらう。」

（二）

今年は寒氣が強い上に長引いて、春とは名のみの風冷かに、手水鉢も堅く氷り詰めて居る三月一日の朝は、恰度孜郎が短銃に祟られてから七日目に當る。

更紗の重蒲團に同じ巾の夜着と唐縮緬の搔卷とを被けて、孜郎は未だ寢て居る。椽は東南に向つて居るので、朝日が障子に射すのを枕上だけ避けて、雨戸が二枚引かれてある。

もう七時過ぎたので、次の間の納戸に、細君は夫の起きるのを待つ間を、火鉢に靠り掛つて新聞を讀んで居る。側に三歳になる小娘が母の櫛で自分の頭を梳く眞似をして遊んで居たが、自分で櫛の齒を髮に引掛けて引いたのが、痛かつたと見えて泣出した。

其泣聲が耳に入つてか、孜郎は目を覺す、同時に又例の通り、

「額を短銃で打つけたら……」と半まで思つて

「あゝ又か、今朝は思ふまいと思つたが、一體何の爲だらう、可厭な癖が付いたものだな。」

掻卷の天鵞絨の掛衿の下に、一眉の細い目の凹んだ尖鼻の、頰から腭にかけて青髯の濃い、鼻下髭の長い顔を、白布で蔽つた括枕の上に仰向けて、孜郎は節の數をも暗んじて居る天井を瞻詰めながら。

「何故這麼考が起るんだらう？」と思つて居る中に、其原因の解釋は無論つかないで、聯想は思ひも寄らぬ處に飛んで、――クライブが未だ青年の時分に、咽喉へ短銃を擬して、引金を三度引いたが發火しない、して見ると天が自分を殺さないので、何か自分が乘切つて掛る大事業が待つて居るのに違ないと、短銃を地に擲つて蹶起した事など、十三四年前に中學の二年級で習つたマコオレイ卿の――クライブ評傳の一節を思ひ浮べて居る中に、其を敎へてくれた敎師の特色のあつた顏が的歴と見えてくる。其名は慥か溝口矢太郎先生と謂つた。一見剛傑肌の四十三四の男で、自分等は赤染衛門と渾名して居た、蓋し洋裝のカラ、カフス、が垢て黒く染つて居ない事は無いからてある。洋服は茶のスコッチの脊廣て、其時分五年の學生がクライブを敎はつた二年の時に、既に胸の縁は切れて、四の紐釦の二までは取れて居たといふ、今は早毛が摩切れて、胸の縁から心が食出し、肱先が薄く破れ掛つて、紐釦は既一個も附いて居ないのを着て、蝶形の黒襟飾は、曲つて居るのが通例としてある。

此先生が大い出席簿と小い採點簿と、古本屋から引取られて已來精勤十年の薄いクライブ評傳、之は主人と同様にその衣服に較ふべき黒のクロスの表装が、白ぼくなつて、表題紙は垢が絡れさうに黒くなり、四隅の角は腹を切つて、板紙が顔を臆面なく露出して居る。此三冊を小脇に掻込んで、短い洋袴の股を廣く、裏鋲の泥靴に廊下を踏轟かして敎場に入つてくる。土佐の人だといふ事であるが。御相は實

にこそ四國猿、虹彩迄が茶色であつたやうに記憶して居る。平素嫣然して居るから良いやうなもの、那の顏で那の髯で可恐い顏をされたら、氣の弱かつた自分は、其當時流行つたエスケイプばかりして居た事であらう。

溝口先生は教場に入つて戸を力任せに締めて教壇に昇つて、先づ出席簿を開き、護謨の無い鉛筆の丸くなつた先を嘗めて、偖て名前を讀み初める。其時左の手は必ず洋袴の横衣兜に隱れて居るのが定であつた、それから…………………。

と追想に耽つて居たが、下婢が庭口の木戸をゴツンと音させて、庭へ入つて來た氣色がする。孜郎はそのゴツンといふ響から、溝口先生の「ホオルゴツン」騷動を想起す。

一體先生の英語の發音と來ては other をオトハアと言はぬ迄で、forgotten をホルゴツン位は何でもないのである。然し奈何した拍子か赤染衛門一名ホルゴツンとも稱する位に、此字ばかりが名を揚げて了つた。

或日先生が少し遲刻した事があつた、生徒は一同着席して待つて居たが、少し退屈して來たので、嘈々騷ぎ初めると、一人が卓を敲き根太を蹶ながら拍子を取つて。

「ホオルゴツン、ホルゴツン、ホルゴツツンたらホルゴツン、ゴツツン、ゴツツン、ホルゴツン。」

と聲高く叫んだ。其調子が一同の氣に入つて、刹那に皆之に和した。其大擾亂の最中に先生飄然教壇に現はれたが、足拍子の爲に床から騰る埃で、姿が明白見えぬ位、然し平然として例の通出席簿を讀み

初めたが、返事が聴えぬので、帳簿を閉ぢて。
「げに酷い騒ぢやのう、何故おまへ等、那様騒をするか。今日は皆缺席や。」
と言つたが、顔は相變らず笑顔をして居たつけ……。
座敷と納戸との隔の襖が啓いて、三歳になる娘の美代ちやんが、袖無羽織を抜衣紋に着て、紅足袋の蹣跚歩行て、床の側へやつて來る、後から母も付いて來ながら、
「八時を過ぎましたよ。おや／＼起きて居らつしやつたの。美ちやん、さ御機嫌克うをしなくつては可けませんよ。」
孜郎は短銃の事も溝口先生の回想も、もう忘れて了つて。
「好矣起きるぞ。美ちやん頰邊をおくれ。」

（三）

其次の朝も昨日と同じ頃に目が覺めると、例の通り又短銃が霏つく。又初つたなと思つて居ると、次の納戸で妻が炭を次ぎながら、
「明日はもう御節句だつていふのに、雪が降つて居るんだよ、厭に成つて了ふねえ。」下婢と話す聲がする。外の雀の聲も、さも雪らしい。
「雪が降つたのか、道理で寒いや」と肩に掻巻を被けて居る間に、今日は小學校時代に淺草の奧山で見た櫻田の雪の油繪を思出した。雪の中を赤合羽の浪人共が、掃部頭の首級を掻いた處の圖で、雪に血が

滴つて居るのが凄かつた。然し純白の處へ紅い色、死骸さへ無ければ綺麗だらう、起きて赤インキを一つ雪に注けて見やうかな。之は驚く。餘り子供染みた事を考へたものだ。曷己ばかりが子供らしいのてはない、世間は皆然うに違ない。それといへは頃日逢つた陸軍中尉など顏色から姿から聲音迄が子供ぽい人であつたな、頭は三分刈の八字眉毛、頰は紅く鼻は丸く、目は大くて、門齒の細い唇の厚い口の上に、申譯迄の髯が薄りと生へて居た。改良軍服の滌々したのを着て胡坐を組き、煙草を指に夾んで烟を吐きながら。四五人の一坐を見亘して、滿洲軍の話をした後て。

「それは戰爭は哀しい事の方が多い、地方の人は勇ましいものだらうと思ふか知れないが哀しい事ばかりてす。」地方とは世間といふ事ださうだ。

軍人は又一口烟草を吸つて、

「奉天の戰が濟んでから、私は遺骸の取片付を命ぜられた一人てすが、山に積んだ死骸を見ると、つく〳〵戰爭が厭になりましたな。平和に倦きた處には止むを得ぬ事か知れませんが、まあ可厭なものてすよ。」

「軍服の手前、些と不相當な御說てすね。」

主人は笑ひながら言ふ。軍人は急に顏を紅くして。

「然し僕一個は身命を献げて居るのですから御心配なく。」餘り眞面目なので、主人を初め一座間を惡くした、其處て自分は訊いた。

「其遺骸取片付の時に、奈何でした？」

軍人は煙草を灰に挿して、煙が目に入つて痛いのか左の目ばかり閉ぢて。

「其時てすな、服の衣兜を見るんてす、其衣兜の中には、大低何かしら故郷から送つて寄越したものを入れて居る、ま普通は寫眞ですね、妻君だとか子供だとか、年を老つて居るのは父母でしやう、後生大事に包んで持つて居ます。」

「手紙も持つて居ましやうね、それから御守札なんども。」

主人は火鉢の火を弄りながら訊いた。

「えゝ持つて居ますとも、又實際持つ氣になりますな。」

「貴方も何か持つて御出てしたか。」

軍人は又顏を紅くして、

「はあ持つて行きました。」

「細君のをですか。」一人が訊くと、主人は引取つて。

「まだ細君は御在にならないんだ、然し細君に成る方は奈何だか知らんよ」

軍人は燃える程に紅く成つて居る。又自分は先を促すと、漸く口を啓いて。

「それて御話をしやうといふのは、或軍曹の遺骸でしたが、其衣兜に入つて居た者が妙な物なんてす。」

皆何であらうと耳を立てゝ居ると、軍人は煙草に火を付けて、

「何有別に變つたものではない、依様紙ですが、他のとは少し違つて、御清書が出て來たんです、肺部の銃傷でしたから、血が澤山出て、紙は紅唐紙のやうに成つて居たですが、擴げて見ると、然うですな尋常一年も上りたての見なんでしやう、幼い筆附で一生懸命に御清書がしてある、優等と朱墨で點が附けてありましたよ、覺り父親が出征後學校へ上つて、もう這麼に字が書けるやうになつた、而も優等の點を採つたといふので、其子供が自慢に父に送つて寄越したものなんでしやうな、寫眞や手紙はまあ然程でもなかつたが、是には閉口しましたね、涙が出ましたね。氣が張つて居る最中でしたが、實際戰爭がつく〴〵、いや又恁言つては申譯ないが、覺りその何ですな、悲しく成つたです。」

「成程是は然うでしやう、兎角子供のする事は感じさせます……。」

襖がすらッと啓くと、美代子が一人でよた〳〵と床の傍に來ながら、廻らぬ舌で。

「とうたん。」といひながら外面を指して、雪の降つて居るのを敎へる。

「美代ちやん起こしに來たのか。今起きるぞ。ウ雪か、寒いな、冷たい手をして居るぢあないか。」

今迄の回想は、美代子を見ると拭いて取つたやうに消えて了ふ。

（四）

雪は正午前に霽つて、夜は梅の月夜、一日の間に春は餘程調つて來た。孜郎は昨日の朝と今朝との回想を興ある事に思つて、其夜寢に就く時に、明朝は何を聯想するかと、寧ろ樂しみにしたのである。

翌朝に成つて夢の央で目が覺めた、目を啓くと今朝に限つて、床の間の前に母と一緒に座つて居る美

代子の後姿が見えたので、直聲を掛ける。

「美代ちやん何をして居るんだ。」床の中から呼び掛けると、昨日束髪を圓髷に結變へた妻は此方を向いて、

「おや御目覺ですか。美代ちやん御雛樣は何許だか父さまに敎へて御上げな。」

一昨日から床の間を雛段代りにして、一對の内裏雛と五人囃とを飾つたのであるが、雛より豆煎や有平糖に氣のある美代子は、隙を見ては雛に侍くのである。今も必然一人て來たのを母に追はれたものであらう。

美代子は雛を指して父に笑つて見せる。

「今日は御節句だな。」

「もう七時半で御座んすよ。」

「御節句が七時半か。」

「いゝえ時の事を申したのです。」

「あゝ然樣でしたか、只今起きまするて。」

「戯謔けてばかり入つしやる。」

ドッコイショ。起反る拍子に、庭て鶯が高音を張つた。孜郎は其聲を聽いて、非常に元氣を吹込まれたやうに感じて反起きた。

異箇に一陽來復した春の氣色に觸れて、孜郎は只嬉しいやうな感を抱いて、顏を洗ひ食卓に向つた。鶯は隣へ飛んで鳴いて居る。

朝餐を喫して居る最中に、茶碗の中に稗が一粒入つて居た。散彈に似て居ると思ひながら箸で取出したが、ふと今朝だけ短銃を額に當てたら奈何かと思ふ氣が浮ばなかつたのを氣附いた。それで今改めて然う思つて見やうとしたが、切つて付けたやうな思想は何の聯想も起さない。然し何の爲に那麼思想が起つたのかと、箸を片手に茶碗の中を覗きながら考へて見た。只何となく然ういふ事もあるんだらうと、朦朧な解決をして居ると、妻は妙な顏をして、

「奈何か爲すんたんてすか。」

「いや奈何もしないさ。」と急に殘餘の飯を喫し了つて、給仕をさせる間を鐵瓶を爪で彈いて居ると、往來を人足らしいものが大衆高調子で話しながら行く音がする。妻は茶碗を差出しながら、

「そら輿屋が來たんだよ。」

「何、輿屋? 葬具屋かい、近所に死んだものがあるのか。」

「未だ御存知なかつたのですね。」

「誰が死人の番人なんぞするものか、知らない。」

「そら一丁ばかり先の唐物屋の娘、貴方が觀せ物の蛇使ひのやうだと仰つた、那の女が死んだのですとさ。」

「那が死んだか、此頃は店にも見えないと思つたが、やれ〱。」

「あれて貴方三十二だつて謂いますよ。大柄な着物を着て白粉を付けて能く歩いて居ましたつけが。」

「婿は出來たつけかね。」

「那は嫁に行く娘なんですとさ、それが奈何したもんだか縁談が纏り掛けては破れるんですと。いえ貴方正銘な娘ですともさ、竟り縁が薄い人なんですね。」

「氣の毒なもんだつたな、今迄獨身だつたのだね、三十二迄。病氣は何だつて、肺病、道理でいやな顔付をして居た。然しあの襟巻は彼所の店で買つたんだぜ、バクテリヤが着いて居たらうな。」

妻は笑ひながら、

「夙の昔に吸つて御了ひになつたから、今更マルホリンとかてもないてしやう。」

「マルホリンではねえや、ホルマリンだらう。」大笑いだ。兎に角御節句の御葬式は氣の毒の至りだな。」

「眞箇に可哀想ですわ、一體獨身の女は皆弱いのは奈何謂ふもんでしやう。」

「然うさ、お前だつて獨身て居りあ、今頃は死んで居たんだ。」些とも說明には成て居ない。然し妻君は、

「ですかねえ」と眞面目に成つて。

「だけれども金田さんなんぞは、づうッと獨身て通して御出なさるけれども丈夫てはありませんか。」

「彼の人は遠いからさ。」

「遠いと死にませんか、それは又何故てしやう。」

「さあ何故かなあ。」孜郎は茶を飯に注けながら答へたが、茶碗を取上げて一口掻込んで急に茶碗と箸とを膳に荒けなく置いて。

「成程釋つた、漸く解つた。」聲高く叫んだので、細君は膽を潰して夫の顔を見ながら。

「何がて御座います、適いと死なゝい譯がてすか、獨身の人の弱い譯がですか。」

「それは夙うに譯つて居るが、己の考へて居た事が漸く今解つたんだ。」

「然うて御座いますか。」

孜郎は唐物屋の娘の死から、自分が短銃を額に當てる氣になる理由を知つたのである。

娘の死は獨身といふ充らない生活に倦んだ結果である。勿論病氣で斃れたのには違ない、然し抑病氣に成るといふのは、生活の單調か、然らざれば外界のリズムと我リズムの不調に歸する。况んや彼女のは肺病だといふ、肺病に成るものは必ず多少人世に厭いた者だ。靈肉の何れかゞ人生の爲に、(敢て自己の爲と言はない)活動して居る時には、遺傳があつても肺病は起らない、激い肺病患者と接吻してさへ傳染などをするものか。

這麽話が自分の短銃一件と何の關係も無いやうてあるが、大に有る。

自分は人生の平安に厭いたのだ、先づ六年間毎日同じやうに、朝起きる、新聞社に行く、歸宅する、寢る、それは其間に職務もあり交際もあり、移轉もしたり婚禮もしたり子供も生れた、忙しいやうにも見えやう、活動して居るやうにも思へやう、然し大體に於て自分の生涯は波瀾のない平坦なるものてあ

つた、今や自分は何か喫驚して見たいのである。

唐物屋の娘も嘸何か喫驚して見たかつたらう。設へば男に見染められたと知つて動悸をさせたり、三井か白木かへ婚禮の衣服でも誂へに行つて、そは〳〵しながら、出された茶碗でもつい顛覆して、間を悪るがつて見たかつたらう。彼女は喫驚を戀慕つて竟に人世の最大喫驚なる死に逢着した。

身分が異り境遇が別て身體が違ふから、彼女は肺病で死に、我は之を外に見て居るやうなもの丶、喫驚を望む心は同じてある、無事に苦しむ思は變がない。

今年は寒さが長いので、氣候にも自分は倦んだ。自分の生涯に倦んだ自分は、人世の最大喫驚に至る方法を、何時となし知らぬ間に考へて居たものが、即ち短銃を額に當てるといふ事であつた、是決して「偶然」でも「何となし」でもない。

今朝鶯を聽いて心地好く感じたのは長い冬が春に變じた報知を聞いて喜んだのである。美代子を見ると何も忘れたやうになるのは、變化の最甚しい時代を見るのが面白いからである。變化々々、潮の滿干が無いと海は三時間で腐つて了ふといふてはないか。

「變化と喫驚、それで短銃の用も無くなるわい。」

思はず言葉に出すと、妻は聽いて

「短銃てすつて、貴方那樣物を買すのてすか。尤此頃は無用心てすから、泥棒が來たら嚇かしには可う御座んすね。」

「何を言つて居るんだい、那様物を買ふなんて言やあしないよ。」
「でも短銃だつて仰つたてはありませんか。」
「言つた事は言つたが別な話だ。」
「へえ、何ですか薩張り解りませんわ。」
「然うだらうさ、お前なんぞに別るもんか。」
「へい、それでは貴方は御邁いのだから長壽をなさるてしやうよ。」

（完）

先月の號へ豫告した小說の中で夏目漱石氏の丈け掲載することが出來なかつた、これは氏がホトヽギスへ書いた小說が大變に長くなつたために本號の〆切期日迄に寄稿せらるゝことが出來なかつたので讀者諸君と共に吾人編輯者の大いに遺憾とする所である。然し其代り豫告以外に春雨烏還二氏の作物を乞うて掲載したから諸君の御不平はないことゝ信ずる



ひとり

徳田秋聲

南が壁の剝かゝつた藏、西が湯屋の薪小屋に直り塞れた二坪弱の壺庭にも、麗かな、春の日影は萬遍なく漾ふて、姿も形もない、ヒヨロ長い一本の楓の小枝々々が、此四五日滅切芽ぐんで來た、常も春先になると、自分の爲べき仕事を、何處にか遺却れて來たやうな、此先が何だか頼ないやうな心細い氣が爲て、妙な一種の哀愁が弱々しい胸一杯になつて來るのだが、年を拾つた故か、此春は格別そんな事もない。加旃、財産の事で兄に不滿を抱いて、不意と飛出して、凄い目色をした人間ばかり居る東京の眞中へ、文なして立つたほどの氣象がありながら、不思議に人間が可怖くて、少し優しい慈悲ぶかい人に出會すと無上に頼しくて、這麽荒い可恐い社會にも、自分と同じ心を持つ人もあるかと異んだくらゐてあるが、其喜悦が少時のまに裏切られて、世話になつた人を疑り、目をかけてくれた主人に見棄てられ、友達に莫伽にされて、常も獨て自分の運命を異しんてゐたものだが、其も近年は段々少くなつて、今ては多少、自分と他との力を量るとも、前途を見る目も開いたやうな感がする。

けれど、己ももう三十近くだ。志がない才取をして、是から資本を拵へて、一ツ端金を作らうと云ふのには、未だ〳〵力が足りぬ。加之昔救つてやつた義理て、自分の手て、失敗のな

かゝら、救つてくれた榮吉さへ、動もすると矢張己を見縊つてゐるやうな姿態が見えて、恁して彼の檐の下に彼の飯を食つてゐる己を、「智慧のない奴は、何時だつて然うさ。」と云つたやうな氣味が無いでもない。

「何だ、又弱い音を吐いてら！」と細野は我と我を嘲つたが、張詰めたやうな胸が、何等か自然に凹んで來た。

湯屋の煙突の煙が、藏の壁から地面へ、むら／＼と黑い影を漲らせたと思ふと、此方の廂際まで舞込んで來たので、逆上目で惱んでゐる細野は、急に障子のなかへ顏を引込めて、爲かけた張合に取かゝる。けれど、何したのか、初めのやうな元氣が奈何しても出て來なかつた。一體體の弱い故でもあるが、頭腦の左右明瞭しない男て、獨力で仕事をするには餘りに氣が弱く、人の爲に使れて働くには、餘りに氣が勝つてゐた。

と、今朝横須賀から歸つて來て、湯に行つたばかりの榮吉（舊自分の家の傭人）が、生々した顏て入つて來た。榮吉は細野から見ると、身長は低いが、嚴重した骨組て、目の色も榮吉の綺麗な代りに弱々しいのに比べると、濁つたうちに光と力を有つてゐる。野卑なところも見えるが、些と苦味走つた顏である。

「細野さん！」と榮吉は心から打解けてゐる調子で、「柏餅を買つて來たから、お茶を淹れやうぢやないか。」

「有難う。」細野は振顧つた。

奥の長火鉢の傍へ行くと、細野は何か舌打をして火を直しながら「那の婆さんにも困つちまふね。榮さんも一人貰はんと駄目だね。」と榮吉の顔を見あげた。
「僕？僕は君、何時だつて貰ふさ。其よりは、君は奈何だい。」
「先づ當分駄目だな。尤も今度の山が一つ當れば、ちよッと田舍へ歸つて、五月頃に世帶を持たうと思つてゐるんだからね、或は其時になつたらば………。」
「ぢや、一人取決めておいても可いぢやないか。僕が是非周旋しやう。」
「榮さんの手にかゝつたのは怪しいからな。」と細野は薄笑をして、「君の方のローズ物を押着けやうと云ふ考なんだらう。」
「莫伽を言給へ。僕も君の體の形がつけば、一人貰はうと思ふんだが、同時にやるのも面白いな。」
「片身怨のないやうにか。」
「君は、あのお文さんは奈何だい。」
「待合に奉公してたと云ふ、左官屋の娘か。性が知れないね。」
「笑談ぢやない。そんな女ぢやないんだ。尤もね、標致は些と二の町だが、其代り氣立は實に感心なものなんだぜ。今時珍しい心掛の好い女なんだぜ。」と熱心に言ふ。「世帶持の好いのは受合だ。」
「ぢや、君が貰つちや奈何だ。」と細野は欝散くさい目色をしたが、「いやに讃めるんで、薄氣味が惡くなつちまふ。」と小鼻をピクつかせて、冷笑つた。

「此奴、莫迦にしてやがんな。人が親切に言つてやりや、直其だ。」

細野は驚いて、目を瞠つて、「ぢや……ぢや眞實に世話してくれる氣なんかい。」

「當然だな。」

「よし。其なら本氣で聞かう。だつて、餘り突如ぢやないか。」と仰々しく開き直る。

榮吉は急に氣乘のしない顏で、例の落着かぬ目色をして、默つて了つた。

細野はジロリと其顏を見たが、「それて、榮さんは那のお欽さんを貰ふと云ふ寸法なのか。」

榮吉は目眩しさうな目を擧げたが、「然うさな―」と氣が差すやうに、「お欽も可いが……奈何だらう。」

「奈何も恁もない、榮さんの氣一つぢやないか。僕は無論好いと思ふ。第一人づきは可し、女振は好し、實に申分なしだ。それて先方から首ッたけと來てりや、此位結構な事はないぢやないか。」

「然うか知ら。」と榮吉は放拋らかしたやうな調子で言つて、心から嬉しさうな笑を目のうちに浮べたが、直に氣が引けるやうに、「挑てちや可けないな。」

「挑てや爲ませんよ。」と眞面目くさつて、今注いだ茶を榮吉に侑める。

「いや、僕はまあ後でも可いとして、眞實に奈何だい。お文さんなら、決して惡かあるまいと思ふ。」

「はゝ、何だか笑談が眞實になりさうだね。」と細野は空笑を爲た。

榮吉が居酒屋のお欽と云ふ愛嬌女と昵遊になつたのは、つい去年の夏、清元の師匠の宅でだつたので。

家業は汚いけれど、生れながら垢脱の爲た、顏立よりも樣子の好い女であつた。無作法な勞働者のなかに立つて、姐や〳〵と呼れて、ゴシ〳〵した、堅い車夫や砲兵工廠の職工達の手に手を握られて、嗅い息を吐かけられるのが可厭さに、少い時から堅氣の奉公に出てゐたが、二十になつても、未だ戀を知らぬやうな幼々しい娘振が、ふと心に染んで、此女と差向になつてゐると、甚麽氣の沈んだ時でも、胸がわく〳〵浮立つやうに爲つて來る。何時でも他を揶揄つてるやうな女で、其癖微塵も惡氣のない、瀟洒した、懸引のない、心は何如にも眞面目な質である。

今日も晩方から遊びに來た。

丁度榮吉が得意先を駈ずり廻つて、憊れきつて歸つて來た處で、獨で飯を食つてゐた。

「御膳なの、お給仕しませうか。」と水口から上つて、耳の遠い婆さんを退けて、長火鉢の處へ坐る。蒸し〳〵する晩で、何處からか甘たるい丁子の花の匂が通つて來る。

榮吉はムシャ〳〵食りながら、平氣らしい顏をして居るが、實は何時も變らぬ、少からず怯えてゐるので。

じろりと其顏を見て、「少時來なかつたね。」

女は急に笑を浮べた目元から愛嬌を收めて、莟のやうな口を屹と結んで見せたが、「餘り來ちや惡いかと思つて…………。」

「然う。ぢや遠慮してたんだね。」

「然うと云ふ譯でもないんだけれど…………」と熟と榮吉の顏を見て、「一昨日の晩お文さんと何處へ行つて？」

「一昨日？」と榮吉は目を丸くする。

「然うさ。」

「一昨日はね、少し文さんに話があつて、些いと其處いらまで出たんだ。目の敏い女だな。」

「甚麼話？」

「つまらない事さ。」

「然う！」と氣のない顏をしたが、「そんなら可いわ。」と素直に默つて了ふ。

「つまらないたつて、其は那の女に取つては一生の大事だけれど。」

お欽は輕く點いて、「一生の大事なの。一生の大事と云へば、大概解つてるわね。

「然うかい。甚麼事だらう。」

「知れてるぢやありませんか。」と慣れつたさうに言ふ。

「何う知れてる？、」

「ぢや言つて御覽なさい。」

榮吉はお終の茶漬を、さら〳〵と掻込んで、「然し、其は後で知れる事だ。」と言つて、食卓を横へ押遣つた。

「だけど、其は何の事だらう。」とお欽は小首を傾げる。

「そんなに心配なら話しても可いが、實はお文さんと宅の細野の縁談さ。」

「然う？然だらうと思つたわ。」

「だから、宅ぢや何だか更まつて、切出しにくいんで。加之お文さんは那云つた生眞面目な女だらう。」

「あ。待合の女中してたとは受取れないわね。」と苦笑する。「そして、其のお話は纏まつて？」

「然やう。纏まつたやうな、纏まらないやうな、僕も何だか困つたんだ。」と顰ッ面をして、「尤も奴さんには正可這麼話は出來や爲ないけれど、女の方ぢや、其の………。」

「可厭だつて云ふの。」

「何に可厭だつて云ふ譯ぢやないが、那の女の事だから、僕に散々ッぱら怨を言つたつけ。其から僕は、細野の素姓から、腕前から、人物から讃めて〳〵、讃ちぎつて勸めて見たが、矢張駄目だ。お終にや、餘計なお世話だなんて、ぷん〳〵憤出して、太て、始末に行けない。考へりやお文さんも莫伽さ。僕よりか奴さんの方か、何のくらゐ親切氣があるか知れやしないのに。」

「そんなに腕があるの。」

「さあ。けど、腕があるから出世するとは限らないよ。運と云ふ奴があるから。奴も考は巧いけれど、何云ふものか可けないな。だから、屹度成功するとは請合へないさ。」

「さう。ぢや心細いわね。」

「けど、そんな事言つてたつて爲方がないさ。お文さんだつて、正可其事で可厭と云ふんぢやないんだらうよ。眞箇其の、可哀さうな點もあるんでね。」と榮吉は術なささうに太息を吐いた。「其事を、今夜一つ宣告しなけやならないんだが、僕は實に其が言辛いんだ。」

「だけど。其はお前さんが惡いんだもの、他に親切をしやうと思つて、碌々お文さんの氣も聞いて見ないでするから惡いわよ。細野さんは乾度氣を惡くしてよ。——細野さんだつて、一人前の男ですもの、可哀さうだわ。」

「然うだらうね。」

「然うだらうねも無いもんぢや有ませんか。私にしたつて、那樣事すりや怨んでよ。」

「誰がお前に……。」と云差して、「可いや、細野にや他の事で埋合を爲るから。僕だつて、充分の好意は持つてゐるんだから。」

言つてゐる處へ、格子戸が開いて、細野が歸つて來た。從々と茶間へ入ると、榮吉と顔を見合したお欽が、譯もなくクス〱笑出したので、細野は妙な目色として、默つて出て行かうとする。

お欽は急に、「あら、細野さん可いのよ。入らつしやいな。」

「は」と、細野は淋しく笑つて、突立つてゐる。

睦まじさうに差向ひに坐つた二人は、多時推默つて居たが、お欽が又到頭噴笑して了つた。

榮吉が睨む眞似をするので、お欽は急に眞面目になつたが、旋て極惡さうに起つて去つて了つた。

細野は火鉢の傍へ膝行寄つて、煙管筒をポンと抜いだが、一服火をつけて、「榮さん、僕は今度見込通り行きさうです。」

「然う。」

「結婚費ぐらゐは出來さうです。」

「そりや結構……」と苦笑した。「まあ、儲かつたら其を資本にするんだね。結婚なんかは、まあ〱第二の問題だ。」

細野は凡ならぬ目色をしたが、急に萎げて、其まゝ黙つて了つた。

細野は花の咲くをも待たず、妙な感情の行違から、此の檐下をも出る事になつた。

小説の巻頭に掲げた晉庵氏譯の「二人畫工」は非常に面白いもので、流石に有名な「クオーヷデス」の著者たるに背かざる書き振りてあるとは之を一讀した人の誰しも心附くことてあらうが、此物語の面白味は回を重ぬるに從て益々わかつて來るので、此次あたりはその頂點となつて居るさうてある。猶此物語は今二度位續く可なり長いものてあるから、讀者諸君は其心構へて讀んて居て貰ひたい。



希望

川上眉山

（一）

村の者は何も知らぬから、兄の與十郎が巧みに言拵へて、思ふさま吹立てたのを殘らず眞に受けたもので、坂の大盡の乙ちやんは、何でも豪い學者になつて歸つて來たと思つて居る。實の處今年の試驗にも亦落第して、かねて修學中の監督を賴んで置いた某博士は、今度も亦試驗委員の一人であつたが、何ういふ見込みを付けたものか、折節上京中の與十郎に向つて、最早受驗の事を思止まらせるやうにと、それとなく因果を含めたのであつた。兄も內々は失望しないでも無かつたが、大氣の男で、騷ぐ體もなく、新次、氣を落すな。俺に考へもあるから、兎も角一旦國へ歸れ。何も胸にある。俺が付いて居る以上惡いやうには決してせぬ。笑つて此日を振返つて見る時節もあるわ。と勵ますやうにして、志を成さ

ぬ中は、と容易に肯かなかつた弟を無理に引立てゝ歸つて來たのである。

高村與十郎、松川村の一の長者で、坂の大盡と言へば近郷に誰知らぬものもない。七人ある同胞の中に三人の男の、中の弟は夭折して、季の新次といふのが、笈を負うて上京してから丁度八年目で、不本意ながら故郷に歸つて來た其青年である。村に居つた頃、縣の中學に居つた頃などは、周圍の者にも全く舌を巻かせた程、恐ろしく能く出來たもので、人も許せば自らも亦したゝかに許して居つたが、京へ出てからといふもの、何う子返りがして了つたか、成績は次第に捗々しからず、果は監督の博士も全く匙を投げて了つたほど、隨分と刻苦して勉強した結果が到頭失敗に終つたので、新次の無念さは實に一通りではないのである。深切づくに、新次の成蹟に付いて諄々と説いてくれた博士の談話を聞いた時、あれほどに出來た新次が、何うして其やうな、と與十郎は不審に堪へんのであつたが、博士の言葉の中には動かすべからざる確かな節があつたので、新次の成功の全く覺束ないのを竊かに悲しんで、其鹽梅では縦令何をした處で、此末烈しい社會に馳驅して功名を爭ふといふやうな事は思ひも寄らぬ。なまじ東京に置いて苦しませるよりは、見切を付けて故郷へ引込ませて、分家でもさせた上で、それから目鼻の付けやうは又いくらもある。と恁う思つて無理やりに弟を促して歸つて來たので、新次の身に取つては、初一念を果さずに歸るといふのが忍ぶ事の出來ない苦痛で、其苦痛は何處にも付いて廻つて、骨肉の情からの兄の慰籍の聲も全く耳に入らず、故郷へ足を踏入れて、馴れた山河を目に入れるより、殊に深く其苦しさを覺えたのであつた。

兄の繕ひ方が上手てあつたので、郷黨の間には少しも襤褸を見せず、前にも言つたやうに、新次は立派なものになつて歸つて來たやうに信ぜられて居た。嫂のお道といふのは初めから優しい人て、陰日向なく何くれと氣を付けてくれるし、甥や姪などは何れも罪のない子供で、東京から來た叔父さんと珍らしがつて、周邊を取卷いて慕寄つて來る。大勢の婢僕は、主人が大切にするのを見て尙更に尊敬する。家は素より村では第一の勢力を持つて居るので、何處へ行つても多くは頭を下げられる。歸郷の其日から、いつの日にも、いかな人からも、好遇されぬといふ事はなかつたのであるが、新次の胸には、如何なる時にも取除ける事の出來ぬこだはりが有るので、面には無據く笑つても、心に耻ぢて、氣は何時も鉛のやうに重く鈍つて了ふ。

他から强ひられても、進んて交りを求めやうともせず、失意と歎息の中に多く日を送つて居た。兄の諫めも、嫂の慰めも、心を動かさぬではないが、宿志を遂げぬ上は、新次は兎ても滿足して居られぬのである。新次は未だ自分は到底希望を達せられぬ身となつて居る事を少しも知らず、失意はしながらも、一時の蹉跌として、やがては勇氣を回復して、再び打つて出やうといふ事を胸には固く誓つて、絕えず未來を描いては、夢のやうな空想の中に果しもなく彷徨つて居た。二十四の秋の末の事。

（二）

緣側の、日の當る處へ出て、季の子のお鳥といふ、二歲ばかりなを乳母に抱かせて、眩しさうな顏でお道は紅葉のやうな手の爪を剪つて遣つて居た、未だ朝露の乾かぬ頃て、裏の雜木林の方には、鵯だの、

百舌だの、鶫などが、日和に機嫌のいゝ聲で囀散らして居た。不意に土藏の陰から足音が聞えたので、顏を振上げると、部屋着の上に、紺出の糸織の羽織を引掛けて、茶の中折の帽子に、村では珍らしいコンゴーの洋杖を持込んで、新次が衝と其土藏の角へ出て來たので、莞爾して、

「おや、那邊へ、」

と嬰兒の手を持つたまゝで聲を掛けた。新次は立止つて此方を見たが、

「一寸散歩に、」

と輕く會釋して其儘裏木戸を指して、栗やら柿やら秩序なく植込んである中を拔けて、ふらりと外へ出た。

路に立つと、蕭殺とした秋の氣は、直ちに身に迫るやうに覺えた。日は斜めに、深い雑木林の奥に差込んで、空は果てもなく澄徹つて、一つ二つ風に飄つて高く舞上つた木の葉が、ひら〳〵と輕く足元に落ちて來た。なだれに下つて軈て又上つて居る勾配の緩い地勢の、南に廣く見渡す方は一圓の田で、收獲時の忙がしさうに、野良に出て居る者は手を揃へて立働いて居た。ちよろ〳〵水の縁を縫つて、尾花がきら〳〵と穗を揃へて日に閃めいて、榛の木杙が處々に、秋の姿を見せて中を彩つて居る。間を通つて一條の路が、さながら蛇のやうに蜿つて、見えつ隠れつ彼方の岡へと續いて居る。新次は其路を辿つて行つた。

遇ふ人毎に挨拶されるのを煩擾さうに、心ならぬ笑顏を返して、やがて其岡を越すと、森を隔てゝ、鏡

のやうな沼が忽ち木の間から美しい影を見せた。左に折れて、鎮守の八幡の横を出ると既汀で、芦や蒲や、眞菰に淺く深く緣を取つた、靜かな極めて靜かな水が、森を、社を、岡を空を、横切る鳥を、輝く日を、其物よりも美しく色を合せて影を涵して居る。向は一帶の松原で、其端れに、土地には稀な瓦葺の大きな二階家がある。菅沼守と言つて、地方の官吏上りて、今は此處から一里ばかり先の町の、其町の名を冠つた紡績會社の理事をして居る人の住居である。

汀に寄つて、駈出すやうな木振で横にのたり出して居る樫がある。其處から見渡すと、向の松原から、直ぐ目の先の菅沼の家は手に取るやうて、短い疎らな姫垣を越して、庭から座敷から一目に見える。新次が今何心なく其處まで來た途端、不意に其庭の端れ、垣に寄つた間近の處で、

「お孃樣、貴方は本當にお可愛相てす事。傍て見て居る私てさへ我慢が出來ないやうに思ひますものを、いくら何だつて那麽にお虐められなすつては、一日と最う御辛抱が續くまいと思ひますわ。」

と丈の低い、横に肥つた下婢らしいのが、傍に立つて居る若い細面の婦人に向つて言つた。

「いゝえ、私が惡いのだから、」

と重い沈んだ聲て答へて、伏目になつて、ぢッと前のすがれ掛つた秋草を見詰めて居る、其顏をゆくりなく見て新次は驚いたやうに目に留めた。かねて知つて居る、玉枝といふ菅沼の娘で、新次は此人が、未だ娘で此家に居やうとは全く思ひも寄らなかつたのである。

お孃樣、と女中が言ふからには未だ定まつた人が無いのと見える。それは兎に角、此窶れ方は何うてあ

らう。晴々しい昔の面差は全て無くなつて、さも〳〵憂愁に閉ぢられたやうな、我が見ぬ中に何のやうな事があつたのであらう。

八年以前、未だ此娘が十六の頃、下の鏡に庭の櫻の日射に驕つた酣の春であつた。つい此先に、乳母のお種といふのが縁付いて居る家がある。其處からの歸りがけに、新次は脇を通りすがつて玉枝を見た事がある。新次は其時ほど此人を美しく見た事はなかつた。水の上に、堤を彩つた若草の上に、櫻の精を其儘の、裾から上の裏若い姿を見せた。霞に咽ぶ空の色。花の諸枝、水の影、時に鶯の聲を餘所に、遠く彼方に在郷唄の、節を閑長に水を隔てゝ、

花がエー、蝶々かナアソレ、
蝶々が花かエー、
來てはちら〳〵ナアソレ、
迷はせるエー、

時も春、人も春、春を溢れた花の姿を、我にもあらず醉心地に、目を奪はれて佇立んだ時、玉枝は人に呼ばれて急がはしく引返して行つた。振の袂が風に零れて、襦袢の色の飜つた拍子に、手折つて頭に挿して居た白薔薇の花が、髮を離れてはらりと水の上に落ちたのを、とも知らずはた〳〵と裾を返して奥へ入つて行つた。新次は跡に、水に漂つて居た簪の花を、風が自づと足元近く吹寄せて來たのをも、常の態には見なかつた。新次は其花を持つて歸つて來た。

暫くして新次は上京した。修學の忙がしさに、何も知らず幾年かを過ぎて了つたが、以前と變果てた俤を再び此處で見やうとは、全く思の外であつた。

新次は尙も、ちッと其方に目を付けて居たが、不意に何か心付いたやうに、左手の路を足早に、森を向ふへ突切つて行つた。森の彼方は村道で、其取付の松の木陰に、御茶漬の看板を出した、中の薄暗い、煤ぽけた茶店がある。乳母のお種が緣付いた先は其處なのだ。

何喰はぬ通りすがりの顏で新次は衝と中へ入つた。折節客もなく、脇の土竈の前に、四十五六の色の黑い、顏の丸い古女房が、火箸を片手に頻りに中の麁朶を鹽梅して居たが、顏を振上げると、吃驚したやうに、

「あれまア、坂の乙ちやんてはねえカね。」

と火箸を捨てゝ慌たゞしく、

「能く來てくらしつた。さア、まア上つてくらつしやい。今日は何處へ行かしつたゞね。」

「なに一寸散步に出たんだが、前を通り掛つたから、茶を一杯貰はうと思つて寄つたのさ。」

と新次は輕く、其まゝ前の床几の一つへ腰を掛けた。茶よ煙草の火と、お種は取持顏の、くるくる立廻りながら、

「はア、然うてがすかい。何にしても能くまア寄つてくらしつた。あれ、何故上らつしやらねえ。其處は餘り端近かてねえかね。」

「なに却つて此處が可い。」

と新次は居心よげに、煙草を取出しながら、

「何うだな商賣は。」

「はい、お蔭樣でまア何うやら悠うやら遣つて居ますだ。有難え事に皆が贔負にしてくれますて、惡い日は一日も喰ひましねえだよ。」

「然うか。それは何よりだ。」

と二つ三つ當座の挨拶の、切れ目を機に何氣ない態で、

「時に種、今其處の菅沼の家の背後を通つたら、彼家の總領娘の庭に出て居るのを見掛けたが、何かえ、彼の娘は、未だに何處へも嫁付かずに居るのかい。」

「はア彼の孃樣かね。」

と種は首肯いて席を近く、

「彼のお子は可愛相に、詰らねえ者に欺されやしてね…………。」

「なに欺された？」

「はア、丁度お前樣が、東京へ修業に行かしつてから間も無え事てがしたよ。京都から來た若え畫工て、暫くの間菅沼樣ん處へ逗留して、畫を描いて居た合點の行かねえ男があつたがね、孃樣其男にうッかり欺されて了つただよ。鎮守樣の祭の晩だつた。家の金え持出して、孃樣其男と突走つただ。」

「お、彼の娘が、」
と新次は我にもあらず膝を進めて、
「む、それから、」
「それなり三年ばかり音信もねえ、全て行衛が知れなかつたゞ。四年目の春になつて、阿父様が會社の用で、急に大阪へ發つて行かしつたが、彼方で思掛げなく孃様に遇つて、直に捉まへて歸つて來さしつた。何でも男には疾うに捨てられて、情けねえ身になつて居さしつたさうだが、歸つて來さしつた姿を見ても、甚麽に苦勞をさしつたかゞ、余所ながらも思遣られるやうに、痛々しく變つて了はしつた。今ても美しにや美しいがね、お前様も知つて居さつしやる、以前の影は全て有りはしましねえわ。」
と言つて稍調子をかへて、
「それでも阿母様が繼母でなかつたゞら、まだ〳〵息をつかしッたらうがね、然うでねえてさへ苛責まれて居さしつたのを、其事があつてからといふものは、弱みを附け目にいびられ通して、孃様一日だつて泣かねえ日は無えといふ話談でがす。心柄とは言ふもんの、若え身空の分別も付かねえ時分にやア、余所にも無え事てはねえてがす。いつまで如彼して置かつしやるだが、他人事ぢやアあるけんど、俺等可愛相てなりましねえよ。」
「ふむ、那樣事があつたのか。」
と新次は腕を組んで、伏目に稍暫し、何か思入つた態に見えたが、聽て談話を外の事にして、間もなく

そこ〳〵に切上げて其處を出ていつた。

（三）

それから半歳ばかり過ぎた後の事であつた、夜に紛れて、新次と玉枝は手を執つて村を出奔した。丁度兄の與十郎が、新次の爲に分家の準備を整へて、隣村の豪家の娘の、何とかいふのを配偶す手筈が出來て居た時、玉枝は又繼母の發意で、あらぬ方へ輿入れの談話を强付けられた時であつた。人目を忍んで、二人は村を跡にしたが、二人は併し、飽まで未來の光明を望んで、闇にも隱されず心に勇立つて居た。今度こそは、と新次は最期の成功を確信して、玉枝は又此人に憑つて、今迄の日を何のやうにも見返して遣らねばと、互みに心の急がれる東京を指して行つたのであつた。

前號には土井晩翠氏に新體詩を依賴したことを豫告してあつたが、氏は近來身體が少し勝れぬので期に間に合ふやうに筆を執ることが出來ぬから、何れ其中何かやらうとの返事があつた。

尙本號に掲げた吉野臥城氏の「天の岩戸」は氏の苦心の作で確かに詩壇の注目を惹くべきものと思ふ。切に讀者の精讀を煩はしたい。



信樂

蒲原有明

靜かに眠りて、寢魂の夜の宮にも事あらで、
甚爽らかに青みたる晨に寤め、顧れば、
傴僂に似たる昨の日は過ぎ行く「時」の杖に縋り、
何方去にけむ、思ひ屈して惱みし我も心解けぬ。
零れし種子の奇しきかな、わが生荒める确にだに
惠み齎らす信樂の朝の一つや、何物も
これには代へじ、「慈悲」の御手は秘むれど、銀の衡、
金の秤目その極の星に懸れる身の錘。

實に靜まれる日の朝け、曾ておぼえぬ悦に
痩屈み冷えしわが胸は、雪消に濕り、冬過ぎて、
「地」の照斑と蒲公英の花芽ぐむ外面のつつましき
春さながらの若萌に、きざす祈誓ぞほのかなる。

何とはなしに自ら耳を澄せば遠方に
浪どよみ風の戰めける音をし尋むる心地して、
憧がれわたる窓近く小鳥轉じて、まぎれむと
惧るる隙に聞きわきぬ、過去遠々の代をここに。

かくて浮ぶるわが「宿世」——瞳徹れる手弱女の
頸をめぐる珠飾、さゐさゐとして鳴響き、
琉璃はささやく紅玉に、（さあれ「苦」の緒の一聯）、
綠にはたや紫に、愛の、欣求の、信の顆。

嗟、この朝の不思議さを翌の夕にうち惑ひ、
わが身をさへに疑はば、惡風さらに刧の火を
誘ひて行手塞ぎなば、いかがはすべき、弛まるる

腕は喝く脣に淨水掬ぶ力なくば。

あるは曲れる「癡」の角にいと鈍ましき「慾」の牛、
牧場に足らふ安隱の命に倦みて、すずろかに
埒のくづれを踰えゆかば、星も照らさぬ夜の道、
後世の善所を誰かまた鞭うち揮ひ指しめす。

あるは木强の本性に潛む蠻夷の幾群の
集ふやとばかり、われとわが拓かぬ森の下陰を
危ぶむ其日、襲ひ來る彼の殘逆の矛槍を
血ぬらぬ前に淨めなむ備へのわれにありや否。

悲願の尊者諸薩菩よ、ただ三界に流浪する
魂を憐み、御心にかけさせたまへ、ゆくりなく
煩惱盡きし朝に遇ひて、今日を捨身の首途や、
遍路の旅に覺王の利生をつれに垂れたまへ。



天岩戸

吉野臥城

常夜 一

「灯せ」と男の神嗄聲高に、
常夜眞洞の奥より呼べば、
頰白の童部は石火を撰りぬ。
丁々戛々地心にひびき、
稻妻なしたる狹青の光、
微風芦原幽かに照し、
枯木杉葉に火は燃え移り、
話にかがやく暫時の燭。

「金流の光燿奈落に消えて、
二たび刧初の渾沌きたり、
か黑き帳幕に裹みおほひぬ。
愁歎。」と女の神窶れし頰に、
涙を流して俯向く吐息、
男の神美豆良の亂れを正し、
鬚掻き撫づるに玉亮々と、
火照りの眸、神さび姿、
「歎きそ、燦たる光明ぞ見ゆる。」
「いづこ」と涙の睫毛を振るに、
童部は「あれ、あれ、灯の近づくよ。」
げに闇分け來る深紅の火の穗、
焔は流れて草木に、水に、——
萎えたる野花に、聲なき鳥に、
晝告げがほなる一瞬一歩、
過ぐれば餓えたる魔が暗闇は、
墨羽翩鋭に地の身に逼る。

「在すや、内に。」と灯高うかかげ、
豫言者めきたる面にこやかに、
神々率入れば、「汝は思兼、
よくこそ、いざ。」とて手を執る灯影、
衣の爛りにほと瞬くよ。
「驚破こそ魔が氣にゆらめく燭、
可怖や。」と童部のふためく聲に、
「噫喧、燭はいきほひ添ひて、
熾に燃え立つ。あすの日祝へ。」
まらうど神達ゑわらひ宣るに、
火の穗はさやかに眞洞に照らむ、
一夜に老いたる神面皺も
よまるる悲しさ。――はた嬉さに、
女の神ゑまひの涙と溢れ、
「燭を生命の常夜眞洞、
消なばの憂ひに魔の氣を厭ふ。
恐怖は闇路に、希望は愛は
光明の道にぞ高照る金華、

慕ひて歇まざる心の喝き、
天地をし蔽ふ毒煙毒霧、
晴れなむ明日こそ幸日よと
おもふも涙」と、ともし仰ぎぬ。
「そも道理や」と膝うち進め、
「狭蠅なす魔はこをどり叫び、
よろづの禍津日蚺蛇を驅りて、
常紅なる花の香ぬすみ、
天の眞名井の清水を呪ひ、
麻理のけがれに舌打つさまは、
醜黄泉國内の黑花陰に
つどへる赤裸のわざはひびとよ。
常夜終焉の世と化しもせば、
いづこに覓めむ、生命の糧を。」
「されば」と愁ふる一個の神は、
「災殃の源を探りて斷たば、
蚺蛇は潛めむ、影を。」と慨く。

「源は」と男の神問ふ、思兼
「開きませ、常夜災殃降るは、
天照る御神の岩屋戸がくり。
よろづの花枯れ、百千の鳥の
囀り止みては六合暗く、
耕す神々こころも迷ふ。――
憎きは須佐之男、魔の誘惑に
醉ひ惚け、雄心くるほひ荒び、
常花聖苑の花折りかざし、
艶女よささやけ、琴かなでよ。』と
八拳の長鬚香を吹きみだり、
狂ひ狂ひて營田の阿離ち、
溝を埋めて魔が曲うたひ、
「光り消せ」ちふ魔王の聲に、
驅け來る斑馬空手に捕へ、
雄たけびたけびて逆剝ぎに剝ぎ、
「見よや」と御神の忌服殿の。

神御衣織らせる御機の上に、
屋の頂つらぬき打ち投げ入れぬ。
驚く織女の神去りますや、
御神は歎きの御聲も震ひ、
『御機は汚れぬ、須佐之男はや。』と
かがやく瞳も愁を帶びて、
去にます玉歩に大地なゐす。
見る見る天地眞闇むに、いよよ
地震ふる。――雉子女、頻鳴き叫び、
しば泣き叫ぶもいよいよ暗う、
ああ高天の原、葦原の國、
光明し沒れぬ。――魔が領とこそ
なりぬれ。――神だち雄心おこせ。
ここにし今來む、神手力男、
ゐわらひ宇受賣と石凝度賣ら
集ひに集ひてよき神ばかり、
光明の明日を。」と座を瞰まはせば、
火の穗は煌晃に烟を喚びぬ。

二

「さらば集へむ神八百よろづ、
何處こそよからめ。燭を執れ。」と
男の神立たせば、神手、力男、
松炬うち振り足疾に來り、
「天のやすの河原神だちつどひ、
うれひに沈む。」と眞洞を覗き、
「や、思兼もか。――男の神しばし
待ちませ。議りて後出で立たむ。」
續きて三個の神々入れば、
火の穂は萬燈華やぐ如く、
暗きに怖ぢぬる心を和め、
紅潮しくる面曲に照らふ。

「議るは、聖光明還さむ計劃、
思兼、汝は思ひはかれよ。」
「さば、吾は常世の長鳴鳥を、
高鳴かしめてぞ黎明呼ばむ。
鍛人は、河上の天の堅石と、
金山の鐵とに劍をきたひ、
美須麻流の玉は玉祖に、
石凝度賣、汝は鏡を作れ。――
布刀玉、汝は天兒屋と
馬鹿男のうらなひ、御幣ささげ、
詔戸言詔れよ。」と言ひ終らぬに、
「灯を」と呼べば「咒へ」と應へ、
荒鷲羽吹きて過ぐるが如く、
夜嵐颯々火の穂おそへば、
殘れる松炬明まだ滅す。
「鷲破こそ魔が氣に消えぬる燭、
可怖や。」と童部のふためく聲に、
「噫喧、神火は消ゆとも消えぬ、
見よ。」とて杉葉を火種に加へ、
ふと吹く倏忽燃え立つ火の穂、

「恐怖は心に魔を生むものぞ、
呵々。」と笑ふに、ゑわらひ宇受賣
ゑみ傾けたる優立姿、
火照りのところ眼に圓居を見やり、
「妾こそ戯咲の舞せめ、さらば
神々ゑわらひ、咲ぎに笑ぎ、
高天の原さへゑらぎ動まば、
御神もゑみなむ。」「言ふにや及ぶ、
この手力男は戸掖に忍び、
『河原のゑわらひ何ぞ』と呟き、
岩屋戸細目に神見しまさば、
手力籠めたる力の無言、
引き出しまつらむ。——布刀玉、汝は
尻久米縄おぞ控き忘れな。」と
雄猛び、枯木を松明に折り、
火ともし分ちて、「神々執らせ、
天の安河へいざ急がむ。」と
外に立つ。とろりと夜嵐和ぎて、
静かの虚空に焔は照りぬ。
彼方の闇なる群衆は、「曉よ、
ああ近づきぬ。」と歡ぶ聲に、
男の神ほほゑみ浮べて立てり。

獨白

一

思へば、父の宮を出で、
依しの隨に天の原、
日の大神と仰がれて、
治し食ししも昨日かな。

今は岩戸のこもり居に、
衣の汚れを濯ぎつつ、
心を澄す天の香の
起居も罪をかしこむよ。

女神月讀、かゞやける
面曲は永久の幸に滿ち
淸き夜守の事もなく、
常若姿、――玉の胸。

露の眞光したたれば、
かうべもたぐる花小草。
不盡の樂に手觸るれば、
淨きにかへるさざれ水。

白き眠は野に、山に、
戀の幸夢人の子に、
靈の靜歌声の葉に、
もたらしめぐる輕歩み。

星の宮居に新生の
少女の眼を讚へては、
「天の靜寂の友となり、
地をな戀ひそ。」と過ぎましぬ。

男神須佐之男、性荒く、
泣きいざちては魔をよばひ、
蒼海原の領を捨て、
神やらはれの放浪や。

一日天階とどろくに、
見れば、八拳の髭神は、
國を窺ふかたちして
奇るに、弓腹をふり立てつ。

「邪無し」と聞くからに、
天の眞名井の宣誓、
美豆良眞珠のたまゆらも、
惡しきに墮ちぬ證言。

ああ醉ひ惚けの魔よばひに、

荒ぶる性の毒の杯、
嘗めては、清き男の眼も
鈍き曇ぞ帶びにける。
大嘗殿を汚しては、
靈の情うしなひつ、
麻理吐き散す醉ひしれに、
平和のろふ醜のわざ。

二

あゝ天地のとどきて、
泣きいざつるは、——須佐之男の
神夜良比にしやらはれて、
今し落ちゆく聲ならむ。
圓う國食す月讀の
清き心を思ふにも、
底つ根の國放浪の
胸和げと祈る情。
はた浮び來るまぼろしや、
紅血の馬の蹄の火、
天つ織女の神去りし
さまを思ふに堪へぬかな。
あゝ天地の靜りて、
怖ぢ憂ふるは、——神々の
闇の災ひやらはむと、
今し灯ともす聲ならむ。

一

異光清き月讀の
月夜の國を思ふにも、
國の汚れ氣とく晴れて、
照りかがやけと祈る心。
はた浮び來るまぼろしや、

忌服殿に火の穗して、
震ひはためく雷の
あらびを見るに堪へぬかな。

聞け、槌の音。――飛ぶ光、
戸の隙掠め飛び去るは。
聞け、神の聲。――照る光、
戸の隙染めて過ぎゆくは。

須佐之男ゆゑにかしこみの、
胸亂せとや。――さに非じ。――
汚れやらふと神々の、
清き議につどふらし。

花にほはぬに花思ひ、
鳥の鳴かぬに鳥おもふ。
今、常夜に歎くらむ
蒼生を思へば、涙し流る。

照明

一

竪篌かなづる優河姫の、
常白光の長裳を曳きて、
白金小櫛に星花かざし、
光明を讃へて、やまず流るゝ
天のやす河は久遠の樂所。
河畔につどひて常夜忘れ、
光の白流にしばし見惚れて、
樂聞きすませる群衆のひとり、
金征矢きらめく光の影に、
默思の眼あげ、「見よ、活光、
神火ぞ近づく、あな嬉しさよ。」
「眞先に立てるは、雄の手力男。」
「火照の若面にゑみ滿ふるは、
おもひかねの神。」「女の宇受賣も」と、
他より他にし傳ふる聲に、

どよめき渡れば、長鳴鳥の
ほがらの一聲希望を告げぬ。

くしびのみ聲に無言の群衆、
流の樂の音靜寂を搖り來。
靜肅に進みし天見屋と
布刀玉、祭壇秡ひ淨めて、
並居の神だち容りす。
見よ、今、眞男鹿の肩內拔に、
拔きたる薄葉の銀杏葉骨の、
三絃かなてば靈音を生まむ
薄骨、——天の波波迦に燒けば、
そのひびたてにぞ合ふ、吉き兆、
神ぶみ溢れぬ、河原花の灯。
根こじに掘じ來し五百津眞賢木
天の香具山に繁れる如く、
さながら樹てては、瑞葉上枝に、

八尺の勾璁いほつ眞玉を、
中枝、八咫の鏡かくれば、
青繁葉山に白虹わたり、
雨晴虚空の照る眩さや、
群衆は思はずかうべを垂れぬ。
綠葉下枝に、白はた青の
丹寸手を取りして、葉の颯然に
衣ずれ聞ゆる神靜けさや。
布刀玉ささぐる布刀御幣に、
灯の照るたふとさ。——天見屋は、
聲おごそかにぞ詔戶言詔らす。

靜寂をやぶりて、長鳴鳥の
高鳴く一聲二聲すれば、
灯の影薄れて河の面白み、
靄霧搖るるに星は夢みぬ。
鳴聲まねびてひとりが鳴けば、
拙き鳥叫び舟にもおこる。

ゑわらふ群衆のどよめき渡り、
どよめき渡りて暫時のどめば、
ゑわらひ宇受賣の艶なる姿、
嬌羞俯目にそと現れて、
眞白のただむき、天の日影の
蔓長葉草を手繦に結び、
眞榊著鬘みどりの髮に
粧へる貌は、皐月美姫の
翠微のうちより生れたる小百合。
風にも堪へざる玉歩を移し、
ふと目をあげたる美しゑまひよ、
何にか譬へむ。――と見れば、忽ち
手草に結べる小笹葉ふりて、
岩屋戸間近に伏せたる虛筩を
踏みとどろこしぬ。そよ神懸り、
胸乳を搔い出て裳紐のゆるび、
柔股あらはの亂れし姿。――
眼尻をおし垂れ男のゑわらへば、

群衆のゑわらひ大波と搖れ、
神々ゑらぎに笑み崩るれば、
高天の原草ゑわらひ靡き、
山河動みぬ。――鷄また鳴きぬ。

二

神々ゑらぎに笑み頽るれば、
山河どよみぬ。――雞高鳴きぬ。
戲咲の舞する宇受賣は、逾、
胸乳、裳、柔股かいあらはして、
艶めく歌聲ゑらぎに溶くる。
神やほよろづの笑み頽るれば、
山河動みぬ。――鷄また鳴きぬ。

高天の原はや薄ほの明り、
河原小鳥のさひづり聞え、
花の香めぐるに、天の岩屋戸
細目に開けて洩れづる光、

露にたゆたひ霧染めなしぬ。
内より宣らすは、日の神、「吾は
慍のこもり居、國中は暗う、
葦原吹く風さこそと思ふに、
宇受賣よ、汝は何に樂ぐや。
亦、八百萬神のもろもろ咲ふ。」
「ここには君より美き神在して、
常照る幸日の嬉しさ。——妾も、
はた八百萬神も諸咲ふ。」
「折こそ好けれ」と、天見屋と
布刀玉、神鏡指出まつれば、
鏡は覺なし照りかがやうに、
浮ぶは、たふとき大神姿。
日の神「奇し」と思して、逾
御戸開け正身出して見ます、
高照る光の照る神姿。
戸隱れ立ちたる雄の手力男、

ぬと現れてぞ御手執りまつり、
御手引きまつりて出し給へば、
「何處へ率て行く、放て。」と、天の
宇受賣を顧み、「美き神いづこ。
——汝の姿は。」と恠みませば、
「宥させ、日の神。——御神は玆に、
御神は君よ。」と、手草を捨てつ。
目くばせよろしく布刀玉立ちて、
御神の後方に、尻久米繩を
控きはひ度して、「日の大神よ、
是より内にな還りたまひそ。」
「宥させ、日の神。——御神は玆に、
御神は君よ。」と、姿を正し、
手襁を切り棄て、蘂鬘捨てつ。
「御神のいでまし讃へよ、仰げ。」
男の神告らすに、咲笑やみて、
常春香花の神ほほゑまひ、

宇受賣、布刀玉、手力男らの、
御前にひれ伏し額づきませば、
神八百萬も皆ぬかづきぬ。
「御神のいでまし讃へよ、仰げ。」
群衆のよろこび、豐葦原の
中つ國搖り、高天の原の
み山にこだまし、河に響きぬ。

日の神ほほゑみ、「あな永劫に
幸かれ、淨かれ、あな常磐に。」と
歩ます足の音に、「時」甦り、
「晝」生れ、「夜」生れ、「四季」整ひて、
花ゑみ、鳥鳴き、靈の火活きて、
人に「戀」ある世の朝ぼらけ、
天の香具山の雲くれなゐに。
永遠の樂所ゆ樂の音湧きて、
妙なるしらべに、――長鳴鳥は、
深紅の冠をふりて歌ひぬ。――

群衆のよろこび光と溢れ、
ああ大海原の青潮と搖る。
「御神のいでまし讃へよ、歌へ。」
「よろこべ。」「歌へよ。」「いざ、歡呼せよ。」
群衆の讃頌金流と溢れ、
ああ大海原の青潮と搖る。

(午の歲二月作――完)

歌

尾上柴舟選

森川葵村

くちなはのまとへる鞭をふりあげて常闇の野に立つは吾なり

香具山は君ますところ白雲を振り袖長う掠めて過ぎぬ

うづくまる獸のごとき礒岩を目覺め起つやと杖うちて見る

龍宮に藤太は醉ふて朧夜の遠鳴りかすむ春の潮かな

櫂とりて灣をよぎれば磯疊るなかにも桃の君が家を見し

貝拾ひ後れたまひし君を待つと杖もて書きし歌は見せじな

うしろより瞼おほはれ春の雲の吾をつゝむと見し袂かな

松毬のしみゝに落つる松山に鶴と遊びぬ寫經の暇を

公達のとよみをあとに鞭あぐる競馬の人に花吹雪する

長谷白眠

卓のうへの匂菫に春の月影さす夜なり眠らてあらむ

紫の菫にほそき夕小雨柄洩わびては行く春の人

戸に凭りて夢物語する君は鳥のなくをにくみたまひぬ

雪の日や森の古塔の影のせし湖はさびしうたそがれにけり

罪怖ぢて戀いなむ子は黒衣の神に追はれぬはやされながら

吉村葩人

春の風千里をへだつ草の家の窓に倚る子の夢さそひ來よ。

曙やうすむらさきの靄の幕鹿の子しぼりとさくら咲く山

くれなゐの油のごとき波こえてさくら七島まろらに浮ぶ。

春の日や椽にかひたるうぐひすの瘠せしを人の呪ひと思ひぬ。

甲斐駿河まろうかさなる山の上に朝の富士見る君とならびて

奥にこもる障子に鈍き日の照りに春怠りの寫經すゝまぬ。

佐久間霧江

黒百合はわれにふさはむ乞ふらくは野行き山行きもとめて來ませ。

騎士の夢美姫の戀もつ伊太利はたづねまほしき詩の國かな。

死なずしてわれなほかくと知る夜より惡夢胸さす一人はあらむ。

薙刀は銀の蛭巻駒は青きみとならびの出陣なりせば。

鈴木静

おこたりの日は雨降りて落花しぬ歌おもふ夜の涙のやうに

吉田掬影

傷手負ひて逃れかへるを古里の山よ小川よわれ迎へずや

大野らや駝駱にのれる一群は城趾過ぎぬ太古のさまに

荒井白翠

宵月は合歡のはな咲く裏の戸に行水つかふ姉をてらしぬ

しぶきちるゆふべの磯に濡して泣く子すかして夫待つ身かな

小林狂霞

今日もまた羊追ふ子が母を戀ふと笛吹くを見し夕日の丘に

寒行の御僧七人鉦うちて霜の大路を經誦し行くも

さち郎

肉慾に汚れし唇ぬぐひあへず聖愛謳ふ詩人惜さかな

村松蓮夢

村の宵端歌自慢の一群は花の茶屋出ぬ下駄からころと

小谷寒雅

あるに堪へぬ思の此身このまゝにはてたらむとも思ふ春かな

わりなくもこはるゝまゝに參らせし夕のうたに君はなど泣く

君ばかりなさけもつ人世にあらじとたのみ來し身のはだ裂く風や

若麻長風

駒なめて行く長安の柳路紫衣は杜子美の君なるらしも

獅子の檻にことさら投げし花束をとりてと人はわれに強ひぬる

朝ばれを白鷺おりぬ初夏の森の中なる湖畔の塔に

湯の山やおぼろ／＼の花明り谷の流れの笛のやうなる

天地のおごり極めて春行きぬみまかりませし王者のさまに

春月はどくろ叩きて黒人等が亂舞す上に白うもさしぬ

いさゝかの雨に耕牡丹かたむきぬ戀につかれし乙女と見えて

歌反故を鶴にたゝみて與やりぬ君待つひまの紅梅の窓

我門の柳の小枝をりて去る罪も興ある春の宵かな

白毛のやうに降る淡雪暖うともしに映ゆる雛の町かな

籠（春）

繞石選

大籠に春の百鳥囀りぬ　夏柳

籠の鳥放ちやりけり風光る　同

鶯の來ては籠のと囀りぬ　同

種おろし籠の中なる種袋　同

一籠の嫁菜あけたる板間かな　同

春雨や灯を剪らしむる籠行燈　泡鳴

若草や籠にふせある鶴の雛　方外

梅林にひそむ童や囮籠　蕪雫

摘草や土筆たんぽゝ籠の中　掬水

老の身の籠編む紅梅日和かな　拘骨

摘草の籠置てある土橋かな　三餘

搖籠に稚兒暖く眠りけり　華水

籠を干す蠶の村の遲日かな　石羊子

鶯の房美しむ丹塗籠　四綠

茶摘女の籠をおろして語りけり　同

美しき籠賣る花の小茶屋哉　壺天

籠さげて船を下り行く潮干かな　同

潮干して獲物を配る小籠かな　同

行春の籠に溜りし句屑かな　鳳梧桐

芹の根のはみ出して居る小籠哉　同

竹籠や眼にうつくしき雛の菓子　同

植ゑ殘る芋數へけり籠の底　葦水

雲に入る心も無くて籠の鳥　同

若草や籠を出しやる鷄の雛　同

摘草の小さき籠を求めけり　紫殘

芹賣の籠新らしき雫かな　同

花籠の山吹散りぬ温泉の二階　同

鶯の籠の埃や春浅し　磨劍

摘草や風呂敷の土筆籠の芹　同

花籠や灯紅き雛の棚　同

籠ながら根芹の泥を洗ひけり　同

屑籠の反古も賣りけり爐の名殘　同

下萌や籠に遊ばす雛いくつ　天仙

白魚や美目盼たり籠の中　同

山迫る谷の辛夷や籠渡し　同

籠の中の虫おぞましき茶摘哉　同

掩とらぬ籠の小鳥や春寒し　同

野茶店の籠に番の雉子かな　寒骨

駄馬の籠獨活てあり島宿場茶屋　同

籠伏に闘雞伏せて庭の春　同

落椿小籠に拾ふ寺門かな　同

雪解川瀬々の蛇籠に波光る　同

茶乙女の籠に映ゆるや春夕日　同

籠に植ゑて春の七草咲きにけり　初聲

語を解す籠の鸚鵡や春闌けぬ　同

燕の糞落し去る菜籠かな　同

凧の糸手繰り收めぬ籠の中　同

籠拔けに人立つ辻の日永かな　同

土筆摘む芹つむ稚兒が手籠哉　同

五月分課題　桶(夏)　四月十五日限

六月分課題　桐の花　五月十五日限

應募俳句は東京市本郷區曙町十一番地大谷正信宛の事

川柳

題、自殺日月星辰、花　三面子選

兎も角も自殺と聞けば哀なり　目黒　痩株

若後家の目立たぬ樣な花を挿　大坂　雲蜓

切先をジッと目詰める九寸五分　下谷　丁束

身投した女は屹度美人なり　同　同

厭世家死ぬる相手を探して居　同　同

新しき塚に山茶花咲いて居る　同　同

お月樣の兎妹に講釋し　同　同

花百首其五を錄すあとは無し　同　半面子

花を賞め根を掘つて食ふ耶蘇信者　同　同

チラ〳〵と花散りかゝる庇髮　同　同

哲學のなまはんぢやくかドブリやり　同　三面子
今生(こんじやう)の鐘は上野か淺草か　同　同
御家風のあはれは花が二ッ散り　同　同
褒められもしようかと小僧死んで見せ　同　同
行暮れて菫咲く野に星一ツ　同　同
入る月にアレ〳〵と指を差し　同　同
夏の朝日寢ても居られぬ樣に出る　同　同
クリニック櫻の下へ埋もれる　同　同
花の雨氣違どもをたゝき出し　同　同
お腰元書生踏まへて花の枝　同　同
五月分題　豆腐　硯蛙

打起黃鶯兒　勿令枝上啼
啼時驚妾夢　不遣到遼西



電車市營論

松井柏軒

電車は猶ほ汽車の如く、公道を占有するに於て。公共的交通機關たる性質に於て。當然國有又は市有と爲すべきもの也

今現に世論を沸騰せしめつゝある三電車の如きも。正さしく東京市に於て所有し經營するを當然とす

電車に對する特許命令第三十九條に於て『國又は公共團體に於て公益のため軌道其他營業上必要なる物件の全部若くは其の一部の專用又は買收を爲さんとする

ときは會社は之を拒むことを得ず。但し之に對し相當の補償を求むることを得」とし。第四十條に於て。買收の場合には年率七分を以て前五ヶ年間の會社の純益平均額を除して補償金額を定むることを規定せり。三電車會社は明治八十五年六月卅日まで營業の特許を有するに拘らず。東京市が何時にても之を買收するの特權を有せること。此の命令書に於て瞭然たり。蓋し電車の如きは。當然市の經營すべきものにして假りに私設會社に其の營業を特許したるに過ぎざるが故に。法律上別に市有に異議の生ずべき餘地あること無し。若し夫れ原則として民業を主張するものあらん乎、其の根本思想陳腐に過ぎ。學說また餘りに舊式なり。素より論ずるに足らず

更らに利害の點より視るに。東京市は市區改正費として年々約百万圓を支出し。而して其の道路を擴張する處多くは電車開通の處ならざるなし。市既に會社をして其の公道に鐵軌を敷き電柱を建て。其の上に危險なる電車を駛走せしめたる上。尙ほ少からざる市區改正費を投じて。而して市民交通の便宜といふの外。何等の利益をか得るや。試みに左の四表を一瞥せよ

卅八年度三電車納付通行稅

市街鐵道　金二十七万八千二百十八圓七錢
電車鐵道　決算報告書に明記なきも大約二十五万圓なるべし
電氣鐵道　金三万六千七百二十圓九十錢
計金五十一万四千九百卅八圓九十七錢

卅八年度三電車東京市上納金

市街鐵道　金九万千五百卅九圓二十六錢
電車鐵道　金十一万千八百十二圓卅錢
電氣鐵道　其の株主配當金年七朱に達せざるを以て皆無
計金二十万三千三百五十一圓四十錢

右書中電車鐵道の通行稅を大約二十万圓と推算せしに卅八年度乘客數

市街鐵道　五四、一四三、七〇〇人
電車鐵道　四六、一八八、九三一人
電氣鐵道　六、六九八、三三八人
計一〇七、〇三〇、九六九人に據る

即ち東京市の所得は、通行稅として國庫の收入する其の半にも及ばざる也。市民が電車の乘車賃引上に就

て大なる反對を表し。市民自個の便利を支持せんとするも洵に由緣ありと謂べし

然るに之を市有となさん乎。第一年に少くも左の利益金を得べし

卅八年度三會社利益金

市街鐵道	八一〇、六八六圓四〇五
電車鐵道	七七一、三一八圓四三五
電氣鐵道	一三〇、五二九圓二二一
合計	一、七一二、五三四、〇六一

是れ三電車が純益金として收納するものにして。正さしく市の所得に移るべき也。第二電車の乘客は月を追ひ年に從つて增加するの一方なるが故に。此の收入は將來益す增加す市の財源としては最も確實にして又最も有望なる者といふべし。現に三電車の總資本金二千七百万圓。內拂込額千七百九十万圓に過ぎざるも。其の株劵時價三千三百五十八万餘圓に上れる所以は。將來甚だ有望なるが故に外ならず。第三之を市營とすれば(一)全線路を整理して不要の個處を廢し、且つ大に線路を延長し得。(二)會社重役以下の職員に大節減を加へ。(三)市營を以て水力電氣を作成し。以て電力費用を節約する等の利益あり。隨つて收益の大なるや知るべきのみ。

夫れ市は築港。下水。道路改修。各市場整理。公會堂建設等。爲すべきの事業甚だ多きも。其の財源に窮するがため未だ着手するに至らず。若し電車を市有として其の收益を財源とせば。此等の事業總て着々成功すべし。東京市將來の發達及び利益よりするも。電車を市有とするの必要なる。多辯を要せずして明白ならずや。市民は唯だ市會一片の決議に滿足せず。自から進んで之を實行するの措置を執らざる可らざる也。

次號の公論欄には河津暹氏の「社會主義功過論」なる論文掲載せらるべく、尙續々經濟學者及び社會學者より視たる社會主義論を紹介すべし



三文文士の末路

桑園生

嚴めしき表裝や、華やかなる文字、何れ由ありげなる標題に、繙き見れば多くは羊頭の狗肉、覆瓿の榮を値せざるものやある、文明の餘澤鉛塹の容易なる爲とはいへ、亂著亂作蓋し今日より甚しきは有らざるへし、亂著亂作猶ほ恕すべし、沽らんことを求むるの極往々にして血燃え情熾なる青年男女の弱點を射て、之に投ぜんとするものに至ては斷じて許すべからず、一面教育を盛にし、理性を進め、情操を練り、勉めて國民の趣味を高上せしめんと求めつゝあるに、斯ゝる徒輩をして傍毒液を散布せしめ、腐蝕せしめつゝあること、吾人實に蹙眉を忍ふべからざるなり、其文を見れば蕪漫、其想を叩けば空索、彼等は已に文士の俤を有せざるなり、彼等は唯此世に毒液を散布すべく生れ出てたるデヴィルのみ、

左あれ靜て思へば左まで介心するにも當らざるべきか、何となれば彼等は時潮に取り殘されたる遺物のみ、急坂を下る明治思想の轉進に伴ふこと能はずして、徒らに壓搾せられ驅逐せられ、今や將に埒外に放たれんとして力を限り其一角に取り着き居るのみ、寄る邊なきさの行き倒れもの溺死の苦痛に沙を摑めるのみ、砂として摑まれたる青年男女の不運は言ふべくもあらず、されど、摑める彼等の命脈そも幾轉瞬の間なるべき、只斯かる溺死の彼等に對して靜に其經歷に想倒すれば、其處に又一掬の涙なくんばあらず、彼等は如何にして生れたる、餘りの聲の美しさに未だ見ぬ戀に憧れ出てたる趣なからずや、

憶ふに、世は德川の末期、明治の初年に亘り、淋れ果てたる文星の光は、遂には憐れを一假名垣翁の御誂案文云々の看板に止め、此頹勢が逍遙博士を促して新に小說眞髓を草せしめし以後なりしよ、此處に一大轉化はそよ吹き來る風の如く、今か消えんの一星火は復び炳乎の光を揚げしが、斯くて起りしはアートフヲア、アートの叫び、自然主義、寫實主義等の聲、勿論幾多の文豪が此等の聲に誘はれ出でたるはあれど、利のあるところ弊とやら、斯くてぞ今言ふ毒液の散布者も產聲を擧げたるなる、

如何にも容易(やさ)し氣ならずや其響、藝術の爲の藝術、美の爲の美、眞も善もあらばこそ、見るがまゝの自然、聞けるがまゝの實、左までの苦心要らばこそ、一輪の明月釋迦も提婆も同じ光を浴び、一瓢の村酒顏回も雲助も一つ味に舌を鳴らす、唯只應擧が筆の辿り、片麟隻甲も忽諸にせざれば足りぬべし、這般の淺薄なる思想が、一度圓熟せざる散漫なる彼等が青年時代の頭腦を襲ふに至るや、文名唾手して取るべしとし、僅に筆路の滑なるを負みて、直に鋤を厭ひ、牙籌を厭ひ、さればとて秩序ある研學のそれをも厭ひて、筆よ靈あれと一向筆にのみ默禱し、今か東洋一

の沙霸ともならんず勢、直物狂ひに中央文壇に集りしをそも〳〵、されど事隷期と違ひ、初の程こそは趣味低き讀者を生捻り、相應しからぬ佳肴に、折には枯腸を濕したることもあるなれ、一面、相率ゆる群盲年々に増加するに從ひ、彼等の間にも自然淘汰の競爭免るべからざるに至りしに加へて、更に他面に強敵こそは現れたれ、そは何ぞ、思想界の進運之なり、株を守つて常に兎を期すべからず、彼等は一本槍を立てゝ、常に闢八州を横行すべきものと夢み居る間に、用捨なく寫實主義は少しく移りて科學主義となり、更に變じて觀念主義となり、標現主義となる、こは皆趣味の單より複に進めるもの、而して趨勢は益之に向つて進まんとしつゝあり、最早、唯材を當面の事物に取り、そが直寫に止めんとする作者の能くすべきところにあらず、前には一向恐ろしきものに避けたりし眞や善や、此等との調和も想はざるべからざるに至れり、此には一定の修養を要す、心理學見ざるべからず、倫理書繙かざるべからず、少くも力ある人生觀、世界觀の一部に耳を貸さゞるべからず、之れ長く放縱懶惰に慣れ來りし彼等の能く忍び得るところならんや、そも宜なり、彼等の多くは或は身體の尫弱を以て、或は智識慾の不足を以て、或は檢束なき生活を慕ふを以て、此等以上には何等の抱負も根據も有せずして集りたるものゝみなればなり、今は術なし、術なきまゝに甲斐なき咒咀と潮罵とを此世に放たんとしつゝある時しもあれ、彼等の耳には嬉に天來の福音とばかりなりしは本能滿足主義、彼等は之に據て、一面彼等の放縱生活に理由を與へ、一面アート、フチア、アートの聲の復活に、其作物の販路を拓かんとしたりしに、熟思すれば、欺れたりき、出し抜かれたりき、近時其聲が他の聲と爭へるを傾聽するに、美の爲の美なり、何ぞ必ずしも其作物の勸善懲惡的なるを要せんや、左ればとて倫理を破れとは言はず、何となば圓滿なる美はそれ等の抵觸を許さゞればなりと、更に捉はれたる文藝の非を説くものゝ聲を聽くに、こも亦全然習を離れよとは言はず、唯自己が主宰者となりて他にならるゝなかれといひぬ、こは明かに彼等が昔ながらに腦理に止めたるアート、フチア、アートのそれとは、內容に於て大徑庭あるにあらずや、何れに聞くも今の聲は皆彼等に非なるものゝみなり、果然日影待つ間の朝顏の命ぞ、たよる竹にはふり離されぬ、俯向きや淚の露の散らざるを得んや、

此方面よりの逼迫は、彼等をして今は死物狂ひとならしめ、亂作を重ねしむるが、重ぬれば重ぬるほど、憐れや夕の麵包は朝よりも少く、今の日色は、昨よりも心細さを增し來るなり、要は病床に泣き兒は飢に泣く、而して身も亦一張羅のまゝ將に文藝の園を追はれんとす、淸貧の文字昔は遁ひたれど、面と向ひては有り難からず、遂に唯只一片の麵包に飽かんが爲に幾多靑年男女の犧牲を作るをも辭せず、却て其弱點に乘じて私を營さんと欲するに至る、嗚呼今日店頭に亂離たるもの、幾千か此かる所産にあらざるものぞ、三文文士の末路亦憐むべからずや。

語を寄す、天下の靑年よ、文藝に熱せる靑年よ、起たんと欲せば大覺悟あれ、大準備あれ、輕忽事に從ひて危き橋を渡る勿れ、橋は中斷せり、十步の前に於て中斷せり、下に蛟鰐の淵は開かれたり、斯くて先進者の多くは現に其腹に葬られつゝあり、されども徒に雷奔雜踏せる群集に在つては、實を得ずして唯聲を聞き、何事ならんの好奇心に押しに押し進みたる結果悔ゆとも遲し、勢に驅られて己れも亦悲運の後を追はざるべからず、斯ゝることは往々にして有る事實ならずや、吾人は閲歷少く、見聞狹く、徒に名の美に憧れ、聲の高きに呑まれて、盲進せんとする、幾多の靑年の此處に三省四省十百省せんことを望む



人物漫評

盲蛇生

(一) 竹越與三郎氏

氏は非常に情に厚い、義に堅い、寧ろ涙多い方の人である。氏を以て恰かも當世流のハイカラ紳士の如くいふものゝあるのは大いなる見當違である。殊に後進の人を扶掖し誘導するの懇切なるは僕の窃かに嘆美措く能はざる所である。氏の研究心が深く、批評眼が鋭く、文藻に饒かに、歴史に通じて居ることは「二千五百年」や「新日本史」などを見た人の已に知る所であるが、獨り歴史のみならず當世の事務に通曉し、時代の趨勢に活眼を開て居る人であることは氏の代議士としての働き、新聞雑誌にあらはるゝ論說又は「臺灣統治志」「比較殖民制度」などを見れば直ぐ分るとであらうと思ふ。氏の代議士としての希望は我國をして完全なる理想的の立憲國たらしめんとするにあるので、議院に於ける役目を仕果せたら、一つ小說でも書いて見たいなどゝいうて居る、氏の文章を見ても、其談話を聴ても其殆ど半分は歴史上の引例から成て居るが、これは歴史は人生進化の法則を敎ふるものであるから其法則を探らんがために歴史を語るので、理想を過去の中に求め、ユートピアを無文無史の時に求めんとする連中などゝは天地の違ひである。氏の眼は常に前方を照して居る。決して後方を顧ることはない。否な顧ることがないではないが、前にいうた通り人生進化の法則を探らんが爲めにのみ顧みるので、決してたゆ〳〵げな、殘り惜しげな目なざしを以て顧ることはない。これは常にカルチュアを說き、樂天觀を說き、獨乙風よりは英國風、英國風よりは寧ろ佛國風に多くの同情を有して居るが如く思はるゝ氏にあつては毫も怪むに足らぬのであるが、こゝが即ち彼の垢面蓬髪是れ豪傑の

特色、衣骭袖腕是れ男子の本分の如く思ふ舊思想、蠻思想の全く消えやらぬ連中に、ハイカラなどゝいはるゝ處かも知れぬ。兎に角黄金のお蔭のみで代議士となつたり、噓言をいふのが甘いので議員となつたりするものゝ多い世の中に、氏の如き頭もあり腕もあり、筆もあり、口もあり、人物もすつかりした人が代議士として出て居るのは僕の大いに心强しとする所である。殊に僕の感心するのは氏に電話をかけると氏は必ず自身で電話口まで出て來ることである。これは些細のことのやうであるが、先生自身が電話口に向て先生は今お留守ですなどいふデモ紳士の多い今の世には珍らしいことゝ思ふ。

（二）三宅雪嶺氏

身體の大きい、頭の少し禿げかゝつた堂々たる偉丈夫……然しながら口が吃て話聲の低い、知らざる人には或は愚人の如く思はるゝ危險がないともいへぬ三宅雪嶺氏、胸に和漢洋の學を蓄へて眼中王公貴人なきも、人に接する溫顏和樂……其ニコ／＼と笑ふや恰かも無邪氣なる小兒の如く、威あつて猛からず、親しむべくして狎るべからずといふ形容詞は最も氏に當て箝まるやうに思ふ。氏の思想は恰かも巨鐘の如くて、一見虚なるが如くして實に無限の音量を蓄へて居る。小さく拍てば小さく響き大きくたゝけば大きく響き、殆んど端倪すべからざるものがある。且つ其終始民間にあつて其膝一度びも權勢の前に屈せず、名を求めず利を追はず、卓然として、毅然として、傲然として、怡然として、古處士の風、國士の風、異人の風、哲人の風を備へて居るのは今の世の第一等の人物と斷言して差支ないと思ふ。

（三）福本日南氏

雪嶺氏の思想を以て巨鐘に譬ふれば、日南氏の思想は千丈の堤の如くてある。一度び之を決すれば滔々汨々流れて止まず、注いて休せず、氏自らさへ其才氣其鋭氣を抑ふる術なきに困む如くに見える。僕はいろい

ろの人の說を聞て之を筆記したこともあるが、氏の說を聞た時ほど其才氣の迸り、其頭腦の明確なるに驚いたことはない。口を開けば即ち文をなし、聲を發すれば即ち章をなすといふも決して溢美てない。少しも苦心せず、些かも澁滯せず、すら〳〵と饒舌て居るのを筆記して見れば、實に立派な文章となつて、句が重複したり、意が連絡しない樣なことは決してない。又氏は趣味の非常に廣い人て語呂合やなにかて言葉の綾を織りなす手腕は和田垣博士とも匹敵すべき人て、此長所は談話の中にもチョイ〳〵顏を出すのて、此人の話は理屈以外餘程面白い所がある。氏は今其鄕里九州福岡の近傍に歸て居るが再び東上するの日は必ずや東都の文壇を驚かすてあらうと今より期待して居るのてある。

（四）内田魯庵氏

僕の知て居る文士の中で此人ほど談話好きて又談話上手の人はない。書物の話――殊に小說の話ても出やうものなら惇々として說いて倦まず語て盡きず、聽く人をして時の移るを忘れ、家に歸るのを忘れしめて了ふ程てある。西洋小說の梗概ても聞て見給へ、ゴツ〳〵したまづい飜譯や字書と首引きてこぢつけ讀をするよりは餘程面白く原著の面影を味ふことが出來る。氏が嘗て盛んに文壇の批評をやつた時に、容赦會釋もなく作家連を冷笑したので非常の皮肉屋であるが如くいはれたが、これは西洋小說のエライものを讀んで居る氏には誠に止むを得ぬことゝて、之によつて寧ろ氏が我文壇を憂慮するの深きものあるを見るべきてある。現に今ても德川時代の戯作物のみを生命として天狗となつて居る文士輩を眼中に置かぬ風あるは話の末にもチョイ〳〵出るのである。氏は一面丸善の顧問官のやうなことをし、又彼のブリタニカの廣告を飜譯するなどゝいふ忙しい役目を持て居るに拘らず、其勉强は非常なもので、少しくエライ作物はドシ〳〵片端から讀破し又純文學のものてなくても思想上、社會上の大問題となつて居るやうな物は大抵殘らず讀んで居るやうてあ

る。氏の將來の如きは恐らく今の文士の中で最も注目すべきものであるを信じて疑はぬ。氏の癖といふのは挨拶のお辭義をする時は決して一語をも發せず、無言にして頭を下ぐることである。これは外の人にあつては餘り可笑しくもないが、談話好きなること氏の如くにして、一度び頭を上ぐれば寧ろ多辯家と目せらるゝ危險ある位口を休めぬ氏にして、お辭義の時に限て決して口を發かず、客が來た時無言にしてお辭義をし、客が歸る時復無言にしてお辭義をするのは奇體に可笑しく面白く感ぜらるゝのである。

（五）　山路愛山氏

氏は實に一世の快男兒である。氏の演說を聞き、氏の文章を讀めば、小さな嫉妬、小さな感情、小さな利害によつて身動きもならぬ程に縛られて居る如く見ゆる紛々たる浮世は、杳かに眼界の外に拋擲せられて、身はさながらに愉快な、活潑な、光明な、磊落な世界にあるが如き心地がする。濕ぽい、陰氣な、女性的な嘆きに滿ちた空氣は忽然として颶風の一掃に遇たかのやう、身は何時か涼しい、快濶な、男性的な、笑ひに滿ちた空氣を呼吸して居る樣に感ずる。社會主義などを唱ふる人の中には妙に世に拗ねた、氣の狹い人もあるやうであるが、氏に至ては毫もさういふ弊がなく、其胸中光風霽月の如く、江戸ッ兒的のサッパリとした古武士風の氣を負ふ所があるやうに見えるのは實に愉快極りなく感ぜらるゝ、氏の獨力でやつて居る「獨立評論」は今の雜誌中僕の最も愛讀するもので、氏が同誌に連載しつゝある「大盜通信」といふ小說などは餘程面白い所がある（堺利彦氏が第三回を評して少し馬琴の龍の講釋趣味があるといはれたのは適評であると思はるゝ所もないではないが）何でもあの小說は社會民主黨の主人公が支那に渡て我說の非なるを悟り、遂に國家社會黨（愛山氏の今現に唱へつゝある）になることを書くのださうだ。氏の小說の中には隨分キワドイ所もあつて氏が竹風氏の男女學生交際論無用論を以て將さに反動起らんなどゝいはれたのは少しく業々し

くもあり又滑稽のやうに思はるゝ。が氏の筆はキワドイ所を書いても決して淫神にかしづくやうな氣のないのは多とする所である。兎に角僕は今の人物の中で氏の如きは最も注目すべき愛敬すべき人であることを信じて居る。



魚河岸の鮪

樋口二葉

荷揚

近海ものは漸次漁獲の減ずるより、荷揚をするにも左ほどの騒ぎもなく、また何れも問屋々々の取引ある家を差して送れば、他より如何に焦慮ればとて仕方なけれど、北海物となりては、現今でこそ汽車でも來れば汽船でも來る、また問屋も差して來る始末なれば、荷揚に就ても唯だごた〳〵する迄なれど、明治十七八年頃までは實に戰爭の如くてありし。

南地部方の荷主より汽船何々丸に鮪を積たりと云ふ電報着すれば、函館問屋（松前問屋のことにて松前の名の廢滅と共に函館問屋と稱す）は二晝夜にして汽船の品川灣に入るが例とて、松前問屋制定の當時より艀請負の西木屋、また小揚請負の伊豆屋、この兩家の中に委托して問屋の代表者が艀に乘込み、汽船の着するを待ちて荷主の送狀と船長の手板と引合せ、積込來る鮪を受取りて荷揚するなり。其受渡しは一本二本と數にて受取るにあらずして、皆衡目にかけて何百何十貫目と云ふ如く、それ〳〵に控えて函館問屋へ渡し、函館問屋より生問屋の大物師に委托して市場へ登し、荷主、函館問屋、生問屋、仲買立會にて始めて販賣するが順序なれば、其手數を要すること非常にして、煩雜なること少々ならざりし。

夜取り

荷揚の順序は普通は以上述たる如き手段なれど、北海向の問屋より函館會所へ宛て、問屋を指名せずに送荷するが多ければ、其積荷を自己の店へ引受んとあせる、函館問屋十軒の競爭こそ實に訝しけれ。何々丸へ鮪何百本積込みたりとの電報達すれば、何れの問屋でも其船の着する時間を豫測し、爭ふて品川まで出張して瀬取をするが例となれり。北海向の問屋より荷を送るに函館問屋の中の某家と指名し來らざるは、一軒の問屋へ宛て送る際には、送附したる鮪の賣價を自由にさるゝ恐れあり、猶それのみならず、荷主に得べき利益も問屋に於て壟斷さるゝ懸念もあれ

ば、單に會所へ宛て送荷の通知を出し、勉强して荷主に利益を多く與ふる問屋を着船の上にて撰擇するに因るなり。故に函館問屋にては競爭して本船へ押懸け、荷主、上乘に面會を求めて、これを籠絡して其荷を一手に引受るが例となり、競爭はます／＼甚だしき程度に達したるなりき。其競爭の激甚となりて他の問屋を拔懸て泡を吹せる手段あり、これを『夜とり』と稱して尤も機敏な運動を爲しぬ。其夜とりなる手段は如何なる方法てあるかと云ば、何れの問屋にても入船のあると云ふことを知れば汽船の品川灣に入るは大方夜中となるより、夕暮より品川へ



（春七題其五）

出張し艀宿へ舟の用意を命じ、妓樓等にて時間の來るを待ち、着船の汽笛を聞くや豫て準備させある艀に飛乘り、われ勝に本船に漕ぎ寄せ、荷主、上乘等に面會を求めるが尋常なる方法なり。然れど斯る手段を取つて漸う荷主なり、上乘なりに面會を求め引取の相談する中に、續々後ればせの連中も押懸來ること〻て、荷主の勢ひ强く到底利益を獨占するに難し。處てこの船の積荷は何うしても我手に於て捌かんとする問屋は、尤も信用があつて機敏な手代を品川へ派出し、總てを其者の働きに一任す、玆に於て手代は他の問屋の出張員に先立て品川へ來り、艀

の準備を充分にさせ、宿中相當なる妓樓へ陣どりつゝ、他の問屋の出張員がそれ〴〵準備を了り、妓樓へ納まりし頃を見計らひ、艀宿へ引返して窃に船を海中へ漕出させ、汽船の碇泊する近傍にうろ〴〵と待ち設け、荷船の着きて錨を下すと同時に舷へ漕寄せて、直ぐに『上乘さんはお出てせうか』と聲をかけ名刺を通じて面會を求め、上乘、荷主を兎も角もと引張出して、自分の乘附たる艀に乘せ、送り狀と手板とを携帯させて、其陣營としたる妓樓へ伴ひ歸り、只管に歡心を買ひつゝ有耶無耶の間に積荷を引受る策を講じ了るなり。斯く荷主、上乘を生擒て了へば、其船に積込み來る荷は此方の物、他より如何に急ればとて何うすることも出來ず、態々本船へ出懸る頃には、荷主、上乘は既に生擒られて妓樓にある後なれば、只指を啣へて引返すまでなり。荷主に對して歡迎を充分にするは、然ることなれども、上乘を斯く歡迎し、殆と荷主同樣に取扱ふには理由なかるべからず、尤も理由はあるなり。上乘は荷主の積荷以外に、必ず五十本や七十本の鮪は積込み居れば、その荷をも一纏めに引受んとすれば、斯くこそ騷ぐなれ。問屋にては荷主の荷より上乘の鮪を引受る方、却て利益の多きものなれば爭ふて上乘に媚び、此夜とりの手段、即ち拔懸の策を廻らして、他店へ指名し來るものにても、上乘の積荷だけを奪ひとることもありき。因て汽船が着たとなれば、問屋は、一刻も油斷が出來る譯のものでなく、其競爭は實に凄じき程にて、一旦生擒たる荷主上乘は中々に放さず、妓樓より直ぐ問屋自身の宅へ連戻り、珍客として扱ひ、荷物の陸揚一切は問屋に始末するが例なりし。其費用を何う廉價（やすく）つもつても一船の荷を引受るには荷物の



(春七題其六)

多少によつて差違のあるは勿論ながら、普通の積荷とすれば荷主上乘への馳走、陸揚の費用等にて百四五十圓は要す、斯く渠費をかけても積荷を引受んとするからは、是を市場に登せて問屋の受くる利益莫大なるは想像し得らるべし。併し今日は交通の便大に開け、汽車にて送るもの多きを占めれば、夜とりの弊は殆と無くなりたり。

仙臺鮪の聲價を得し原因

北海もの即ち仙臺鮪が魚川岸市場に聲價を得し原因は、近海もの丶出荷頓に減じたる際、交通の便ひらけてドシ／＼輸入し來るに因るとは雖も、該地方にては山裾の深味へ立網をいれ、砂地の處まで車盤にて捲きあげ、漁獲したる鮪を一夜濱邊の砂上にさらし、それより細引を括り砂石の上を引摺りて納屋へ入れるを例とせり。取扱ひは斯くの如く亂暴なるより、鮪そのものを損傷すること實に夥多しく、啻にそれのみならず、網より砂上へあげる際にも、鈷を用ひて鮪の體を何れの嫌ひなく突き、また手鍵を手當り次第に打こみなどするより、肉に傷を生ずること尤も多く、其傷部より腐敗を速かならしむること少々ならず、爲に漁獲して三日目となれば眼は曇り總は色褪て臭氣を發せり。か丶る魚族が幾等輸入されしとて、魚川岸市場に聲價を得らるべきや。仙臺鮪の聲價を得出したるは實に明治十四年以後にして、其取扱ひ方を改良し、腐敗を豫防することに注意したるに因るなり。其改良を促したるものは、魚川岸の生問屋にて佃善こと田村善次郎と十平こと止田平六の二人なりし。元來南部地方の問屋荷主は、魚川岸の生問屋とは取引なき上、兎角一時に夥多しき荷を輸入する處より、大資本を要することゝて迚も生問屋にては仕切などの點に於て其荷を受切れざれば、從來取引のある函館問屋と云ひ重に鰹節問屋を專業とする、彼の十軒に宛て送り、それより川岸の生問屋へ委托して賣捌くの慣例となり居たりし處、佃善と十平は自分等は生問屋で居ながら、仙臺鮪に限つて函館問屋の手を經るも面白からず、且つ鮪に傷物多く折角の品を賣物と爲す能はざる處多きは遺憾なりとて、佃善の番頭勝蔵といへる男、輕子二人を連て南部へ下り、荷主と應對し直接の出荷を約束したるなり。これ明治十四年の春にして、其際宮古の網元菊地某へ鮪の取扱ひ方を注意し、鮪を扱ふには脊にいれて輕子二人で擔はすれば、魚を損傷せずして取扱ひも便利なりと、伴ひ行きたる輕子をして運搬せしめ見せたるより、其便利を覺りて從來の亂暴なる扱振を改めぬ。爾來輸入する仙臺鮪は漸次傷物を減じ、近頃のごとく稍完全なる送附方となり、遂に近海ものを壓して聲價を獨占するに至る、然れども仙臺鮪の名は未だ劣等視さる丶こそ是非なけれ。

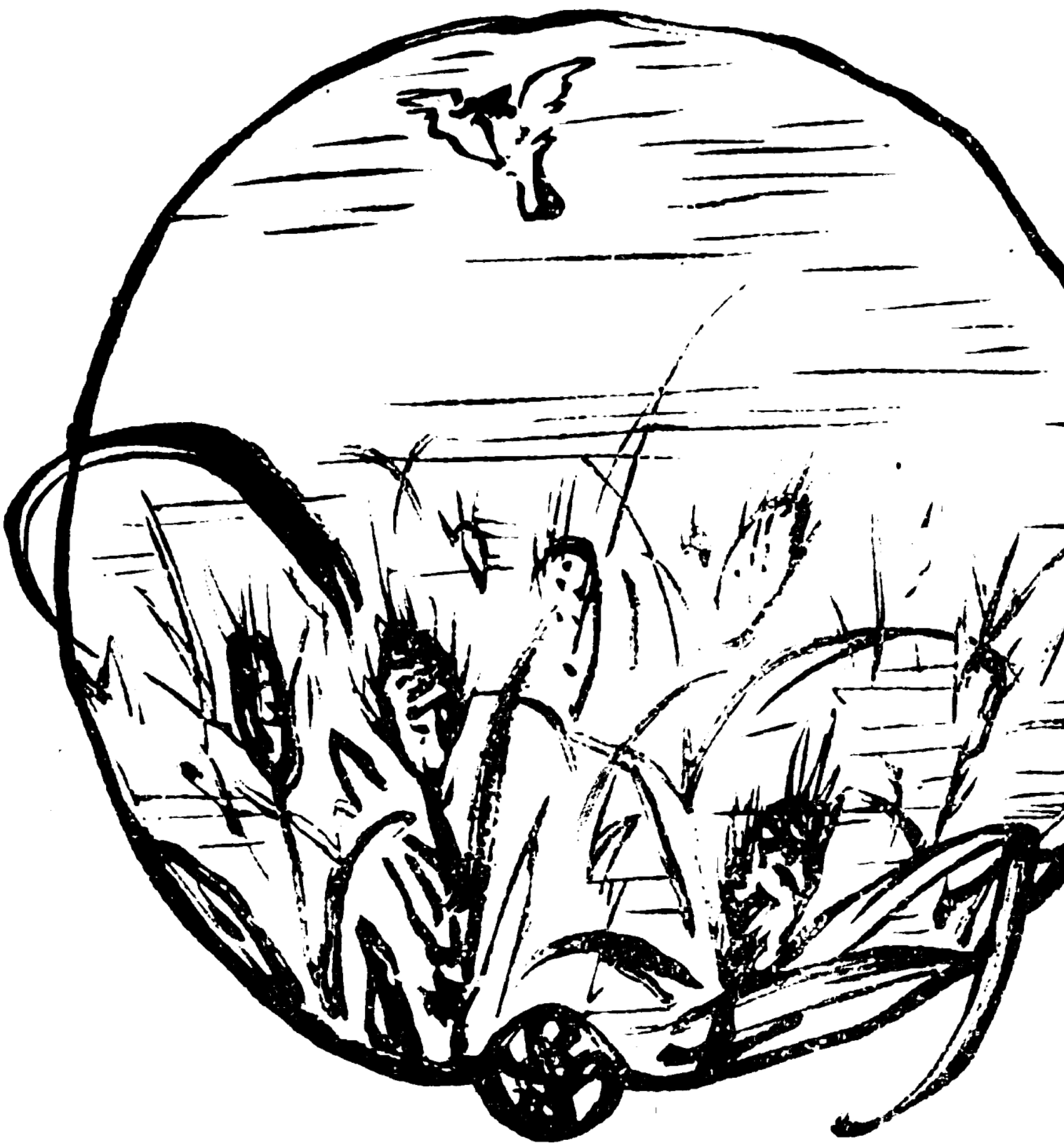
荷主の經驗

近海ものは年々漁獲を減すれば、何千本と云ふ鮪が市場へ現る丶ことはなけれど、是迄北海ものは隨分澤山一時に輸入することあり、これをドヤと稱して捌き方に惱むこと往々あつて、迚も捌きの道なき時は、陸揚をせずして大阪地方へ廻送し、東京鮪といひて一疋の切身となし、十貫目二圓より三圓までに賣捌きし事もありしが、近頃は荷主も經驗が積みたれば、一度にドヤるほどの荷は輸出せず、毎日出荷するやうになり、雙方の都合よくなるのみならず、一本づ丶氷詰となして汽車便を利用す

ろより、肉も至極鮮かな綺麗なものが來り、絶えず魚族を取扱ふ問屋すら近海ものと見紛ふに至れり。

●●●●
狡黠手段

腐敗を防ぐ手段として、稍荷の目方を減ずる手段として、鮪の脂肪を搾りとつて送るものあり。これは仙臺鮪に限らず、近海ものにも往々この狡黠手段を行ふ荷主ありとか、脂肪を搾取したる鮪は近海ものと北海ものとの別なく肉あらびて筋肉の間に割を生じ、寒きときには肉が固着して稍乾せり、而して肉の色は白く味ひ更になければ、迚も普通の賣物にならず、多く居酒屋田舍茶屋へ捌けり。かゝるものになると大庖丁て十本も切せば、水氣なく切惡いこと尋常てなきものから、力自慢の庖丁使ても閉口し、終日腕が痛むと云り。



(春七題其七)

●●●
紅さし

脂肪を脱去りしもの、日數を經て腐敗に傾かんとするもの等には、『紅さし』と云ふ事を行ひて一時を瞞着し賣捌く惡弊あり。紅さしとは如何なる事を爲すかと云ふに、いやに曇りを生じたる眼、色の變りて臭氣を放たんとする鰓、切口の白く荒らけたる肉等へ、紅を擦して鮮新きものゝ如く見せ、只その場のみを繕ひ賣るなり。買人も紅さしものと知らぬにあらねど、一寸と肉の荒びも隠し、鰓の變色も赭色の爲に見えれば、左ほど甚だしきものにあらずとして買ひ行けど、いかに揚末の繩暖簾なればとて、馬士茶屋なればとて、買物にならざるより

鹽漬身にして漸く賣ることありとか。斯かる物を夏場に賣られてはそれこそ大變、直ぐ惡疫流行の媒介となるべし。全體鮪のスキ身は賣殘りの古物を鹽漬にするが例はなれば、衛生を重んずる人、いな衛生などと四角張らずとも、賣る者も買う者も充分に注意すべき事ならずや。

鮪の種類

鮪の種類は凡そ十餘種あれども、普通市場に登るものは『大シビ』と稱し二十貫目三十貫目あるものを大とし、都人士の間に歡迎されず、田舍おくりなどを專らとされぬ。一般の氣受よく賣行くは『メジ』『ゴホウ』ともに量目は三貫目内外のものとす。それに亞て持囃さるゝは『キハダ』にて初夏頃が味よく、姿はシビ鮪と同じけれど、鰭の先に黃色を帶び、比較的眼の小さく、肉も淡朱鷺色の透明にして至極綺麗なり。『メジ、ゴホウ、キハダ』は何れも淡泊にして輕く尤も刺身などに適し、料理に用ひらるゝが同じ形を備へ、同じ肉色を持ながら目の割合に大なる『目バチ』と稱するもの、砂摺の腹部にある鰭の女の頭髮に用ひし髮挿と云ふものの如く、左右に長く張たる鰭のある『ピンナガ』と稱するものとは、共に味ひも惡く價も廉なれど、殆と常食にするものなく、鮫など同じやうに蒲鉾屋にてつぶしに使用せり。而して近海ものにては九貫目内外を大と云ひ、四貫目より六貫目までを中物と云ひ、三貫目内外『メジ、ゴホウ』の種類を小と云ひて尤も都下の嗜好に適せり。この二種は何れも五本を一個として、取扱ひも他のものより丁寧に爲し、炭俵に卷きて損傷を防ぎあれば、一にこれを稱して貫卷ものとは云ふなり。北海ものには送る荷主の印をつけ、鮪の頰或は尾に烙印を捺するもあり、また寒冷紗にて尾を包むもあり、赤紙青紙等にて尾を卷くもあり、これを赤まき或は青まきと云へり。

切賣

近海物の小なれば、一本を購ひたればとて一日に賣切せざる限りにあらねど、料理屋にては頭や尾を持扱ひ、大物中物となりては無論一本を賣捌くこと、市中の料理屋または肴屋にては能はざれば、川岸に於て切賣を爲すなり。其切方は法のあることにて、先最初頭を鰭附に切る、これを『鰭附』と云ひて鰓際より一寸下へ鰭をつけて切るなり。其次を手尺にて二さしはかりて切る、これを『胴車』といひて重に料理屋向へ賣れ行くなり。殘る尾のところと斯く三個に切放すを普通とし、大物になりて胴車を切ても猶半以上を殘すときは、矢張り手尺にて二さし度りて切る、これを『二の車』とは云ふなり。此賣價は頭も尾も胴車も二の車も同價なるも面白し。頭は安肴屋が買出して葱鮪として賣り、領首の耳肉は刺身にも作れり、尾は多く場末の棒手振の手に捌け行くなり。我々が一寸近所の肴屋に作らせて食する刺身は、多く領首の處か尾の肉にして所謂胴車なる耳肉の刺身はなしと合點せざるべからず。

市中の賣高

鮪を都人の如何に歡迎するかは、其賣高によつて聯想することを得べし近來の如く輸入頻繁なるも不足を感ずるに至るは無理ならず、二十貫目以上の鮪七百本以上八百四五十本までは、東京市中の料理屋または肴屋

の手に於て毎日賣捌け、漸く一戸に對し三日位に食する割合にならんと云へり。毎日市場に於て二十貫目の鮪が八百五十本づゝ捌けるとすれば實に都人の口腹に入る鮪は四千百貫目となり。現今の鮪の相場は平均近海もので十貫目に付き、十二圓以上十七八圓まで、北海もので同じく十貫目に付き、五圓以上十圓以下の間を往復せり、然れば近海物の最低價十二圓とせば、四千百貫目に對する川岸の賣揚高は、四千九百二十圓となり、北海物としても二千五十圓の賣揚となれり。此川岸値段に三割四割の利益を見て市中で賣捌くとすれば、其金高も中々少々にあらず、けれども漁獲充分ならずして、出荷多しと言囃せる朝にても、需用を供給するだけの荷廻りなく、品不足を感ずる上に出荷の幾分は地方へ引ける處より、昨今の如く鮪の拂底を招きたるなりと云ふ。●猶この外に圍ひ方、仲買の鑑定違ひ、さし値等五六項あれど、餘り長くもなり讀て興味も薄ければ省略しつ。（完）

社會側面觀

▲奇警なる觀察の投書を歡迎す▲二百字以內葉書に限る▲締切は每月十八日

▲平凡化　千葉　凡骨

十歲で神童二十歲で才子、三十に成て唯の人とは男の精神上に於ける變化を譬へたる言なるが、之を女の子の容貌の變化にも應用せば妙なるべし、幼き時は非常に可愛く成長の後ちは定めて絶世の美人となるべしと思はれしものも、成長するに從ひ段々に變化して年頃になりては普通の容貌となるもの多し、之れ蓋し男の天才が平凡化するが如く微妙なる心的作用に依り容貌上の天才が年と共に段々に平凡化して唯の人となりしなるべし。

▲大業な名　本郷　大名

下宿屋の名は大抵其家相當のものを附けて其名を聞くと直に其家はどんな所か位の想像が附く樣でなければならぬ、然るに途方もない名を附けて濟ましてるのがある、大きいのでは新花町の日本館、眞砂町の亞細亞館、錦町の萬國樓、場所は忘れたが東洋館、世界館など、ハイカラなのはスミレ館、百合館、頑的なのは臥龍館、時習館など尋ねなば猶多くの奇なるものもあるべし。

▲若い婆さん　下谷　若翁

產婆の中には婆ざんもあるが、大抵は若くて婆さん所か姐さんと云ひたい程の人が居る、其漸く二十才を越した許りの人を年寄と同等に婆さん扱ひはちと可愛想だ、併し若い當人逹が音無しくも此婆さんなる名稱に甘んじてる所を見ると柄にもない謙遜の德に富んでる樣だが、其癖年は若いが腕は頗る老いたるが故なりと內々御自慢で居るかも知れない。

▲優勝劣敗？　宇都宮　弱虫生

論者曰く優勝劣敗は生物自然の法則なりと、世人之を信じて同じく口を揃へて此語を操り返す、然れども之は尤も過れる論にして又甚だしき愚論なり、猛獅猛鷲の日に月に其數を減じ其種族の滅せらるゝに比して、

其の餌食となるべき弱き小禽小獸のよく繁殖するを見ば、又以て論の全然誤謬たるを知るべきにあらずや、

▲鐵面皮　大阪　千枚張

若しも有神論者が曰ふ如く全智全能の神が此世に在るならば、彼等は隨時隨所に一擧一動も神の目を離るゝ事が出來ない、然るに彼等は其神前を少しも憚らず惡事と迄は行かざるも少なくとも他人の目を憚るべき事をも、或は男女性交の如きも神の見らるゝ前にて平然として行ふを見れば、有神論者は恥辱と云ふ事を知らない人か、或は神經に異狀のある病的人間だ。

▲牛の述懷　神田　一視同仁生

人間といふものは、得手勝手のものだ、白齒のあるものは肉食動物だから人間は肉食するものに極つて居るなつて、晩酌にはビーフのロースに舌鼓打つ先生が、九段下の馬車馬に同情して動物虐待禁止などゝいやに慈善家ぶつて德及禽獸などゝ濟したがる、鞭あてるのが無慈悲で、屠つて食ふのが慈悲であろーか、プライマー、エシックスといふ本にも公々然、成る可く死の苦痛を短くする樣に殺せ、之が動物に對するヴエネザチレンスだと、……呆れる、とは昨夕夢に見た牛の述懷。

羅馬藝術の瞥見

笹川臨風



希臘人と羅馬人とは、その性格を異にす。一は花の如くにして、一は喬木に似たり。一は藝術的にして、一は政治的なり、一は理想的にして、一は實際的なり希臘人は美を以て世界を風靡し、羅馬人は力を以て宇内に臨めり。されば羅馬の藝術は要するに、希臘藝術の附庸たるに過ぎず。幾多の邦土を覆し、幾多の領邑を滅し、四極八荒、指顧の間にありたりと雖も詩と云ひ藝術と云ひ、宗教思想と云ひ、苟も靈的生活に屬す

るものは、一に希臘の感化を被らざるはなし。その最古の時代にありては、エトルリアの影響を受けたること明かなりと雖も、希臘思想は潮の如く、澎湃千尺の濤をなして羅馬を浸しぬ。羅馬の神は、源を希臘のオリムプスに發し、ヘラス民族の神話に現はれたる人名を改稱して、之に新事實を加味したるに過ぎず。而してその加味したりしものは、神話的詩的材料に非ずして、寧ろ道德的倫理的なりしなり。羅馬人は唯に國民的叙事詩を有せざるのみならず、もと是れ希臘詩家の門弟子若くは模倣者に外ならず。戯曲の如きも、僅に希臘の創作を羅甸的に轉じたるのみ。ホメロスのイリヤッド、オヂッセイは、正にヴアージルのエーネイドと好對照をなし、アリストフアーネスの崇高なる理想的詼諧はプラウタス及びテレンスの陋劣なる滑稽と相對して奇觀を呈せり。藝術に於ても、また斯くの如かりしのみ。

羅馬の藝術は國民信念の必要より起りたるにもあらず、また詩人の超絶的理想に動かされて發したる想像に基きたるにもあらずして、寧ろ富あり力あり、權勢あるものが、驕奢を喜ぶの爲に、即ちその一生を飾り、その勢力を華やかにし、人民に誇らんが爲に、藝術を用ひたりしなり。さればポムペイウスの建てし石造の劇場は四萬人の觀衆を容るゝに足り、ケーザルの圓形劇場は絹布の天蓋を以て日光を遮るの驕奢をなし、シルクス、マキシムスを宏壯にし、ユリアンバリシカを建て、ヴイナス、ゲネトック像を安置する公會堂を造りぬ。帝ヲノグスチウスの御宇は壯觀錦の如かりし世なり。ヴイルギル、ヲヴイッド、ホラチウス、チヴリウス、プロペルチウスが文壇を飾りたる時代なり。彼れケーザルの遺志を繼ぎて、その未だ成らざるものを成しゝのみならず、八十有二の殿堂を再興したりしのみならず、幾多の巍然たるもの、厖然たるもの、宏なるもの、美なるものを起せり、パンテヲンは羅馬建築中の偉觀と稱せられ、マルセリウース劇場は、今日猶ほバラヅヲ、ヲルシニに於て、その規模の一端を推知するに足れり。イストリアのポラにあるヲーグスチウ

ス及びロマの殿堂は、コリント式の好模型にして、ニメスのマイソン、クアレー堂は偉觀、目を駭かすべし。ヲーグスチウス以後にありては、曾てヴエスヴイアス山の炎々たる噴火に依りて埋もれたるポムペイの古市、一たび露はれて、當時の建築樣式を世間に示すあり。紀元六十九年に至りて、羅馬の建築術は、再び光輝を放ち、コロッシウム劇場の宏麗殆ど比なしと稱せらる。長さ六百呎、幅五百呎に及び、八萬の觀衆を容るべしと云ふ。帝チタスの浴堂之に隣して、壁畫、天下に名あり。帝チタスの門、帝トラジヤンの公會堂、帝ハドリアンのヴイナス、ロス殿堂、帝カルカラの溫泉堂、帝ヂヲインチアンの溫泉堂、ダルマチアのサロナにある同じ帝の宮殿、帝コンスタンチンの法廷等、塞煙荒草の間に空しく廢墟を留めて、一石一柱、いづれもありし世の榮華を語らざるはなし。

その彫刻もまた上流社會の裝飾用なりき。古きものに在りては、フイレンゼのウフイジにあるメヂシアンヴイナス。ナポリの博物館にあるフアルニース、ヘルキユールス。羅馬にあるトルソヲ。ヴアチカノ宮にあるカリアクイド等を推すべし。いづれも筋肉怒張の狀見事なりと雖も、その頭部は、體格に比して小なる誹を免れず。ヴアチカノ宮にあるニル河神の像は、帝ヂアドチの時代に成り、ハドリアンの名手は、アンチノト市を建てゝ、此にあまたの像を置きぬ。アグソッピナ、プヂシチア、ヲーグスチウスの諸像はいづれも羅馬全盛期の遺物にして、羅馬彫刻の逸品と稱すべし。浮彫にては、チタス門のそれ、トラジヤン門柱のそれ、セプチミウス門のそれ、コンスタンチン門のそれ、皆古代の餘韻搖曳としてかぐはし。希臘派の名工ヂヲスコリヅは寶石を刻むの術に長じて、派手好きの羅馬人を喜ばせぬ。

羅馬の繪畫も云ふまでもなく希臘の後塵を拜せり。畫題は多く希臘の譚話に取れども、また羅馬の史書肖像畫もありき。紀元前三百年の頃には、フアビウス、ピクトルなるものありて、サルス堂に畫けり。同じ二百年の頃、詩人パクビウスまた同じやうなることとして

けり。ヲーグスチウスの朝には、ラヂウス名あり、肖像畫もまた行はれて、共和政治時代の末には、シジクスのラ、と呼べる女畫工、是に依りて名あり。ポムペイ、ヘルキユラニユーム市の發掘、チトス浴堂及び地下墳墓の穿鑿始まりてより、羅馬繪畫は世に現はれてナポリの博物館は頗る多く此種のものを藏せり。嵌工畫の名高きものには、ファウン家の舗石を飾るものと、歷山大王の戰を寫せるものあり。後者にありては、波斯勢を寫せるものは存すれども、不幸にして歷山大王勢の部は破れて全からず。その存するものに依りて、之を見れば、頗る巧妙にして、設色もまた活くるが如く、その精緻眞に驚くべし。此他有名なる羅馬の古畫は、ヴアチカノ宮にあるアルボフランヂニーの結婚、傳に云ふ所のチベリウス祖廟、カラカラ浴堂の嵌工畫ヴイラ、ボルギースの猪と武者との格鬪をけ描ける嵌工畫、ネンニグ及びヴイルベルの嵌工畫の類なりとす。

新刊批評

▲靈魂論　妻木直良著　文會堂發行

若し佛教中より、佛陀論と靈魂論とを除き去らば、何等の議論も何等の研究も必要なかるべし、佛陀論に關しては、姉崎博士の『法身佛と現身佛』あり、村上博士の『佛陀論』ありて、大に研究の材料を供せられしが、靈魂論に關しては、從來僅かに片々たる小冊子に依りて通俗に講演せられたる井上甫水博士の『靈魂不滅論』ありしのみにて、眞實に佛教經典に依り、佛教各宗に渉り、普通一般の人に了解し易き著書とては一も無かりしが、今回妻木氏の著述になりし是の書は、前田博士の評論にある如く明治の新原人論とも稱すべき好箇の著にして我論、業論、心論、眞如論等と歷史的組織的に一々經文の考證に依り、約四百頁の大册を成せり、佛教の大意を知るには至極便利にして、靈魂に對する研究も是より大に盛んなるに至るべし。(定價六十七錢)

▲新古俳諧奇調集　沼波瓊音編　内外出版協會發行

詩趣の極めて悠長なる時、極めて急迫なる時、甚だ複雑なる時、大に莊重なる時、頗る飄逸なる時は、句勢自ら奔騰して、十七字の規を脱し、五七五の式を破る、奇調俳句是れなりとは著者の自序、讀者讀んで其然るや否やを知れ

▲比較殖民制度

竹越與三郎著
讀賣新聞社發行

我國人の殖民に關する智識の乏しいのは著者と共に嘆息に堪へぬ次第である。此書は著者一流の明快な流暢な筆を以て英、獨、佛、和等の殖民制度を比較論評し、合せて殖民地と保護國との聯合制度、保護國制度、郡縣殖民地等の實例を擧げ、進んで殖民地官吏任用法、殖民地の人口增加法等を說いたもので、附錄の四篇は皆殖民教育、殖民智識の普及を計るべく新聞雜誌に出した論說を集めたものである。單に娛樂を得る爲めの外讀書をせぬといふ連中には此書は少し高尙過ぎるかも知れぬが、苟も膨脹的帝國の臣民として、將來の我國運に冷淡ならざる人は必ず一讀して置かればならぬ有益な書である。殊に序文の如きは盛んに清新の文字を用ひて調に豪闊の響あり、蓋し當代の名文の一に數ふべきものと思ふ。(定價八十錢)

▲伯爵夫人（後篇）

田口掬汀著並發行

吾人は此後篇を讀んで著者のプロットを作るの巧みなるには益々感心するが、其描寫の手腕、文章の書き方などに至つては矢張り前編の評にいうたと仝一の語を繰り返さゞるを得ざるを悲むものである。然しながら聞く所によれば、この小說の如きは決して著者の理想でも本領でもなく、新聞編輯部員の請求によつていろ〳〵に趣向を代へたり、描寫を變じたりせなければならぬ事情の下に書いたものださうな。吾人も亦其必ず然らんことを信ずると仝時に我國出版界、讀書界の爲めに憤慨浩歎に堪へざる次第である。吾人は右の事情を思ふて深く此篇の瑕疵を拾ふことをなさず、靜かに掬汀氏が其理想のもの、其得意のものを出さん日を待つの情に堪へぬのである。然しながら極めて俗惡なる小說も家庭の二字を冠て續々讀書界にあらはるゝ今日にあつては此書の如きは斷然として頭角をあらはすもので、婦人の讀み物には最も適當なるものであることは疑ひない。(定價八十錢)

▲運命

國木田獨步著
左久良書房發行

正直にいふと僕は是迄餘り獨步氏の作物に注意を拂て居らなかつたのである。が此篇の二三を讀むに至つて初めて大に注目すべき作家たることを知たので俄かに獨步集まで借りて來て片端から讀みつゝあるのである。描寫の點に至ては今一息と思はるゝ所もないではないが、其取材は何れも清新で、確かに人生の一部に觸(タッチュ)れて居る樣に思はるゝ。殊に卷頭の運命論者などはあれ丈けの驚くべきことをあの位自然に書き上げた手腕、(尤も少しく同情が足らぬやうに思はるゝが)又巡査などのアッサリとして而かも深き趣味に滿ちたる、無意味に筆をとりつゝある小說家とは其選を異にして居る。僕は此人此書を以て確かに現今小說界の最も注目を拂ふべきものとして讀書界に推奬するものである。(定價七十五錢)

▲潮待ち草

幸田露伴著
東亞堂發行

昨年中「日本新聞」に掲げられたる漫筆三十九と數年前の作九とを合せて一卷四十八章より成り、附錄として百頁に近き小說「土偶木偶」を掲げたり。漫筆の方には氏の學と識とを示すに止りて、文學的興味の索然たるものもなきにあらねど、著者ならでは到底書き能はざる名文字

少からず、殊に「土偶木偶」は著者の詩情の決して老いざるを見るべく其五回のちぎれ文の如きは絶世の名文、金色夜叉の宮の書簡の如きは到底比べものにならぬ心地す。(定價八十五錢)

▲最近學校評論　臼田亞浪著　東亞堂發行

もと「向上主義」の記者にして、今は「電報新聞」の記者たる臼田亞浪氏が現今の東京私立學校について記述論評したるものなり。其多くは「向上主義」誌上に掲載せられて好評ありしもの、學生の參考となること多し。(定價四拾錢)

▲韓國之實情　圓城寺淸著　樂世社發行

圓城寺天山氏の政論及び文章は今の新聞記者中にあつて最も優なるものであることは今更ら喋々を要せぬ所である。本書は著者が國民後援會から派遣せられて韓國を視察した結果を報導し、且つ之に著者の論評を加へたもので、韓國の實情を知らんとするもの丶爲めには實に有益な本である。殊に此書に多とする所は親切に懇篤に彼地の事情を知らしめんとを願へる著者の至情がよくあらはれて、絕えて自ら高しとし又は名を求めんとするの風がなく、卷末に韓國の智識を得るに適當なる他人の著述を紹介したことである。これは著述界の美事というても宜しいと思ふ。(定價四十錢)

▲人生の歸趣　河上肇著　今古堂發行

「社會主義評論」程讀んで面白くなく、書き方も餘り理に落ちた所がないでもないが、其眞摯なる態度は大に賞すべきぢやと思ふ。卷頭にある野田とかいふ人の無我の人といふ文は餘程面白い所あり、又河上氏が謳し得、又誠め得て妙なるものといふべきである。(定價三十錢)

▲橫戀慕(前編)　廣津柳浪著　今古堂發行

後篇をも通讀した後でなければ全體についての批評を下す譯にゆかぬが、柳浪氏獨得の描寫の手腕は此の篇にも遺憾なくあらはれて、二三頁と讀みゆく中に讀者を篇中に引き入れ、終りまで眉も凝らずにすら〱と讀み了らしめ、篇中の人物と共に悲喜せしむる一段に至ては何というても柳浪の天才を認めざるを得ぬ。和田英作氏の口繪は美はしくして且つ品よし。吾人は後篇の出るを待て細評したいと思ふ。(定價六十五錢)

▲品性論(上)　文學士 竹村修譯　內外出版協會發行

スマイル氏のキャラクターを譯したもので、譯文流暢なるは何より嬉しい。健全な、品格ある市民とならんとするものは必ず本書を讀み且つ味ふべきことを勸むる。(定價四十錢)

▲賣花娘　菊地幽芳著　隆文館發行

飜案小說とあるから何となく情の移らぬ所もなきにあらねど、又日本人には書けまいと思はる丶所もないではない。筋で以て小說を讀まんとする人には餘程面白いものである。(定價五十錢)

▲ヴエニスの商人　淺野馮虛譯　大日本圖書株式會社發行

沙翁全集第三卷として發行せられたるもの、姑射氏の二卷に比すれば却て筆力自在なるが如く思はる。一々原著と比して强て非難をいへば、

多少の瑕疵はなきにあらざるべけれど、この位よく書けれぱ先づ大成功といふて可なり。

吾人は此大事業が中途にして挫折するが如きことなく今の儘にして着々進行せんことを切望するの情に堪へず。(定價八十錢)

尙島崎藤村著「破戒」樋口龍峽著「碧潮」田岡嶺雲著「壺中我觀」は次號の誌上に批評すべし

今月は材料非常に多く、倍號といふ豫定を超えて殆んど二倍半の頁數に增加したるに拘らず、尙悉く之を收むること能はず、割愛したるもの少からず。豫告にあつて而かも本號に掲載する能はざりし諸大家の名篇玉什と共に次號誌上に掲げらるべし。

前號要目

附録

男女交際に就て

浮田和民

人は社會的動物なれば相交るを以て快事となすは當然の事なり。但し男女の交際に就ては特に注意を要するものあり。そは男女相交るの結果如何によりて各自の害となり、又た延て社會の害となることを免かれざればなり。さればといひて昔日の如く男女の交際を禁壓するの方法は今日の如き立憲自由の世には行はるべくもあらず、又た有益にもあらざるなり。

余が今日切望する所のものは青年男女の交際よりも先づは夫あり、妻ある男女間の交際なり。即ち夫婦相携さへて社交上に出るの習慣是なり。目下紳士の集會は男子のみにて殺風景に流れ、又た婦人の集會には男子なくして婦人の益する所少なく、何れにしても社交上の缺點なりと言はざる可からず。之が爲め紳士の宴會多くは藝妓の出席なくては乾燥無味に終るを常とせり。吾人は社交上良人の赴く所、必ず夫人の伴ひゆかんことを希望す。是の如くなるときは自から紳士の集會も紳士らしくなり、且つ夫人は男子の談話に接して自から知識と興味とを增すことある可し。

次に余が希望する所のものは或る制裁の下に男生及び女生の同一所に會合し、或は演説若くは講演を聞くが如き機會あらんこと是なり。個人々々に青年男女の自由に交際するが如きは危險多しと雖ども團體的に相接することは其の會合の目的に對して甚だ有益なることあり。同一會堂に男女の聽衆相交り居ることは説教者若くは講演者の言ふ所を更に興味多からしむるの益あり。又た男女學校の運動會等には

紹介によりて異性見物して互に奬勵するが如きは美事として差支なかる可し。男女の間は如何に籬籬を築きても之を飛び越ゆるものあり、籬籬のある爲めに却て其の侵犯を刺激するの患なきに非ず。寧ろ靑年男女の間は往々相接せしむる方却て迷思妄想を少からしむるの益なきに非ず。靑年男女の交際は幾分か自由を與へて父母師友の監督あるを必要とすべし。

概して男女間の交際は夫婦となく然らざるとなく互に相尊敬するの念慮を失はざるを必要とす。故に男尊女卑の思想を挾むが如きは旣に男女交際の資格を失ふものと云ふ可し。一方は自から尊しとし他方は自から卑しきものと假定し居るときは旣に同等の交際は出來ざるなり。社交上の原則は先づ交際その物を目的として之に興味を感じ、次には交際する者は先づ同等となりて其の位置、貧富等を忘れ相親しむを以て通規とす。人若し自から尊大にして他を方便視し、交際を機會として何か他に利用する所あらんとするが如きは旣に社交の眞面目を辱かしむるものと云ふ可し。

故に靑年男子にして女子を輕蔑せず、其の人格を畏敬するの念慮あらば交際しても不可なかる可し。然らざるものは是れ狼にして羊を食はんとするに等しく、決して恕す可からざるなり。女子は天性男子より弱きが故に、男子は義俠心を以て之に對するの義務あり。然れども女子は天性男子に劣るといふ可きものに非ず、却て其の情緒の濃かにして意志の强きは男子にまさるもの少からず。男子ほどの敎育なくして常識は却て男子にまさるもの多しとす。斯れば唯だ男子の資格を有するのみの人間が何の根據ありて女子を輕蔑するか殆んど解す可からざるなり。多數の男子は英雄にもあらず、天才にもあらず、

平々凡々たる者なり。其くせ多數の女子よりも多くの教　と多く發展の自由とを有し居れるに非ずや。寧ろ多くの男子は女子の前に出てゝは赤面の至りなりと云ふ可き次第なるに非ずや。今や我國の青年稍やく男女交際の切要を論ずる者多し。余は先づ彼等が男女交際の實行に着手する前に男尊女卑の觀念を一掃し、左の三大原則に向つて宣誓せんことを切望せざるを得ず。

一、男子は女子よりも力強き故に、常に之を保護するの義俠心を有すること

二、體力の一點を除けば殆んど男女の天性は一短一長、概して平等なるが故に、他を劣等視せざること

三、男女の道德は共に同一に嚴守すべきこと即ち一方に要求する所の節操は同樣他方に於ても之を遵奉すべきこと

此心を有する所の青年男女は交際して不可なかる可し。若し其間に眞個の戀愛發生することあらば偕老同穴の夫婦となるべく、然らざるものも一身潔白にして互に獨立自尊の人たることを失はざる可し。

男女學生交際論

慶應義塾長　鎌田榮吉

名は男女學生交際論といふも、問題は廣く青年男女の全般を包み、而して學生は當然其中に含まるべきなり、近來學生なる資格を有して都下に集り來り、互に交際をなすもの多し、從來離隔し居りし兩性

が俄に相交るに至れる結果として、往々其間に弊の生ずるは數の免れざる所これ世の父兄と共に一般識者の甚だ憂ふるところとなす、然らば男女交際は斷じて不可なるかといふに決して然らず、社會は固より男女兩本位を以て成立するものなれば、今後益々此主旨にて社會を形成し行くにあらざれば文明世界に國を立つべからず、男女交際は益々盛に爲さざる可らざるや明かなり、去ればとて現在のまゝの男女の思想、從來の如き男女の意志にては不可なることはいふまでもなし、男女七歳にして席を同うせずといふこと古來東洋の教なりき、斯くて今日に至れるものが、卒然として自由の交際を爲すに至る、其間に弊の起らんは見易き理なればなり、予の考を以てすれば、此後男女交際の成立を促して之を潔白に持續せしむるには種々の要件を要すべし、先づ第一に女子なるが故に男子に唆かさるとか、男子の爲に致さるゝとかいふが如きことあるべからず、之を期するには是非とも獨立自尊の精神の發達なかるべからざるなり、此精神にして發達せんには、女子なればとて一概に男子の輕蔑愚弄を受くることあるまじく、又男子とても、女子の體力弱し、智力短しとの謂を以て苟めにも我意を振ふ如きことなかるべきを信ず、況んや女子の心身も次第に發達すべきに於てをや

外國即ち歐米諸文明國の實況に照すも、矢張獨立思想の盛なる處ほど男女交際自由に行はれて而も其弊却て少きが如し、余、一佛人の船中にて米國婦人を評したるを讀みたることありしが、時は恰も大西洋上の船中にて、眼前に幾多の米國婦人並に歐洲諸國の男女の乘合あり、一層明確に且つ實際に徹して其評語の實現を見る事を得たりき、佛人の評に曰く、今船中にて米國婦人の擧動を見るに、如何にも奇

怪の感に打たれざるを得ず、全然男子と何等の隔意もなく、諧謔も憚らず嬉戯し居りぬ、其樣餘りに、吾人佛國人より見ては、婦人として男子に對する擧動馴々しきに過ぎ、或る點よりは、疑の眼を以ても見るを得べきなり、若し之を英國婦人をして見しめば、此米國婦人の擧動に對しては唯 Shocking いやなこと、の語あらんのみ、之を佛國婦人に見しめば、唯 Indecent あた厭らしいの語あらんのみ、更に之を獨逸婦人に見しめば如何、Impossible よくまー彼樣なことが出來たもの、唯此一語が酬ひられんのみ、斯の如く、米國婦人は男子に對して餘りに馴々しく戯るゝも、決して他國人の邪推のそれの如くに、男子のポケットを狙ふにもあらねば又其ハートを狙ふにもあらず、乃ち金が欲しくてにもあらず結婚がしたくてにもあらず、唯尋常男子相互に、或は女子相互に戯ると何等の差異なきなり。此の如く馴れて而かも其間に醜情を挾まざるはこれ職として米國婦人に獨立心の發達し居るが爲めなり云々と、即ち男子と如何に遊び戯るゝとも、苟且にもそれに唆かさるゝとか誘惑せらるゝとかいふことあるなし、勿論米國婦人なりとて總ての點に於て宜しといふにあらず、種々の點に於て種々の缺點もあるべし、左れども唯此男女交際の一點に在りては、親しく交りて而も比較的潔白なりといふを得るなり、而してこれ、最も米國を惡し樣に見る佛人の批評も此一點のみは正しく是認し居るところなればなり、是れ男女混合教育其他兩性を隔離せざるの習慣が與りて大に力あるなり。

之を歐洲人に就きて言はんか、英國婦人は佛獨等の婦人よりは此點に於て米國婦人に近く、只米國婦人の鄙俗なるに比して、優しく、女らしき長所あるものゝ如し、而して男子に對する交際の態度に至つ

ては略同一なりとす、予の在英中知人なる婦人が一佛國人と約婚即ち結婚豫約をしたることありき、其約婚期は、此佛人暇ある時は巴里より倫敦なる婦人の家へ遊びに來れるが、其時は兩親初め一家擧て此兩人の交際の親密なるべき機會を與ふる事に勉め相携て自由に外出もし、未來の夫婦が兩々相携へて諸所の見物にも行きぬ、之に對して予の問を試みたることあり、良人の方よりは時々訪ね來るに、何故貴孃の方よりは巴里へ行かるゝことなきかと、其答に、佛國にては若きもののみ二人にて外出することは許されず、必ず母なる人が伴ひて監督するを常とするが故に、自由の交際は望むを得ず、從て相互の性情を洞察する上に遺憾なき能はざればなり、之れ何に因るぞ、佛國の女子は其信用を受くるの度に於て未だ英國婦人に及ぶ能はざればなり、否とよ我國にても妾等の母の少時に在りては、妾等の今日に於けるが如くには自由なる能はず、是れ未だ十分なる信用をば受け居らざりしなりと、更に之を他の人々に糺したることありしも得たる答は一樣なりき、之によりて知らるゝ如く、佛國にありては猶ほ母の監督によりて婦人の品行を保護し、又男子に對して親が直接に己れの娘を保護せざるべからず、斯くて結婚前には英國の如く自由に男女を交際せしむる能はざることゝなるなり、斯かる有樣は、要するに婦人が猶ほ眞乎の獨立を遂げ居らざるを證するもの、元來男子といはず、女子といはず、凡て信用を受けて、彼は放任すとも確實なりと云ふ樣に仕向けらるゝに至れば、自己の責任重くなりて、一朝過失あらんか、全然其責を負はざるべからざるに至るものなり、歐米諸國男女交際を自由にするものに在ては自己の責任と社會の制裁は甚だ強く、萬一此爲に身を過つことあらんか、其結果たる實に恐るべく、一生此世に立

つこと能はざるに至る、即ち未婚者の此一事に對する觀念は殆んど一の宗旨の如き觀を爲せるなり、均しく歐洲に在ても佛獨等の如きは英國よりも比較的親の保護の下にあると深きものは、其女子に於ける責任も比較的に輕く、更に日本に至りては、其責任最も輕し、之を從來の有樣に見るに、甚しく男女間の交際を杜絕せしめて、偏に父母の監督によりて過失なからしめんことを勸め、若し斯くても過失あるときには、其責の歸するところ、父母の監督の不行屆に歸し、最初より本人の自制自活の力を無視したるものなり、然るに此の如く獨立自治の精神に乏き婦女子を放任して恰かも籠を出たる鳥の如くならしめ、而かも父母の監督に代るべき自治心と社會制裁の未た發達せさるにあらずや、如今の醜體を顯はすも怪むに足らざるなり、苟も眞平に過失を防止せんには、自治自制の感を强からしめざるべからず、之には成るべく多く自由を與ふると同時に嚴重なる責任と社會制裁とを作ること必要なり、日本にては男女交際始まりし爲に弊の生ずる多きが如きは、從來餘りに長く兩性間を離隔し居りし結果として免れざるところなるべし、ベンザム氏の說に、兄弟姉妹の間には結婚の慾望なきものは、可婚期以前、即ち少年時代より通常同栖するが爲めなり、血族同胞なるが爲といはんよりは寧ろ同栖し來れるが爲と言はざるを得ずと、これ幾分の道理あるが如し、見よや埃及のトレミー時代の國王には兄弟結婚ありしことを、和漢にも其例なきにあらず、之れ恐らくは高貴の間には同胞各々居を異にし、相互の關係甚だ隔絕し居る事あるが爲めなり、要するに男女交際は幼年時代より兩性相接せしめて、女子は女子と、男子は男子というふが如きことなく交らしむれば、世人の憂ふる弊は意外に少きのみか却て反對の結果を見るも知る

べからず、男女交際最も行はれて而も其弊最も少しと稱せらるゝ英國には一の語あり、Flirting といふ、此語は佛國には無きところにして佛人の譯するに苦むところなりと聞けり、之を何ぞといふに、此語は男女兩性が相睦み相戲るゝことなるも、其間に些の戀なる情を交へず、唯互に馴れ互に戲るといふに止るのみ、換言すれば Intention を持たずして Attention を拂ふことを指すなり、究竟するに全く兩性相和して淫逸の念なきことは恰かも男子と男子、女子と女子とが戲遊すると同一にして而かも之より一層優美親愛の情に富むものなるべし、

斯かる樣こそ吾人の望ましきところとはいへ、左ればとて或る特殊の人に對して結婚を求むべきことは言ふまでもあらず、唯男女が普通の交際を爲すに當り、戀の意味なき潔白の交際が生じ來らざるべからざるを信ず、こは今日の社會に直に求むること難しとせんも、弊を恐れて男女交際を杜絶する如きは、其愚や溺るゝを恐れて水泳を禁ずると一般のみ、各自の父母が己れの子弟に對する注意は、こは又別箇の事、社會改進の方面よりいへば、兩性間の交際は必ず開かざるべからず、之が開くれば開くる程その弊は減ずべし、如何となれば自然の必要と人爲の力とに依て制裁を形作り又異性の交際に慣熟すべければなり、乃ち過失あらんか、長しへに世に立つを得ずといふ責任の威の大なるものなかるべからず從來の如く兩性を隔離し又は僅に他の監督によりて之を保護するが如きは到底永久の事にあらず、兩性自由に交りて而も其弊なきを期せざるべからず、自ら己れを奉ずること金玉の如くし苟も之を傷つけば終生世に伍すること能はずとの信念起らんとを期するには獨立自尊の觀念を強くして而して文明流の交

際を爲すに在るのみ、固より若き男女、其間自ら幾多の階段あり、從て直接其等の父母たり敎師たるものは、此思慮熟せざる輩に對して更に箇々特殊の注意あるべきなれど、こは彼等を敎育する方面の事に屬し、社會一般の趨勢は男女兩性をして從來の如く長く相離隔することを得ざらしむ、然るに今猶ほ男女七歲にして席を同うせずといふが如きは、啻に姑息の手段たるに止らず、又行はんとするも能はざるところ、去れば此際に於ても徒に舊習を朴守するが如きは甚だ不可、之を何れの見地よりするも當面最も要するところは獨立自尊の精神にて自己の威嚴を失はすして悠々和樂以て文明の男女たるべきものなり

男女學生交際論

中島德藏

予は此問題に就きては、想ふに二個の觀察點あるべしと思ふ、即ち一は純粹なる理想の側より、一は單に實際の上よりすることとす、純粹なる理想の側より言へば、誰とて男女交際を望まざるは無かるべきも、若し實際己れに娘あり、妹あり、或は己れが監督する生徒等ありて、之等を眼中に浮かべて、切に其等の幸福を望まんものには、自ら思慮の着實に至るを免れざるべし、且つ今の問題たる、之を理屈の上よりいふにあらず、今の女學生が今の男學生に對して、能く幾何の度まで交際を進め得るかに在り、既に之れ實際上の問題なりとす、故に單に西洋の事情に照し、西洋の習慣を調べて、直に以て今日の日

本の問題を解決せんとするは大なる謬なり、西洋の書籍にのみ親むものは、自然に移る情よりして、其所説の極端に走るの弊あるを遺憾とす、

扨て之を解決するには二ヶの問題あり、一は男女青年の品性問題なり、之が今日にては能く己れを統御し得るの度に在るかといふに、從來の教育方法の結果之を然りと答ふる能はざるの度にあり、由來日本人は感情的にて道理を輕んずる傾あるが、特に此男女間の問題には誰にも一種强烈なる、否寧ろ猛烈なる慾求あり、斯かる慾求あるが故に往々にして道德の羈絆を受けず、受けざるが故に面白しといふこともあり、青年に自重の難きこと、こは歷史或は遺傳より來れるかの觀もあり、兎に角、舊慣は男子には都合よくも、貞操は從來高き道德と成り居らざりし故、社會の制裁を免るゝの點に於ては可なれども、女子に在つては然らず、直に取り返しのつかぬ璧に瑕とならざるべからず、而して彼等の今日に在りて、能く盲目的行爲を避け、自己の幸福を損せず、璧を完うして微瑕なからしむるを得るかといふに、否、々、今日の女子敎育にては、爾く確乎たる品性を保たしむるを得ず、獨り之を女子にのみ尤むべからず、男子とても、身大學を卒業したりと稱するものにても、理性の力を男女の交際に働かしむるは頗る長所ならずと信ず、予は曾て之を名けて異姓間の鋭感性と呼びしが、此鋭感性は日本人に於て最も强く、理性の作用は、之に反して鈍きが故、直に西洋人とは同一視して論去し得べからざるものあり、

他の一は、交際には誰に對する折にもあれ、複雜なる作法に遵はざるべからず、單に本能若くば粗末なる常識の命に赴くは頗る危險なるところ、是非とも十分なる用意と研究とにより作成せられたる、種

種綿密なる作法を要するなり、然るに悲いかな我日本には、從來男女の間は全然長く隔絶し居りたるため、又た、日本人には、凡ての交際に於ける禮法に疎き弊もあり、愈よ男女交際には一の依るべき典型とて存するなし、典型は或は西洋に在りといはんも、東西品性の異なるあり、直ちに取つて用ふべからざるは理の見易きところ、日本は日本に別に一種の作法なかるべからざるなり、斯ばかりのことに苦心すべきにあらず、女子の前にて言ふまじきこと、爲まじきことぐらゐは、常識に訴へて十分なりと言ふ人もあるべけれど、此常識なるものは實は一律なるを得ずして、尙ほ凡て青年に任せ去る程完全に發達し居らざるなり、

男女兩學生を共に收容する學校にては、勢ひ兩者互に面接するは免れざるところ、之に向つて啻に貞操を說くに止むべからず、其爲まじきこと、語るまじきことを着實に說くの要あるべしと信ずるが、此爲まじきこと語るまじきことを告ぐる、之が予の所謂禮法の理想にして、究竟斯かる習慣風俗が漸次に固定して、一個堅實なるものとなれば、其處には自ら制裁力あり、一たび道を過らんか、嚴正なる制裁は忽ち社會より降下せん、從て凡ての敗倫を未然に防止するを得べく、今日吾人の要求するところは、斯かる嚴正一毫をも許さゞる制裁なりと信ず、去れば作法は世の社會改良家が眞面目に研究して、完全なる形式を編成すること必要なるべく、吾人も亦進んで今の日本の青年男女が十分實行し得べく、又せざるべからざる交際の禮法を研究せんと思惟するものなり、唯今日に於て未だ一々擧示すべきほどのものを有せざるを慊む、

斯かる禮法の確立して始めて兩性の交際も開くべく、然らざる間は弊の百出するを免れず、之をしも彼等は人間の屑故隨意に欲するところに行かしめよとは勸め難し、其一生の幸福に關すること至大なればなり、故に男女交際其者は決して惡しき意見にあらざるも如上の問題にして十分なる解決を見ざる間は、兩性は暫く忍んで決して各自一己の意のまゝに相接近すべきにはあらずと信ず、

或は其緒を開くとして、靑年男女相互の任意接近は不可とするも、家族と家族とを交際せしめて、中に靑年男女を交ふること、換言すれば家族を中心として靑年男女の交際を許すべしといへるものあり、之も亦一說なるべく必ずしも惡しとは言はず、其れにしても今少しく奥底を打開して靑年男女の接近するには如何に爲すべきかを敎えざるべからず、人と人との交際には由來精深なる硏究を要するもの、然るに今の說をなすもの、多くは遠くより見たる大體の觀察に止り、能く如上の兩方面より親切なる着實なる硏究を遂げたるものを見ず、吾人は切に斯かる問題に身を委ぬるの士の生ずるを望む、兎に角現況のまゝにては交際すべからずといひながら、別に所謂現況なるものを開展すべき方法を案出せんともせず、有るがまゝに放任し去らんとするは、甚だ不親切にして、且つ最も因循姑息の策なりと信ず、少しく面倒にもあれ、吾人は何等か依るべき良法を案出して其處に兩性接近の道を拓かんと欲するものなり

男女間の交際に就て

日本女子大學長　成瀬仁藏

男女の交際論は隨分重大な問題であつて、之に對して誤りなき判斷をなし、之を論定せむとするには、余程愼重なる思考と深遠なる見識を要する事は勿論であるが、實に之を種々なる方面より觀察し、深く四圍の事情を顧みる事も一層必要である、從來此問題に關しては往々偏狹なる議論や、極端なる意見を耳にする事がありますが、畢竟其着眼點の異なる所より生ずる結果であるけれども、亦其觀察が餘りに單純に失し、或は一方面に偏するとか、或は四圍の事情に對する觀察が正鵠を得て居ない所より種々なる僻見に陷ゐるのであろふと思ふ。予も此問題に關して多少研究して居る所もあり、充分に所懷を披瀝して識者に諮つて見たいと思ふて居りますが、近來校務甚だ多端なので、未だ其機を得ないのであります、夫故御尋ねに對しても充分に御話する時間もありませんが、唯平素所思の一端を述べて見たいと思ふ。

男女七歳にして席を同ふせずとは東洋流の主義でありますが、西洋では男女混同して社會を圓滿ならしめ、優美ならしめんとするのである、予は敢て東洋流の主義に盲從する者ではないが、さればとて遽かに西洋流の極端說に左袒するものでもない。乍併此二主義の氷炭相容れぬといふのは、畢竟東西各々其家庭、社會の狀態、及び宗教の信念等の異つて居るに基因するのであつて、大勢から論ずれば、我國の現狀は、前者を離れて漸次に後者の主義に接近しつゝある者といはなければならぬ、而かも現今の如き

過渡時代に在ては、何れの主義を以て可とすべきかは容易に斷定する事は出來ない、けれども予は後者の主義を以て寧ろ前者に優つて居ると感ずるのである、唯憾らくは我社會の現狀は未だ此主義を實現せしめても可いといふ程度に達して居ないのである。

予は曾て米國に在るの日、親しく女子大學の內情を視察し、又學校以外の女流とも相往來するの機會も、少くなかつたので、米國女子の狀態に就ては比較的に多く知る事が出來た、其經驗に就て少しく話して見たいと思ふ。

米國は男女の交際の最も隆盛な國である、けれども我國の如く何の主義も定見もなく、猥りに相交るのではない、彼國の女子の多くは十七八歲で女子大學に入るのであるが、其學生時代に於ける監督と制裁とは非常に嚴格な者である、而して二十歲餘で業を卒へて校堂を去るに及びては、一個の見識と比較的堅固なる意志を養成せられて居るので、社交場裡に入りても誤る事が少ない。又彼等が自由に男子と相往來して陋風を生じないのは前述の如き敎育によりて養成せられた見識と意志にあるのであるが、此他に大なる原因がある、即ち社會の狀態と宗敎上の信念である、彼等の交際場裡に入るには最も嚴格なる一定の禮式を守らなければならぬ、食堂に在つて女子の來る時には男子は自から其襟を正すといふ樣に、其言語に於ても動作に於ても犯す事の出來ない自然的儀式があり、秩序が整ふて居る、若し此風儀を紊す者があれば再び社交場裡に立つ事の出來ない程に嚴格なる社會の制裁がある、此の如き整然たる秩序と嚴格なる制裁力を有する社會に於てこそ始めて男女の交際を自由ならしむる事が出來たのであ

る。

るに現今一部の人々の主唱する如き、此内情を察せず、其秩序を觀ないで、皮相なる男女の交際を直に我國に實行せんとするのは最も危險千万の事と云はねばならぬ。米國の如き社會では宗教的觀念によつて嚴格な風俗、儀式、制裁が備つて居つて、若しも之に背く時には直ちに社會の信用を墜し、人の指彈を受ける事となり、且又個人にも堅固な信念があつて、遺傳的に男女の關係を亂さない良風がある、之に加へて敎育の道も完美して居つて、女子は社會に對し、心理上に關し、女子自身が自己の前途に對して其品位を操守する事が堅固であるが爲めに、其間に誤りの出來ないのは當然である。

想ふに男女の交際に誤りを生ずるのは、通常男子より起る例が多い。女子は男子に比して謹愼の度が深く、女子よりする事の少いのは疑を容れぬ所である。殊に古來女卑の風習の强い我國に於ては最も其例の多い事は社會の事實が之を證明して居る。是は元來女子敎育が備らず、見識と思慮を有する女子の少いのも亦其一動機であると思ふ。乍併歐米諸國に在つては、敎育の道の完成して居る結果として、女子は皆自分の意志を中堅として、進歩的知識を有して居つて、男子は彼等の上に立つて之を侮蔑する事が出來ない、獨り風俗の上ばかりでなく、女子は相當の見識を具へて居つて、男子をして一指を染めしむるの隙間がないのである、吾人の見聞したる實例にも、風儀に關して些細なる事から女子より絶交せられた人も少くないのである。此の如く女子は常に多大なる感化力を有して一定の主義と確固たる信念の下に男女の交際は盛んに行はれて、紅紫相點綴し春花秋月一時に到り、社會を圓滿に發達せしめ、調

和せしむるものである。

我國の社會の狀態を見るに、女子は一定の見識と宗教上の信念を持たない、況んや女學生は未だ確固たる意志を有する者が少ない、それに社會の制裁力は甚だ薄弱で風俗上の秩序も整つて居ない、加之古來の風習として女子を輕視するの陋風は容易に脫する事が出來ない、斯樣なる社會に於て單に男女交際の形式のみを實現しよふとする事は其有害なる論ずる迄もない、予の今日までに見たる所では、多少洋書を學んだ青年輩が、社會家庭の實狀を顧みないで、徒らに皮想の見解を以て男女の交際、更らに危險なる男女學生の交際を唱導するが如きは取るに足らぬ議論で、彼等の所爲は實に女々しい、男子らしくない、活潑なる我日本男子の精神を茶毒する者であつて、固より之を排斥しなければならぬ。

然れども男女席を同ふせずてふ東洋流では到底我社會を進化し、發展せしむる事は出來ない。兩者を融和せしめ、統一せしめ、社會各方面の施設を完成して、徐々に男女交際の道を講ずるのは必要である。現時の我が社會では家庭が圓滑に齊はないで、常に風波の絕えない事實は往々にして乏しくない。而して是等の事情は延いて社會腐敗の動機となり、病根となつて居るのである事を思へば、社會改良の端緖として、先づ家庭を圓滑ならしむる事を計らんければならぬ、家庭を圓滑ならしめむとするには主として男女間の調和を計らんければならぬ、即ち男子をして女子の如何なる者なるかを知らしめ、女子をして男子の如何なる者であるかを知らしめるのである、男女間の意志を疎通せしめて相援け相思ふといふ事が互ひに一致しなければならぬ。此途に一步を進むるの策は即ち男女間の交際にあるのである、

男子には男性があり、女子には女性があり、心理上の作用、經歷、體質の相違等各其特色を有して居るので、兩者が互ひに此特色を知悉せなければ圓滿なる一致は保てないのである、偶〻相識らざるの男女が其結婚後に至つて、衝突を生じて悲慘の淵に沈むのは双方に心情の疏通がなく、喜憂相配つ事が出來ないからである。其苦痛と悪感とは著しく個人的の發達を沮害するものであつて、大にしては社會の沈滯を來す事となる、之を救ふの道は兩異性をして互ひに相知らしめ相容れしむるのである。

然らば、如何にして此兩性をして相知らしめ、相融和せしむる事が出來るかといふに、

第一に家庭に於て此兩異性を相近親せしむる事である、現今我國の家庭では多くは父たり兄たる人が其子女に對して甚だ冷淡である、其席さへ同ふしないといふ樣に、嚴然たる區別を立てるのは、異性相倚るの途に對して大なる沮害を與へるものである。夫れ故に女子を有する父は自から之に親しみ、兄たる者は其姉妹に親しみ女子は父若くは兄弟に親しみ、更らに男子を有する母は自から之に親しみ男子も亦自から進んで母若くは姉、妹に相親しむで、互に相倚り相導き、同情を疏通しなければならぬ、此の如くして互ひに異性の情誼を學び自然に之を知覺して相融和する事が出來る、是は最も根本的に必要なる點であつて漸次に慣熟するに至れば、夫を選び、妻を選む上に於ても誤を生ずる事がなくなり、從つて家庭の圓滿と發達を來す樣になる、更らに一歩を進めては親戚知己の間に於ても家庭間の交際を試みて互に子女男子を相伴ふて往來すれば異性間の本性を知る上に一層多大の便益を得るに至るものである、

第二には我國青年子女の判斷力を養成せしめなければならぬ、之は敎育の力を要するので、殊に女子

に在つて一層緊要なる事を感ずるのである、其判斷力を養成するのに就ては、種々必須なる要件があるが、理解力、人を洞察するの力、之に對するの知識を涵養するので、要は理性の發達に力めるのである、自己に對する事は自己の判斷力に訴へて自から之を解決するの風を養ひ徐ろに其意志を確固ならしむるのである、

更らに他の方面に於ては古來よりの女卑の陋風を打破して、男子をして女子に對して相當の禮義を有せしむる事である、而して男子が女子に對するの責任、將來家庭を作る上に於て有すべき男子の態度、其他女子に對するの觀念を改めしめなければならぬ、現今の學風は此點に於て大に缺けて居る、是は宜しく男子教育の任に當る人に向つて其改善の道を講ぜられん事を望まなければならぬ。

斯の如く其根本の精神が革新せられて、自然の陶冶によつて風俗習慣が進歩して來るなれば、男女の交際は自然に隆盛になるべき者であつて、兩者相統一し、相調和して、社會の進歩を計る上に非常なる力を生ずる事と信ずるのである。

近來男學生が何等の紹介もなくして猥りに書を女學生に送りて交遊を求めるといふが如きは、實に禮義を省みない行爲であつて其罪は決して輕くないのである。况んや未だ主義も定見もなく、意志の薄弱な青春の兩性が相交るといふのは、斷じて排斥しなければならぬ。殊に女子の性情から見ても其十三四歲から二十歲前後迄は最も注意を要すべき時代であつて、總ての性能の最も盛に發達すべき時機であると共に、又最も危險なる時期である、即ち前に述べたる如く其理性を養ひ其判斷力を發達せしめ堅固な

る意志を養成するのも此期に屬するのであつて、未だ自由に交遊を選ぶの時機でないのみならず、之を今日の社會狀態に就て考ふるも決して許す事が出來ないのである。

要するに男女間の交際は異性相倚るは自然の理であるが故に、敢て之を否む者ではない。唯之を唱ふべき時期如何にあるのである、而して我が社會の現狀に照して觀察すれば時期尙早しの感がある。社會の風俗が改善せられ、其秩序が整ふに至れば男女の交際も自然に圓滿に行はるゝに至るのである。然れども今日に於ては未だ一の理想とすべきもので、之を實行し得べき時の速かに來らむ事を切望する者である。

男女交際論

文學博士　井上哲次郎

男女交際論が大分燃え立て來ましたから、こゝに少しく私の見る所を述べて見ませう。

男女交際といふことは固より今日まてと雖もないことはないのであります。人間あつてより以來男女交際はあつたのであります。然しながら何分是迄の日本の有樣では男女交際は決して滿足に行て居る譯ではない、是迄のやうな男女交際では面白くないから何とか其方法を改良しなければならんといふ必要が差し迫て居るのであります。

つきましてはどういふ具合に男女交際の方法を改良してよいのであるか、此點については人によつて

いろく見る所を異にして居る次第であります。それで今男女交際の方法をこういふ風にしたらよからうといふ吾々の見解を述ぶるのであるが、其範圍を限りて述べないと、混雜を來す恐がある故に、先づこゝに其範圍を明かにしませう。

吾々のいふ所は貴婦人紳士ともいふべき大人の男女交際のことであつて、男女學生の如き青年間の交際は自ら別問題であります。男女學生間の交際は、これは餘程注意を加へなければなりませぬ。これ迄男女交際のことを論じた人の中に男女學生間の交際も成るべく自由にするが宜しい、彼等が自由に交際し得るやうにせねばならぬと造作もなく述べた人もあるが、甚だ不謹愼なる議論で、社會の利益にならぬことゝ思ふ。男女學生などいふ青年間の交際を自由にするのは西洋と雖も決してないとである。不良なる青年は素より別であるが、教育ある社會に於ては決して無制限なる男女學生交際の行はるゝことはない。たゞ何分西洋では教育ある社會の制裁は日本などよりも比較的よく行はるゝ故に或制限されたる範圍に於ては男女學生の交際も比較的多く行はるゝといふに過ぎませぬ。日本はまだ何分さういふ社會の制裁がよく行屆て居りませぬのに男女學生の交際を無茶苦茶に奬勵すると途方途徹もない間違が起るかと思ふ。奬勵せずとも充分さういふ弊害が起りつゝある所に、況して教育若くは宗教に關係ある人、又は其他世間の風教を維持すべき任務を負ふ人が、男女學生の交際を漫りに奬勵するといふことては、其の結果實に懼るべき事になるかも知れぬと思ふ。だからこれは別問題とせざるべからざるのである。

而して吾々はこゝに大人たる男女殊に教育ある社會の男女即ち貴婦人紳士間の交際については些か見る所を述べて見やうと思ふ。

貴婦人紳士間の交際はどうか今少し改良せねばならぬと思ふ。どうも今迄の所では、それが具合よく行はれて居らぬ、とても西洋の男女交際の狀況に比較することが出來ぬ。先づ宮中の御宴(例へば、觀櫻觀菊の御宴抔)にしましても貴婦人の出席するものが割合に少い。今少し貴婦人が出席せざるべからずと思ふ。然しながら宮中の御宴などは所謂雲の上のことであるから暫らく別問題として、民間の宴會の狀況を見て最も遺憾に感ずるのは男女交際の甚だ不都合なることである。まア畢竟西洋風の男女交際といふものが出來て居らぬといふことである。大抵歡迎會とか送別會とか懇親會とかいふやうな場合には男子ばかりが集るといふことになつて居る。偶まに女の人も出るといふことがあつても、それは別席に集るといふことになる。男子は男子、女子は女子と、同じ室に會しながら別々に座りて、別々に談話をして居るといふ有樣で、どうも入り交ての愉快なる交際が出來て居らぬ。これが日本の社會のまだ充分文明的に進まぬ證據である。貴婦人紳士一堂に集て眞に上品なる交際が出來るやうにならねばならぬ、不潔なる感情が交らずに上品に、高尙に、愉快に交際して、宴會の禮を全うするといふことが出來なくては甚だ不都合な次第で、到底文明的の國民とはいへぬのであります。

凡そ人間は野蠻な程男女交際は立派に行かぬのであります。文明の程度が低ければ低い程女子の危險が多くしていろ〳〵の男子に接することが出來ませぬ、て成るべく交際を避けて深宮の中に閉ぢ込めら

れて居るとか、知らざる男子に容貌を見せぬといふ奇妙な風があります。然しだん〳〵文明の程度が高くなればなる程男女の交際が立派に上品に出來て來る、まア西洋は其點に於て一番甘く行て居る所でありませう。所が日本は到底も此點は西洋に及ばぬ、戰爭には勝つても此點は西洋に劣ること甚しい。日本人と雖も男女交際を必要とすることは疑ない。故に料理屋に行て藝者を上げるといふことがある。即ち貴婦人紳士の交際が立派に行かぬ故に此缺點を滿たすために藝者を呼ぶといふことになつて來る。どうも藝者などゝいふものは容貌は奇麗であつても、又多少藝はあつても、もと〳〵野卑なるものであるから、かゝるものと交際するのは決して男子を上品に導くことなくして、寧ろ反對の結果を來すことは必然である。さういふことが日本の紳士の習慣となつて居るがために、どうも一朝にして西洋のやうな貴婦人紳士の交際をなすことはなか〳〵容易でないと思ふ。貴婦人でも何でも女子さへ見れば藝者か何ぞに對するやうな劣等なる感情を以て迎へんとする最も面白からざる習慣がある。かういふことは高度の文明に達したる社會には決してない。固より人間であるから少しも情慾に動かさるゝものなしとは西洋と雖もいへぬことであるが、常に嚴重なる社會的習慣あるがために、なか〳〵惡風俗などを許さず、立派なる社交をなすことが出來て居る。即ち文明的の社交が行はれて居る。これが出來なくては第一日本の社會の改良が出來ぬ。男子が料理屋に行て藝者を相手にする、ために男子の品性が墮落する傾向が多い。それと同時に貴婦人の品性も矢張りよくはならぬ、寧ろ惡くなる。貴婦人は男子に殘されて空房を守らねばならぬ、夫たる男子は料理屋に於て藝者を相手にして居る。妻たる貴婦人は空房を守ては嫉妬

を起し、意地を惡くする。加之貴婦人は交際に馴れぬことになる。多くの集合には出る能はずして內に殘され、廣く交際する機會を得ないからして交際の道に老練になる機會がなく、從つて智識を開發することも困難である。兎角引込思案となる。日本の貴婦人などゝいふものは多くは引込思案の人で偶に集會の席に出ると、マア猫をかぶつて沈默するといふ有樣である。それは何處から出るかといふに貴婦人紳士間の交際即ち上品なる社交が出來て居らぬからのことである。上品なる社交が出來れば貴婦人紳士共に其要求を充たすのみならず、其品性を高くし、其結果は廣く社會の改良の基礎となる譯である。固よりさういふ貴婦人紳士間の社交が立派に出來ることになつても藝者の如きものゝ跡を滅するといふことは容易ならずとするも次第に社會の一隅に屏息して公々然形をあらはすといふことがなくなるであらうし、又さうなければならぬのであります。

それから、さういふ貴婦人紳士間の交際を上品にせんとするには宴會の方法を改良せねばなりません、今迄の宴會は到底上品なる交際をなすやうに出來て居らん、其の宴會の方法の改良は容易であるのに、世人は何故此容易なることをもせぬかを怪むのである。或一部ではいくらか立派に之を初めて居る人もあるが、極めて少數である。日本の宴會はどういふやり方かといふに廣い座敷のぐるりにお膳を並べる、其座敷の眞中はずうと明く。こッちの端と向ふの端とは距離が遠いので談話をすることが出來ぬ。宴會は一所に會食するものがお互に胸襟を披いて談話をせねばならぬ、それでこそ初めて眞の宴會といふべきである。そこにほんどうの男女の交際が成立せねばならぬ、然るに日本では男女の交際が旨く出

來ぬ、通常男ばかりが集り、而かも其男子も左右に對するの外は互に談話が出來ぬやうに座つて居る。夫れ故に料理屋からは藝者やお酌などが來て其紳士等の前に座つて紳士等の相手になる。だから紳士と紳士とは藝者やお酌に遮られて益々談話が出來なくなる。かゝるやり方はどうもいけぬ。さうして宴會はどうしても或程度迄の禮法即ち多少の禮法がなくては上品にやることが出來ぬ。所が日本のやり方では其禮法が甚だ亂れて居る。亂雜蕪雜と批評するの外はない。又食事をするといふ上からいうても日本の宴會はよくない。食事をする時には立派にするがよいが、食事をすると追々盃をさしに來るものがあつてどうも碌々食事をすることが出來ぬ。其上お膳をベタと疊の上に置くのであるから其邊を往來する人のためにゴミが食物の中に這入り衞生上も甚だよくない。甚しきに至ては人のお膳を跨いて席につく人がある。西洋の人などより見れば實にケシカラぬことであるが、日本人は跨ぐ人も跨がるゝ人も平氣で居るといふ開けない時の有樣である。かく宴會の方法が甘く行て居ないがために宴會の半ばより三々五々相集り、席が次第に亂れ、其中には隨分醉たくれも出來、終りには劍呑になつて來る、盃を飛ばし、お膳を蹈み、臭い息を吹掛け、呂律の廻らぬ話を仕掛け、終りはどうも目出度ないことが多い。夫れ故に吾々はさういふ所に出るのを好まぬ。歡迎會とか送別會とかに出ても會半ばにして歸る。歸るのが一番安全である、終まで居るのは危險である、どうも終まで居ると碌なことはない。交際所でなく交際を毀すことになる。西洋では之と反對て宴會があれば終りまでも愉快にして歡を盡くし、共に樂んで歸るといふことになつて居る、日本でどうもさういふ風に行かぬのは全く宴會の方法が惡るいからである。

食べるためにも交際するためにも宜しくない方法を取るのは實に宜しくない事である。つまり日本人はかゝる場合に禮法を守らぬからである。禮法といへば大變に四角張た堅苦しい樣に聞えるが、決してさういふ意味でない。或點まではくつろぐも宜しい、くつろぐも宜しが然し或點迄は矢張り禮法を守らねばならぬと思ふ。さうしてかゝることは田舍になればなる程甚しい。禮法などは全く崩して了つて頓と無禮講といふ姿である。今日は暑いから私も諸肩をぬぐから貴君もおぬぎなさいといふのを手始としてだん〳〵ひどくなる。こういふ風ではどうもいけませぬ、どうしても或程度で止めねばなりませぬ。其他いろ〳〵の氣隨氣儘のことをやり、隨分見るに忍びぬこともある。こういふ不都合ある宴會に馴れた男子では到底貴婦人紳士の宴會をよくやることは出來ぬ。だから次第〳〵によい方法を講じて宴會を改良せねばならぬ、急には到底出來ぬことゝ思ふ。西洋でも男子丈の宴會では餘り感心せぬこともある、素より日本のやうにひどいことはないが、少しく勝手なこともやり、又話も卑猥といふ程でもないがどれ丈けか自由になつて稍〻不都合のこともある。然しながら一人でも貴婦人が入ると、それがバッタリと止みて社交上の儀式がよくなる、話はするが或程度の禮法は亂れぬ。されば實に感服すべき點がある。日本人などは大に此等の點を學ぶべきであるが、是迄はどうもよく行かぬ。それは外交官とか又或一部の上流社會では少しはよく行て居る所もありませう、が日本全體の狀況に照せばまだ〳〵前途遼遠なりといふべきである。

で此男女交際の方法を改良するには今日の教育ある社會よりして上品なる、或程度迄禮法を守るといふ交際の道を開くに若くはない、これを手本として他の社會でも學んだならばだん〳〵廣く此れが行は

るゝに至りませう。宴會の方法は今迄のやうに疊の上にお膳を据ゑず、西洋流に食卓の上に据ゑるがよい。さうすれば他の人とも愉快に話が出來、藝者やお酌を相手にせなくてもよい。たべ物、飲み物を運ぶ人は客の後ろより丁度ボーイの如くに持て來る。又盃のとりやりはせぬがよい。あれは實に馬鹿〴〵しいのである。親友とか親類とかの狹い範圍ならば格別であるが、廣い中には面白くないことがある。息の臭い人が盃を進めるなどは甚だ迷惑のこともあらうと思ふ。かゝることをせずして自分は自分のお膳の上でやるとして愉快に談話をし交際すれば好い。又從て一歩進んで紳士と貴婦人と別々になつて食事をすると云ふやうなことなく、男女入り交て食事をすることも出來る。笑ひ興じて食事をするのは消化をよくし、兼て一夜の歡を盡して別るゝのはよい習慣である。かゝる娛樂の道があれば紳士も料理屋で藝者を相手にする馬鹿〴〵しいことをやめ、其上貴婦人は又だん〴〵交際になれ、交際の間に智識を推し廣むるといふ便宜も出來、旁々日本の社會の文明的基礎が出來る譯であります。然しこれは初めにも述べました如く大人である貴婦人紳士の交際のことゝて、男女學生及び其他の青年のことではない。青年の時代にはさういふ必要はない。何か必要が生じたならば學校の敎員若くは父兄の監督の下にて交際するの外はないが、是れはこゝにいふ所と自ら別問題である。世の男女交際を論ずる人がかゝることを混同して居るのは甚だ心外である、又よく西洋の交際の狀況も辨へず、一概にハイカラ的風俗を歡迎し、西洋よりもずうと先きへ行かんとする傾もある、それも準備があるならばよいが、準備は西洋程に出來て居らぬのにさういふ所に行き過ぎたことをすれば大いなる弊害を殘し、再び取返しがつかぬやうになる故にかゝることは餘程愼重の態度を以て論じて貰ひたいと切に希望する次第であります。（筆記）

此廣告により御注文の御方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

ホトトギス

本號は頁數平生の**五倍**に達し三百頁を算す中にも**夏目漱石**の小說新作「**坊っちやん**」は氏が從來の作中最も多く時日を費したる長篇にして百四十頁に渉り實に本號の**壹半**を埋む氏が空想の漫々として際涯無く筆端の炳炯として出群なるは本篇に依て愈々之を明にする事を得べく本誌は以て**丙午文壇**に於ける**第壹の佳品**と自讃し敢て讀者の案頭に薦む次に「**太祇句選後篇**」は俳壇に於ける**珍書**にして嘗て子規居士が太祇の句の世に傳ふる事少きを遺憾とせし者**此書**あつて初めて其渇望に答ふるを得たりとすべし即ち採つて以て之を本號に收錄す其の他「**吾輩は猫である**」其十は新たに雪江孃を點出し來りて其の暢達の會話不測の紅涙を描くあたり此の作者が**女性**を寫す上に於ても亦た透徹の筆を有するを認むべく其他苦沙彌先生の三女兒、古井武右衛門君、寒月先生等紙上に活躍す右の外本號に收錄せる所の**要目を列擧**すれば左の如し

●畑打(小說)……高濱虛子●かけおち(小說)……栁植潮音譯●眞間の戀塚(俳體詩)……萩原蘿月

●海紅堂漫筆……河東碧梧桐●應擧と吳春(畫談)……王義之(法帖談)……中村不折

●本鄕座野火の評……內藤鳴雪●詩片、蛙……小泉八雲作、大谷繞石譯

●蕪村遺稿講義(冬七)……●小說家(寫生文)……夕波●寮生活の卅分(寫生文)……へうろく生

●妾宅(寫生文)……著森●オレンヂ摘み(寫生文)官召郎●素人淨瑠璃會(寫生文)……楓散人

●繪畫(口繪、裏畫、其他)……淺井默語、中村不折、庄野宗之助、橋口五葉等

四月一日發行 ‖ 頁數參百頁 ‖ 定價郵稅共金五拾貳錢

五部前金七拾錢●拾部同壹圓參拾錢　毎月一回十五日發行

明治卅九年三月十五日發行　價十五錢

堺利彥編輯

社會主義研究

第一號

THE STUDY OF SOCIALISM

MARCH 15, 1906.——NO. 1.

本號要目

* * *

"In every historical epoch, the prevailing mode of economic production and exchange, and the social organization necessarily following from it, form the basis upon which is built up, and from which alone can be explained, the political and intellectual history of that epoch."

—KARL MARX.

* * *

▲本誌は全國都市の主なる雜誌店に於て賣捌く

發賣所　東京麴町區元園町一丁目二十七番地　由分社

中央公論定價表

一冊	金拾五錢
六冊	金八拾五錢
十二冊	金壹圓六十五錢

本號特別金卅貳錢　郵稅共

●但海外（清國は本邦郵便局所在地を除く）は一部郵稅六錢を要す

送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名并に社名を記し拂渡局所を**東京駒込**と指定せられたし
一弊社は振替貯金（三四）に加入いたし居り候間振込用紙御入用に候はゞ御申越被下度候
一郵券代用の場合は必ず壹割増のこと
一誌代、廣告料とも總て前金にあらされは御需めに應せす
一前金切の節は帶封に朱書いたすべくに付早速拂込まれたし然らされは其號限にて發送を止むべし
一雜誌の發送を以て領收の證といたすべくに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし

明治三十九年三月三十日印刷
明治三十九年四月一日發行

禁轉載

發行兼編輯人　武田福松
印刷人　清水金右衛門

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所（電話下谷九一九）反省社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場



活動寫眞フイルム

第一軍從軍 第二軍從軍 第三軍從軍 日露戰爭實地活動寫眞フイルム

●コンノート殿下横濱御上陸の實況
●●大名行列
●●コンノート殿下御覽の新橋藝者の手踊
●新橋ステーションの大火
●●陸海軍各司令官凱旋の實況
●●近衛師團軍旗祭に於ける滑稽假装行列の實況
●東東大相撲常陸山、梅ヶ谷、大砲、國見山、駒ヶ嶽、大刀山等取組の實況
●呉軍港に於ける軍艦筑波進水式の實況
●上野公園に於ける滿洲軍大歡迎會の實況
●●日比谷公園陸軍第二歡迎會
●旅順攻圍軍奮戰の實況三拾餘種
●旅順港及日本海に於ける大海戰の實況
●日光、江の島、嵐山、奈良、鹽原、須磨、舞子、銚子、九州耶馬溪、嚴島等の絶景
●船來餘與フイルム數十種新荷着

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可
明治三十九年四月一日發行（毎月一回一日發行）